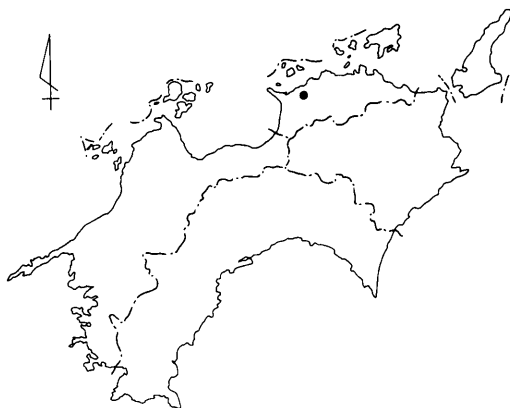


四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第十六冊

川津二代取遺跡



1995. 3

香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

日本道路公団

川津二代取遺跡正誤表

頁	位置	誤	正
図版目次	図版16	N-37, 38区 S D05上層	N-37, 38区 S D04上層
図版目次	図版17	M, N-36区 S D04	M, N-36区 S D05
13	2行目	安成五年(1858)に成立した『西讃府誌』	江戸後期に成立したとされる『東讃郡村免名録』
11	調査区欄	O-34, 36 (940㎡)	O-34~36 (940㎡)
166	第151図の土層名	2 明灰色粘質土 (Fe. Mn含、地山)	2 明灰色粘質土 (Fe. Mn含)
192	下から10行目	晩材部への遺構は	晩材部への移行は
図版16	上の写真	N-37, 38区 S D05 上層	N-37, 38区 S D04 上層
図版16	下の写真	M, N-36区 S D04	M, N-36区 S D05

序 文

四国横断自動車道は、高松～善通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県的高速道路が結ばれることになり、本格的な高速交通時代の幕開けとなりました。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道高松～善通寺間の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行なってまいりました。3年6ヶ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了しました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行なっているところであります。

今回、『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十六冊』として刊行いたしますのは、坂出市川津町に所在する川津二代取遺跡についてであります。川津二代取遺跡の調査では、弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が検出されております。

本報告が、香川県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援賜わりますようお願い申し上げます。

平成7年3月

香川県教育委員会

教育長 田 中 壮一郎

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第十六冊で、香川県坂出市川津町4955-1～4970-1番地で実施した川津二代取遺跡（かわつ にだいどりいせき）の報告を収録した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は、平成2年3月に予備調査を実施し、本調査を平成2年5月10日から平成3年3月8日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

（予備調査 渡邊茂智・西岡達哉・大林修三・古野徳久・山下平重）

本調査 牧野啓造・木下晴一・塩田公一郎・白川悦代

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

（順不同、敬称略）

香川県土木部横断道対策室、同坂出土木事務所横断道対策課、坂出市瀬戸大橋・横断道対策室、坂出市川津公民館、四国横断自動車道建設坂出市川津連合対策協議会、同坂出市中塚地区対策協議会、各地元自治会

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は木下が担当した。

6. 報告書の作成にあたっては、下記の方々の御教示を得た。記して謝意を表したい。

（順不同、敬称略）

立命館大学文学部 高橋学、財団法人徳島県埋蔵文化財センター 菅原康夫

香川大学教育学部 谷山穰

7. 本報告書で用いる方位の北は、方位記号のみのものは国土座標系第Ⅳ系の北であり、方位記号にT.N.を附すものは真北を表す。また、標高はT.P.を基準としている。

8. 遺構は下記の略号により表示している。

S A 柵列、 S B 掘立柱建物跡、 S D 溝状遺構、 S K 土坑、
S P 柱穴、 S R 自然河川、 S X 不明遺構

9. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「丸亀」(1/50,000)を使用した。また、図版の一部に建設省国土地理院撮影の空中写真を使用した。

10. 本報告書の土器実測図のうち、断面が黒く塗り潰されているものは須恵器・須恵器系土器を、断面が網目になっているものは釉薬のかかった陶磁器を、断面が空白のものは弥生土器・土師器・土師器系土器・瓦器および瓦質土器を表す。また石器実測図の網目は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は敲打痕を表す。

11. 本報告書においては、弥生土器と土師器との区分が明確でない。それは、執筆者の側で弥生土器と土師器の境界について明確な知見をもち得ていないことと、層位的に混在する状況で遺物が出土しているためである。

12. 堆積物に関する記載に用いている略号、内容は以下の通りである。

Fe=鉄分、Mn=マンガン、G=級化層理が認められる、S=堆積粒の淘汰が良い
M=マトリックス、礫層ならば礫と礫の間を充填する堆積物、I=礫層に瓦重ね構造が認められる、△=地山（この層より下層に遺構・遺物は認められない）

また、層界の点線は、層界が不明瞭である場合、上部を調査中に削ってしまったため本来の層界が不明になっていることを示している。

目 次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	
1. 調査の体制	5
2. 発掘調査の経過	5
3. 整理作業の経過	10
第2章 遺跡の立地と環境	
1. はじめに	13
2. 大束川流域の段丘崖	14
3. 段丘崖形成以前の微地形	22
4. まとめ	25
第3章 調査の成果	
第1節 層序の概要	26
第2節 弥生時代前期の遺構・遺物	
1. S D01	32
2. S D02	32
3. S D03	37
4. S R01	38
5. S R02	56
第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物	
1. 概要	56
2. O, P-41, 42区 S D04	56
3. O, P-41, 42区 S D05	78
4. O-39, 40区の概要	81
5. S D07	94
6. S D06	101
7. S D04(N-37, 38区ほか)	102
8. S D05(N-37, 38区ほか)	105
9. その他の溝状遺構	109

10. 性格不明遺構	117
11. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物のまとめ	118
(補注) 下川津C類土器(仮称)について	119

第4節 中世の遺構・遺物

1. 掘立柱建物・柵列・柱穴

(1) 概要	122
(2) S B 01～03	122
(3) S B 04	131
(4) S B 05	133
(5) S B 06	134
(6) S B 07	134
(7) S B 08	135
(8) S B 09	139
(9) S B 10	139
(10) S B 11	141
(11) S B 12～14	141
(12) S B 15	146
(13) S B 16	146
(14) S B 17・20	147
(15) S B 18	150
(16) S B 19	153
(17) その他の柱穴から出土した遺物	153
(18) S A 01～05	154

2. 土坑・性格不明遺構

(1) S K 05	156
(2) S K 06	158
(3) S K 07	159
(4) S K 08	159
(5) S K 09	160
(6) S K 10	161

(7) S K13	162
(8) S K14	166
(9) S X04	167
(10) S X05	167
(11) S X06	169
(12) S X07	169
(13) S X08	169
3. 溝状遺構	
(1) S D28	170
(2) S D29	171
(3) S D30	172
(4) S D31	172
(5) S D32	173
(6) S D33	173
(7) S D34	173
(8) S D35	173
4. 中世の遺構・遺物のまとめ	174
第5節 近・現代の遺構・遺物	
1. 柵列	179
2. 土坑	181
3. 溝状遺構	185
第6節 包含層および出土位置不明の遺物	187
第4章 自然科学的分析	
第1節 川津二代取遺跡出土木製品の樹種	191
第2節 川津二代取遺跡におけるプラント・オパール分析	195
第3節 川津二代取遺跡出土土器にかかわる赤色顔料物質の微量化学分析	199
第5章 まとめにかえて	201

挿図目次

<p>第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財 包蔵地(高松～普通寺) …………… 2</p> <p>第2図 予備調査トレンチ位置図 …………… 6</p> <p>第3図 グリッド配置図…………… 8</p> <p>第4図 調査区割図…………… 9</p> <p>第5図 川津二代取遺跡の位置…………… 13</p> <p>写真1 大東川流域の段丘崖…………… 14</p> <p>第6図 丸亀平野1m等高線図 …………… 15</p> <p>第7図 川津二代取遺跡周辺 10cm等高線図 …………… 18</p> <p>写真2 濃度分析の一例…………… 19</p> <p>第8図 大東川流域の微地形分類略図…………… 20</p> <p>第9図 段丘崖の堆積状況模式図…………… 21</p> <p>第10図 下川津遺跡の検出河道と10cm 等高線図・下川津遺跡断面模式図…………… 23</p> <p>第11図 川津二代取遺跡周辺 微地形分類予察図…………… 24</p> <p>第12図 土層断面模式図…………… 26</p> <p>第13図 調査区北端 土層断面図①…………… 27</p> <p>第14図 調査区北端 土層断面図②…………… 28</p> <p>第15図 下層確認トレンチ 柱状図…………… 29</p> <p>第16図 37ライン 土層断面図① …………… 30</p> <p>第17図 37ライン 土層断面図② …………… 31</p> <p>第18図 南部 遺構配置図 (弥生時代前期まで) …… 33</p> <p>第19図 北部 遺構配置図 (弥生時代前期まで) …… 35</p> <p>第20図 S D01 断面図 …………… 32</p> <p>第21図 S D02 断面図 …………… 37</p> <p>第22図 S D02 出土遺物実測図 …………… 37</p> <p>第23図 S D03 断面図および 出土遺物実測図 …………… 38</p> <p>第24図 S R01 断面図 …………… 40</p> <p>第25図 O, P-43区 S R01(東)下層 出土遺物実測図① …… 41</p> <p>第26図 O, P-43区 S R01(東)下層 出土遺物実測図② …… 42</p> <p>第27図 O, P-43区 S R01(東)下層 出土遺物実測図③ …… 43</p>	<p>第28図 O, P-43区 S R01(東)上層 出土遺物実測図① …… 44</p> <p>第29図 O, P-43区 S R01(東)上層 出土遺物実測図② …… 45</p> <p>第30図 O, P-43区 S R01(東)上層 出土遺物実測図③ …… 46</p> <p>第31図 O, P-43区 S R01(東) 出土遺物実測図①…………… 48</p> <p>第32図 O, P-43区 S R01(東) 出土遺物実測図② …… 49</p> <p>第33図 O, P-43区 S R01(東) 出土遺物実測図③…………… 50</p> <p>第34図 O, P-43区 S R01(西) 出土遺物実測図①…………… 51</p> <p>第35図 O, P-43区 S R01(西) 出土遺物実測図②…………… 52</p> <p>第36図 N-37, 38区 S R01河底 出土遺物実測図①…………… 53</p> <p>第37図 N-37, 38区 S R01河底 出土遺物実測図② …… 54</p> <p>第38図 N-37, 38区 S R01上層 出土遺物実測図 …… 55</p> <p>第39図 南部 遺構配置図 (弥生時代後期～古墳時代前期) …… 57</p> <p>第40図 北部遺構配置図 (弥生時代後期～古墳時代前期) …… 59</p> <p>第41図 O, P-41, 42区 S D04・05 断面図 …… 61</p> <p>第42図 O-39, 40区 S D05など 断面図 …… 61</p> <p>第43図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図①…………… 64</p> <p>第44図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図② …… 65</p> <p>第45図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図③…………… 66</p> <p>第46図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図④ …… 68</p> <p>第47図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図⑤ …… 69</p>
--	--

第48図	O, P-41, 42区	S D04下層	出土実測図⑥	70	第70図	O-39, 40区	S D10 断面図	S D07・10 断面図	93
第49図	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物実測図①	72	第71図	S D07・11	断面図		95
第50図	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物実測図②	73	第72図	S D07下層	出土遺物実測図①		96
第51図	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物実測図③	74	第73図	S D07下層	出土遺物実測図②		97
第52図	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物実測図④	75	第74図	S D07下層	出土遺物実測図③		99
第53図	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物実測図⑤	76	第75図	S D07下層	出土遺物実測図④		100
第54図	O, P-41, 42区	S D04	出土遺物実測図	77	第76図	S D07上層	出土遺物実測図		100
第55図	O, P-41, 42区	S D05下層	出土遺物実測図①	79	第77図	S D06	断面図		101
第56図	O, P-41, 42区	S D05下層	出土遺物実測図②	80	第78図	S D06	出土遺物実測図		102
第57図	O, P-41, 42区	S D05上層	出土遺物実測図	80	第79図	S D04	断面図		103
第58図	O-39, 40区	S D04~06	断面図	82	第80図	S D04下層	出土遺物実測図		104
第59図	O-39, 40区	S R01	出土遺物実測図①	83	第81図	S D04上層	出土遺物実測図		105
第60図	O-39, 40区	S R01	出土遺物実測図②	84	第82図	S D05・15	断面図		106
第61図	O-39, 40区	S D05等	出土遺物実測図①	85	第83図	S D05下層	出土遺物実測図①		107
第62図	O-39, 40区	S D05等	出土遺物実測図②	86	第84図	S D05下層	出土遺物実測図②		108
第63図	O-39, 40区	S D05等	出土遺物実測図③	87	第85図	S D05上層	出土遺物実測図		109
第64図	O-39, 40区	S D05等	出土遺物実測図④	88	第86図	S D11	断面図		110
第65図	O-39, 40区	S D05下層	出土遺物実測図①	89	第87図	S D11~13・15・16	出土遺物実測図		110
第66図	O-39, 40区	S D05下層	出土遺物実測図②	90	第88図	S D12・16・21・25	出土遺物実測図		111
第67図	O-39, 40区	S D05上層	出土遺物実測図	92	第89図	S D12	断面図		112
第68図	O-39, 40区	S D08	断面図	93	第90図	S D03・13	断面図		112
第69図	O-39, 40区	S D09	断面図	93	第91図	S D15	断面図		113
					第92図	S D16・17	断面図		114
					第93図	S D20	断面図		114
					第94図	S D21	断面図		114
					第95図	S D25	断面図		115
					第96図	S D14	断面図		115
					第97図	S D23	断面図		116
					第98図	S D24	断面図		116
					第99図	S X01~03	断面図		117
					第100図	下川津C類土器			121
					第101図	南部	遺構配置図(中世)		123
					第102図	北部	遺構配置図(中世)		125
					第103図	S B01~03	平面図		127
					第104図	S B01	平面・断面図		128
					第105図	S B02	平面・断面図		129
					第106図	S B02	出土遺物実測図		130
					第107図	S B03	平面・断面図		131

第108図	S B 04	平面・断面図	132	第142図	S K 07	平面・断面図	159
第109図	S B 04	出土遺物実測	132	第143図	S K 08	平面・断面図	159
第110図	S K 01~04	平面・断面図	133	第144図	S K 09	平面・断面図	160
第111図	S B 05	平面・断面図	133	第145図	S K 09	出土遺物実測図	161
第112図	S B 06	平面・断面図	134	第146図	S K 10	平面・断面図	161
第113図	S B 06	出土遺物実測図	134	第147図	S K 10	出土遺物実測図	162
第114図	S B 07	平面・断面図、出土遺物実測図	135	第148図	S K 13	掘削状況平面・断面図	163
第115図	S B 08周辺	遺構配置図	136	第149図	S K 13	出土遺物実測図①	165
第116図	S B 08	平面・断面図	137	第150図	S K 13	出土遺物実測図②	166
第117図	S B 08およびその周辺	出土遺物実測図	138	第151図	S K 14	平面・断面図	166
第118図	S B 09	出土遺物実測図、平面・断面図	139	第152図	S K 14	出土遺物実測図	167
第119図	S B 10	平面・断面図、出土遺物実測図	140	第153図	S X 04	出土遺物実測図	167
第120図	S B 11	平面・断面図	140	第154図	S X 05~08	平面・断面図	168
第121図	S P 377	出土遺物実測図	140	第155図	S X 05	出土遺物実測図	169
第122図	O-37, 38区	柱穴集中部 平面図	142	第156図	S X 07	出土遺物実測図	169
第123図	S B 12	平面・断面図	143	第157図	S X 08	出土遺物実測図	169
第124図	S B 13、S A 04	平面・断面図	144	第158図	S D 28	断面図	170
第125図	S B 14	平面・断面図	145	第159図	S D 28	出土遺物実測図	171
第126図	S B 12~14周辺	柱穴出土の遺物実測図	146	第160図	S D 29	断面図	172
第127図	S B 15	平面・断面図	146	第161図	S D 30	断面図	172
第128図	S B 16	平面・断面図	147	第162図	S D 31	断面図	173
第129図	S B 17	平面・断面図	148	第163図	S D 31	出土遺物実測図	173
第130図	S B 20	平面・断面図	149	第164図	南部	遺構配置図(近・現代)	175
第131図	S B 17・20およびその周辺	出土遺物実測図	149	第165図	北部	遺構配置図(近・現代)	177
第132図	S B 18	出土遺物実測図	150	第166図	S A 06・07	平面・断面図	180
第133図	S B 18	平面・断面図	151	第167図	S A 08	平面・断面図	181
第134図	S B 19	平面・断面図	152	第168図	近・現代の土坑	平面・断面図①	183
第135図	S B 19	出土遺物実測図	153	第169図	近・現代の土坑	平面・断面図②	184
第136図	その他の柱穴出土の遺物実測図		153	第170図	近・現代の遺構出土の遺物実測図		185
第137図	S A 01~03・05	平面・断面図	155	第171図	近・現代の溝状遺構	断面図	186
第138図	S K 05	出土遺物実測図	156	第172図	包含層及び出土位置不明の	遺物実測図①	188
第139図	S K 05	平面・断面図	157	第173図	包含層及び出土位置不明の	遺物実測図②	189
第140図	S K 06	平面・断面図	158	第174図	包含層及び出土位置不明の	遺物実測図③	190
第141図	S K 06	出土遺物実測図	158	写真 3	川津二代取遺跡出土	木製品の材頭微鏡写真	194
				写真 4	植物珪酸体(プラント・オパール)	の顕微鏡写真	198

表目次

第1表	四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(1)	3
第2表	四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(2)	4
第3表	予備調査トレンチの概要	7
第4表	発掘調査の工程	11
第5表	整理作業工程	12
第6表	弥生時代後期～古墳時代後期の溝 整理表	118
第7表	近・現代の土坑 観察表①	181
第8表	近・現代の土坑 観察表②	182
第9表	近・現代の溝状遺構 観察表	185

図版目次

図版1	調査前状況(東北から) 基本層序	N-37, 38区 掘削状況(北から)
図版2	O, P-41, 42区 SP050 断面 N-39～42区 SX06 断面	図版15 N-37, 38区 SD07 断面(遺物は339) N-37, 38区 SD07 掘削状況(南から、 遺物は326)
図版3	下川津C類土器・下川津B類土器	図版16 N-37, 38区 SD05上層 遺物(387)出土 状況
図版4	遺跡付近空中写真①(縮尺約1/2万)	N-37, 38区 SD04 断面(南から)
図版5	遺跡付近空中写真②(縮尺約1/5千)	図版17 M, N-36区 掘削状況(南から) M, N-36区 SD04 遺物(411)出土状況
図版6	調査前状況(西から) O, P-43区 SR01 掘削状況(西北から)	図版18 O-34～36区 掘削状況(南から) M, N-35区 SD19 断面(南から)
図版7	N-39～42区 SD02 掘削状況(東から) O, P-41, 42区 SD02 断面	図版19 O, P-41, 42区 上層 空中写真
図版8	O-37, 38区 SD03 断面 O, P-41, 42区 SR01(東)(西)合流部 断面	図版20 O, P-41, 42区 SB04 掘削状況(南か ら)
図版9	N-37, 38区 SR01 掘削状況(北から) 37ライン SR01 断面	N-39～42区 SB05・06 掘削状況(南か ら)
図版10	N-37, 38区 SR01河底 遺物(110)出土 状況 N-37, 38区 SR01上層 遺物(117)出土 状況	図版21 N-39～42区 SB07 掘削状況(北から) N-39～42区 SP202 遺物(444)出土状 況
図版11	O, P-41, 42区 SD04・05・SR01 掘 削状況(北から) O, P-41, 42区 SD04上層 遺物(184)出 土状況	図版22 N-39～42区(北部) 上層 空中写真
図版12	O, P-41, 42区 SD04上層 遺物(193)出 土状況① O, P-41, 42区 SD04上層 遺物(193)出 土状況②	図版23 N-39～42区 SB08付近 掘削状況(東か ら) N-39～42区 SB09 掘削状況(東から)
図版13	O-39, 40区 掘削状況(南から) O-39, 40区 SD05下層 遺物(296, 297) 出土状況	図版24 N-39～42区 SB10 掘削状況(東から) N-39～42・O-39, 40区 SB11 掘削状 況(東から)
図版14	O-39, 40区 SD07 遺物(323)出土状況	図版25 O-37, 38区 遺構検出時 空中写真
		図版26 O-37, 38区 遺構検出状況(西から) O-37, 38区 上層遺構 掘削状況(北から)
		図版27 N-37, 38区 上層 空中写真
		図版28 N-37, 38区 SB17・20 掘削状況(北か ら)

	N-37, 38区	S B18等	掘削状況(北から)		O, P-41, 42区	S D05下層	出土遺物
図版29	N-37, 38区	S B18	掘削状況(東北から)	図版51	O-39, 40区	S R01	出土遺物
	N-37, 38区	S P682	遺物(488)出土状況		O-39, 40区	S D05等	出土遺物①
図版30	N-37, 38区	S P659	遺物(492)出土状況	図版52	O-39, 40区	S D05等	出土遺物②
	N-37, 38区	S K19	掘削状況		O-39, 40区	S D05下層	出土遺物①
図版31	N-37, 38区	S B19	掘削状況(南東から)	図版53	O-39, 40区	S D05下層	出土遺物②
	N-37, 38区	S P657	掘削状況	図版54	O-39, 40区	S D05上層	出土遺物
図版32	N-39~42区	S A01	(南から)			S D07下層	出土遺物①
	N-39~42区	S K05	掘削状況(東から)	図版55		S D07下層	出土遺物②
図版33	N-39~42区	S X08	掘削状況(東から)	図版56		S D07下層	出土遺物③
	N-39~42区	S K06	掘削状況(南から)	図版57		S D07下層	出土遺物④
図版34	N-39~42区	S K08	掘削状況(東から)			S D06	出土遺物
	O-37, 38区	S K09	掘削状況(南東から)			S D07上層	出土遺物
図版35	O-37, 38区	S K10	掘削状況			S D04下層	出土遺物①
	N-37, 38区	S K13	掘削状況(北から)	図版58		S D04下層	出土遺物②
図版36	N-37, 38区	S K13	遺物(551)出土状況			S D04上層	出土遺物
	N-37, 38区	S K13	完掘状況(北から)			S D05下層	出土遺物①
図版37	N-37, 38区	S K14	掘削状況(南から)	図版59		S D05下層	出土遺物②
			作業風景	図版60		S D05上層	出土遺物
図版38	O, P-41, 42区		掘削状況(北から)			S B02	出土遺物
	O, P-41, 42区	S D28	遺物出土状況			S B06	出土遺物
図版39	O-39, 40区	S D29	検出状況(西北から)			S B07	出土遺物
	O-39, 40区	S D29	掘削状況(西北から)			S B08およびその周辺	出土遺物
図版40	N-39~42区	S D31	掘削状況(南から)			S B12~14周辺柱穴	出土遺物
			地元説明会 遺物展示風景	図版61		S B17	出土遺物
図版41	S D02		出土遺物			S B18	出土遺物
	O, P-43区	S R01(東)	出土遺物①			S B19	出土遺物
図版42	O, P-43区	S R01(東)	出土遺物②			S K05	出土遺物①
図版43	O, P-43区	S R01(東)	出土遺物③	図版62		S K05	出土遺物②
	O, P-43区	S R01(西)	出土遺物①			S K09	出土遺物
図版44	O, P-43区	S R01(西)	出土遺物②			S K13	出土遺物
	N-37, 38区	S R01	出土遺物①	図版63		S K14	出土遺物
図版45	N-37, 38区	S R01	出土遺物②			S X04	出土遺物
図版46	O, P-41, 42区	S D04下層	出土遺物①			S D28	出土遺物
図版47	O, P-41, 42区	S D04下層	出土遺物②			近・現代の遺構	出土遺物
図版48	O, P-41, 42区	S D04下層	出土遺物③			包含層	出土遺物
	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物①				
図版49	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物②				
図版50	O, P-41, 42区	S D04上層	出土遺物③				

付 図

南部 遺構配置図

北部 遺構配置図

報 告 書 名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十六冊			
編 集	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
発 行	香川県教育委員会、日本道路公団、(財)香川県埋蔵文化財調査センター			
刊 行 年 月 日	平成7年3月31日			
遺 跡 名	川津二代取遺跡	かわつにだいどりいせき		
遺 跡 略 号	OWD I			
所 在 地	香川県坂出市川津町	かがわけんさかいでしかわつちょう		
頁 数	目 次 等	11頁	総頁 341頁	挿図枚数
	本 文	202頁		178枚
	観 察 表	65頁		写真枚数
	図 版	63頁		279枚
時 代	遺 構	遺 物	そ の 他	
弥生時代 前期	溝状遺構	3	土器、石器	
	旧河道	2		
弥生時代後期～ 古墳時代前期	溝状遺構	21	土器、石器	
	性格不明遺構	3		
鎌倉時代	掘立柱建物跡	20	土器、石器、木器、 銅銭	
	柵列	5		
	土坑	20		
	溝状遺構 性格不明遺構			
近世以降	柵列	3	土器、石器、銅銭	
	土坑	21		
	溝状遺構	10		

第 1 章 調査の経緯

第 1 節 調査にいたる経緯

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会は、これを受けて路線内の埋蔵文化財包蔵地の状況を確認する目的で、国庫補助事業として分布調査⁽¹⁾を実施した。これらの成果をもとに、路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、日本道路公団と文化庁の協議が行なわれ、基本的には記録保存で対応することが決定した。路線内での対象面積はこの時点で39万㎡余りと判断した。

また、香川県教育委員会は、同事業に対応するため香川県土木部横断道対策室並びに日本道路公団高松建設局管理課、同高松工事事務所と昭和62年度の早い時期から調査体制等について協議を開始した。

協議の結果、昭和63年度当初から2ヶ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した⁽²⁾。このため香川県教育委員会では、調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置し、専門職員の増員等の措置を順次実施した。

平成元年度には、坂出市川津町に所在する埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容について確認するため、日本道路公団と協議の上、用地買収の進捗状況に合わせ平成2年2月26日～3月17日の期間で予備調査を実施した。実施にあたっては、地元関係者、四国横断自動車道・南進自動車道対策協議会、同中塚地区対策協議会、同西又地区対策協議会、坂出市都市開発部瀬戸大橋・四国横断道対策室、香川県坂出土木事務所横断道対策課等の協力を得た。

予備調査の結果、川津中塚遺跡を初めとする集落跡を中心とした6遺跡についての内容を把握し、同地区での本調査対象面積を111,750㎡に確定した。

今回報告する川津二代取遺跡は、大束川の右岸に接し、調査対象面積10,400㎡を計る。

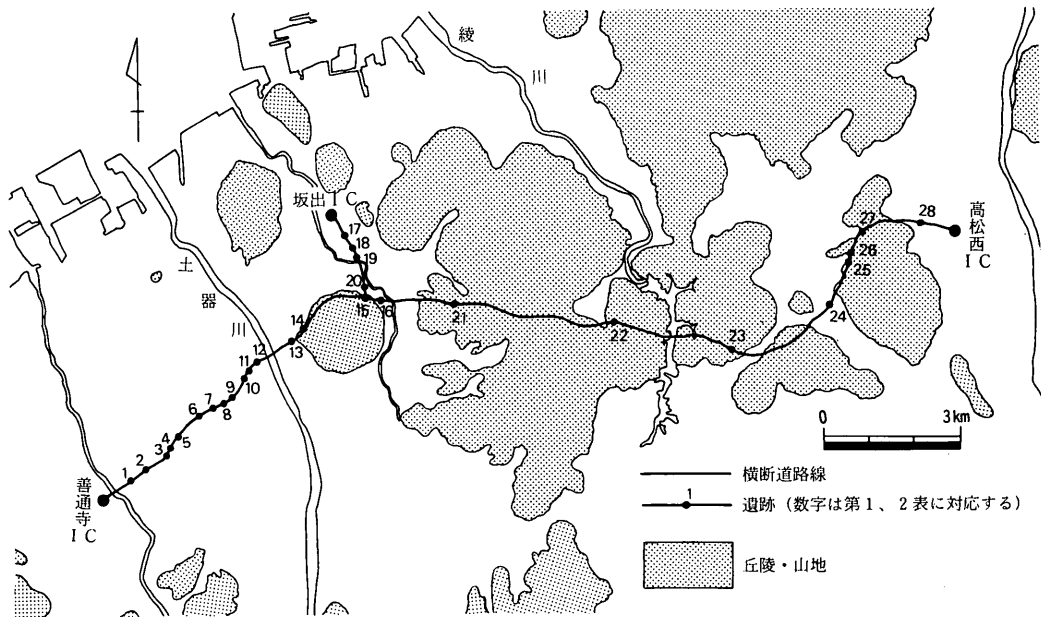
本調査は、平成2年5月10日から着手し、平成3年3月8日に終了した。

調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施された。

(1) 香川県教育委員会『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』

1987

(2) 最終的に、用地買収・家屋退去等の関係で調査期間は3年6ヶ月を要し、本調査面積は、予備調査による遺跡内容の確定を随時実施したことから、319,201㎡になった。



第1図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（高松～普通寺）

No	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物
1	龍川五条遺跡	普通寺市原田町	12,300 10,200	元.6.26~2.3.31 2.4.9~2.12.5	竪穴住居・掘立柱建物跡・弥生時代墓・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器
2	龍川四条遺跡	普通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元.7.1~2.3.31 2.5.28~2.10.24 3.4.4~3.6.18	古代掘立柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・和鏡・磁器・瓦器
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63.4.18~元.2.10 元.4.10~2.3.31	竪穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63.5.15~63.11.26	旧石器ユニット・溝状遺構・建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町・郡家町	17,099 2,600	63.4.18~元.3.31 元.4.10~2.3.31	竪穴住居跡・溝状柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑釉土器・斎串ほか
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63.4.18~元.3.31 元.4.10~2.3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有舌尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉土器・灰釉土器
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63.6.15~元.3.22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串ほか
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63.6.15~元.2.17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033	63.12.12~元.3.25	掘立柱建物跡・溝状遺構	
10	川西北・七条I遺跡	丸亀市川西町	4,034	63.12.13~元.3.27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器
11	川西北・七条II遺跡	丸亀市川西町	4,760	元.2.2~元.3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構	土師器
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	12,208	元.4.10~元.8.11	中世掘立柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	3,366	63.12.13~元.3.27	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2.3.1~2.3.31		

第1表 四国横断自動車道(普通寺~高松)建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2.8.2~3.3.20 3.9.2~3.9.4	弥生~中世掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝状遺構	弥生土器・土師基・恵須器・墨書土器
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2.5.10~3.1.17	古墳時代竪穴住居跡・溝・古代~中世建物跡・溝	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨書土器
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2.5.10~3.2.28 3.4.4~3.9.13	弥生時代竪穴住居跡・溝・土坑 古代~中世建物跡・土墳墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2.5.10~3.1.31 3.7.1~3.7.16	弥生時代水田・井堰・溝・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2.5.10~3.3.8	弥生時代溝・自然河川・中世建物跡・溝	弥生土器・石器・土師器・須恵器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2.4.12~3.3.28 3.7.18~3.9.27	弥生時代竪穴住居跡・建物跡 古墳時代竪穴住居跡・溝・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元.4.17~元.5.16		弥生土器・須恵器・土師器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30~2.12.26	時代不詳 柱穴・土坑	
23	綾南奥下地南遺跡	綾歌郡綾南町	2,900	元.5.22~元.7.24	須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元.8.19~2.2.28	弥生時代溝・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2.4.11~2.10.2	円墳・中世土師器窯・掘立柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元.9.1~元.12.28	前方後円墳(主体部3基)	古式土師器・鉄器
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10.1~2.2.28	中近世建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元.8.19~2.3.25 2.5.10~3.3.25 3.4.5~3.7.18	旧石器ブロック・埴輪焼成土坑・古墳(3基) 竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑	旧石器・弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・陶棺

第2表 四国横断自動車道(善通寺~高松)建設に伴う発掘調査の概要(2)

2 節 調査の経過

1. 調査の体制

発掘調査は、平成2年5月10日に開始され、平成3年3月8日に終了した。

平成2年度の調査体制は以下の通りである。

香川県教育委員会事務局文化行政課			財団法人香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	太田 彰一	総括	所長	十川 泉
	課長補佐	菅原 良弘		次長	安藤 道雄
	副主幹	野網朝二郎	総務	係長(事務)	加藤 正司
総務	係長	宮内 憲生		主査(土木)	山地 修
	主任主事	横田 秀幸		主事	三宅 浩司
	主事	水本久美子			(～5.31)
		(～5.31)		主事	斎藤 政好
		石川恵三子			(6.1～)
		(6.1～)	調査	参事	見勢 護
埋蔵文化財	係長	大山 真充		係長	渡部 明夫
	主任技師	岩橋 孝		係長	藤好 史郎
	技師	北山健一郎		係長	真鍋 昌宏
				文化財専門員	牧野 啓造
				技師	木下 晴一
				調査技術員	塩田公一郎
				調査技術員	白川 悦代

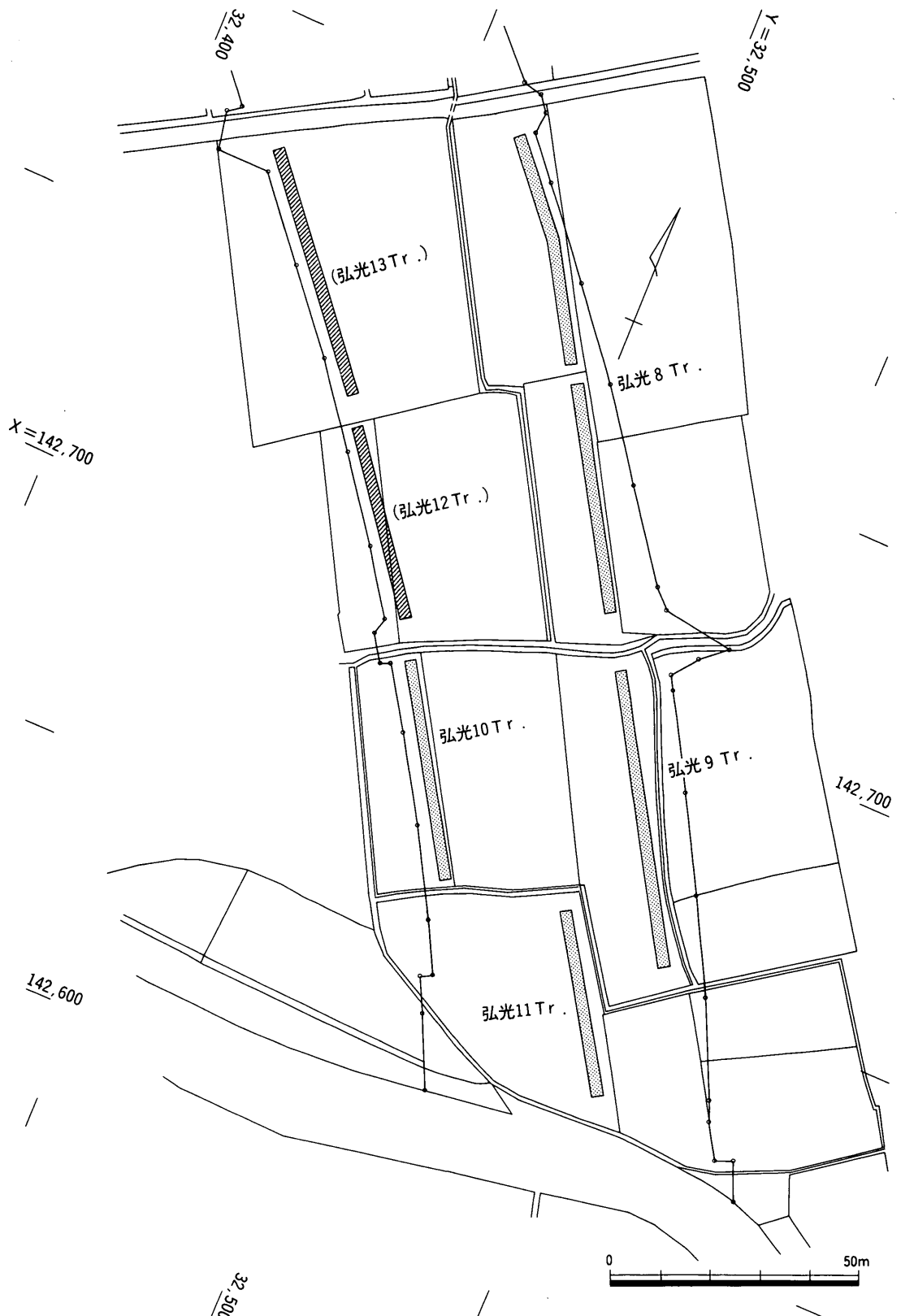
2. 発掘調査の経過

① 予備調査

本調査にさきがけて行なわれた予備調査は、川津地区全体の路線内で行なわれたが、川津二代取遺跡に関連する部分は、平成2年3月7～9日に調査された弘光8～11トレンチである(第2図)。トレンチは横断道路線の両側の際に設定することを基本とするが、弘光12・13トレンチ部分は、予備調査時に未買収地であったため、本調査を開始した直後に調査を行なった。この結果、幅2m・総延長220mのトレンチ調査によって、川津二代取遺跡の範囲が確定された。予備調査によって知られた遺構の概要は第3表に示す通りである。

② 調査区割の設定

本調査は20mのグリッドを設定し、これに基づいて行なった。グリッドの設定は昭和60～62年度にかけて調査の行なわれた下川津遺跡におけるグリッド割りを延長している。これ



第2図 予備調査トレンチ位置図

トレンチ番号	規模(m)	遺構	遺物	土層
弘光8	2×90	溝状遺構 3 土坑 1	弥生土器	床土下に灰～茶色系の希薄な包含層が堆積し、北端では深さ1m以上に達する。遺構はこの包含層の上で検出された。
弘光9	2×44	旧河道 2 溝状遺構 5	弥生土器 サヌカイト	包含層は存在せず、耕作土直下で遺構を検出した。
弘光10	2×42	溝状遺構 3 土坑 1 ピット 多数	土師質土器・須恵器	床土下に約5cmの包含層(灰白色)が堆積し、遺構はこの上から掘り込まれている。
弘光11	2×41	旧河道 1 溝状遺構 4 ピット 少数	なし	包含層は存在しない。

第3表 予備調査トレンチの概要

は下川津遺跡の南に川津中塚遺跡・川津下樋遺跡・川津二代取遺跡が隣接することから、検出遺構の相互検討などに有効であるとの見地によるものである。

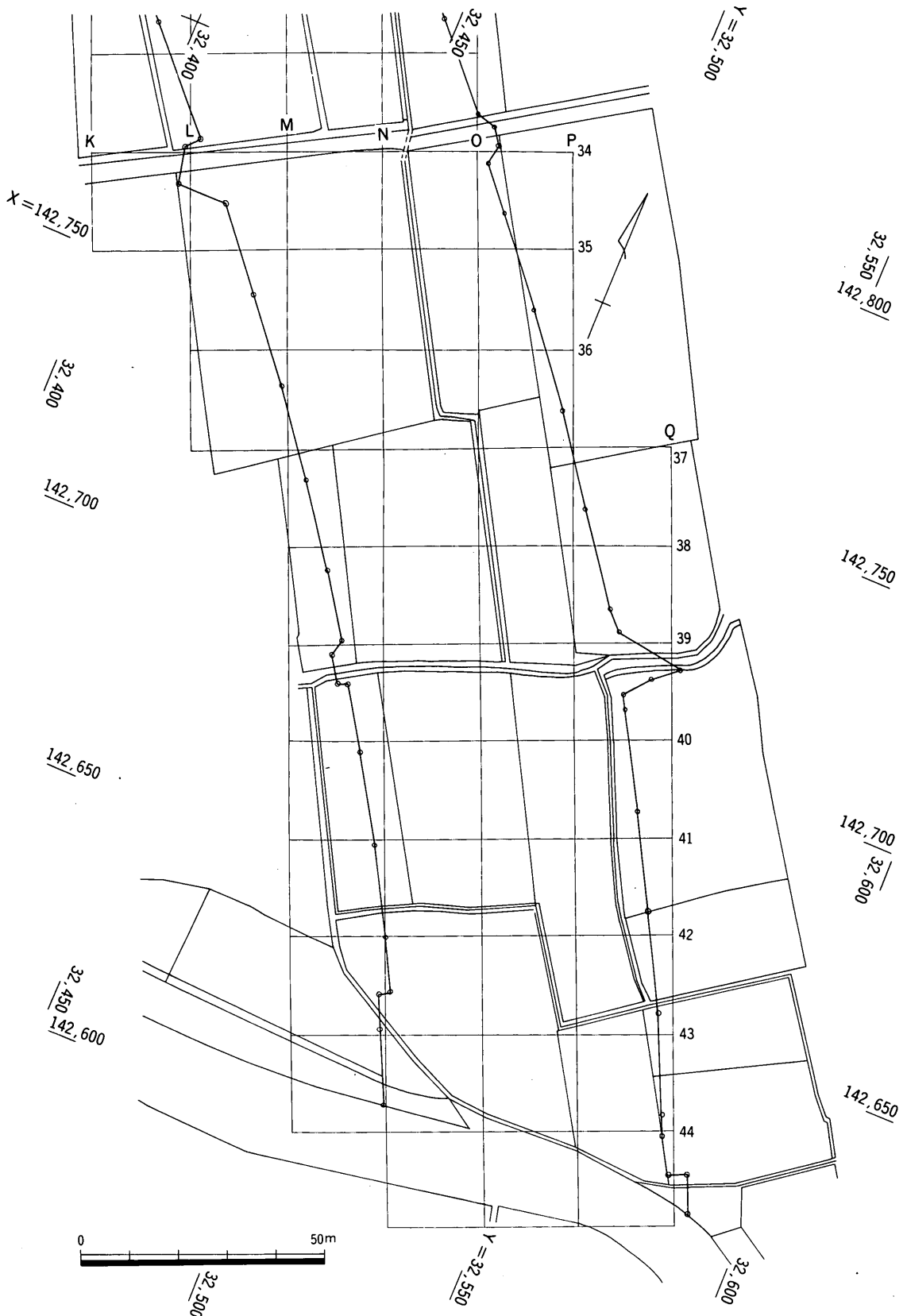
下川津遺跡は、中国地方東部を網羅する国土座標第Ⅴ系に基づいて、真北より23度西に振った軸を基準に20mグリッドを設定している。川津中塚遺跡・川津下樋遺跡・川津二代取遺跡のグリッド設定は、下川津遺跡のグリッドを南に延長したものであるが、その際に座標系を四国地方を網羅する国土座標第Ⅳ系に変換した。^(註)川津二代取遺跡のグリッドは第3図に示す通りである。20×20mグリッド名は西北隅のグリッド杭名によって呼称している。

(注) 座標値の変換は、国土地理院四国地方測量部の御好意で行なわれた。具体的には下川津遺跡の既知の第Ⅴ系の点を経緯度に変換し、それを第Ⅳ系の値に変換した。変換はコンピュータで計算されたが、平面座標系という性質上、数cmの誤差が出ている可能性がある。なお、グリッド杭の座標(Ⅳ系)の一部を掲げる。

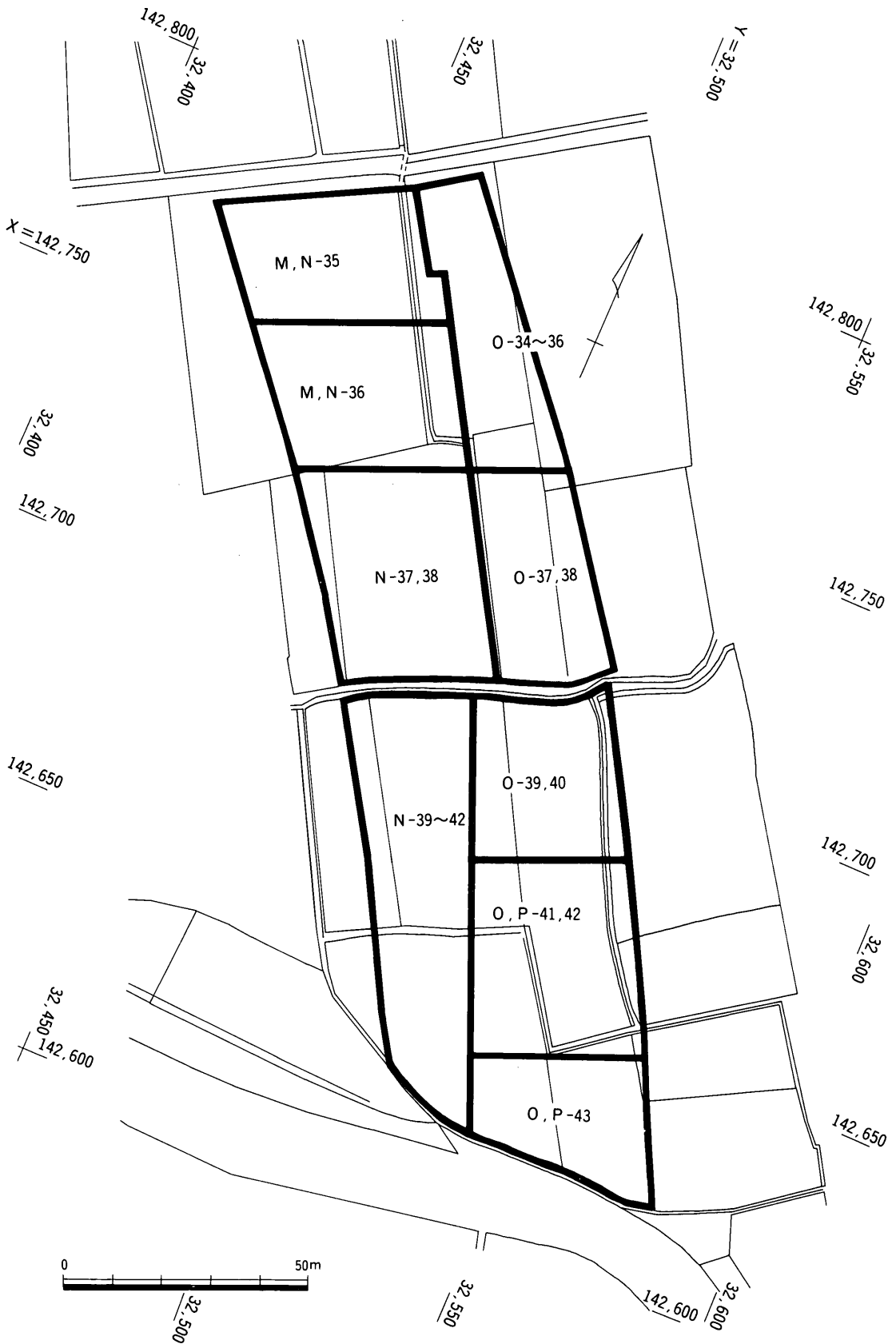
グリッド	X	Y	グリッド	X	Y
N-34	142791.0742	32445.8791	N-40	142680.6135	32492.7667
P-40	142696.2428	32529.5870	P-44	142622.6024	32560.8455

③ 本調査の経過

本調査は、工事請負方式で行なわれ、平成2年5月の入札で村本建設株式会社が落札し、6月19～22日に弘光12・13トレンチの調査を行ない、6月26日より表土除去を開始した。工事契約締結後から調査開始までに2ヶ月近い日数を要したのは、主として現場事務所の用地が確保できなかったことによる。



第3図 グリッド配置図



第 4 図 調査区割図

調査はグリッドラインを基準に、調査区を10区画に分割し順次調査を行なった。分割した調査区の名称・面積および発掘調査の進捗状況を第4図・第4表に示す。

調査は、水田耕作土と床土を重機で除去し、包含層以下を人力で調査することを原則とした。しかし、後述するように調査の遅れが深刻になるにつれ、遺物の包含が希薄な包含層に関しては重機で除去したところもある。

調査着手時から1ヶ月は作業員の就労数が少ない状態が続き、作業員数が20名程になった9月中旬から10月上旬にかけては、天候の不良が続いた。とりわけ9月19日の台風19号による豪雨で調査区南端の大東川からの溢流水が調査区を流れる被害を受けた。また、中世の遺構を調査した後、包含層を除去し弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を調査し、さらに下層の弥生時代前期の自然河川を調査するという具合に複数の遺構面が存在する調査区があり、これを調査計画の中に読み込んでいなかった関係で、次第に調査の遅れが深刻化した。これに対し、作業員の増員や実測作業を夜間に行なうなどの努力をしたが、O, P-41, 42, M, N-35の2調査区については最下層の弥生時代前期に埋没した自然河川について不十分な調査しかできなかった。また、調査終了後に行なう予定であった遺構面下の堆積層の堆積年代や環境を調査する目的のトレンチ掘削も中止した。

平成3年3月3日には、川津公民館において川津中塚遺跡、川津下樋遺跡と合同で地元説明会を開催し、多数の人々の参集を得た。また、平成3年1月までの調査成果の概要を速報した。(注)

(注) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』 1991. 8 香川県教育委員会・

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局

『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成2年度』 1991 財団法人香川県埋蔵文化財調査センタ

3. 整理作業の経過

整理作業は、平成5年4月1日に開始され、平成6年3月31日に終了した。

平成5年度の整理体制および工程は、以下の通りである。

調査区 (面積)	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
N - 39, 40 (700㎡)	準備工										
N - 41, 42 (1100㎡)											
N - 37, 38 (1400㎡)											
O - 39, 40 (950㎡)											
O - 37, 38 (1000㎡)											
O - 34, 36 (940㎡)											
O, P - 43 (1050㎡)											
M, N - 36 (910㎡)											
O, P - 41, 42 (1200㎡)											
M, N - 35 (1000㎡)											
牧野 啓造											
木下 晴一											
塩田公一郎											
白川 悦代											

(▲は写真撮影用の撮影の実施を要す)

第4表 発掘調査の工程

香川県教育委員会事務局文化行政課

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括課長 中村 仁
 主幹 菅原 良弘
 主幹 小原 克己
 総務係長 源田 和幸
 主事 櫻木 新士
 主事 石川恵三子
 (～5.31)
 藤原 和子
 (6.1～)
 埋蔵文化財係長 藤好 史郎
 主任技師 國木 健司
 主任技師 森下 英治

総括所長 松本 豊胤
 次長 真鍋 隆幸
 総務係長(事務) 土井 茂樹
 主事 齋藤 政好
 (～5.31)
 主事 西村 厚二
 (6.1～)
 調査係長 渡部 明夫
 係長 廣瀬 常雄
 主任技師 木下 晴一

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
遺物注記(土器)	■											
遺物接合・復元		■										
遺物実測・拓本			■	■	■	■						
レイアウト						■						
遺物観察表							■	■	■			
遺物写真撮影							■	■				
トレース									■	■		
図版作製											■	■
原稿執筆							■	■	■	■		
編集											■	■
整理収納												■

第5表 整理作業工程

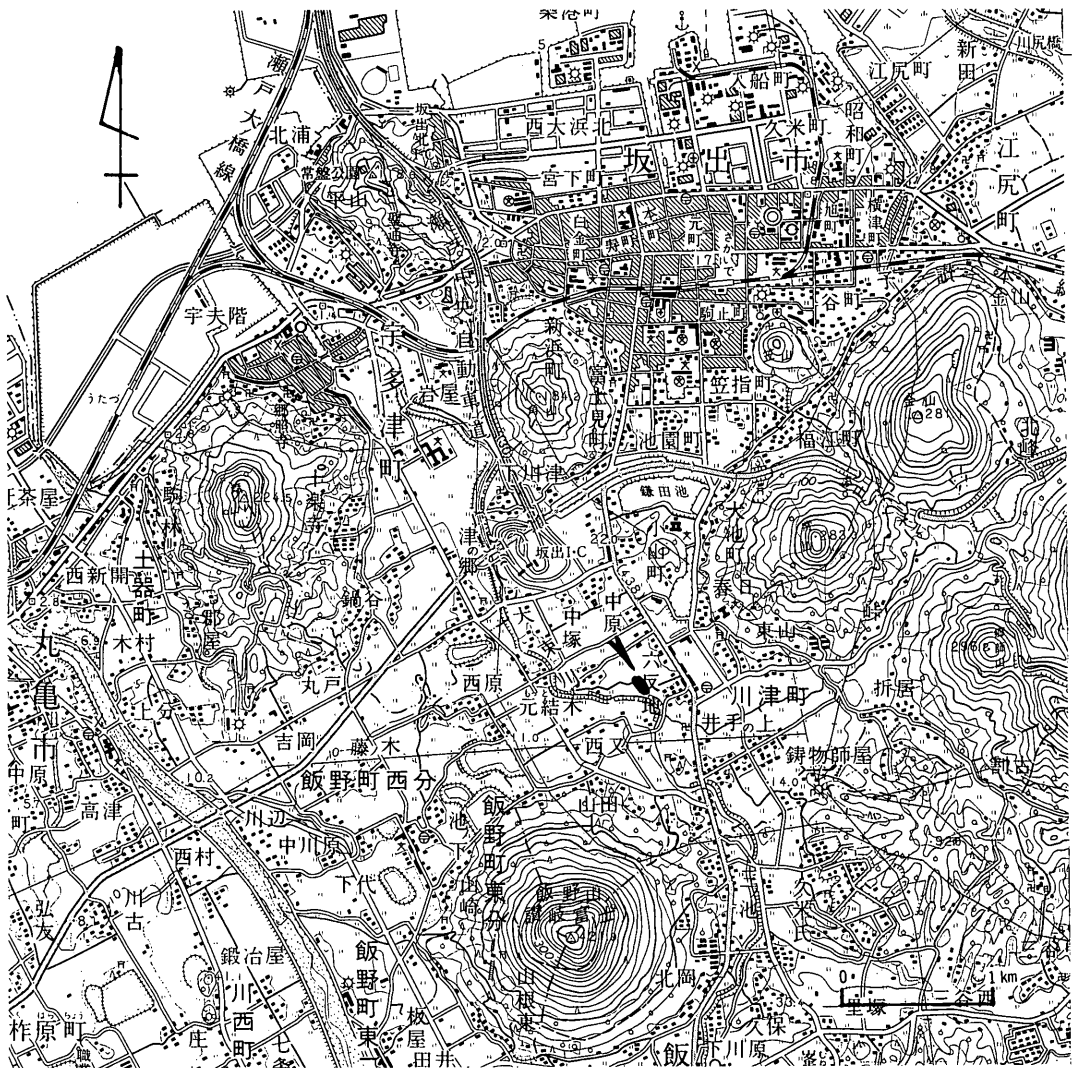
整理作業に携わった方々

青木民江、岩井弘恵、多田見和、東條俊子、
 西紋佳寿子、藤野麻理、山地真理子

第2章 遺跡の立地と環境

1. はじめに

川津二代取遺跡は、香川県中部に位置する丸亀平野の東北端、現在の行政区分で香川県坂出市川津町に所在する。安政五年(1858)に成立した『西讃府誌』によると、川津町は鶴足郡の西川津村と東川津村の二村からなり、西川津村には、西又・蓮尺・中原・下川津・中塚・北新田・山田・南新田・畑方・広光の免⁽¹⁾が記載されている。このうち広光免には、上所な



第5図 川津二代取遺跡の位置 (国土地理院1/5万地形図「丸亀」を使用)

ど十六の小地名が記載されており、遺跡所在地付近は、「二代取」と呼ばれている。

遺跡は東西南北を山塊に画された東西3km、南北2km程の平野に位置し、この平野の中央に大東川と呼ばれる小河川が流れている。平野中には南北方向においては不明瞭であるが、東西方向では条里型地割が認められる。集落は、集村をなすものと疎塊村状をなす部分が混在している。調査着手前の調査地の地目はすべて水田であった。

先述した通り、現状の地形からみると、遺跡は大東川流域の平野に位置している。しかし、第6図の等高線図を見れば明らかなように、遺跡付近の平野は丘陵などの明瞭な分水界をもって水系的に完結しているのではなく、土器川の営力下にある。また、大東川上流は、河川争奪された旧綾川が形成した谷底平野⁽²⁾を主として流れており、狭い集水面積しかもたない。このように丸亀平野の河川は、時代によって変遷し、やや複雑な様相をもっている。このうち、遺跡の立地や土地利用を考えるに際し、古代末頃と推定される大東川の下刻によって形成された段丘が重要である。本章では、この点を中心に記述する。

2. 大東川流域の段丘崖

(1) 大東川の流況

大東川は、丸亀平野の東南部を画する大高見峰(504.1m)を主峰とする山塊を水源とする。富熊・上法軍寺・下法軍寺が所在する幅約1.25kmの広い谷底平野を東大東川・中大東川・沖川・大東川に分流して流れ、下法軍寺島田の集落の東南付近で相次いで合流している。四流はいずれも条里型地割にほぼ合致しており、人為的に固定された流路と考えられる。合流して後は、飯野山と東側の丘陵およびその前縁に付着する段丘の間を北流し、角山と青ノ山の間を

通って宇多津町で瀬戸内海に注いでいる。流域面積は55.1km²、流路延長は約51.4kmを測る。

国道11号線以南の大東川の両河岸部には比高0.5~1.0m内外の小崖(段丘崖)が、200m程の幅で連続している(写真1)。大東川寄りの低い面には、高い面に認められる条里型地割が認められない。また、川津二代取遺跡調査中

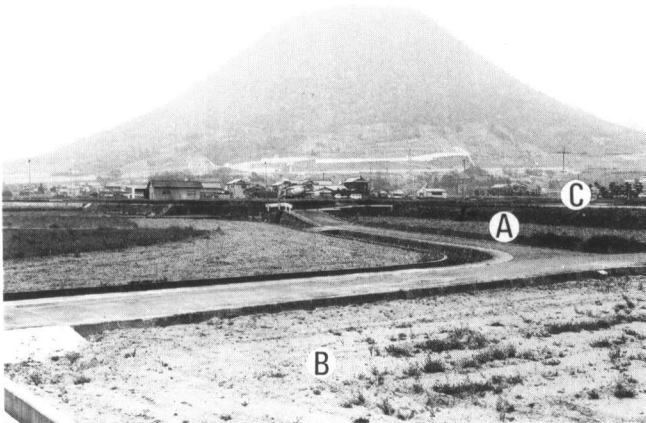
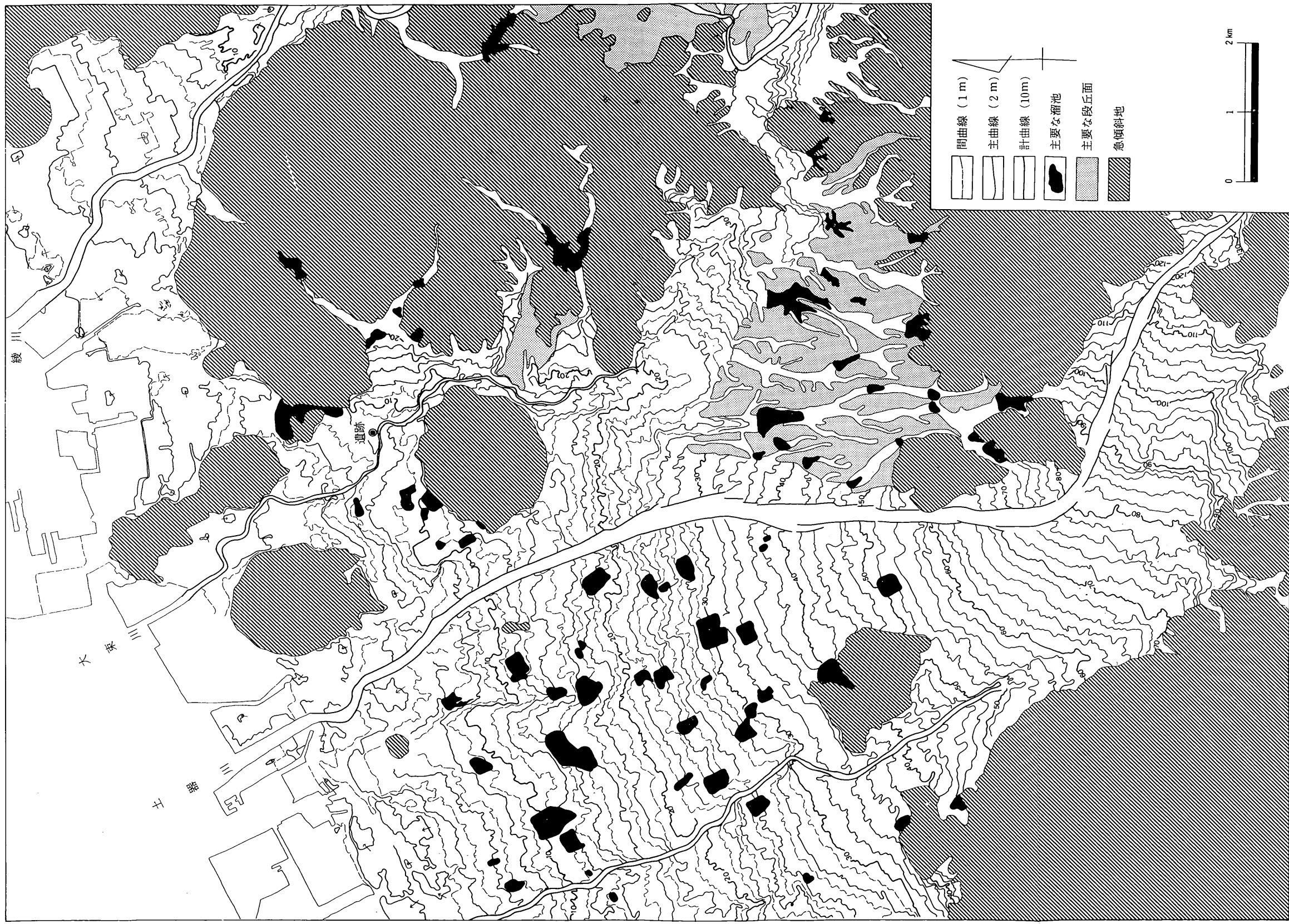


写真1 大東川流域の段丘崖
(A:段丘崖、B:氾濫原、C:段丘I面)



第6図 丸亀平野1m等高線図

の1990年9月の台風19号による降雨で低い面の広範囲が冠水するなど、数年に一度ほどの頻度で冠水する地形面であるという特徴がある。

結論を先に述べると、大東川流域に認められる2面の地形面は、古代末頃に形成されたと考えられ、瀬戸内海東部の臨海平野で指摘された「完新世段丘」⁽³⁾に相当すると考えられる。この段丘崖の形成される以前は、遺跡周辺は網状流をなす主として土器川の(旧)河道と自然堤防からなる地形環境を呈していたと考えられ、段丘崖の形成によって現状の河道に固定されたものと考えられる。したがって段丘崖の形成前後の土地利用には変化が認められる可能性がある。本章では、大東川流域の低い地形面を「氾濫原面」、段丘崖に画された高い地形面を「段丘I面」と呼称することにする。

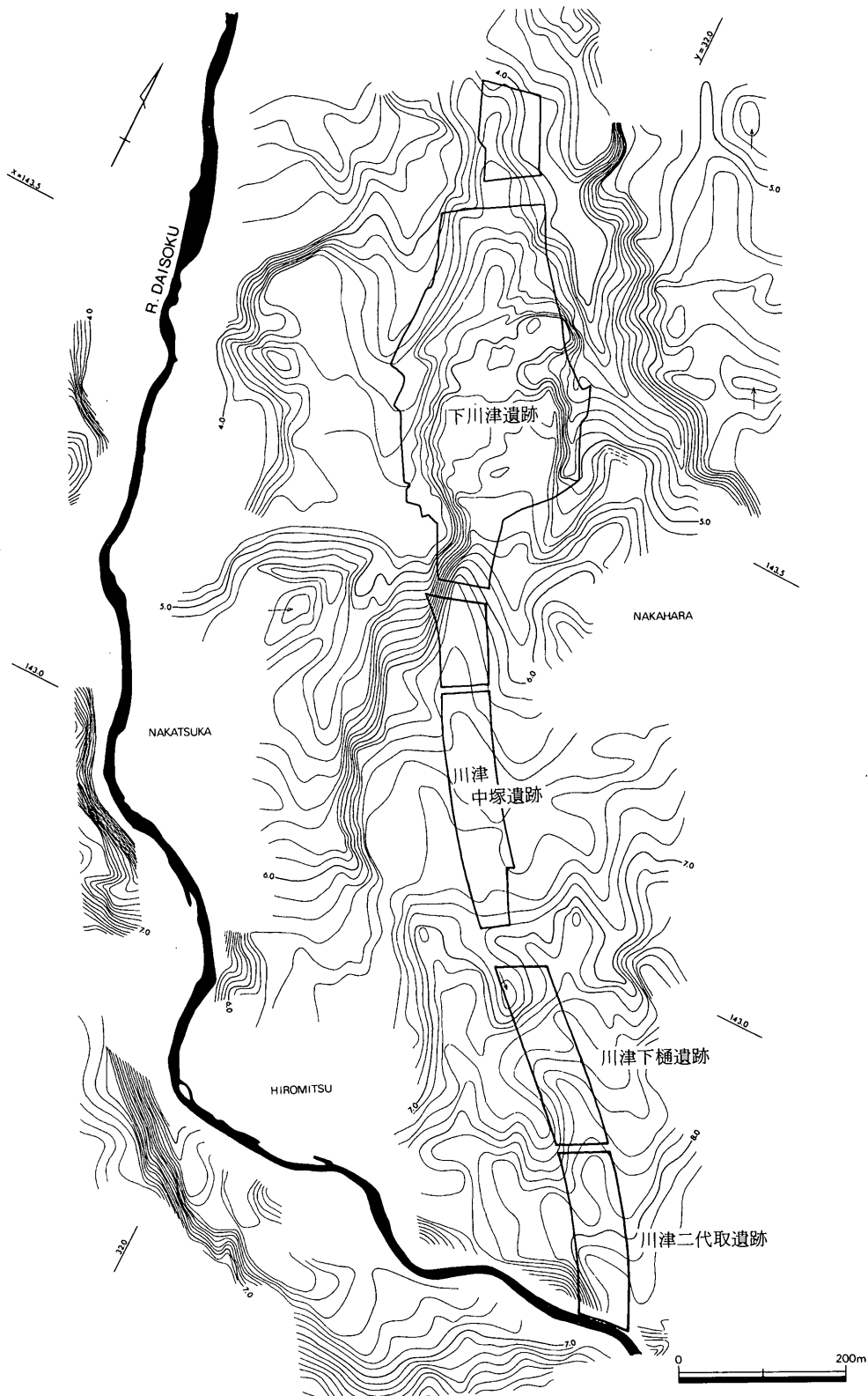
(2) 10cm等高線図と白黒空中写真の濃度分析

はじめに段丘崖の平面的な範囲を抽出した方法について簡単に記しておく。

通常、段丘崖のような微地形を抽出する方法は、空中写真の実体判読を行なう。今回は、1962年に建設省国土地理院が撮影した縮尺一万分の一の白黒空中写真(SI-62-4)を線比2倍に引き伸ばしたものを中心に使用した。大縮尺の空中写真を用いるのは、局所的な土地の高低差をより明確に把握するためである。この場合、段丘崖の比高が50cm以上であれば実体視によって容易に判読できるが、50cm以下になると(判読者の能力にもよるが)次第に暗示的にしか捉えられなくなる。そこで、地表面の微起伏を抽出するために10cm等高線図を作成した。

10cm等高線図は、現在の水田の標高を中心に、それを割り込んで等高線を引くことによって地表面の微起伏を抽出する図である。川津二代取遺跡周辺では、四国横断自動車道をはじめ、瀬戸中央自動車道の建設や大東川の河川改修に際して、縮尺千分の一の工事用設計図が作製されており、これらによって10cm等高線図を作製し、編集したのが第7図である。等高線のパターンを観察すると、舌状もしくは紡錘状の微高地や谷状の凹地を読み取ることができ、これが微高地や旧河道などの微地形を表すものと考えられる。

第7図を見ると、大東川の左岸には等高線が密になる部分が断続して認められる。10cm等高線図は水田の中心部の標高を割り込んで作図するため、実際より緩傾斜の等高線として表現されるが、この部分は写真1に見られるような段丘崖である。一方、右岸側には明瞭に等高線が密になる部分が存在していないが、後述する濃度分析の結果や発掘調査の成果から、「中塚」集落の東側の標高6m付近の、やや等高線が密な部分が段丘崖にあたる。それは、下川津遺跡の調査区の西辺付近を通り、「下川津」集落付近まで辿ることができる。「中塚」



第7図 川津二代取遺跡周辺 10cm等高線図

集落の南側は「弘光」集落が近接しており10cm等高線を引くことができない。集落を分断する形で段丘崖が存在するものと考えられる。

10cm等高線図が、現地表面の微起伏を抽出する方法であるのに対し、白黒空中写真にあらわれる濃度の差に基づいて微地形を抽出しようとするのが、濃度分析である。

白黒空中写真の被写体は白から黒までの多数の階調によって表現される。一般的に地表面が湿っている場合には黒っぽく、乾いている場合は白っぽく写る傾向がある。空中写真を観



写真2 濃度分析の一例

察していると、旧河道が黒っぽい帯となって写っていたり、微高地が白っぽくパッチ状に写っていたりすることがある。しかし、このような濃淡差の識別は判読者の経験や能力に大きく左右されるといわれている。そこで、客観的なデータとして濃淡差を知るために濃度測定器で読み取ったデータを、パソコンで

様々な方法で出力し、分析することを試みている。これはまだ試行錯誤の段階にあるが、ここでは写真2を紹介する。

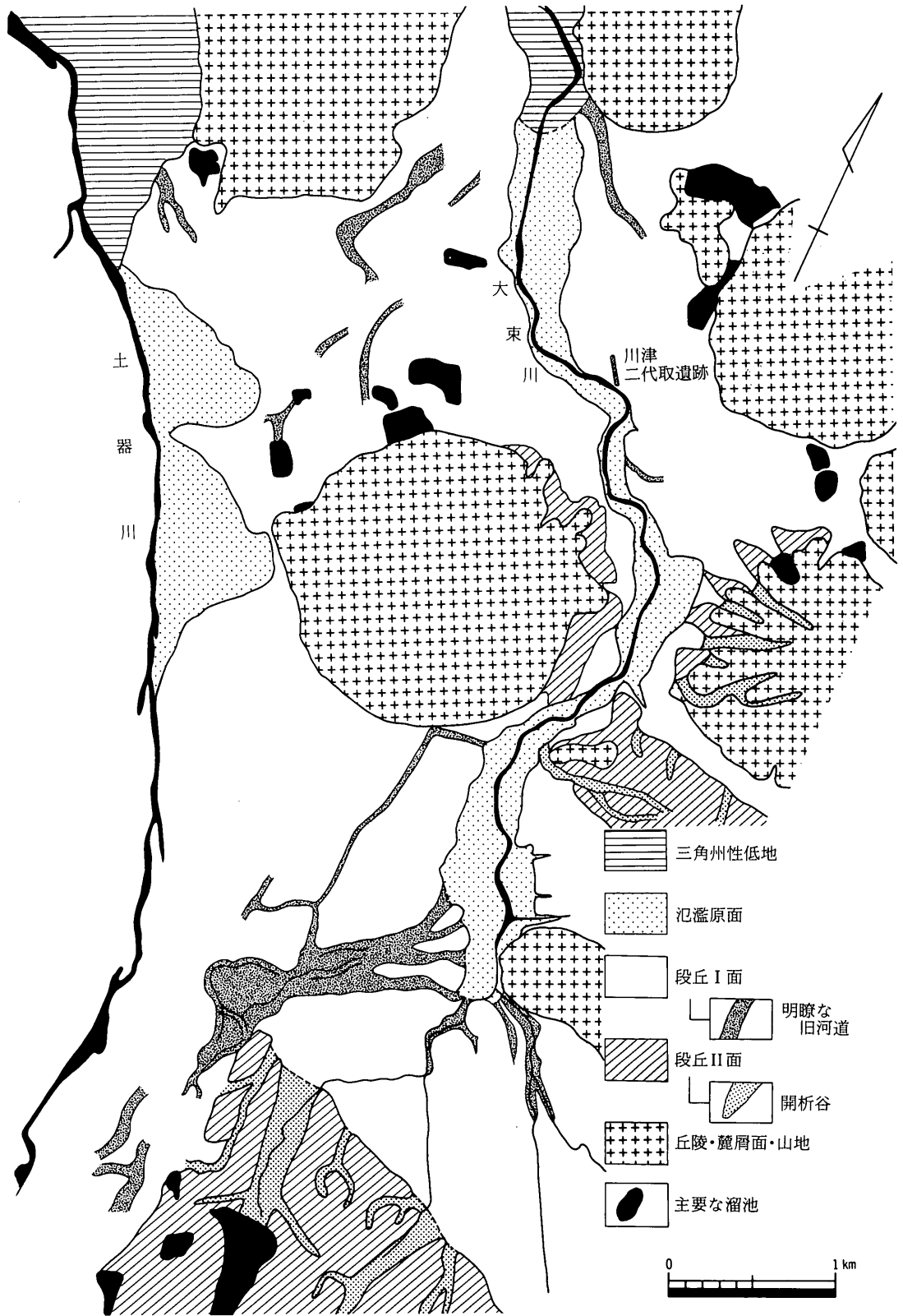
写真2は、右下が下川津遺跡付近、中央部に大東川が北流する付近の写真である。これは実際の長さ約3m毎に1点の割合で、濃度を256段階に読み取り、濃度ヒストグラムを平坦化し、14段階の濃淡に出力したものである。したがって、実際の空中写真の濃度を単純に強調した画像ということになる。

一見して注目されるのは大東川の流域が白っぽく写っていることである。結論だけ述べると、この部分は大東川の三角州にあたり、砂などの粗粒の堆積物で埋積されているため表層が乾きやすく、白っぽく写真に写るのである。また、この写真では十分に指摘されないが、左右の下半部分に黒っぽい帯が写っている。これは段丘I面上の旧河道である。このように空中写真の濃淡差が微地形の違いを示すことがある。

(3) 段丘崖の範囲

主として空中写真判読で抽出した段丘崖の範囲を第8図に示す。

段丘崖が現地表に認められるのは下川津遺跡付近より南で、200mほどの幅で蛇曲しなが



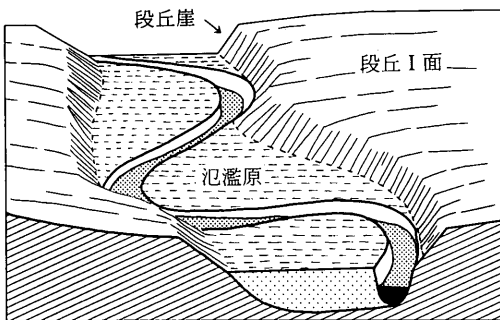
第8図 大東川流域の微地形分類略図

ら連続している。河道の凸岸部では段丘崖が不明瞭になるところがあるが、これはポイント・バー堆積物によって崖が不明瞭になっているものと考えられる。段丘崖は大東川支流の四流が合流している「島田」集落付近まで認められる。その上流は西南方向の土器川にむかっている明瞭な旧河道に連続する。この旧河道は土器川付近では土石流堆状の高まりを形成しており、土器川の主流が激しく流れ込んだことが想定される。段丘崖の形成つまり河床が低下した原因は不明であるが、大東川の段丘崖は土器川の主流が流れ込んで形成されたものと判断される。なお、現在の土器川の河岸にも段丘崖が形成されており、成因・形成時期は大東川と同様と考えられる。

(4) 段丘崖付近の堆積状況

次に、段丘崖で画される二面の地形面の堆積状況を概観する。この部分は昭和60～62年度に調査された下川津遺跡と平成2年度の川津一ノ又遺跡 I・II 区の調査によって堆積状況を知ることができる。川津一ノ又遺跡 I・II 区は概要報告⁽⁴⁾によると、氾濫原面においては、現耕作土直下にシルト質細砂がほぼ水平に堆積し、その下には、シルト・細砂・粗砂が現河道方向に緩やかに落ち込んで堆積する。一部のトレンチでは、その下（現地表面より2.3m 以深）でグライ化した暗灰～暗灰青色シルトが堆積し、この層中より古代末～中世の黒色土器片が出土している。一方、段丘 I 面上での堆積状況は、現耕作土直下に厚さ 2m 程のシルトが堆積し、その下層に層厚 0.4m 程の粘土・粘質土、層厚 1.2m 程の木質を含む黒色粘土が堆積する。層は概ね水平に堆積している。堆積年代を知る手掛かりは今のところ得られていない。

下川津遺跡では、第 4 低地帯と呼称される部分が氾濫原にあたる。第 4 低地帯とは、第 10 図における S R 4-1～4-6 部分である⁽⁵⁾。第 7 図でも説明した通り第 4 低地帯の旧河道群の東端付近に 10cm 等高線の密になる部分がある。第 10 図の断面模式図にも見られるとおり、河床



第 9 図 段丘崖の堆積状況模式図

が大きく下方に抉り取られている状況からみても、ここに段丘崖が存在するものと考えられる。ただし、下川津遺跡においては、「平安洪水砂」と呼称される大規模な洪水によると推定される堆積層の問題や、遺跡東側の河川の下刻によって生じた谷頭侵食によって形成されたと推定される S R 2-2・S R 3-3 の年代観、あるいは、第 4 低地帯の諸河道出土の遺物の年代観の問題など、筆者

の側で十分な整理ができていないため、段丘崖の形成時期については、古代末という漠然とした年代観を与えることしかできない。

以上のことから、段丘崖付近の堆積状況は第9図のように模式的に示すことができる。

3. 段丘崖形成以前の微地形

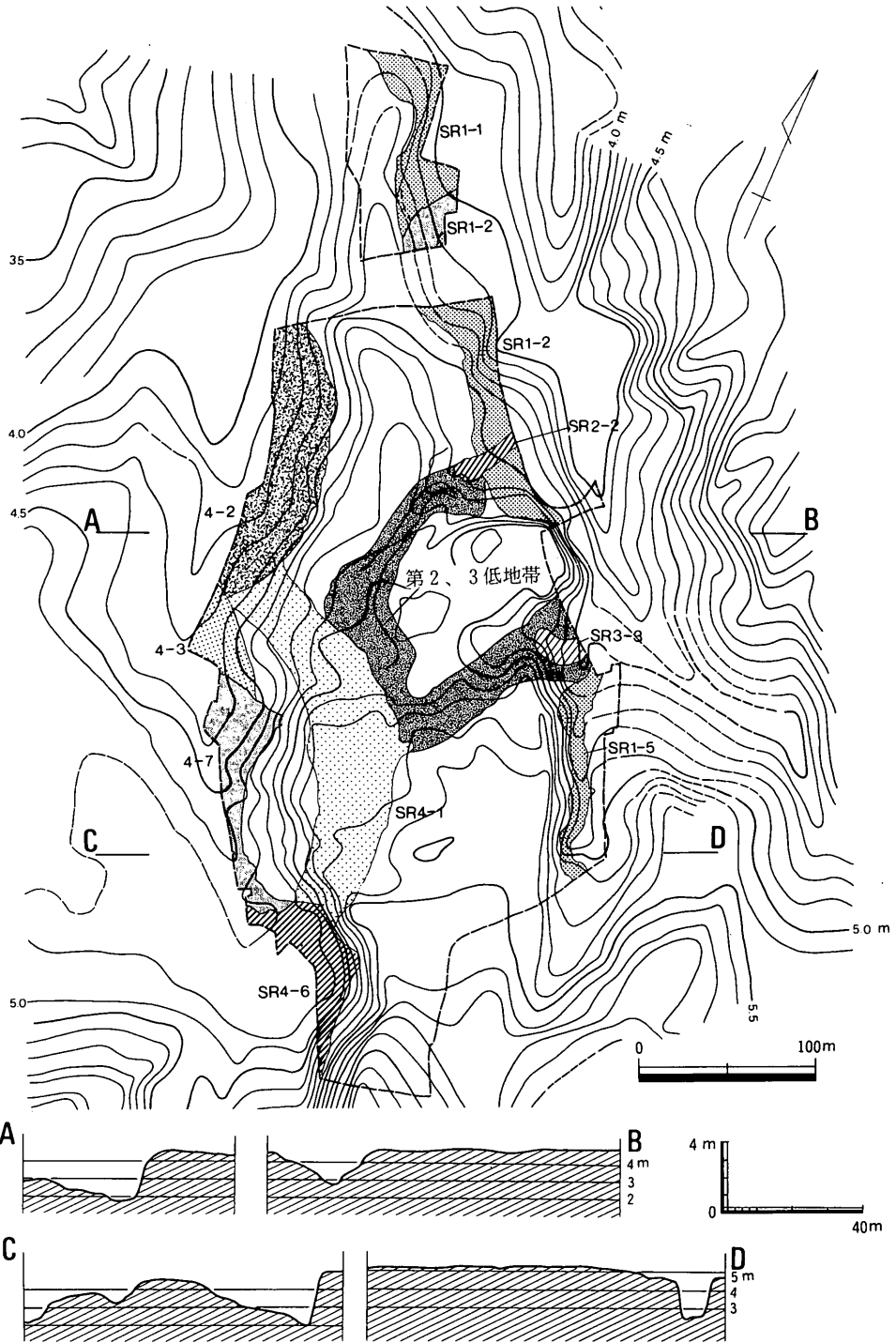
第10図の「下川津遺跡の検出河道と10cm等高線図」は、発掘調査で検出された旧河道と10cm等高線図を重ね合わせたものである。まず、旧河道のおおまかな埋没の年代観は、

第2・3低地帯(弥生時代前期の埋没)・SR1-1(古墳時代前期の埋没)・SR1-5(古墳時代末の埋没)・SR1-2(奈良時代前半までに埋没)・SR4-2(平安時代前半までに形成、殆ど開折されていない)・SR2-2(平安時代中頃の埋没)・SR4-6(平安時代後期に埋没)・SR3-3(平安時代末までに埋没)・SR4-1(平安時代末に埋没)・SR4-7(鎌倉時代に埋没)のように整理される。

旧河道の埋没年代と10cm等高線図の凹地との関係を見ると、埋没の新しい旧河道ほど明瞭に地表面の凹地の連続として捉えることができ、弥生時代前期埋没の河道やSR4-1は現地表面に凹地として痕跡を残していない。これは、前代の微地形が現地表面に残している微起伏が、段丘崖の形成という大きな微地形変化によって消去されているという、下川津遺跡周辺のみの特異性にもよるが、概ね、10cm等高線図にあらわれる凹地と旧河道との関係、あるいは、微凸地と実際の微高地の関係は第10図のごとくである。また、先述した濃度分析では、10cm等高線図に現れる凹地と相対的に黒っぽく写っている部分との間には相関関係が認められ、10cm等高線図では凹地として捉えられないものの、濃度分析では黒っぽく写る帯として認められ、旧河道を推定できる場合もある。反対に、10cm等高線図で微凸地として捉えられる部分と濃度分析で白っぽく写る部分の間にも相関関係がある。

以上のような確からしさではあるが、10cm等高線図と濃度分析によって、川津二代取遺跡周辺の微地形は、第11図のように分類される。川津二代取遺跡の立地する段丘I面は、パッチ状に散在する明瞭な微高地と微高地と、その間を網状に流れた河道からなっている。地形発達史の観点からは、段丘I面は氾濫原が形成される以前は、「氾濫原」の性格をもつ地形面であった。弥生時代後期から古代頃までの集落を検出した下川津遺跡や川津中塚遺跡の北部⁶⁾は微高地部分にあたり、微高地を選んで住居を構えていたことが推定される。

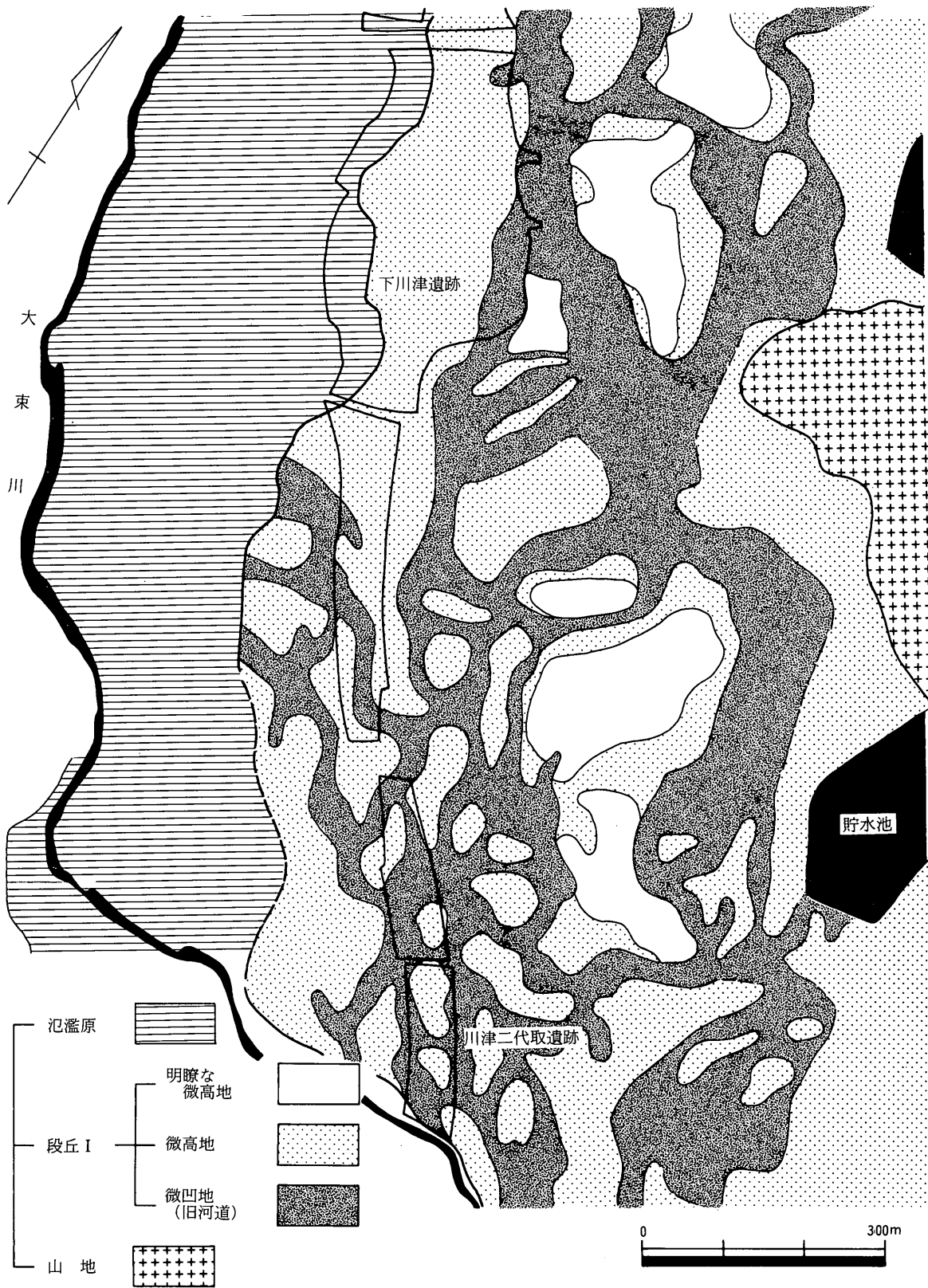
一方、古代末頃に氾濫原が形成されると、段丘I面のパッチ状の微高地と旧河道(微凹地)の関係が、段丘I面(微高地)と氾濫原(微凹地)という関係に変化する。下川津遺跡の中



第10図 下川津遺跡の検出河道と10cm等高線図・下川津遺跡断面模式図

(下川津遺跡断面模式図は、『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』

1990 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団より転載)



第11図 川津二代取遺跡周辺 微地形分類予察図

世の建物や、後述する本遺跡の中世集落が段丘Ⅰ面の旧河道上に営まれるのは、このような微地形変化による土地条件の変化が前提となる可能性が高い。

4. まとめ

遺跡の立地と環境について大雑把に述べてきたが、この程度の縮尺の微地形分類を行なうと、遺跡や遺構の立地や性格について理解を深める資料とすることができると考えられる。しかし、この微地形分類は求める時代の地形環境を正確に知り得るものではなく、ある粗さをもったものである。また、平面的な把握にとどまっており、垂直的な検討が行なわれていない。垂直的というのは堆積層の検討のことであるが、これは微地形分類自体が妥当なものか、範囲は妥当かなどを判断するだけでなく、環境や形成時期などを知るデータの入手の機会でもある。そして、その最も良い機会が発掘調査ということになる。

微地形と遺跡の立地との間に何らかの相関関係があるかどうか、微地形によって特徴づけられる土地条件は地域によって個別的（地誌的）な側面があり、単純に論じられない。しかし、ある地域の微地形と遺跡の立地については相関関係がある可能性がある。このことを前提とすると、限定された範囲の発掘調査データが面的にどこまで広がるのか地形から推定することができる。また、検出された遺跡（特に集落遺跡など）の立地と同一の土地条件（微地形）のところにも同様な遺跡が立地する可能性が考えられる。また、同様な土地条件のところには遺跡が存在しない場合には検出された遺跡のもつ歴史的な意味をより深く把握できる可能性がある。あるいは、噴砂など大地震の痕跡が検出された場合、その範囲を微地形から推定するなど「アボイド・マップ」としての役割も期待できるなど、多様な利用価値がある。今後、このような視点からの検討を深める必要があろう。

(注)①高松藩では租税徴収の単位も「免」と読んでいた。

②高桑 紘「堤山附近の河谷地形」『香川大学学芸学部研究報告』第Ⅰ部第3号 1953

③高橋 学「地形環境分析からみた条里遺構年代決定の問題点」『条里制研究』第6号 1990など

④「川津一ノ又遺跡Ⅰ・Ⅱ区」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成2年度』1991 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局

⑤SR4-1とは、報告書で記載される第4低地帯流路1の略である。(以下も同じ)

⑥「川津中塚遺跡Ⅰ区」「川津中塚遺跡Ⅱ区」注4と同一文献。および「川津中塚遺跡Ⅰ区」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成3年度』1992 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団高松建設局

第3章 調査の成果

第1節 層序の概要

調査時の土層断面観察から、川津二代取遺跡の土層の堆積状況と遺構との関係は、下図のように模式的に示される。また、調査時に作成した土層断面図のうちの3ヶ所を掲載し、報告する。

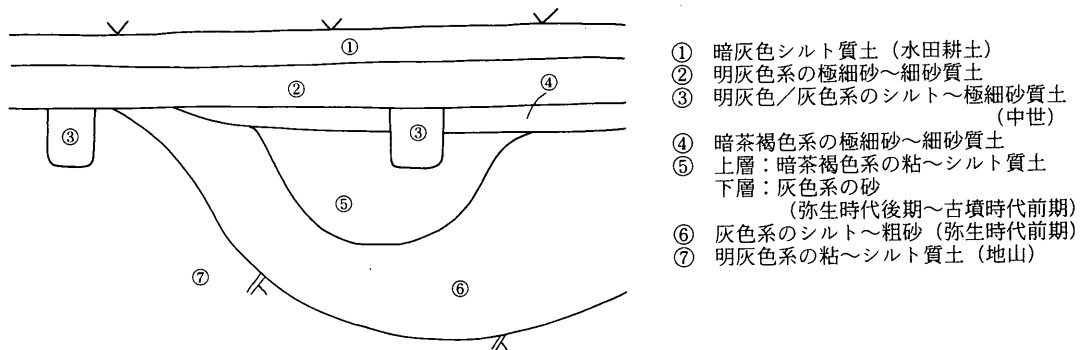
(1) 堆積状況の概要

第12図は、川津二代取遺跡の土層断面模式図である。

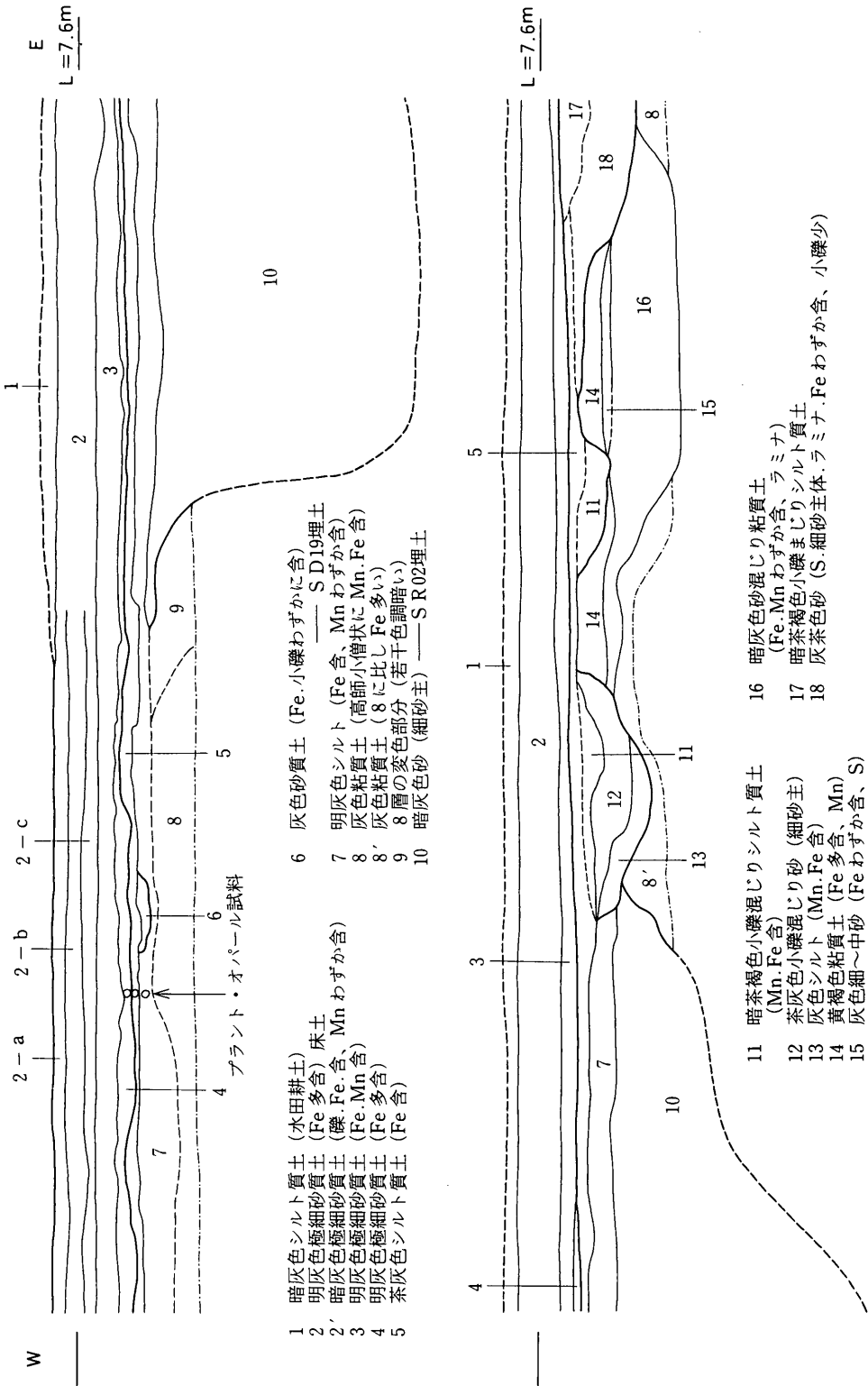
地表面の現代の水田耕作土(①)の下層には、明灰色系の極細砂～細砂質土が堆積している(②)。この層は、過去の水田耕作によって形成された層と考えられ、鉄分やマンガン粒の集積によって3層程度に細分される。②層の下には、地山と考えられる黄色味を帯びた明灰色系のシルト質土(⑦)が堆積する部分と暗茶褐色系の極細砂～細砂質土(④)が堆積する部分がある。④層は相対的な凹地部分の堆積層と考えられ、出土遺物から古墳時代後期～中世までの間に形成されたものと考えられる。なお④層は、市道の北側の調査区においては削平のため認められない。

中世の遺構は、④層・⑦層の上面から掘り込まれている。

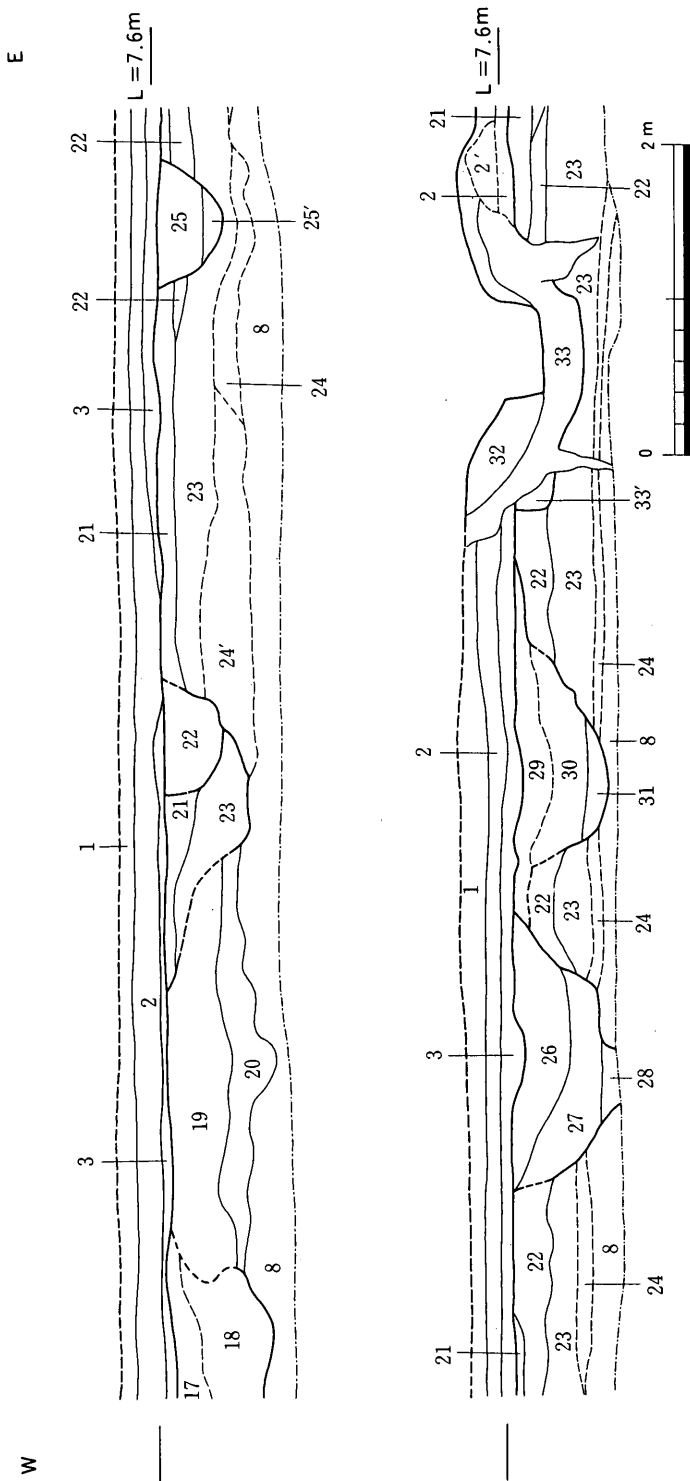
⑤層は、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構(溝)である。このうち規模の大きいものは砂からなる下層と粘土・シルトよりなる上層の2層に分層されるものが多い。これらは④層



第12図 土層断面模式図



第13図 調査区北端 土層断面図①



- 19 茶灰小礫混じり砂 (細砂主、Mn、Fe 含)
- 20 灰色砂 (S、細砂主、小礫のベニヤ、Fe わずか含)
- 21 暗茶褐色シルト質土 (Mn、Fe 多含)
- 22 灰色小礫混じり砂質土 (Fe 多含、Mn 含)
- 23 灰色粘質土 (高師小僧状に Mn、Fe 含)
- 24 灰色粘質土、粗砂
- 24' 灰色中砂 (Mn、Fe 含、淘汰良い、6 との境は不明瞭)
- 25 暗茶褐色小礫混じりシルト質土 (Mn、Fe 含)
- 25' 暗茶褐色シルト質土 (Mn、Fe 含)
- 26 暗茶褐色小礫混じり
- 27 シルト質土 (Mn、Fe 含) のプロックなどが乱雑に入る)
- 28 灰色砂 (S、細砂が主)
- 29 暗茶灰色粘質土 (Mn、Fe 含)
- 30 灰色粘質土 (Mn、Fe わずか含)
- 31 灰色砂 (小礫わずか含、細砂主体)
- 32 灰色シルト質土 (現、腐蝕土)
- 33 灰色粘質土 (~暗灰) (Fe 含)
- 33' 灰色砂質土 (Mn、Fe 含、用水路の攪乱)

第14図 調査区北端 土層断面図②

の下面から掘り込まれている。

⑥層は、弥生時代前期に形成された旧河道である。灰色系の粗砂～シルトの級化層理が認められる。⑦層上面から掘り込まれているが、⑦層との分層は、断面観察では容易なものの上での平面的な観察では、両者が酷似しているため困難であった。

⑥層の下面、あるいは⑥層より古いと考えられる旧河道も存在する。調査区南東端のSR01の下層に存在する、粗砂・小礫によって埋没した旧河道と、調査区東北端の粘土・シルトによって埋没した旧河道である。後者の旧河道は予備調査の際に弘光8トレンチで確認されたものである。これらの旧河道については十分な調査を行っていない。

⑦層以下の堆積状況は、調査区内の数ヶ所で行なった深掘りトレンチによって、地表下2m程度までの状況は把握している。第15図はN-40グリッド杭付近での下層確認トレンチの柱状図である。それによると⑦層は、巨視的には同系統の色調と同一粒径の堆積層が続いている。肉眼観察では、時期判定の手掛かりとなるテフラ層などは認められなかった。なお、⑦層上面から10cmおきに採集した数gの土壌サンプルを、地学団体研究会が示す方法^(注)によって、分析した結果においても火山ガラスの濃集層は認められなかった。したがって、⑦層の堆積年代を推定する手掛かりは得ら

れていない。

(2) プラント・オパール分析

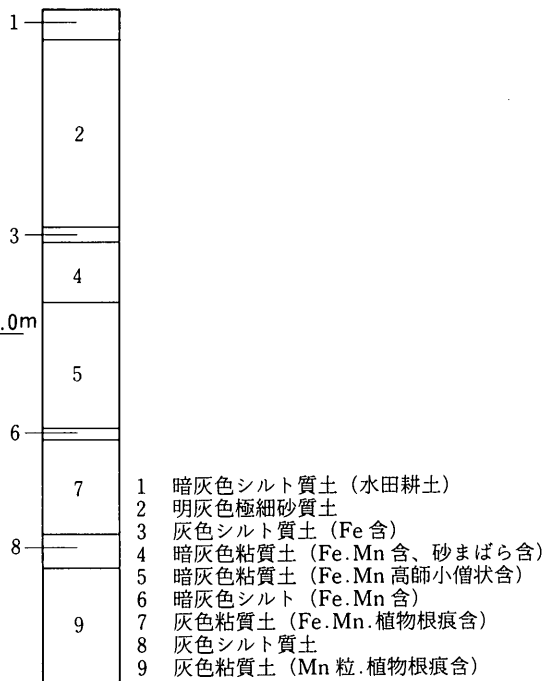
第13・14図は、調査区北端の東西方向の土層断面図である。ここでは東から西に向かって徐々に標高が下がる傾向があり、数層が堆積している。調査では水田遺構は検出されなかったが、水田土壌の可能性が考えられ、プラント・オパール分析を行なった。結果は、積極的に水田耕作を裏付けるものではなかったが、試料採集の前提となる分層に問題があった可能性もあり、今後に課題を残した。

(注) 野尻湖火山灰グループ『火山灰分析の手びき
—双眼実体顕微鏡による火山灰の砂粒分析法』
地学団体研究会 1989

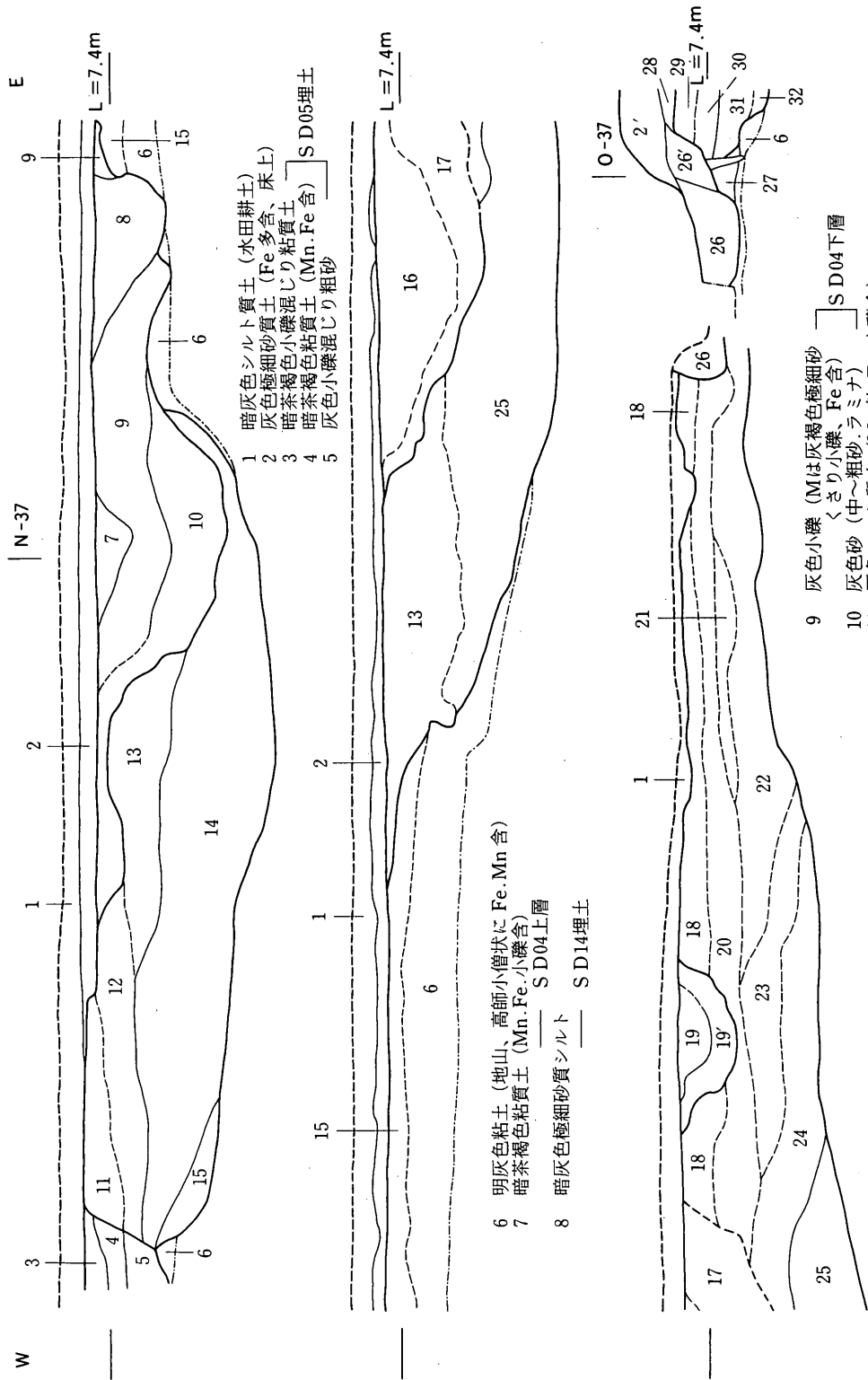
L = 8.0m

L = 7.0m

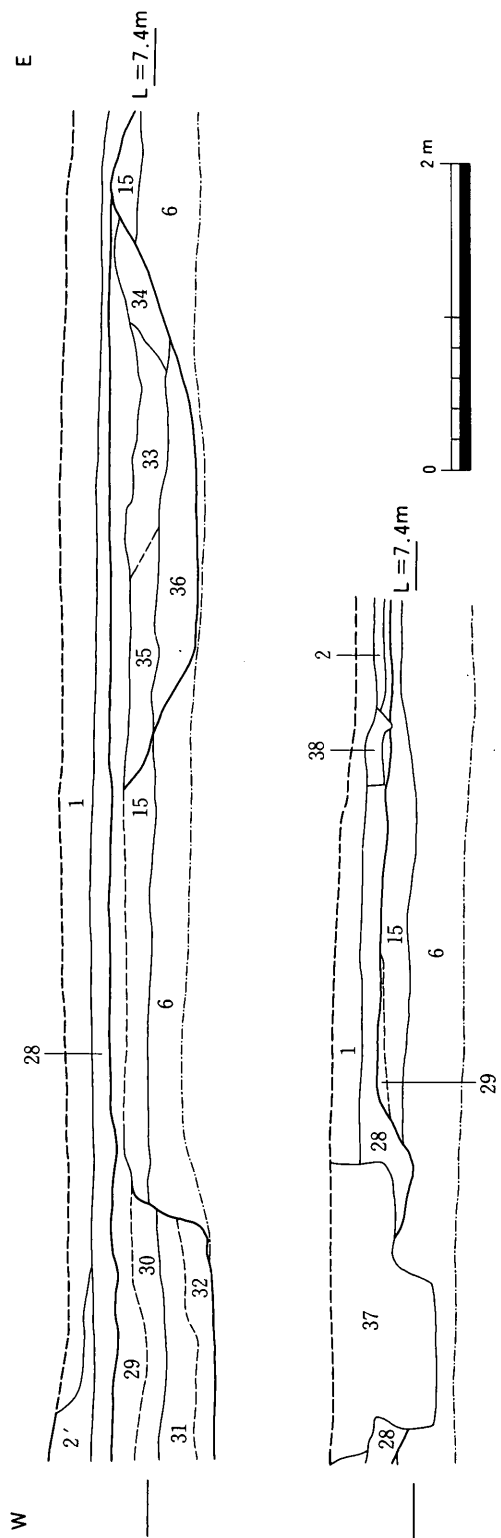
L = 6.0m



第15図 下層確認トレンチ 柱状図



第16図 37ライン 土層断面図①



- 14 灰色砂 (径 5 mm程の礫~細砂、巨視的に西から東方に向かい細粒化する、ラミナ S.G)
- 15 明灰色粘質土 (Mn 粒, Fe 含)
- 16 暗茶褐色粘質土 (Fe, Mn 含)
- 17 茶灰色小礫混じりシルト質土 (Mn 粒, Fe 多含, Fe 含) SD07上層
- 18 灰色シルト質土 (Mn 粒多含, Fe 含) SD07下層
- 19 暗茶灰色粗砂混じりシルト質土 (Fe, Mn 含) SD11埋土
- 19' 暗灰色小礫混じり中砂
- 20 灰色粘質土 (Mn 粒, Fe 含)
- 21 暗灰色小礫混じりシルト
- 22 灰色砂 (細~中砂主, S)
- 23 灰色砂 (小礫含, 中~粗砂主, S)
- 24 灰色細砂 (S, 茶灰色シルトのラミナ)
- 25 灰色砂 (細・中・粗砂が各々淘汰され水平方向に互層状に堆積)
- 26 灰色シルト質土 (腐蝕土, 現代用水路)
- 26' 明灰色極細砂質土 (珪, 礫, Fe 含, Mn わずか含)
- 27 灰色粘質土 (Mn, Fe 含, 用水路埋土)
- 27 橙色小礫混じり砂質土 (用水路埋土)
- 28 暗茶褐色粘質土 (Mn 粒, Fe 多含, 小礫含)
- 29 明灰色小礫混じり砂質土 (Mn 粒, Fe 多含, シルト・極細砂主)
- 30 灰色小礫混じりシルト質土 (Fe 多含, Mn わずか含)
- 31 暗灰色シルト (下方に小礫わずか含, Fe 含) SD06埋土
- 32 灰色小礫混じり粗砂
- 33 灰色中砂 (小礫, Fe, Mn 含)
- 34 灰色粗砂 (灰色シルトのラミナ, Fe, Mn 含)
- 35 灰色小礫混じり粗砂
- 36 灰色中砂 (S)
- 37 攪乱 (弘光 8 トレンチ)
- 38 攪乱

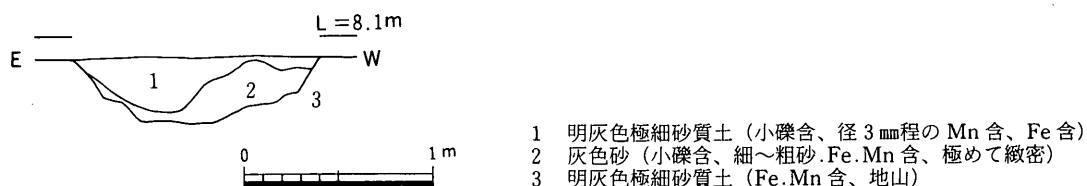
第17図 37ライン 土層断面図②

第2節 弥生時代前期の遺構・遺物

弥生時代前期に属すると考えられる遺構は、溝跡3条と旧河道1ないし2条である。

1. S D01 (第20図)

O, P-43区で検出された溝跡である。幅約1.3m・深さ約0.4m程の規模で、断面は浅い皿状を呈する。検出長は12.5m、やや東よりに湾曲しているがほぼ南北方向の流向をもつ。小礫を含む比較的粗粒の堆積物で埋積されている。遺物は検出されなかったが、後述する弥生時代前期新段階に埋没したS R01に流路を壊されていることから、弥生時代前期新段階以前の溝跡と判断される。なお、後述のS D02と埋積土が共通することなどから、弥生時代前期新段階をそれほど遡るものとは考えられない。



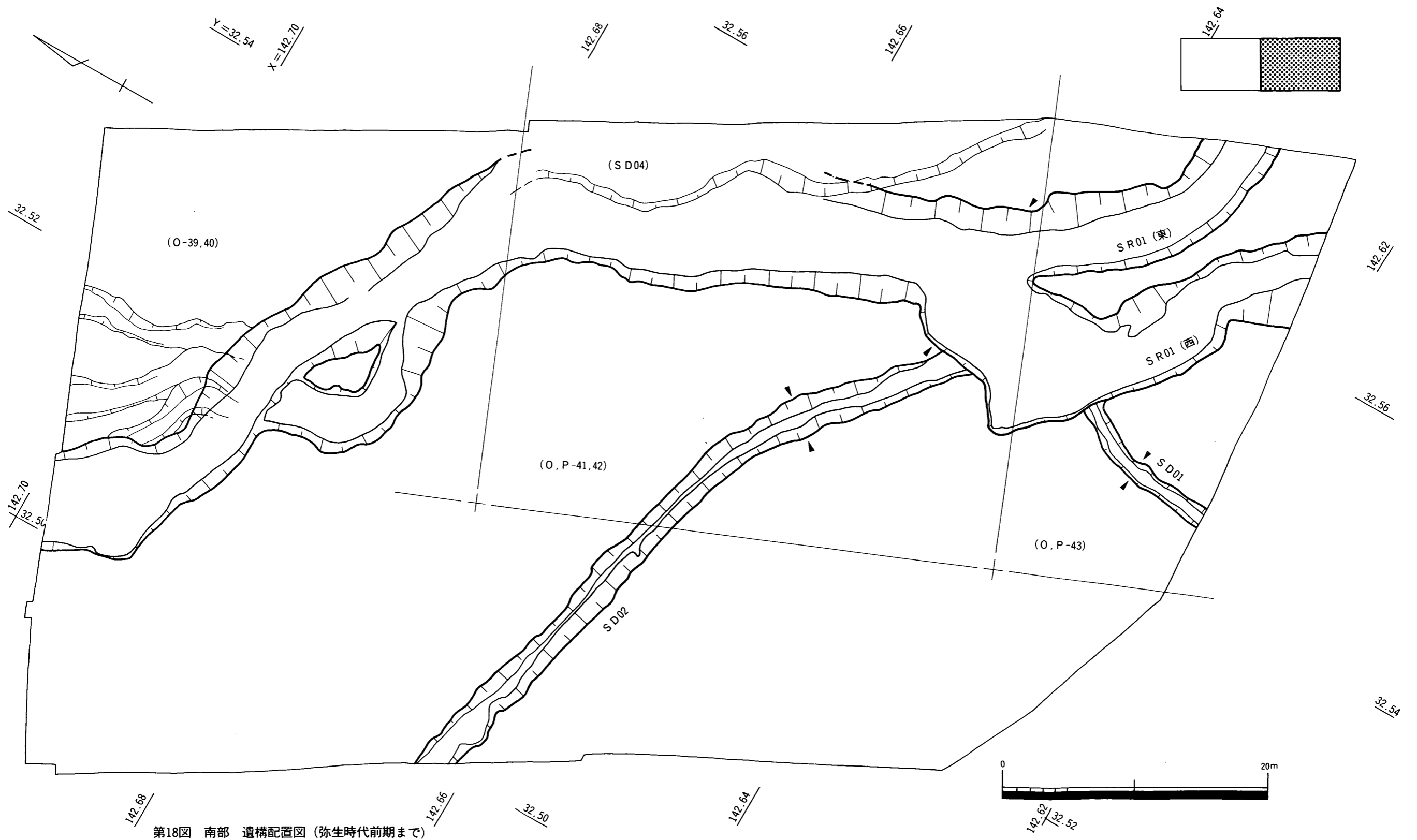
第20図 S D01 断面図

2. S D02 (第21、22図・図版7)

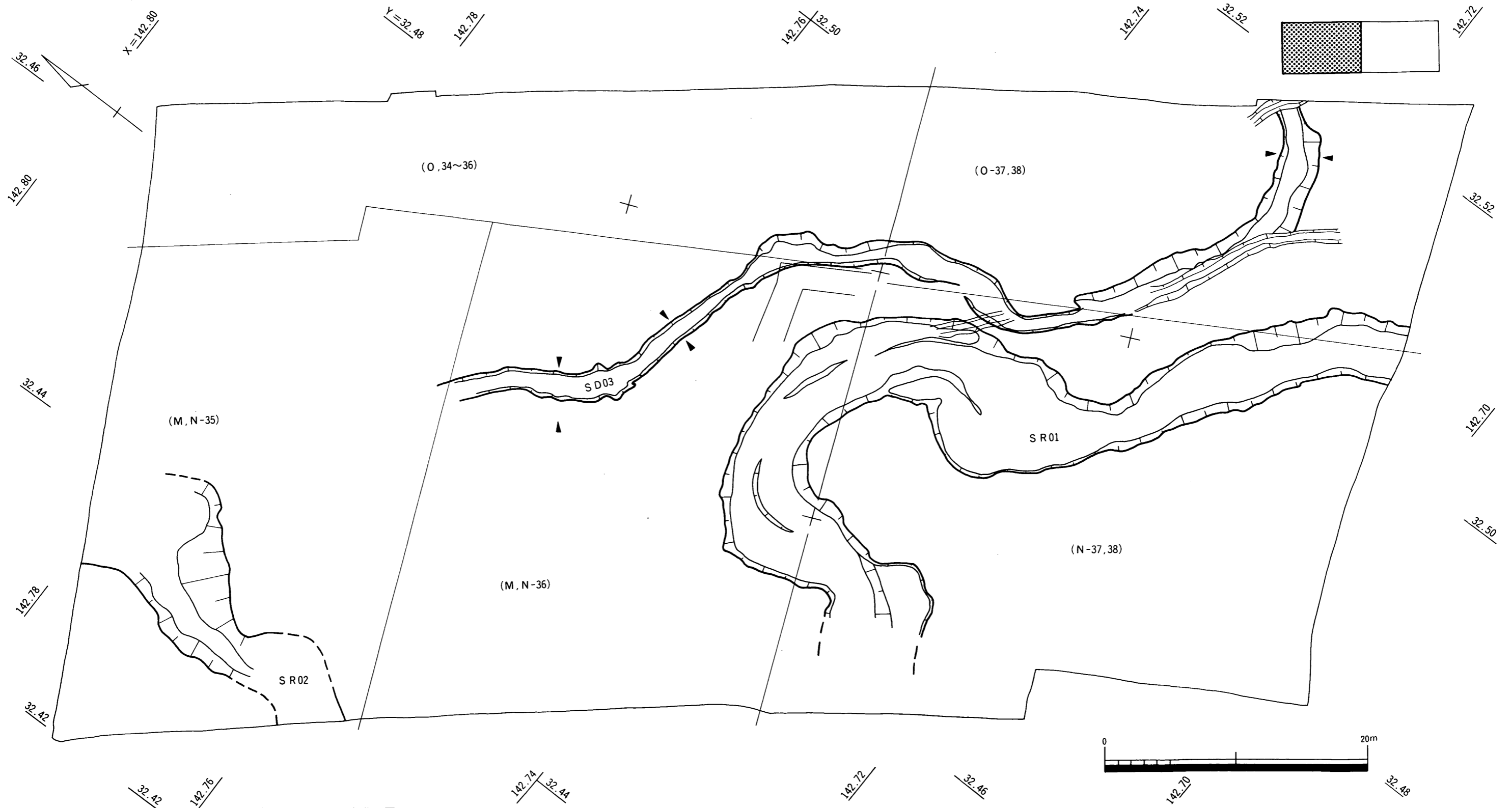
N-39～42・O, P-41, 42区で検出された溝跡である。幅2.15～2.7m・深さ約1.0mを測り、断面はV字状を呈する。北側に張り出す弧状をなして流れている。検出長は53mにわたる。埋積土は小礫を含む比較的粗粒の堆積物である。溝の側面には流水によると思われる挟り込みが認められる。後述するS R01によって壊されているが、S R01から取水するものであった可能性も考えられる。その理由は、S D02とS R01の出土遺物に時代差は認められないこと、S D02の延長部にあたるS R01には、S D02の痕跡が認められないことによる。

S D02から検出された遺物はきわめて少なく、十数片を数えるに過ぎない。第22図は、S D02出土の遺物実測図である。1は壺形土器の底部、2は蓋形土器である。ともに摩滅が著しい。この他に、多条のヘラ描き沈線の施された細片も検出されており、弥生時代前期新段階に属するものと考えられる。3は打製石斧である。扁平な造りで、一側縁に敲打痕が認められる。

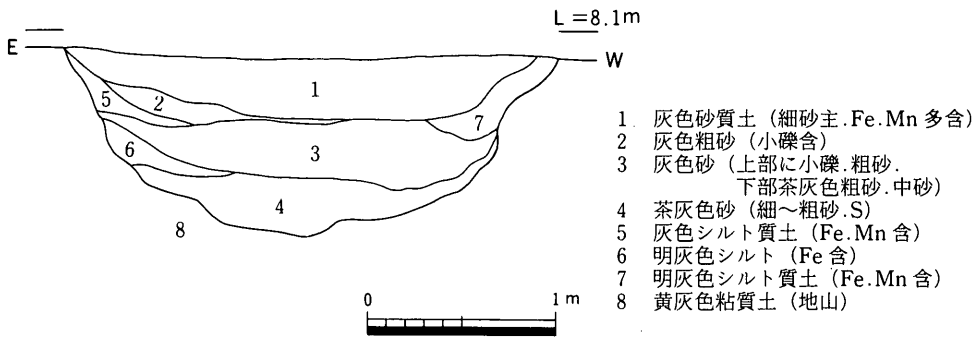
出土遺物の年代観から、S D02は弥生時代前期新段階に埋没したものと考えられる。



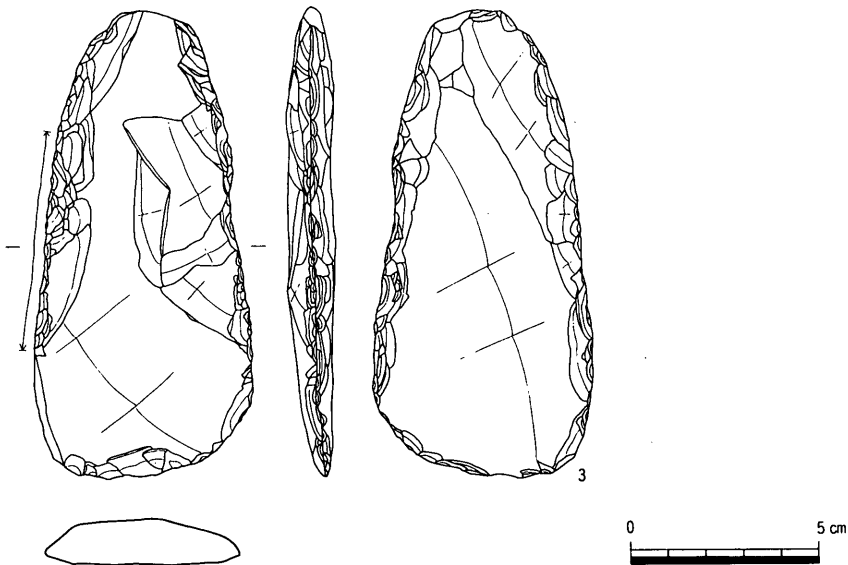
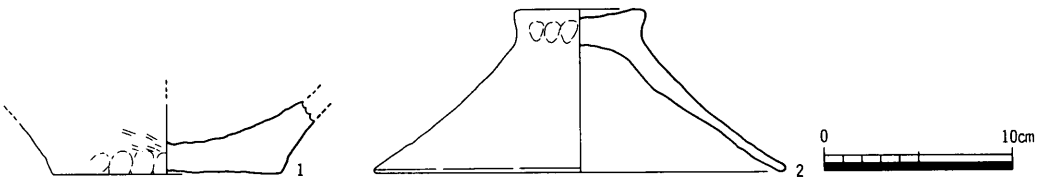
第18図 南部 遺構配置図 (弥生時代前期まで)
 (▶は断面図作成位置)



第19図 北部 遺構配置図 (弥生時代前期まで)
 (▶は断面図作成位置)



第21図 S D 02 断面図



第22図 S D 02 出土遺物実測図

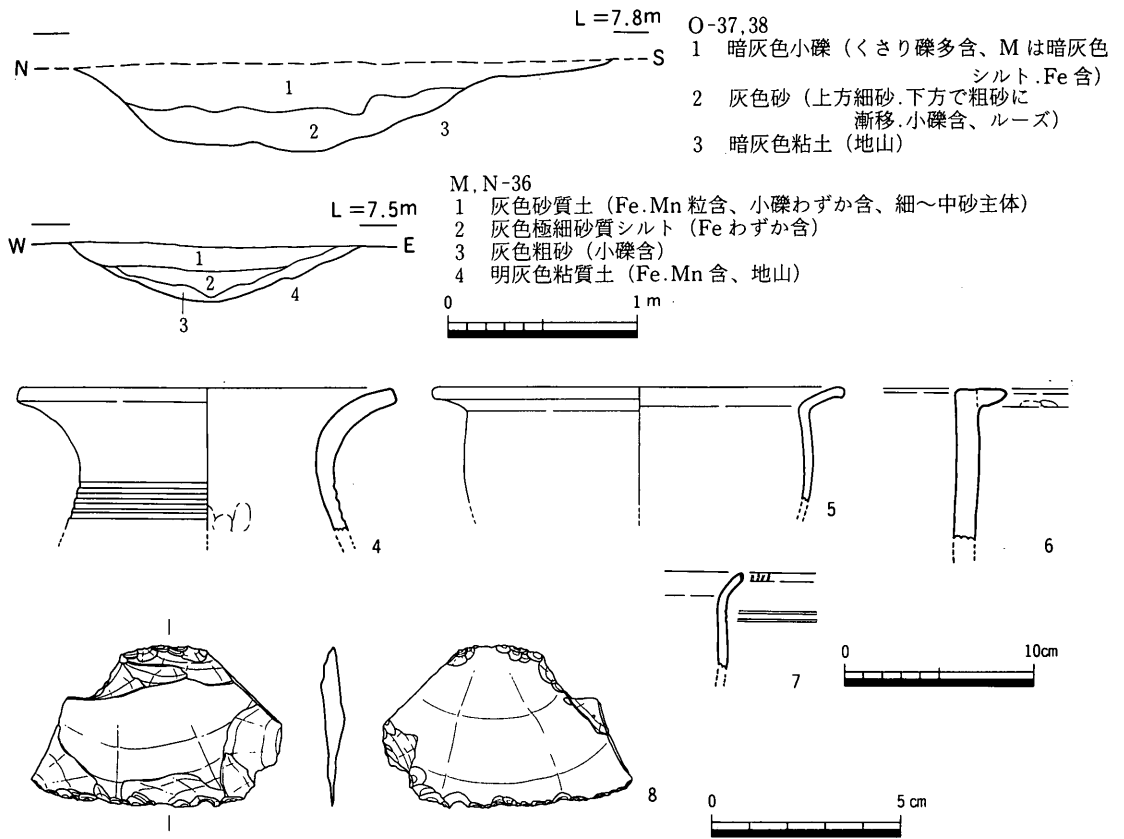
3. S D 03 (第23図・図版 8)

O-37, 38区からM, N-36区にかけて検出された溝状遺構である。幅約1.25~2.85m、深さ約0.3~0.5mを測り、断面は浅い皿状を呈する。概ね東南から西北方向に向かって蛇曲しながら流れ、M, N-35区において後代に掘られた溝状遺構によって壊され消滅している。検出長は約82mである。埋積土は小礫までを含む比較的粗粒な堆積物である。

第24図は、S D 03出土の遺物実測図である。S D 03の遺物出土量は僅少である。4、6~

8はO-37,38区で出土したもの、5はM, N-36区で出土したものである。4は頸部にヘラ描きによる4条の沈線が巡る壺形土器、5～7は甕形土器である。5、7は如意状口縁を呈し、7には口縁端部に刻み目、下位に2条のヘラ描き沈線を施している。6は逆L字状の口縁をもつ。8はやや外湾する刃部をもつ削器である。

S D03出土土器は後述するS R01出土の遺物の様相からみて、弥生時代前期新段階に属するものと考えられる。



第23図 S D03 断面図および出土遺物実測図

4. S R01 （第24～38図・図版8～10）

① S R01の概要

南北方向に細長い調査区を南から北へ縦断するように流れる旧河道である。

S R01は、第1章第2節において述べたように調査の遅れが深刻化したことによって、一部においては十分な調査を行なうことが出来なかった。最も、多大な土量を掘削して若干の遺物を採集するだけという調査の是非を問われる側面もあったのであるが、この点について

はここでは触れない。調査区毎の調査内容は以下の通りである。

O, P-43区 すべて人力掘削による調査

O, P-41, 42区 埋積土の上部を重機で除去、下部を人力掘削(掘り残し部分あり)

O-39, 40区 すべて人力掘削による調査(ただし、後代のSDとの明確な層の分離が出来ていない)

N-37, 38区 すべて人力掘削による調査

M, N-36区 埋積土の大半を重機で除去

このことから、出土遺物の組成といった問題を検討する場合には、N-37, 38区は河底付近で遺物が採集されたのみであるから、O, P-43区の資料のみしか使えないということになる。

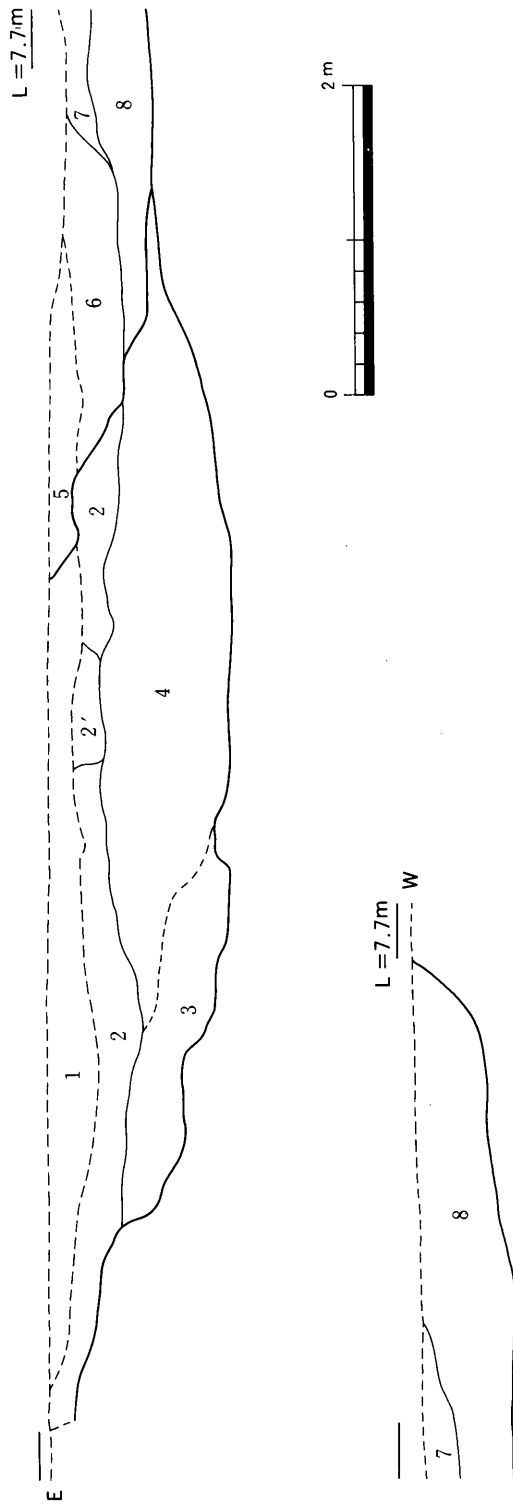
SR01は、調査区南端のO, P-43区においては2流に分かれて流れている。東側をSR01(東)、西側をSR01(西)と呼称する。これらは後述するように同時に流れていたと考えられる。合流したのち北流し、M, N-36区でほぼ180°迂曲し、N-37, 38区で調査区の西側の区域外に抜けている。河道幅は約12.5m、深さ0.8~1.0mを測る。

第24図はSR01(東)とSR01(西)との合流部分の畦断面図である。SR01は本遺跡の基盤(地山)である明灰色シルト質土層を開折しており、SR01(東)は、淘汰が良くラミナの発達する砂層よりなる下層(3、4層)と小礫を含む粘質土やシルト質土で埋積される上層(1、2層)の2層で埋積されている。SR01(西)は、SR01(東)の埋没後にこれを開折して流れ、淘汰が良くラミナの発達する砂層で埋積されている。これらの層の境界は不明瞭で、巨視的にはSR01(東)は級化構造を為しているものと考えられる。つまり、上下層の区別をしたものの埋積は同時であると考えられる。また、SR01(東)と(西)には層位的な前後関係があるが、これは強いて分ければこのようになるのであって、例えば土器の形式差の現れる年代差があるというよりも、埋没の過程での短期間の前後関係と捉えられる。

② O, P-43区のSR01(東)下層出土の遺物

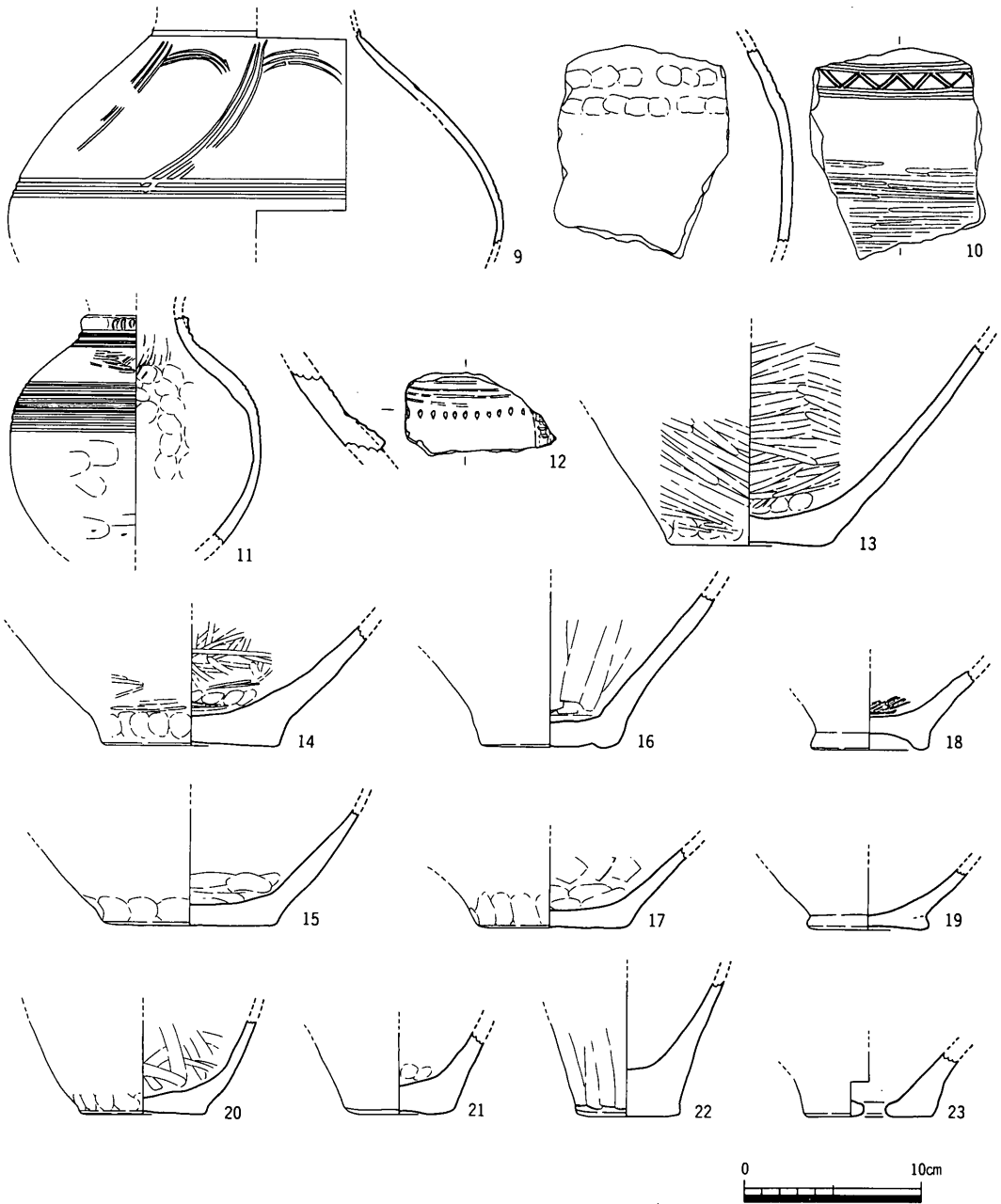
第25~27図は、O, P-43区のSR01(東)下層出土の遺物実測図である。

9~12は壺形土器の頸部・体部の破片である。9は体部最大径よりやや上位に3条のヘラ描き沈線・体部と頸部の境界に1条のヘラ描き沈線を施し、その間にヘラ描きの連弧文を施している。10には山形文が施されている。12は器表の摩滅が著しいが、4条以上のヘラ描き沈線、その下に刺突文が巡る。その下部には棒状浮文(刻み目を施した縦方向の貼り付け帯)が付されている。12は施文・胎土から59と同一個体と考えられる。11は、体部最大径よ



- 1 灰色粘質土 (Mn, Fe 含, 上方わずかに小礫)
- 2 明灰色シルト質土 (Mn, Fe 含)
- 3 明灰色小礫混じりシルト質土 (Mn, Fe 含)
- 4 灰色砂 (S. 細砂, 下方にシルトのラミミナ)
- 5 灰色小礫混じりシルト質土 (上方で小礫多含、Mn, Fe 多含)
- 6 灰色砂 (上方は細砂のラミミナ, 粗砂~細砂が乱雑に入る)
- 7 灰色小礫混じり極細砂 (Mn, Fe 含)
- 8 灰色砂 (暗灰色シルトのラミミナ, 小礫~細砂が互層状に堆積する, 4層より粒径大)

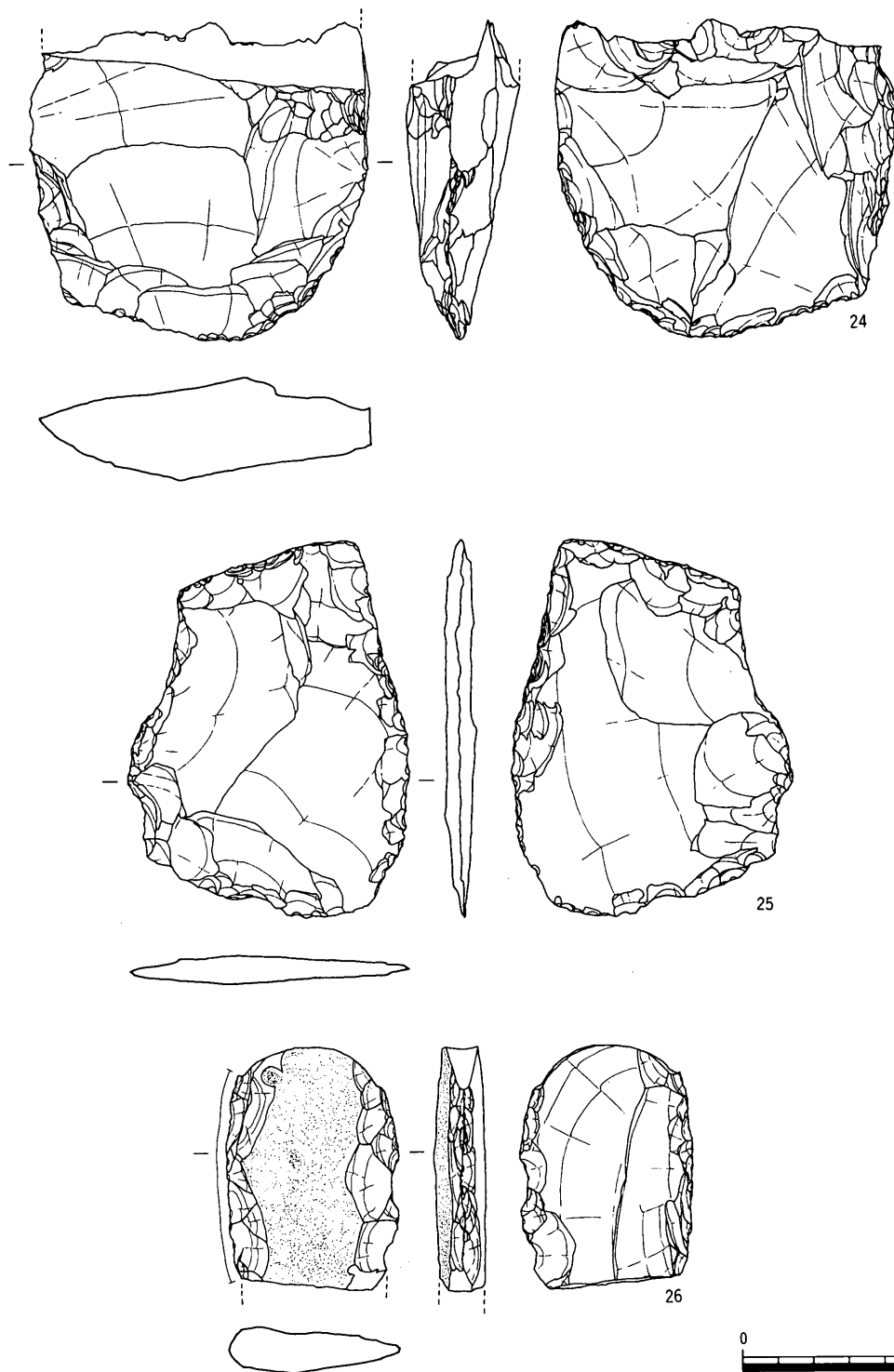
第24図 S R 01 断面図



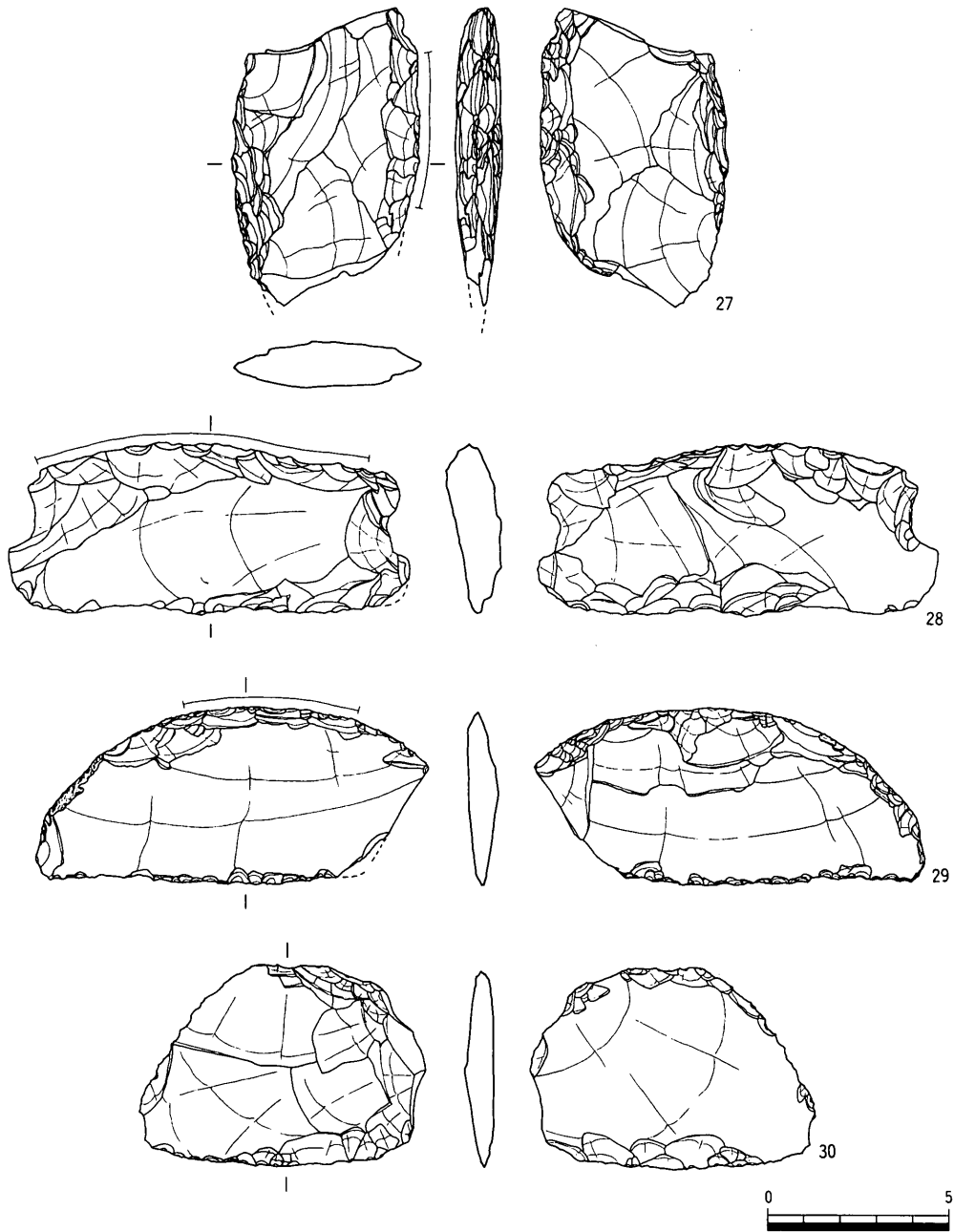
第25図 O, P-43区 SR01 (東) 下層 出土遺物実測図①

りやや上位に12条のへら描き沈線、頸部と体部の境に4条のへら描き沈線、その上位に刻み目のある貼り付け突帯が付されている。13～22は壺形土器および甕形土器の底部の破片である。23は甕。焼成後に一孔を穿っている。

24～30は石器である。24～27は打製石斧と考えられる。24は基部を欠損するが、欠損後に



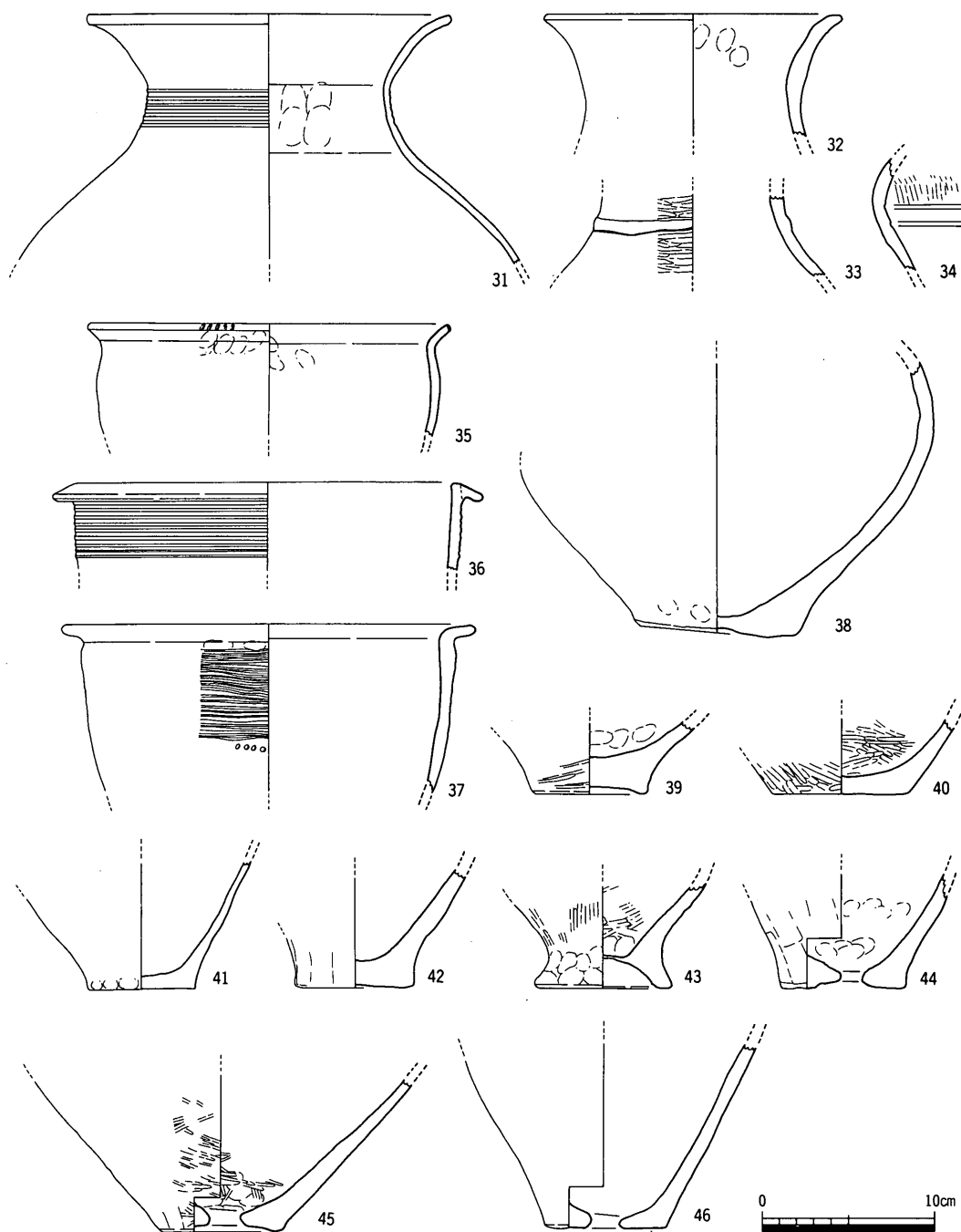
第26图 O, P-43区 S R01 (東) 下層 出土遺物実測図②



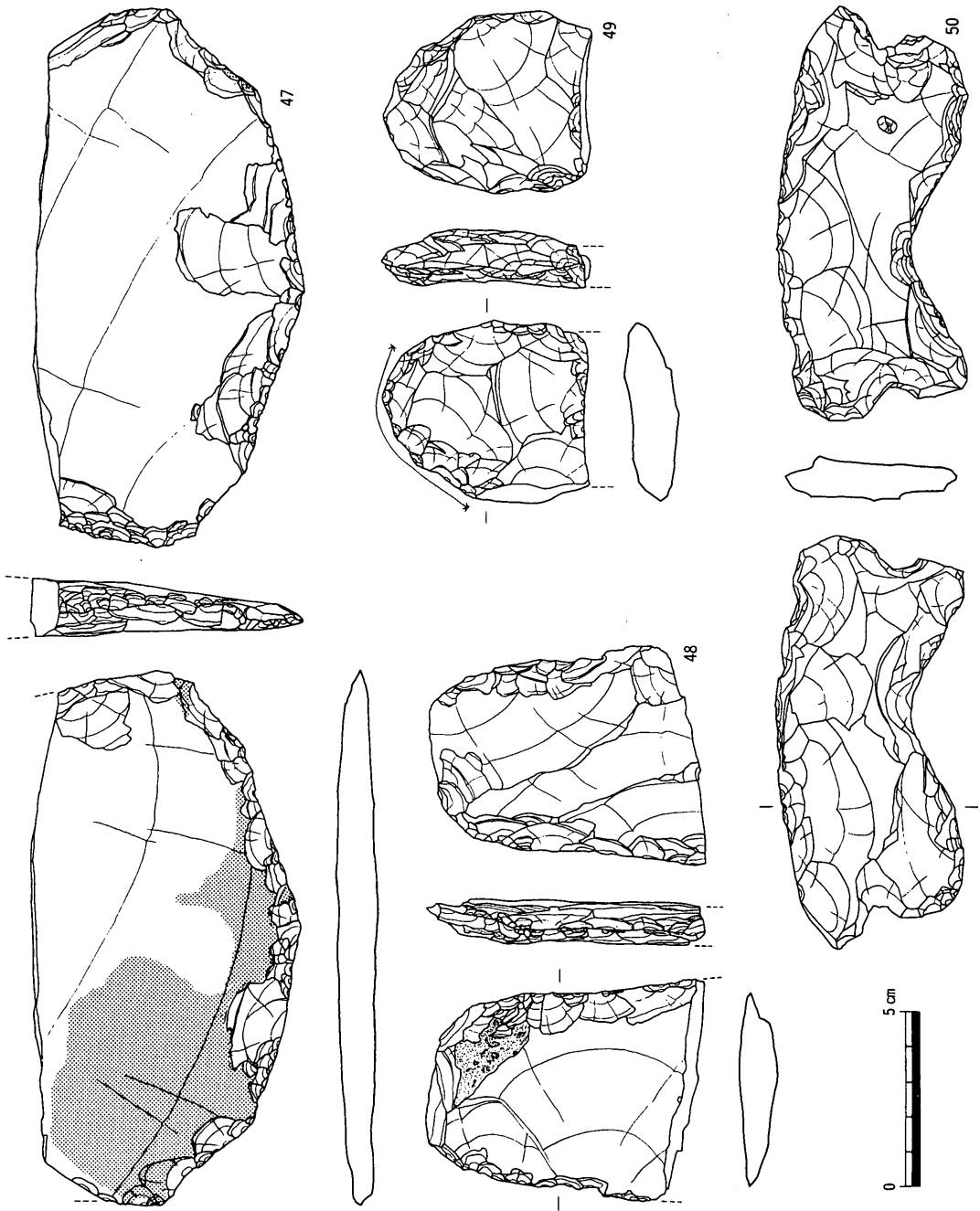
第27図 O, P-43区 SR01 (東) 下層 出土遺物実測図③

調整を行なっている。転用の意図が窺われるが何を意図したのかはわからない。25はやや不定形な分銅形を呈する。右側縁を刃部とする削器の可能性もあるが、全周に押圧剝離や敲打による階段状剝離が認められるため、打製石斧と考える。26は打製石斧の基部。27は刃部と基部を欠損している。そのため図の天地については検討の余地を残す。28は石包丁である。

直線状の刃部で両端に抉りをもつ、背部に敲打痕が認められる。29は直線刃の半月形を指向した打製石包丁である。背部に自然面と敲打痕が認められる。30はやや外湾する刃部をもつ削器と考えられる。



第28図 O, P-43区 S R01 (東) 上層 出土遺物実測図①

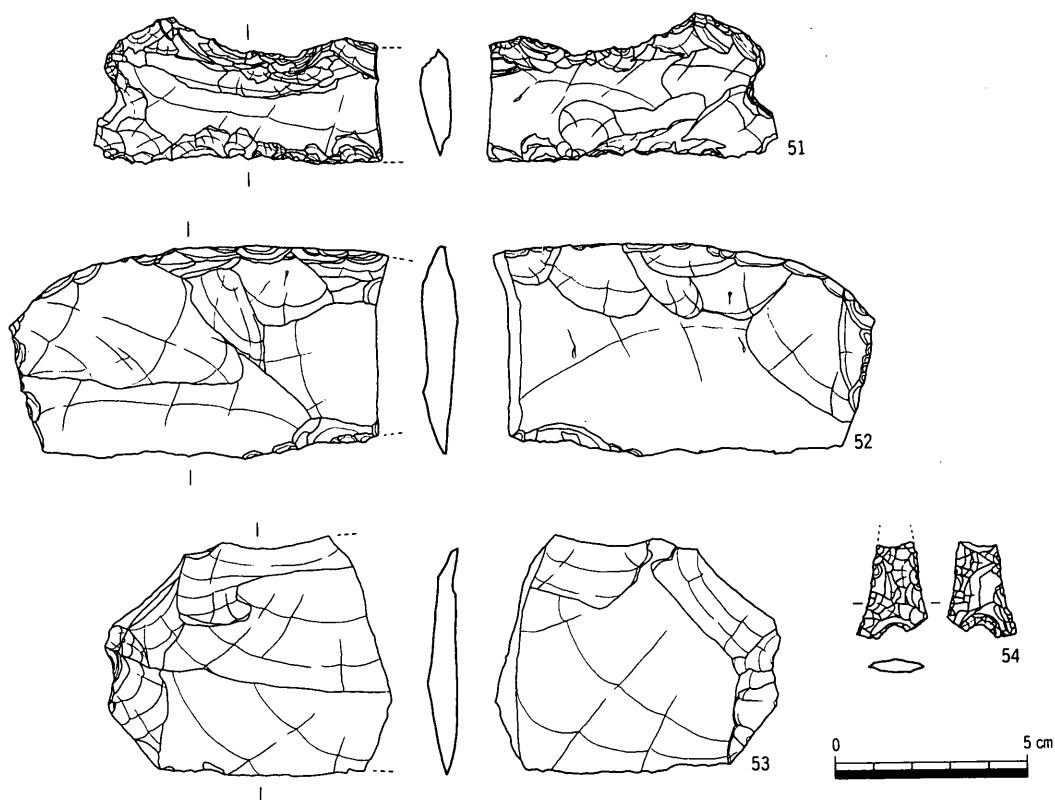


第29図 O, P-43区 SR01 (東) 上層 出土遺物実測図②

③ O, P-43区 SR01 (東) 上層出土の遺物

第28～30図は、O, P-43区のSR01 (東) 上層出土の遺物実測図である。

31～34は壺形土器である。これらは頸部に施文があるものがあり、31は6条のヘラ描き沈



第30図 O, P-43区 SR01 (東) 上層 出土遺物実測図③

線が、33は削り出し突帯が、34は2条のヘラ描き沈線が巡る。35～37は甕形土器の口縁部の破片である。35は如意状の口縁を呈し、端部に刻み目を施している。36は8条以上のヘラ描き沈線が巡り、逆L字状の口縁を呈する。37の口縁部は摘み出して整形しているようである。体部上半に櫛描文を施し、その下半に刺突文を施している。

38～40は壺形土器の底部、41、42は甕形土器の底部と考えられる。42は蓋形土器の可能性も考えられる。43は倒杯形の脚台をもち、内外面にミガキが施されている。44～46は甑の底部。いずれも焼成後に一孔を穿っている。なお、甑は甕形土器からの転用と考えられるものが多いが、45は壺形土器を転用しているようである。

第29図47～49は打製石斧である。47は基部を欠損する。一面には使用痕と考えられる擦痕が顕著に認められる。48、49はいずれも刃部を欠損している。50および第30図51は石包丁である。50は全体的な剥離の方向などから刃背部を決定したが、検討の余地を残す。50、51ともに両端に抉りをもつ。52は一長辺が鋭利で、その一部に細部調整が認められることから削器に分類した。しかし、一短辺にも細部調整が認められることから石包丁としてもよいかも

しれない。一短辺は欠損する。53は刃部・背部ともに細部調整が認められないため、二次加工のある剥片と分類した。ただし、一短辺では挟りが認められ、一長辺は成形段階の剝離のみで鋭利な刃部をなしていることから石包丁ないし石包丁の未製品である可能性がある。54は凹基式の石鏃である。先端と基端の一部を折損する。

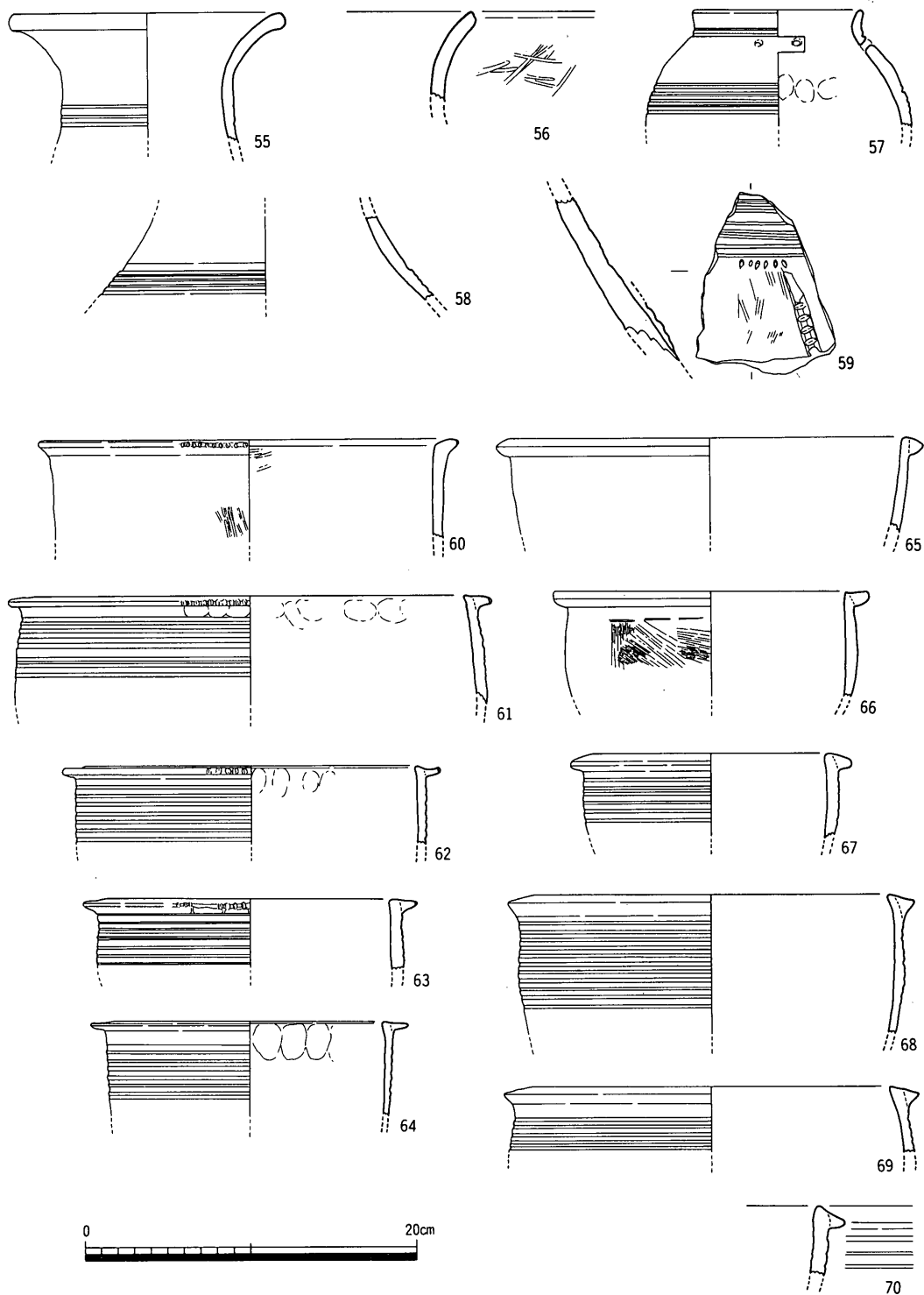
④ O, P-43区 S R01(東)出土の遺物

第31～33図は、O, P-43区のS R01(東)の上層と下層が分類できずに採集された遺物の実測図である。55～59は壺形土器である。55は頸部に3条、56は口縁端部に1条のヘラ描き沈線が巡る。57は無頸壺と呼ぶべき形態である。頸部に2条のヘラ描き沈線、その下に焼成前の2孔(破片のため本来の孔数は不明)が認められる。体部には浅い沈線とやや深い沈線を交互に各3条ずつ巡らせている。59は棒状浮文をもつもので、前掲12と同一個体と考えられる。

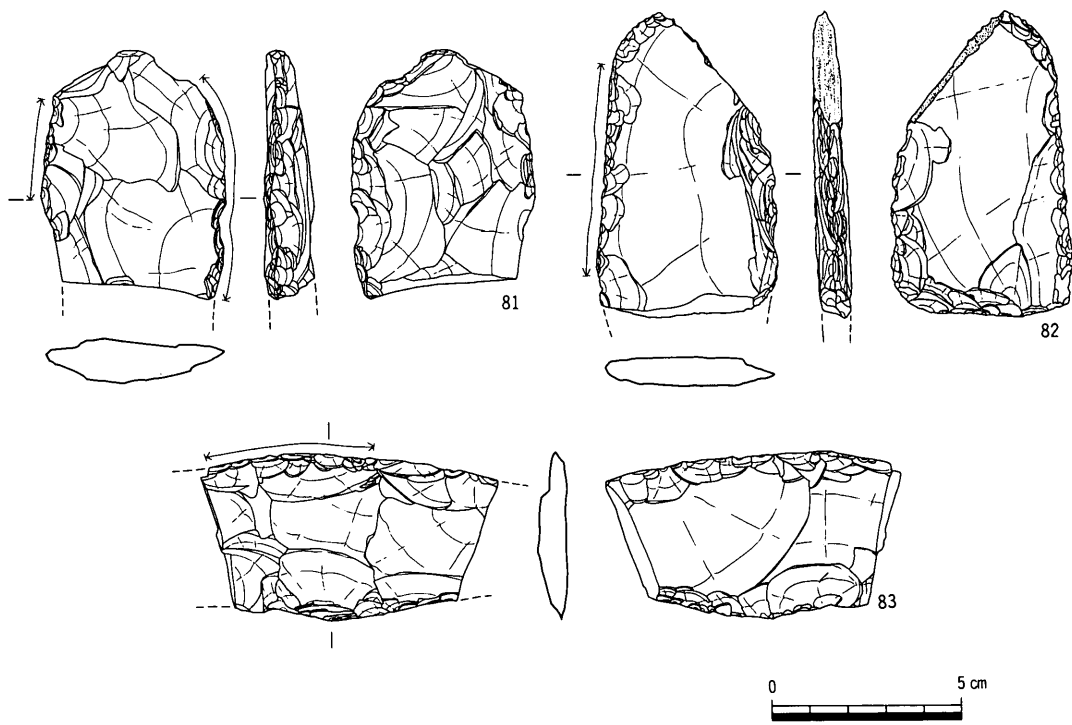
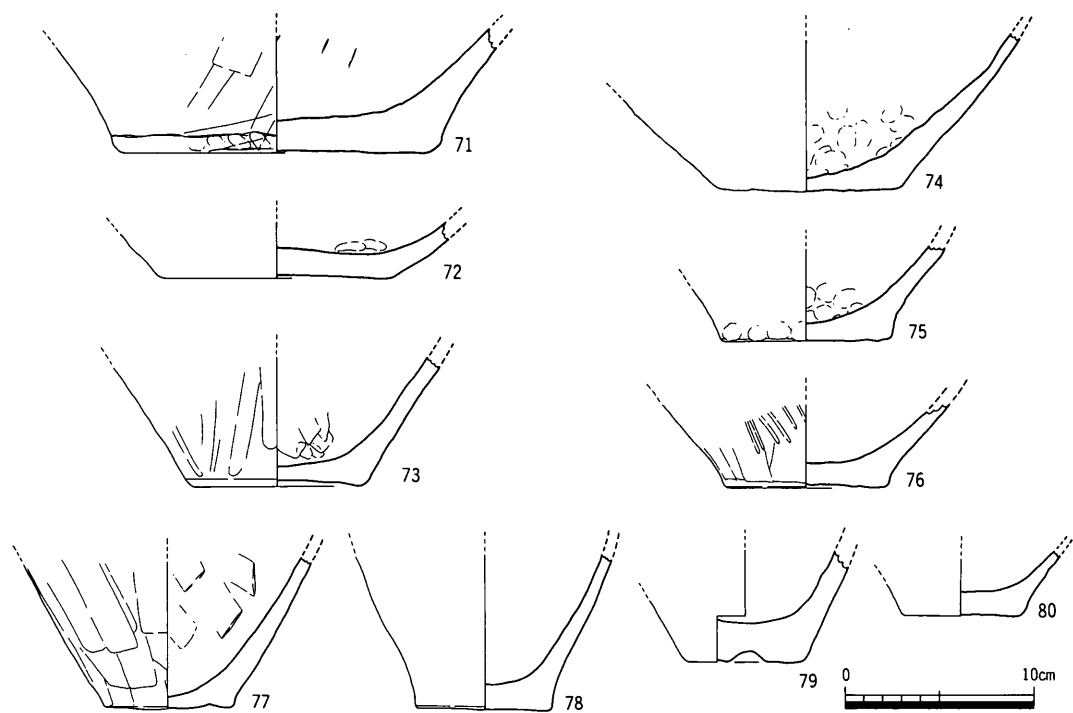
60～70は甕形土器である。60が如意状の口縁である以外は、逆L字状口縁を呈する。このうち口縁部断面は61～64が比較的薄い造りであり、65～67は玉縁状の形態、68～70は三角形を呈する。60～63は口縁端部に刻み目が施されている。ヘラ描き沈線の施されたものは、61が7条、62が7条以上、63が8条以上、64が7条、67が7条以上、68が11条、69が5条以上である。

第32図71～76は壺形土器の底部、77～80は甕形土器の底部である。79は焼成後の窪みが認められる。甕への転用を意図したのであろう。

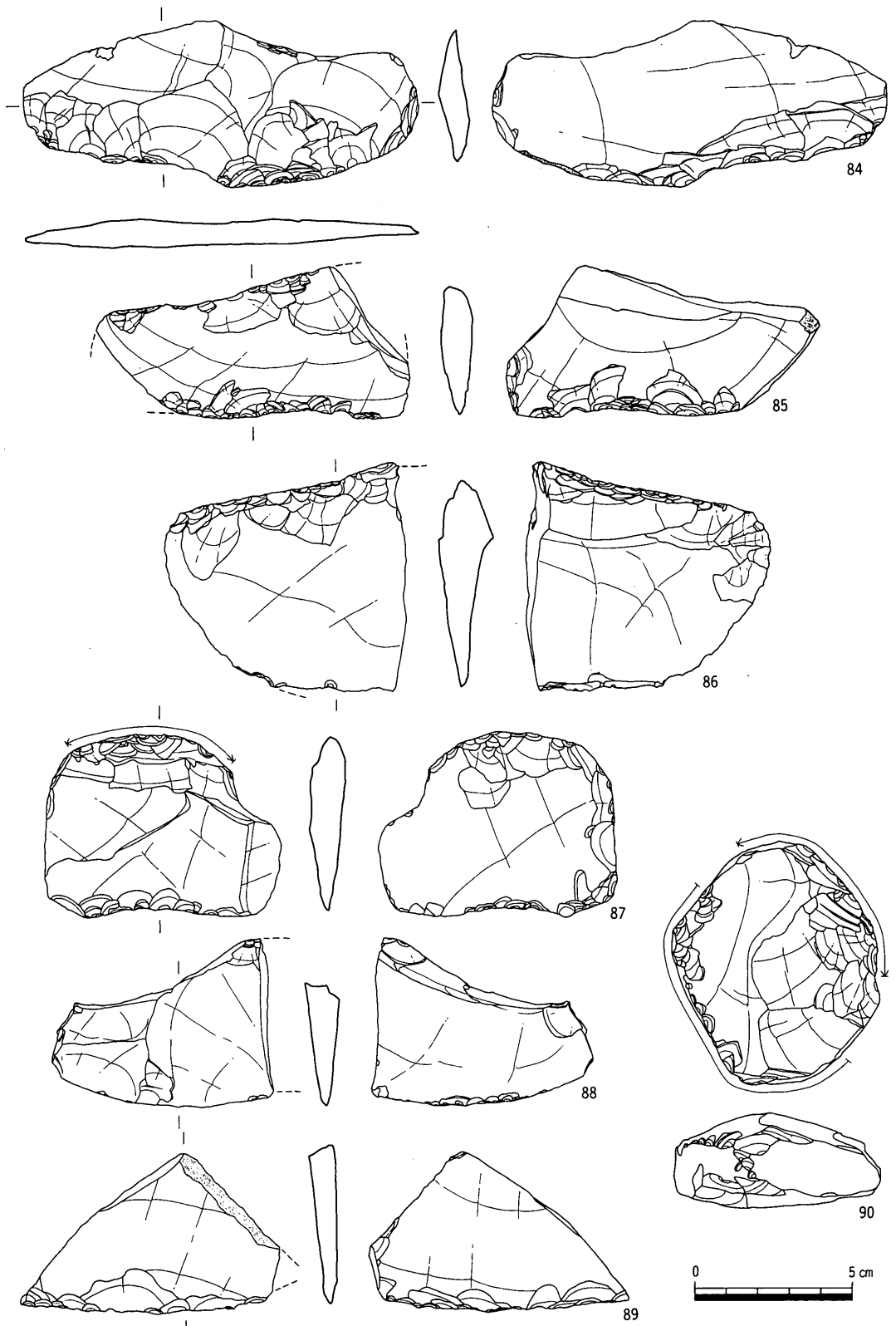
81、82は打製石斧の基部である。共に刃部を欠損する。83はやや外湾する刃部をもち、背部に敲打痕の認められる石包丁ではないかと考える。両端を欠損する。84は形態から石鎌ではないかと考える。刃部は直線で小突起がある。基部の一辺に自然面が残る。85は横長で一辺にやや内湾する刃部をもつ。両端を欠損しているため本来の形態は不明である。石鎌の可能性もあるが、一端に細部調整が認められることから削器と考える。86は背部に敲打痕が認められるものの刃部に細部調整が認められない。成形段階の剝離で鋭利な断面となっていることから削器と考える。87はやや内湾気味の刃部をもつ削器と考える。折損した石包丁を転用している可能性がある。88、89は削器と考えられる。88は外湾する刃部をもつ。一端を欠損する。89は直線状の刃部をもつ。一辺に自然面を残している。90は敲石と考えられる。側面のほぼ全域に顕著な敲打痕が認められる。また、表面には成形を目的としたのではない階段状剝離が多く認められる。



第31図 O, P-43区 S R01 (東) 出土遺物実測図①



第32図 O, P-43区 S R01 (東) 出土遺物実測図②

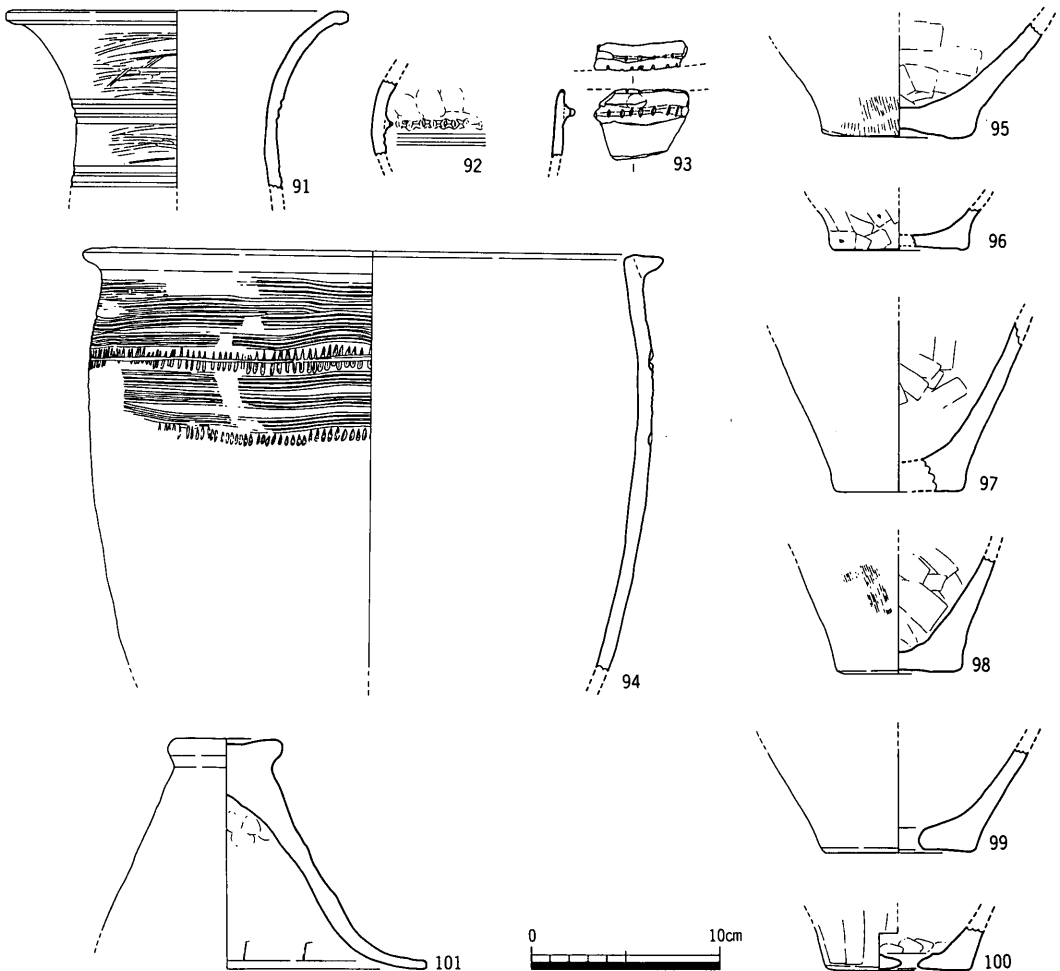


第33图 O, P-43区 SR01 (東) 出土遺物実測図③

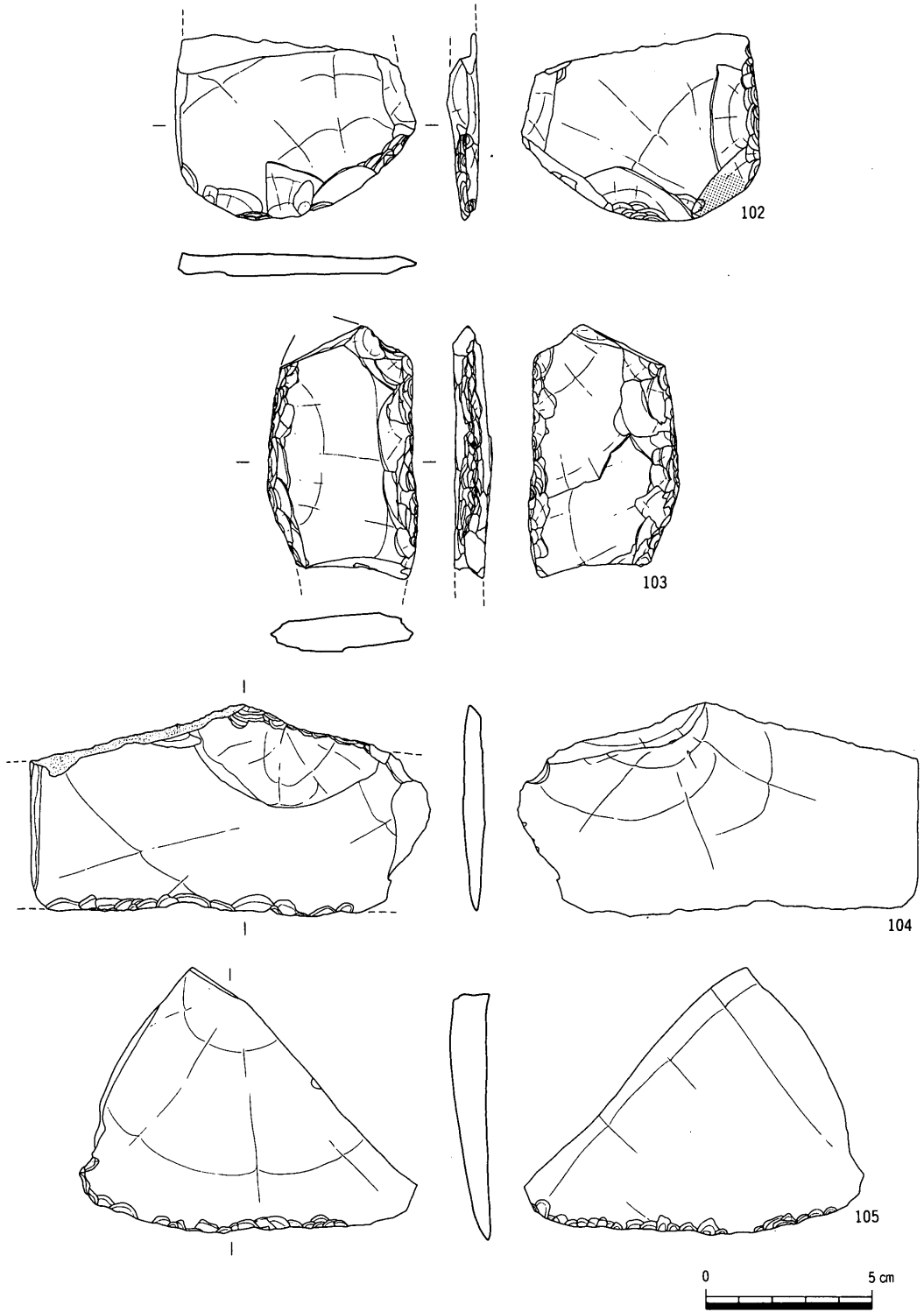
⑤ O, P-43区 SR01 (西) 出土の遺物

第34、35図は、O, P-43区 SR01 (西) 出土の遺物実測図である。

91、92は壺形土器。91の頸部上半には3条、下半には3条以上のヘラ描き沈線が施されている。92は頸部と考えられる破片である。図の天地には検討の余地がある。刻み目を有する貼り付け突帯と2条以上のヘラ描き沈線が認められる。93、94は甕形土器。93は口縁部の小破片である。口縁端部から9mm程下がったところに刻み目を有する突帯を貼り付け、端部頂面にも刻み目を施している。前期古段階に見られるものである。94は逆L字状の口縁をもつもので、4条を一単位とする櫛描文を4段、その下に断面形が紡錘形をなす刺突文を施した後、その上に1条の沈線を施している。その下に3段の櫛描文、刺突文を施す。



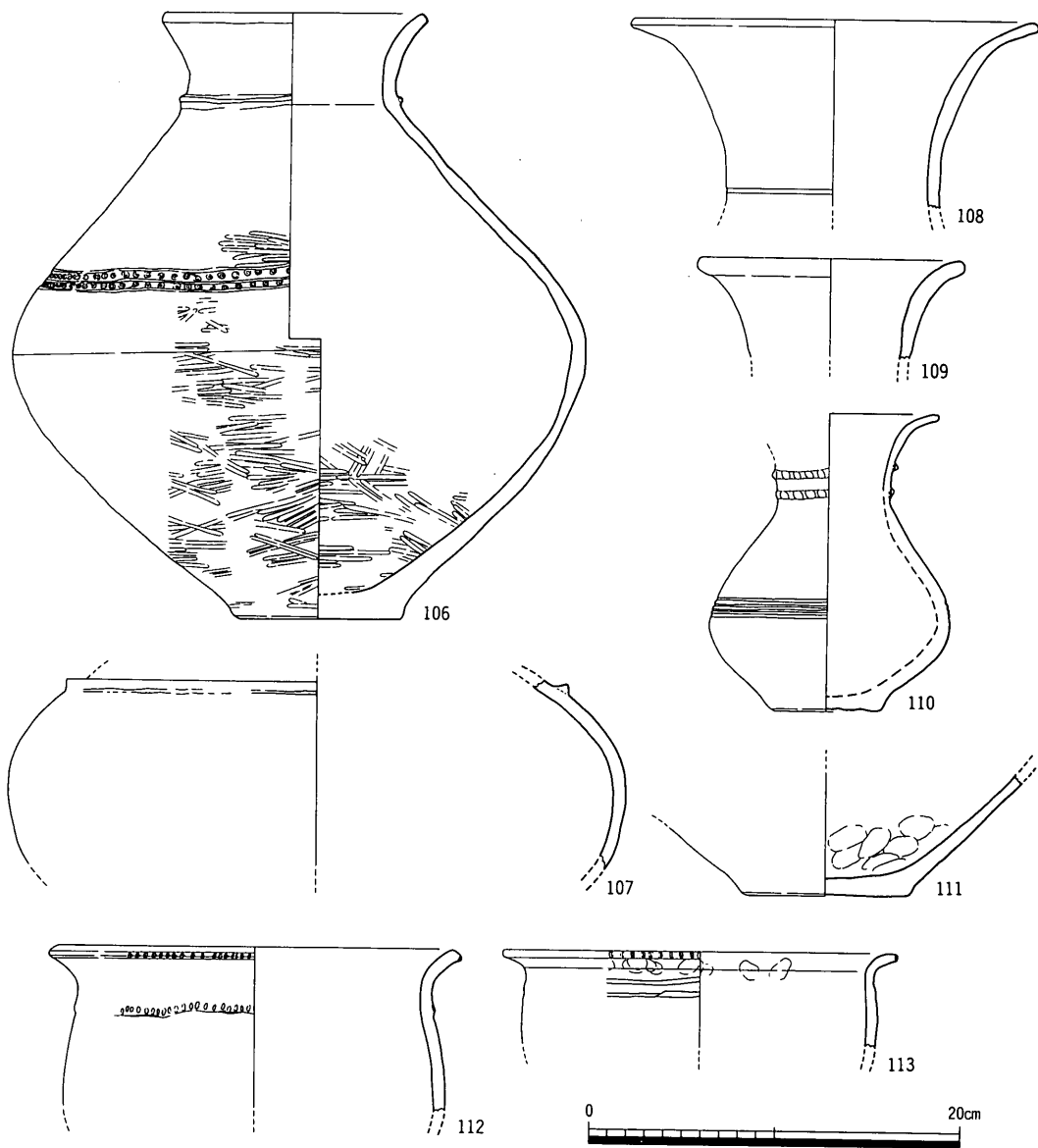
第34図 O, P-43区 SR01 (西) 出土遺物実測図①



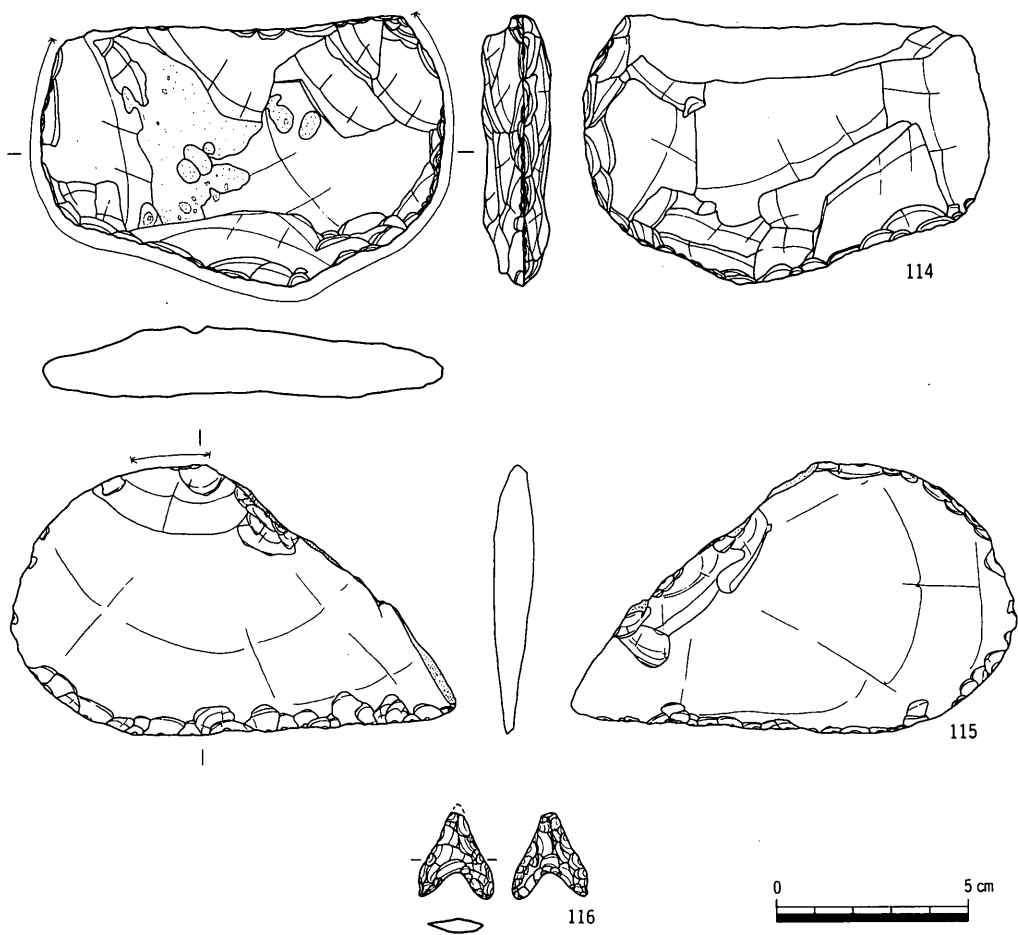
第35图 O, P-43区 SR01 (西) 出土遺物実測図②

95～98は、壺形土器・甕形土器の底部である。99、100は甑。ともに焼成後に穿孔されている。101は蓋形土器である。

第35図102、103は打製石斧である。102の刃部には使用痕と思われる摩滅が認められる。104、105は削器である。104は直線状の刃部を片面からのみ細部調整してつくり出している。背部には自然面が残り、成形の際の打瘤が残る。両側面は欠損している。105は外湾する刃部をもつ。両面とも1回の打撃による剝離面からなる。



第36図 N-37, 38区 S R 01河底 出土遺物実測図①



第37図 N-37, 38区 S R01河底 出土遺物実測図②

⑥ N-37, 38区 S R01河底出土の遺物

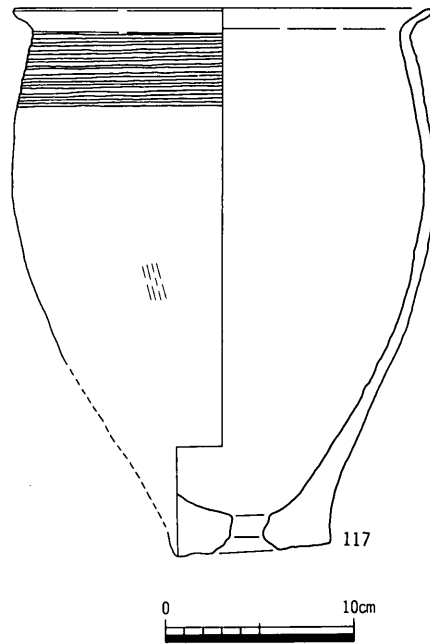
N-37, 38区のS R01からは、河底からのみ遺物が出土している。第36、37図の107、109～111、114は比較的狭い範囲から集中して検出された。106は河底で横倒しの状態で検出された完形の壺形土器である。器高の1/2よりわずかに下に最大径があり、強く胴の張る形態である。頸部に貼り付け突帯、胴部最大径部よりやや上位に三条のヘラ描き沈線を巡らし、沈線間に竹管文を施している。107～111も壺形土器である。107は体部の破片。断面三角形の貼り付け突帯を付している。108、109は口縁部の破片。108の頸部には1条以上の沈線が巡る。共に摩滅が著しい。110はほぼ完形である。最大径は下位にあり、ずんぐりとした形態を呈する。頸部に刻み目を施した2条の貼り付け突帯、胴部最大径よりやや上位に4、5条のヘラ描き沈線を施している。

112、113は甕形土器である。112は、如意状の口縁で端面に刻み目が施されている。その下位に段状の突帯を削り出し、刺突文状の刻み目が施されている。113も如意状口縁を呈し端面に刻み目が施されている。体部上位に2条のヘラ描き沈線が施されている。

第37図114は、打製石斧の刃部である。敲打痕が認められ、比較的雑な剝離である。基部を欠損するが、剝離の方向を観察すると欠損部分は短いものであると推定される。未製品と考えるべきかもしれない。115は削器と考えた。直線状の刃部をもつ。背部は軽く敲打して成形している。一側縁は自然面を残すが、一側縁は刃部から背部にかけて丸く成形している。この部分にも細部調整がわずかに認められる。116は凹基式の石鏃である。

第38図の117はN-37, 38区のS R 01の埋積土の上面において検出された甕形土器である。斜め上方を向いて完形で出土した。117の他にS R 01の埋積土上面において遺物は検出されず、また、117が完形であったことから何らかの遺構に伴う可能性を考えて精査したが、土壌への鉄分の沈着が著しく何も明らかに出来なかった。

117は如意状の口縁を呈し10～11条のヘラ描き沈線を施している。器表の摩滅が著しい。



第38図 N-37, 38区 S R 01上層 出土遺物実測図

⑦ S R 01出土遺物のまとめ

S R 01から出土した遺物の大半は、弥生時代前期新段階に属するものと考えられる。しかし、細かく見れば、前期古段階、中段階に属すると考えられる土器片や弥生時代中期の様相をもった土器片も含まれている。これらは、層位的に遺物を採集したO, P-43区において、層位とは関係なく混在する状況を示している。それは、型式差として捉えられる土器がもともと混在して存在していたのか、洪水による埋積という現象によって時期差のある遺物が混在したのか、どちらであるのか不明である。

遺物は南方ほど多く採集される傾向があり、O, P-43区で28リットル入りコンテナ5箱、N-37,

38区で2箱であった。なお、O-39,40区では後代の溝状遺構とS R01との遺物の分離が明確にできなかった関係で、次節で報告する。

5. S R02

M, N-35区で検出された旧河道である。M, N-35区の調査区西から北に抜けている。検出長は約21mで、川幅約6m、深さ約0.75mを測る。埋積土は粗粒の砂からなり、S R01とよく似ている。N-37, 38区で調査区外に抜けたS R01の続きである可能性が高いが、確認されていないため別の流路として報告する。遺物は弥生時代前期に属すると考えられる土器破片が数点採集されたのみである。

第3節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物

1. 概要

先述した弥生時代前期以降、弥生時代中期に属する可能性のある遺物は微量存在するが、遺構として把握できるのは、弥生時代後期～古墳時代前期の溝群である。

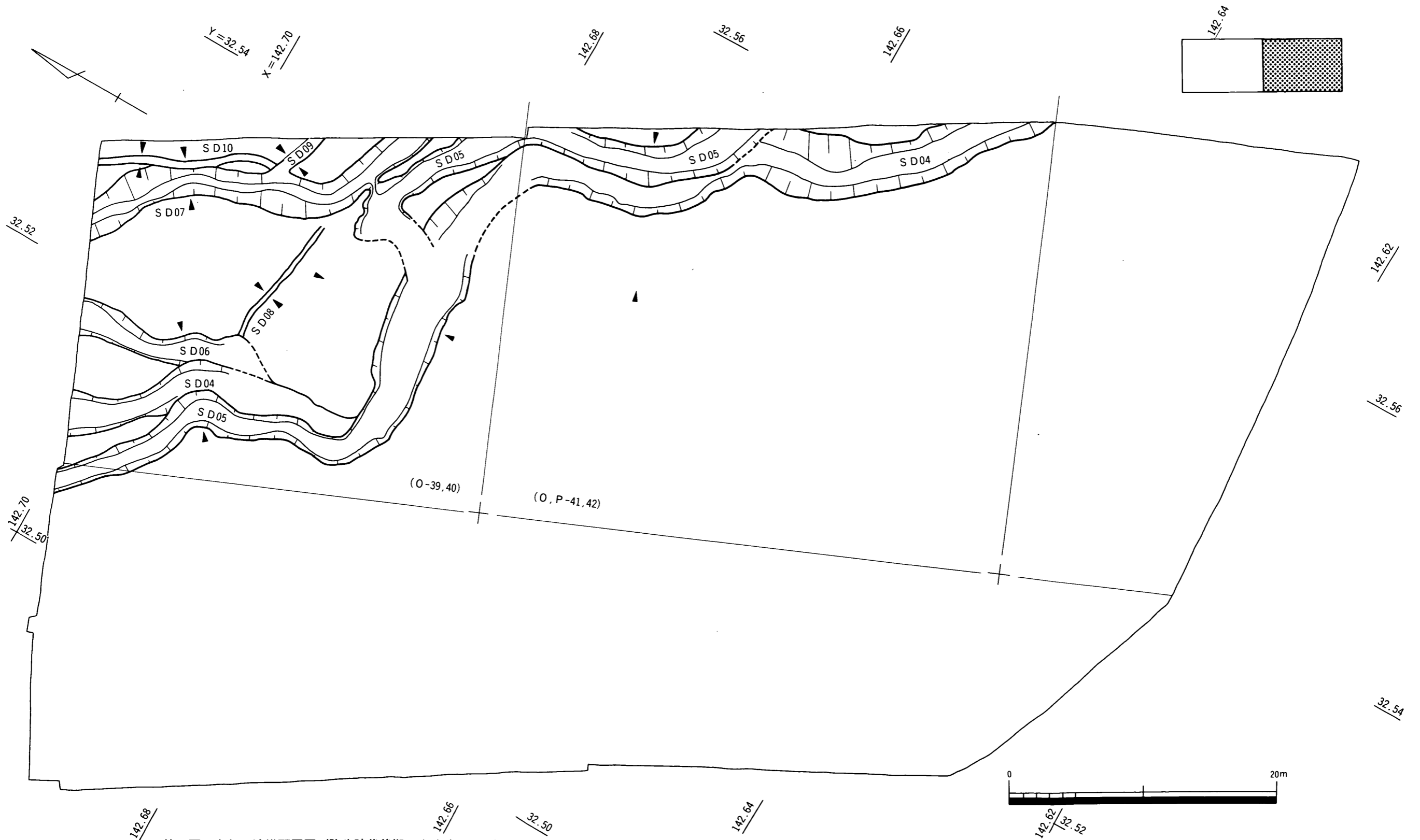
川津二代取遺跡においては、調査区の東南方向から西北西方向にむかって多数の溝が掘削されている。これらは巨視的には同一の方向をもったもので、比較的に規模の大きなものは、砂で埋積された下層と、粘土・シルトで埋積された上層からなる。この下層と上層は、溝が埋没する過程での堆積環境の違いを示すのではなく、下層が埋没した後に、上層が再掘削されたものがある。調査区北方のM, N-36・M, N-35区のある溝においては、途中までは上層と下層が同一の流路をとっていたものが、途中から全く別の流路となるものがあった。

多数の溝状遺構のうち、いわゆる「切り合い」関係によって前後関係が判明するものは、上層の切り合い関係が判明するもの下層は不明なものが多く、また上下層で時期差のある遺物が混在する状況を呈している。

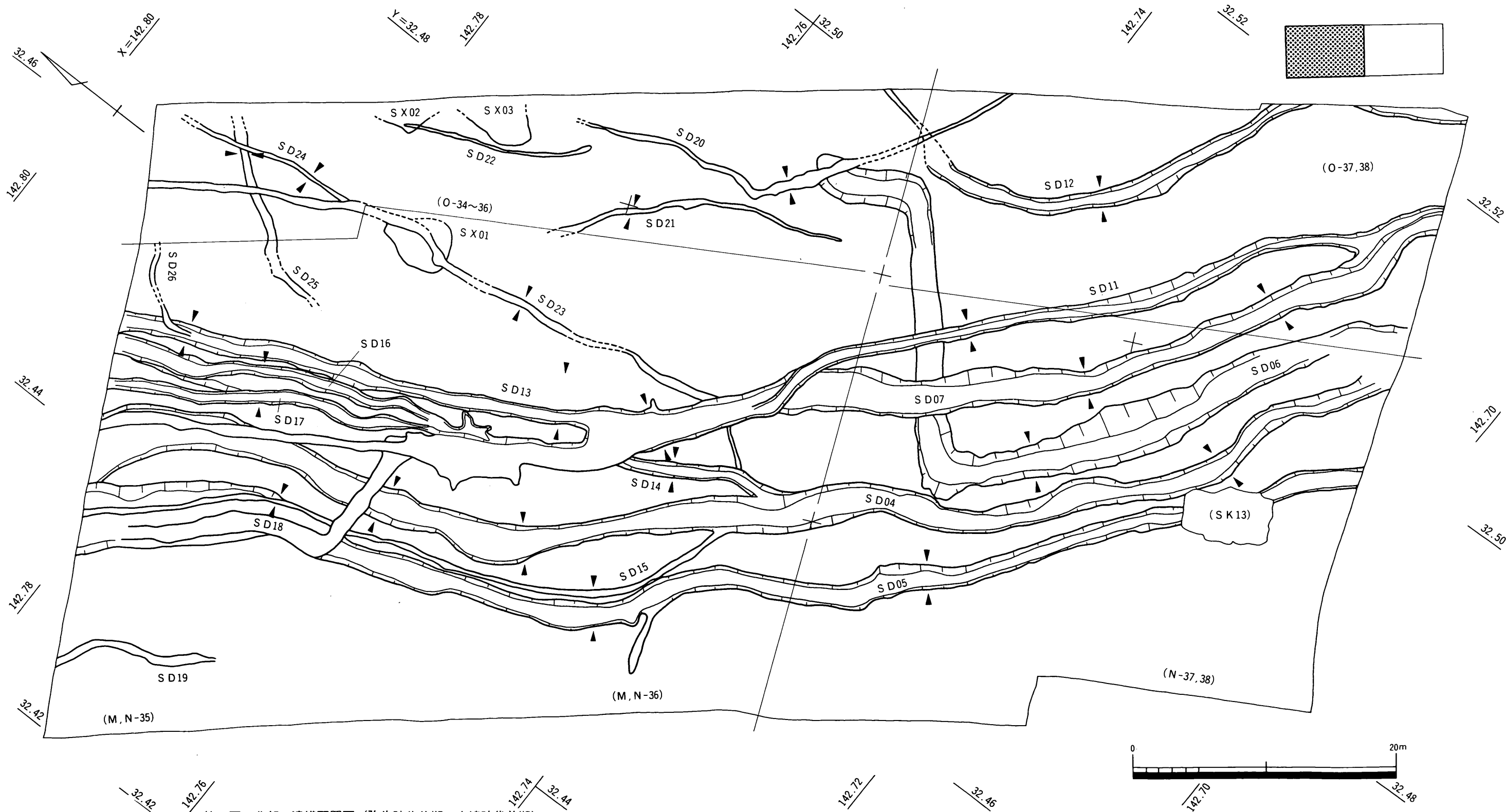
以下、調査区毎に各々の溝状遺構の内容を報告し、その後に全体を総括することにする。

2. O, P-41, 42区 S D04 (第41、43～54図、図版11、12)

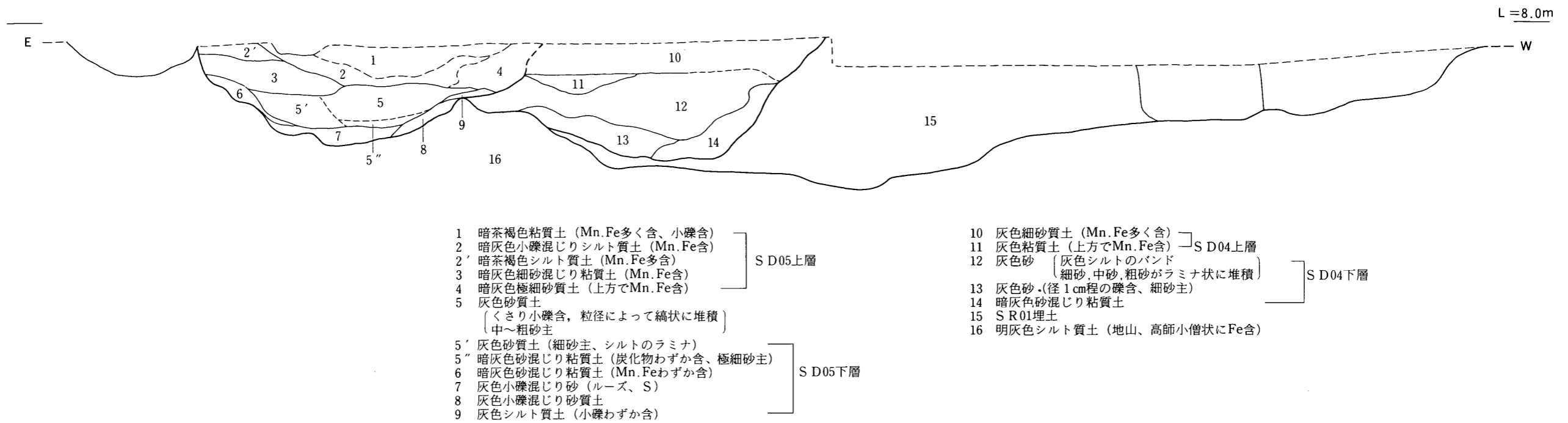
O, P-41, 42区では、調査区の東側から北に向けてS D04が掘られている。この調査区では、S D04はS R01の埋積土部分を掘削しており、S R01の右岸付近を大きく壊している。また、O, P-41, 42調査区の途中からS D05が出現するが、S D05はS D04の埋没後に掘ら



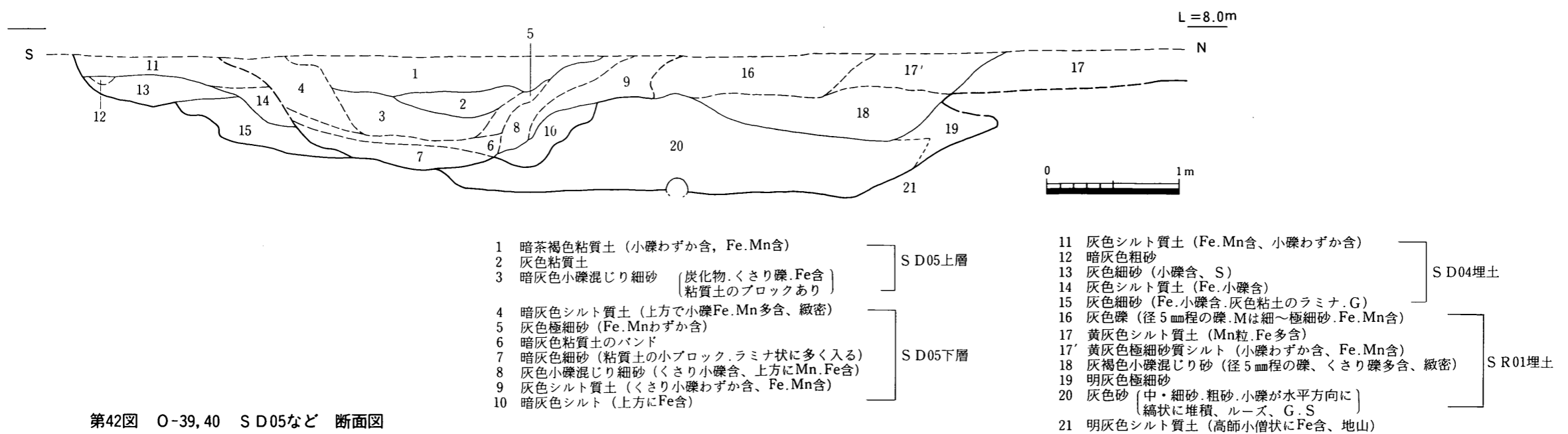
第39図 南部 遺構配置図 (弥生時代後期～古墳時代前期)
 (▶は断面図作成位置)



第40図 北部 遺構配置図 (弥生時代後期~古墳時代前期)
 (▶は断面図作成位置)



第41図 O, P-41, 42 S D 04・05 断面図



第42図 O-39, 40 S D 05など 断面図

れたもので、S D04の右岸付近を大きく壊している。

溝幅は3.0～5.6m、深さは約0.7mを測る。

埋積土は巨視的には2層に分層した。径1cm程の礫を含み、粗砂・中砂を主体とする下層と細砂から粘質土よりなる上層である。下層の砂は淘汰が良く、ラミナが見られるなど流水による堆積であることがわかる。なお、先に下層埋没の後に上層が再掘削されている例の多いことを記したが、ここでは下層と上層との間にギャップは認められない。

O, P-41, 42区のS D04からは多数の遺物が検出された。

① O, P-41, 42区 S D04下層出土の遺物

第43～48図は、O, P-41, 42区のS D04下層出土の遺物実測図である。

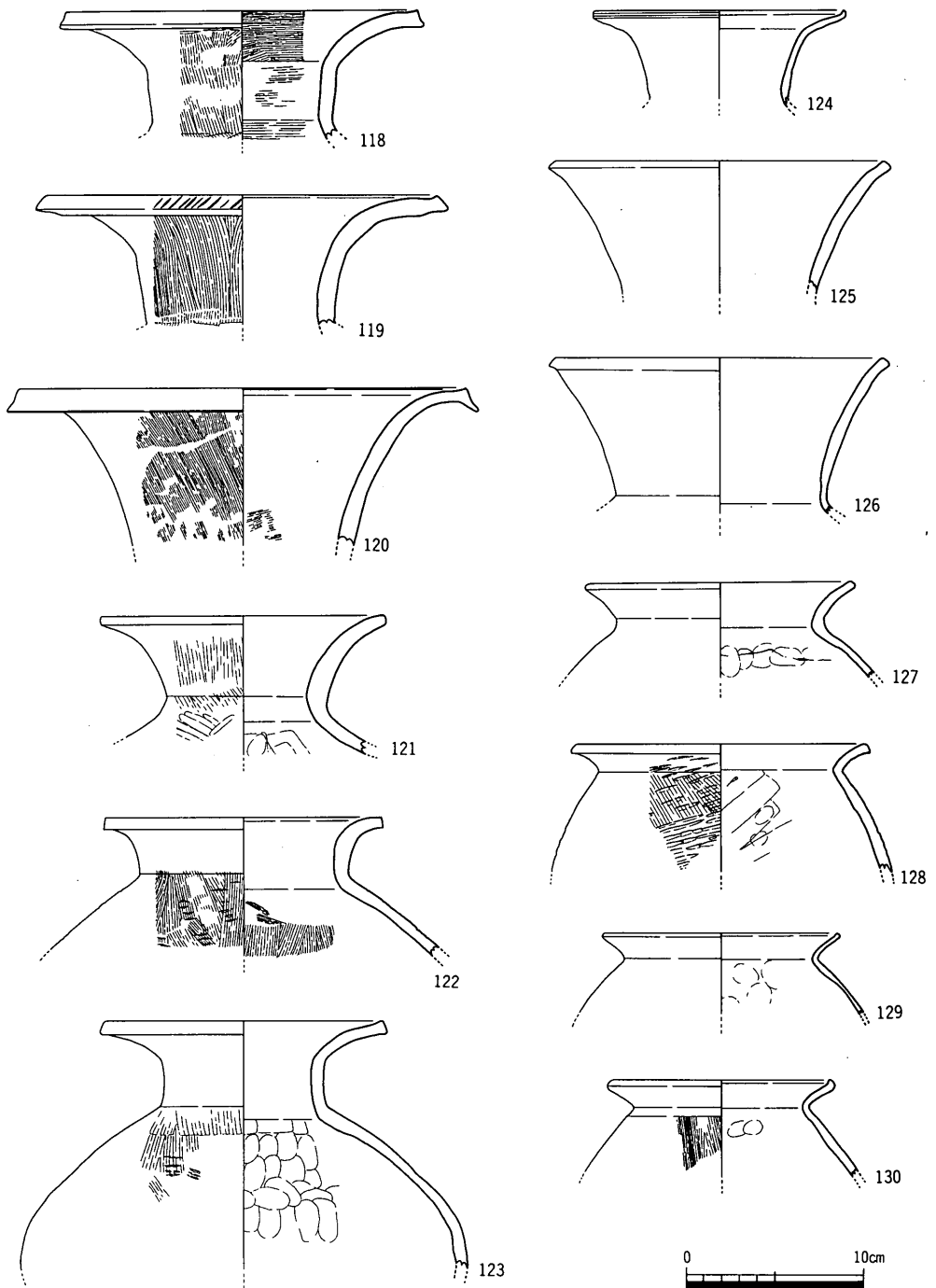
118～126は広口壺の口縁部の破片である。118は、ほぼ直立する頸部から朝顔状に開く口縁をもつ。口縁端部は上下に僅かに摘み出している。119、120はやや外傾する頸部から稜をもたずに外湾して口縁にいたる。口縁端部は、119は僅かに上方に摘み出し、端部にヘラ状工具で刻み目を施している。120は、端部を下方に拡張している。なお、120は接合出来ないが、上層出土の191と同一個体である可能性が高い。121～123は口縁があまり大きく開かないタイプの広口壺である。121は外反する頸部から、そのまま口縁に移行し、端部は角状におさめている。122、123は直立する短い頸部から湾曲して短い口縁をもつ。口縁端部は角状におさめている。

124は外反する頸部から緩く屈曲して口縁部をつくり、口縁端部は上方に摘み上げている。口縁端面に疑凹線が認められる。124は後述する下川津C類土器の範疇で捉えられる。125、126も下川津C類土器の範疇で捉えられる。口縁端部はやや肥厚させて丸くおさめている。摩滅のため調整は不明である。

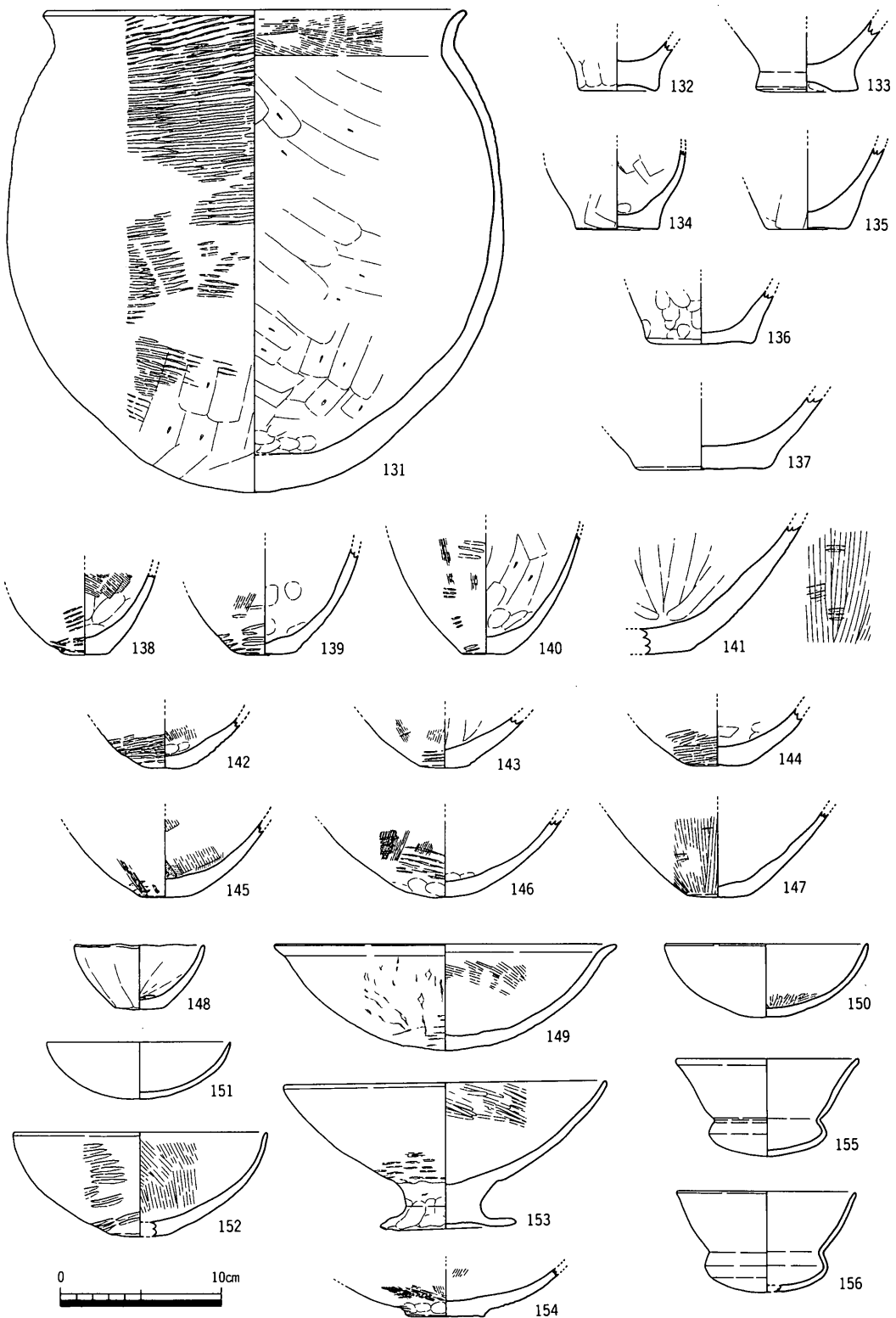
127～131は甕形土器である。127、128は「く」の字状に屈曲し外湾する短い口縁をもつ。129、130は下川津C類土器である。器壁は薄く、口縁端部を僅かに上方に摘み上げている。131は器高に対して口径が大きい、ずんぐりとした形態を呈している。外面は口縁まで叩きを施した後、緩く口縁部を外反させている。

132～147は壺および甕の底部である。132～137は弥生時代前期に属するものと考えられる。混入したものであろう。138～147はほぼ丸底化しているが、狭小な平底であるもの(138～141、144、145、147)とほぼ丸底化しているもの(142、143、146)がある。

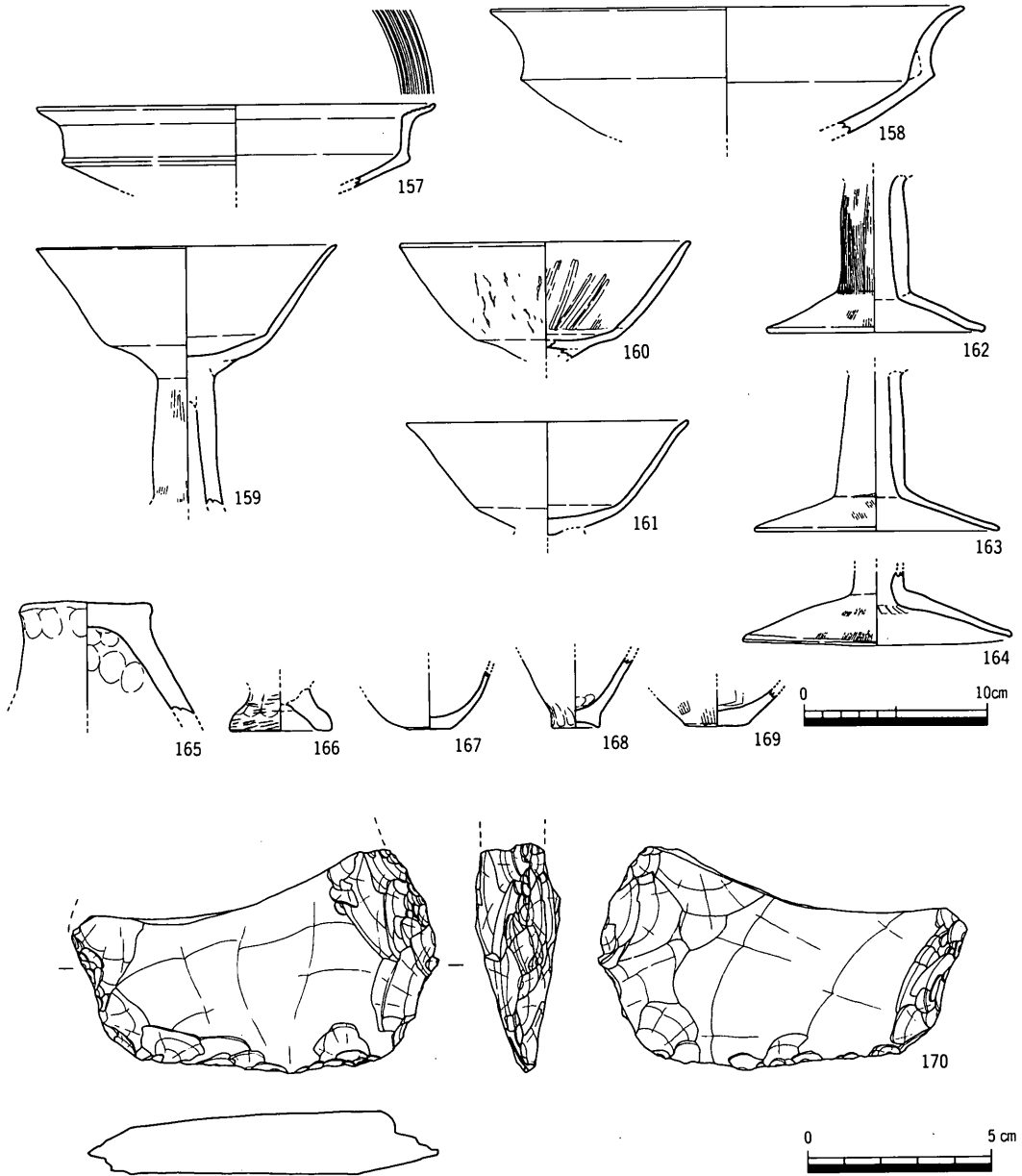
148～156は鉢形土器である。148は平底でボウル状を呈する。内外面に板ナデが施され、



第43図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図①



第44图 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図②



第45図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図③

内面見込み部にはヘラ状工具による連弧状のキズが認められる。149は丸底で、浅いボウル状を呈し、口縁部を緩く外反させている。外面には縦方向のシワ（亀裂）が認められる。

150は丸底で浅いボウル状を呈する。摩滅しているが、内面見込み部から放射状にヘラミガキが施されている。下川津C類土器である。153はボウル状を呈する鉢の底部にやや不整形な脚台を付したものの。脚台部には指頭痕が多く認められる。摩滅しているが、外面下半に

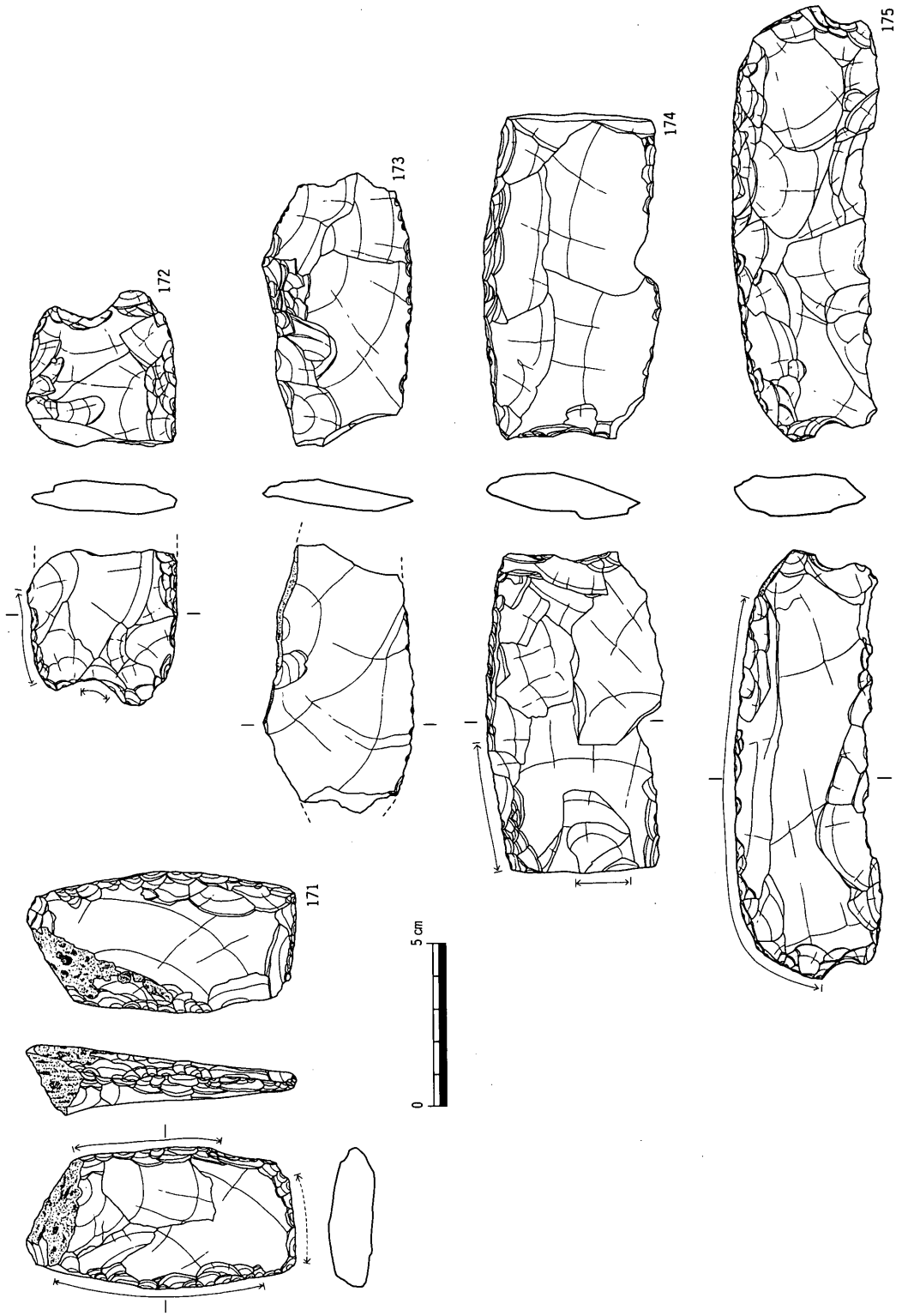
叩き、内面上半にヘラミガキが施されている。153はO, P-41, 42区のS D07出土の348と形態・胎土・色調が酷似しており、同一製作者が時を開けずに製作したものである可能性がある。154は鉢形土器の底部と考えられる。円盤状の底部をもち、外面は叩きの後ハケ、内面にはハケが施されている。

155、156は小型丸底鉢である。扁平な体部に体高を凌駕する口縁を有する。下川津C類土器である。

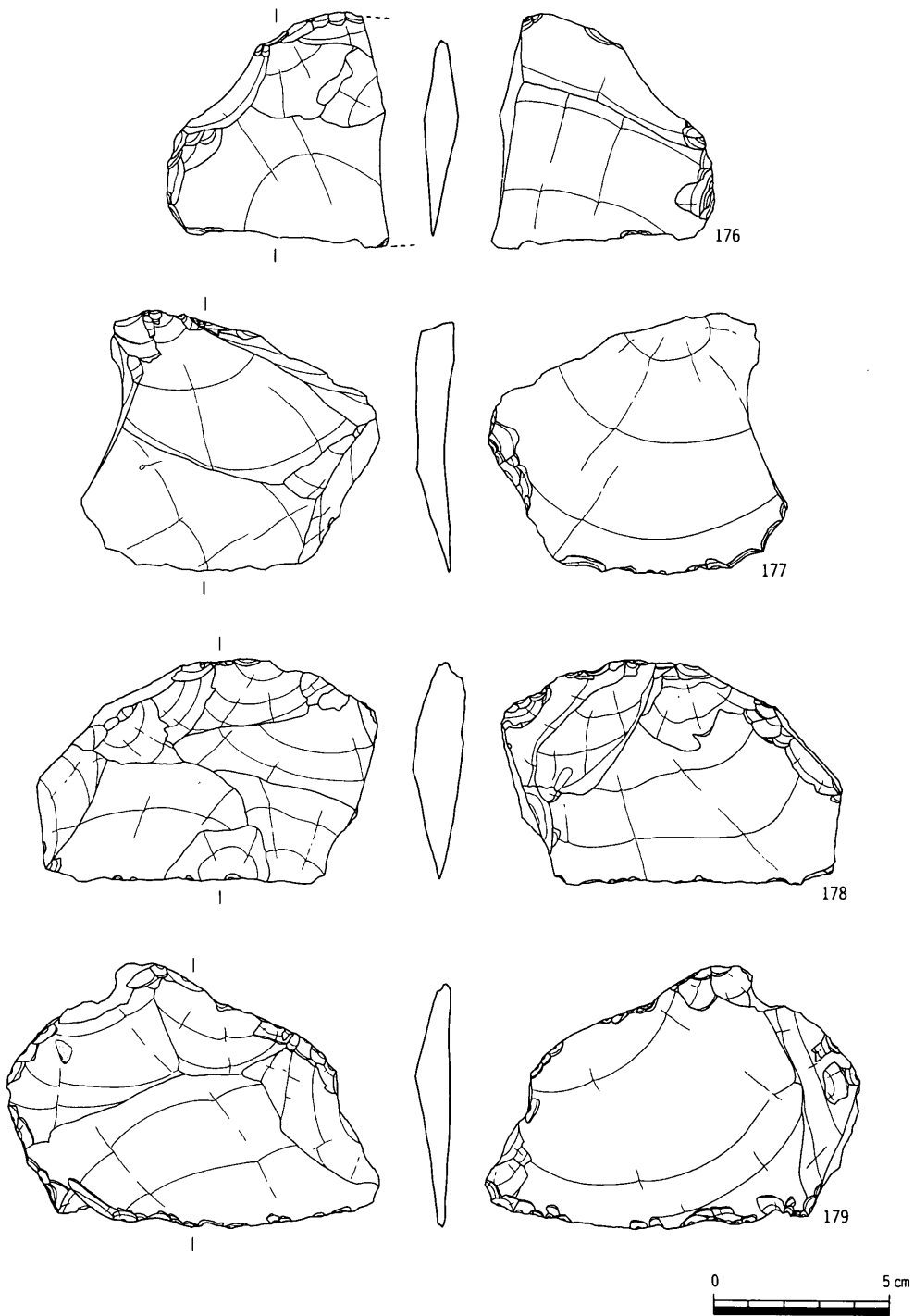
157～164は高杯である。157は、わずかに内湾する体部から明瞭な稜をもって口縁部につながる。口縁部は直立して後大きく外半する。口縁部内面には櫛状工具による沈線が巡っている。胎土中に微量の金雲母・角閃石を含んでいる。157は小破片のため土器の傾きには検討の余地を残す。158は、僅かに内湾する体部に明瞭な稜をもって外湾する口縁部がつく。体部と口縁部の境の内面には粘土を足して肥厚させている。159～164はいずれも下川津C類土器である。159～161の杯部の形状、大きさは特に内面において酷似している。型つくりの可能性を考えてよいと思われる。159は僅かに内湾する体部から外上方に開く口縁部をもつ。外面に稜は認められない。杯部と脚部は別々につくった後に接合しているようである。脚部は円筒状で中空である。外面にはタテハケが施されている。160も159とほぼ同様の杯部である。内面にヘラミガキ、外面の調整は不明であるが、縦方向のシワ（亀裂）が多く認められる。162～164の脚部は円筒状で中空の柱状部から大きく開く裾部をもつ。外面はタテハケ、内面にはナデ調整が施されている。

165は蓋形土器である。弥生時代前期に属するものであろう。166は製塩土器の脚台部の破片である。外面は叩きの後指押さえで整形している。内面はナデで杯底部に充填した粘土が一部遺っている。167～169はミニチュアと考えられる土器の底部である。167は狭小な平底の底部に内湾する体部をもつ。内外面ナデが施されている。168は甕形土器底部かと思われる。内外面下半は指押さえ、以外は摩滅している。

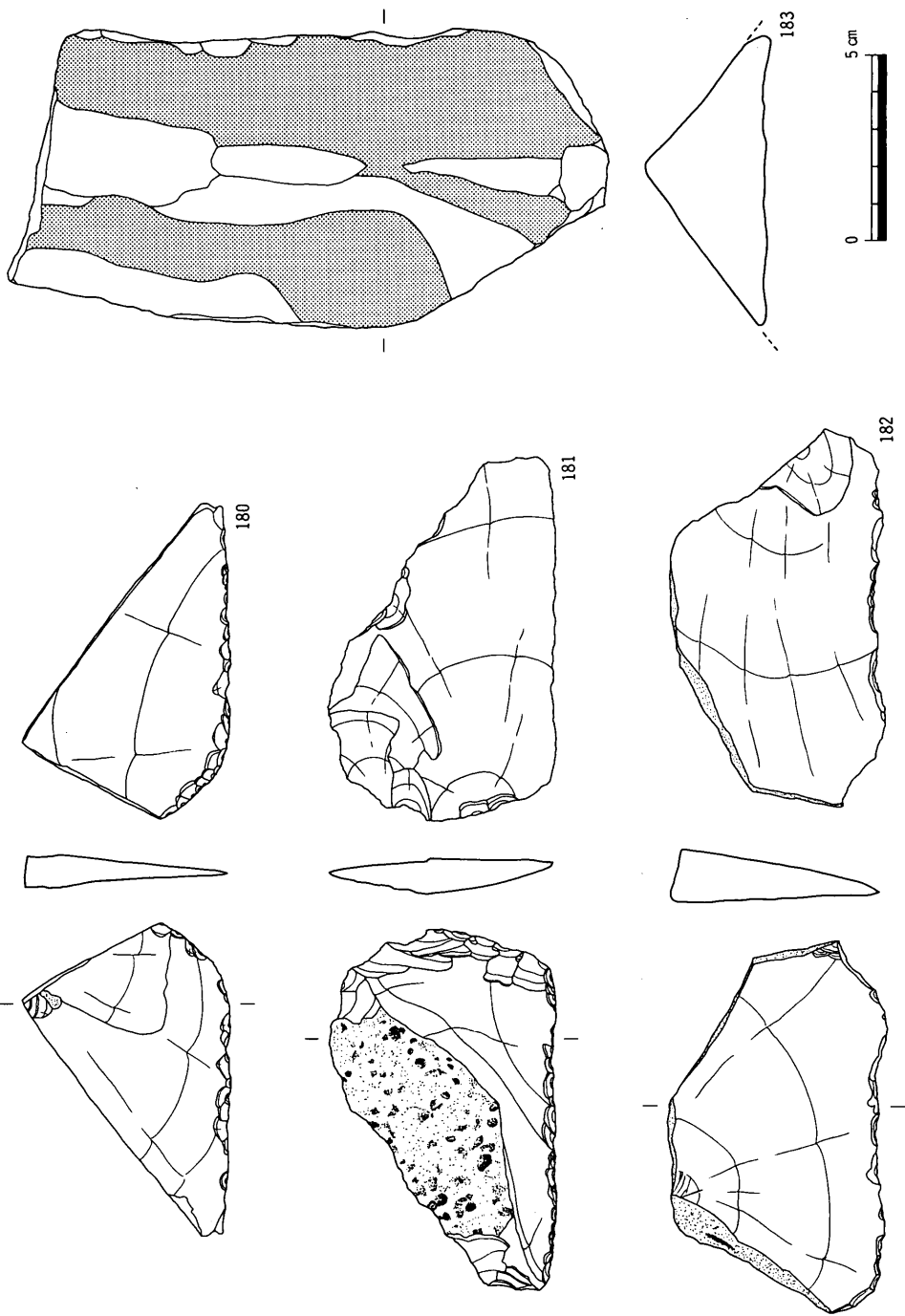
170は肉厚な打製石斧の刃部である。基部は欠損している。171も打製石斧である。基部側縁と片面の一部に自然面を残す。両側縁に敲打痕が認められる。172～175は石包丁とその未製品と考えられる。172は折損している。背部と挟り部に敲打痕を認める。173は、やや外湾気味の刃部をもち、背部に自然面を残す。肉薄である。両端を折損しているが、形態から石包丁と考える。174は石包丁の未製品と考えられる。若干の押圧剝離によって刃部を整えているが全体に及んでいないこと、両端の挟りが造りかけと考えられることから未製品と考えた。この推定が正しければ、左側面の敲打痕は挟りをつくるためのものであると判断され



第46图 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図④



第47图 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図⑤



第48図 O, P-41, 42区 S D04下層 出土遺物実測図⑥

る。175は直線状の刃部をもつ。背部には一部自然面が残り、他部には敲打痕が認められる。刃部、背部ともに階段状剝離が目立つ。

176～182は削器である。176は直線状の刃部をもつ。一端は欠損する。背部は剝離を比較的密に行なっていることから石斧などの転用品である可能性がある。177の外湾する刃部にはほとんど細部調整が加えられていないが、成形段階で鋭利な刃をなしていたからであろう。181は一面に自然面を残す。直線状の刃部は片面からのみ押圧剝離を施している。182はやや内湾気味の刃部をもつ。背部は自然面である。打瘤が明瞭に残る。

183は砥石と考えられる。三角形の断面を呈するが、これが原形であるのか割れた結果であるのか不明である。表面は摩滅する。石材は花崗岩ポーフリーという火成岩の一種である。

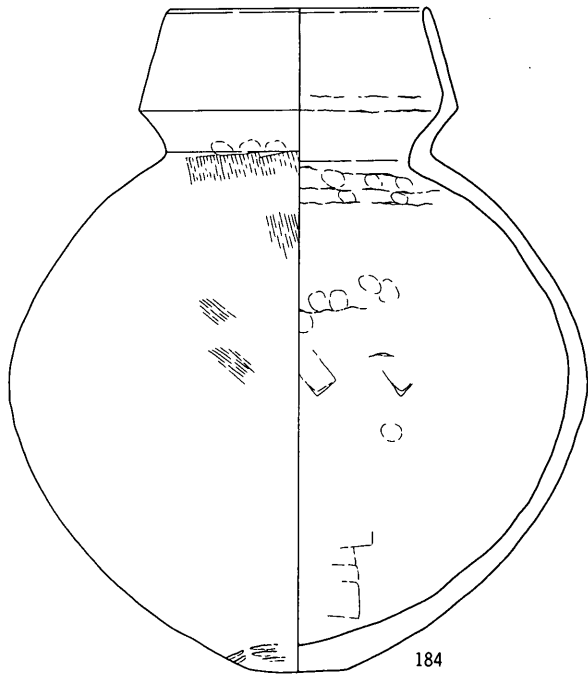
② O,P-41,42区 S D04上層出土の遺物

第49～53図は、O,P-41,42区のS D04上層出土の遺物実測図である。このうち第49図の184～186、第51図202はS D04の埋積土の上面から完形に近い状態で検出したもので、他とは違った出土状況であった。これらの遺物は層位的には後述のS D05との関連で考えるべきかもしれない。

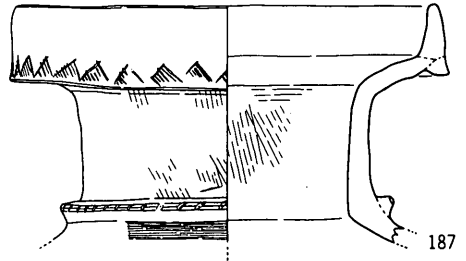
第49図184は二重口縁壺である。「く」の字状に屈曲する頸部に内傾する口縁を付加する。口縁端部は丸くおさめている。体部は球形を呈し、底部はほぼ丸底である。調整は底部付近に叩き目が残るほか、体部外面はハケ、内面は板ナデが施されている。口頸部はナデである。185は壺の頸部から体部にかけての破片である。186も壺。口縁部を欠損する。

187～190は二重口縁壺。187は直立する頸部を屈曲させ、さらに直立する二重口縁をもつ。口縁部にはヘラ状工具による鋸歯文が描かれ、頸部下端には刻み目を施した突帯を付している。188は口縁部の破片である。外面にヘラ状工具でやや稚拙な鋸歯文を描いている。189は、直立する頸部から屈曲する受け部を経て直立する口縁を有する。口縁端部は角状におさめている。190も直立する口縁を有し、端部は尖り気味におさめている。191、192は広口壺の口縁部である。191は先述の120と同一個体である可能性が高い。192は外傾する頸部から朝顔形にひろく口縁をもつ。僅かに上方に摘み上げられた口縁端部の端面にはヘラ状工具による波線文が一条描かれている。

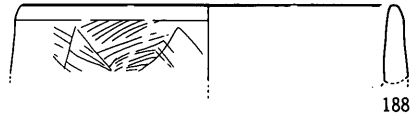
第50図193は、S D04から散在する状況で検出された壺形土器で、1m近い器高をもつ大型品である。胎土中に角閃石を含み、形態的にも下川津B類土器の壺に似る。土器棺など特



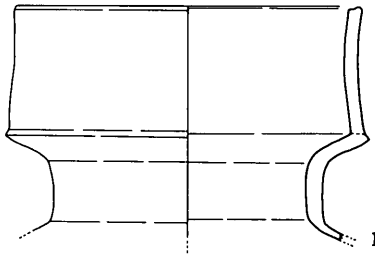
184



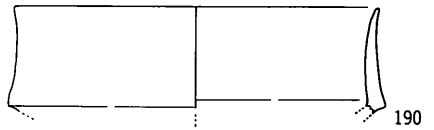
187



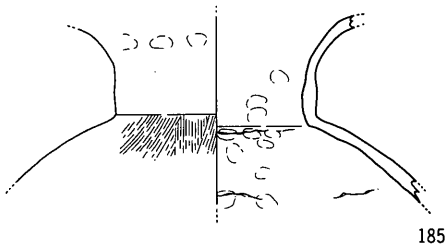
188



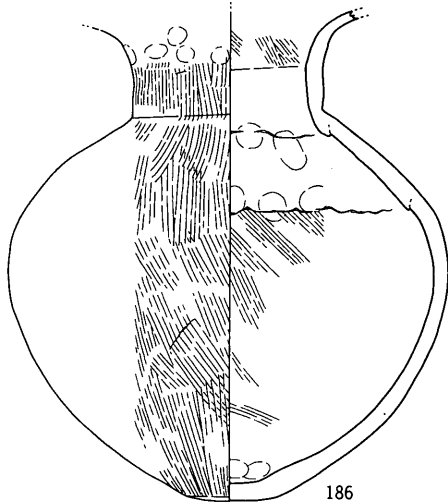
189



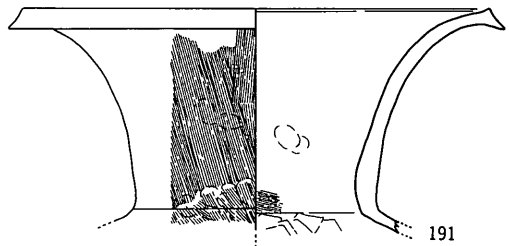
190



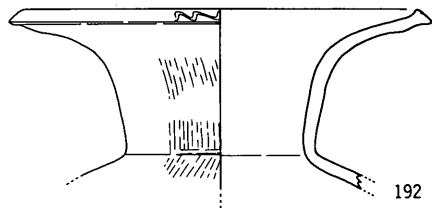
185



186



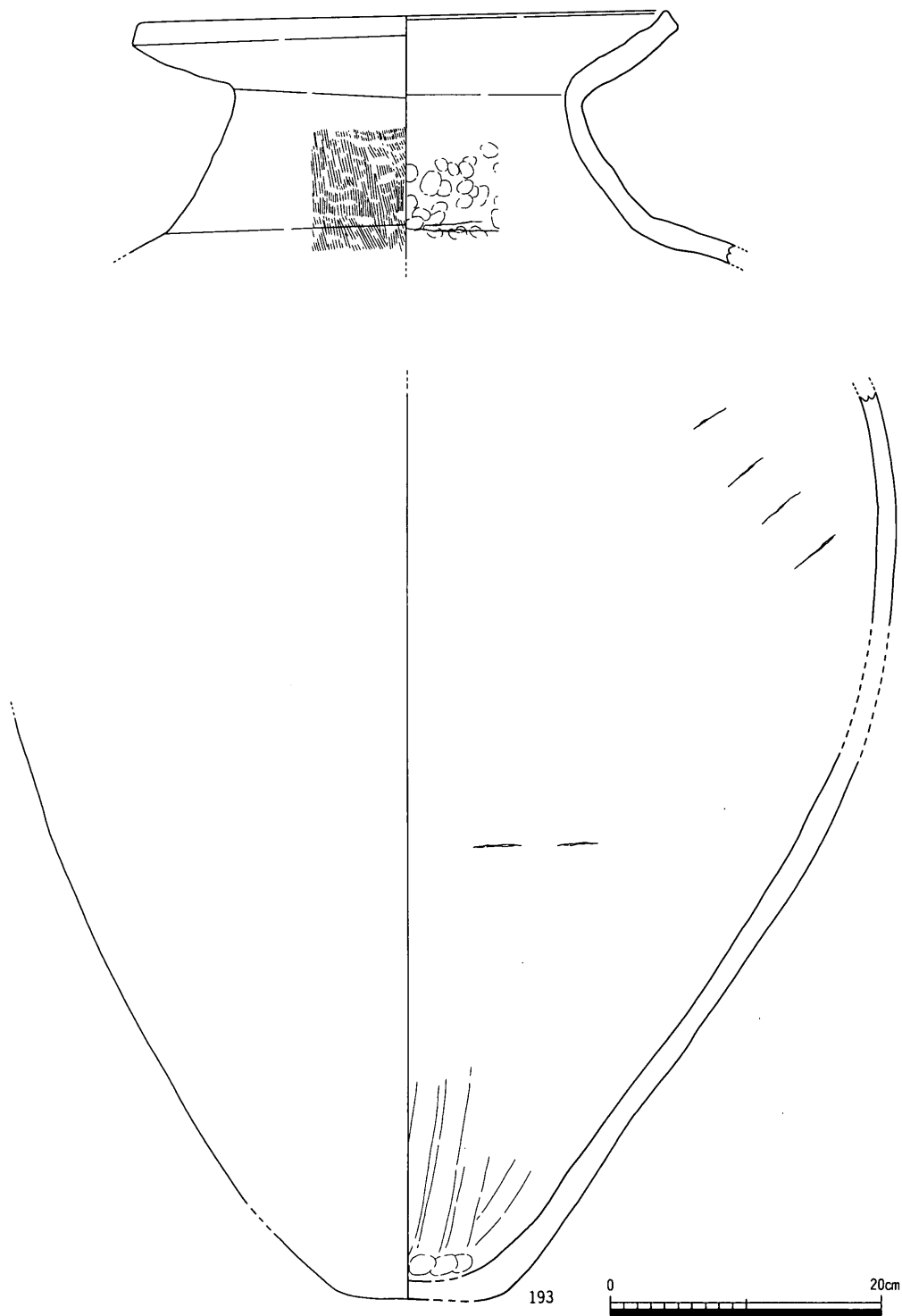
191



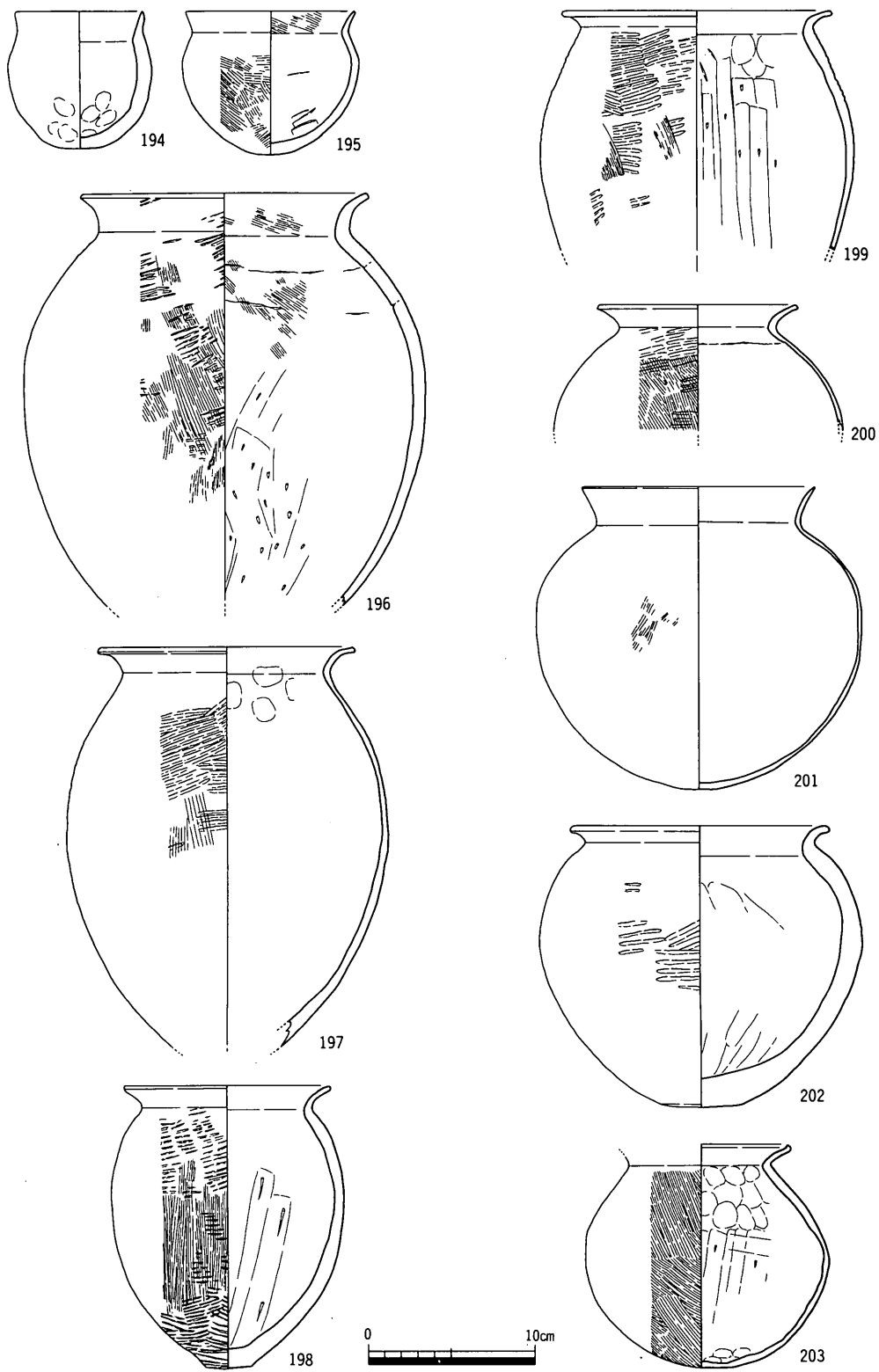
192



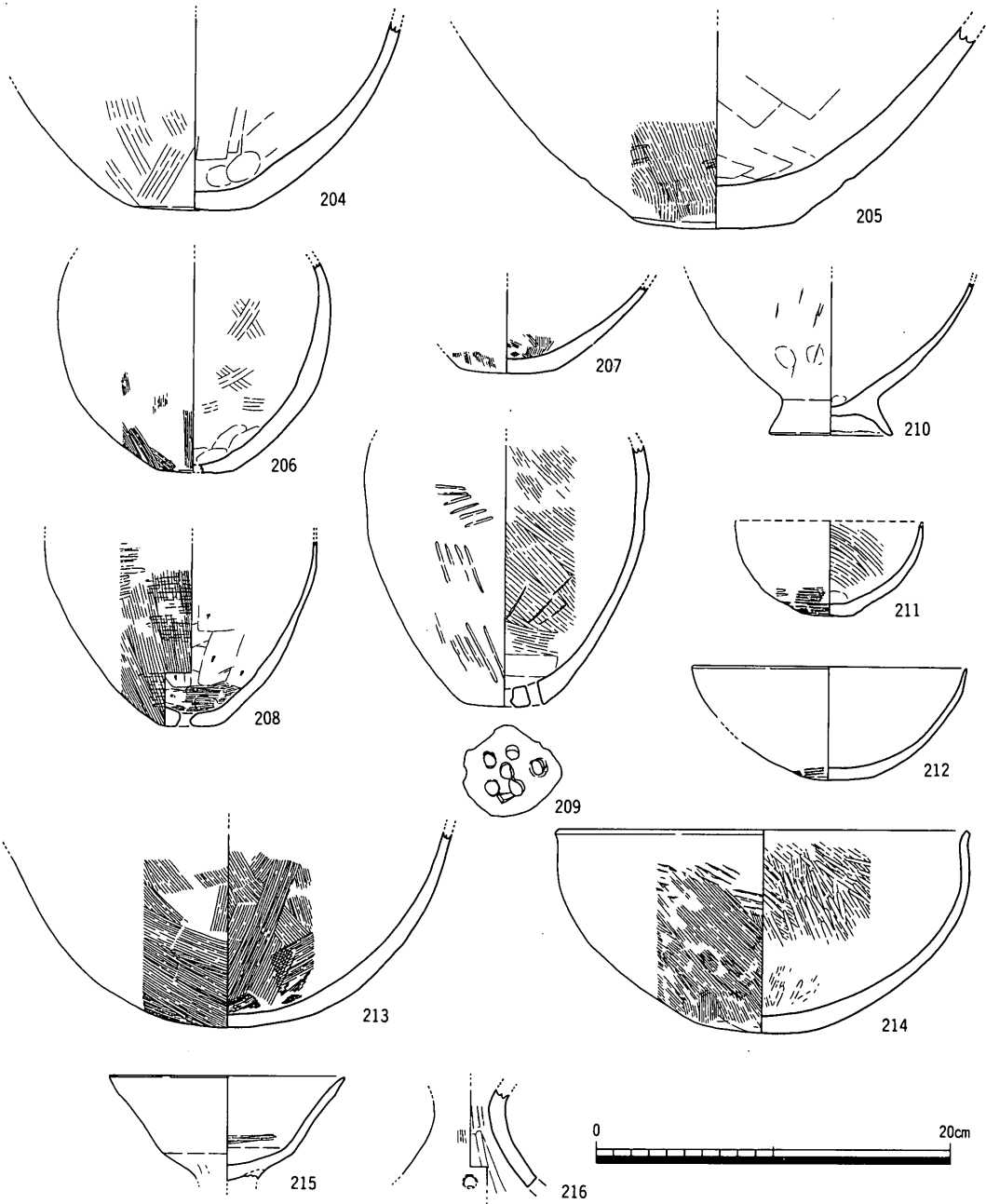
第49图 O, P-41, 42区 S D04上層 出土遺物実測図①



第50図 O, P-41, 42区 S D04上層 出土遺物実測図②



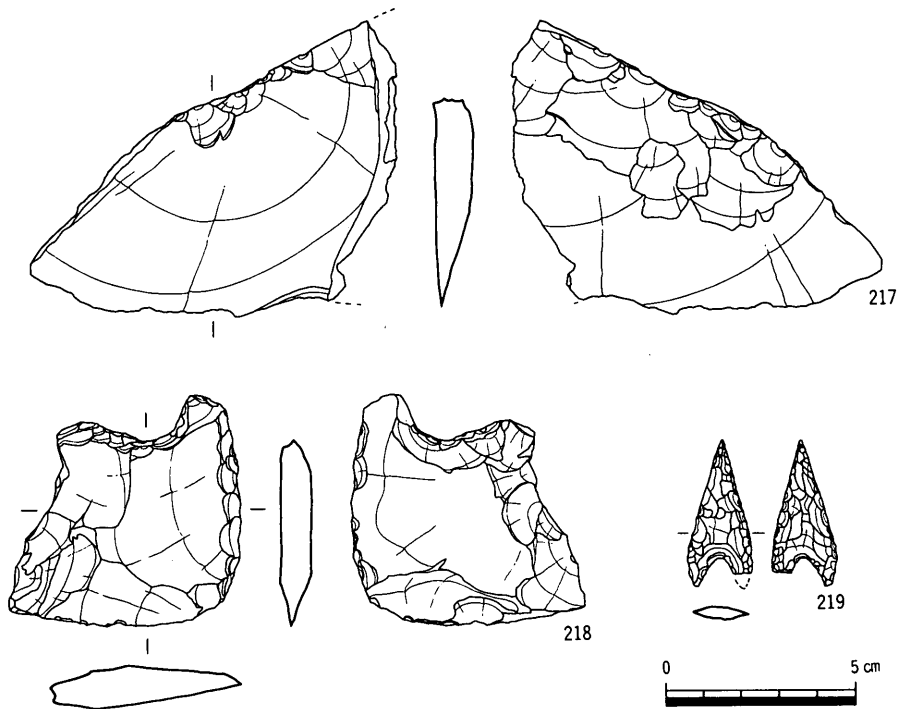
第51图 O, P-41, 42区 S D04上層 出土遺物実測図③



第52図 O, P-41, 42区 S D04上層 出土遺物実測図④

別な用途でつくられたものであろう。

194、195は小型丸底壺である。194は器壁の厚いもので手捏ねの可能性がある。195は、球形の体部から緩く屈曲し短い口縁がつく。体部と口縁部の境は内面において明瞭な稜をなし



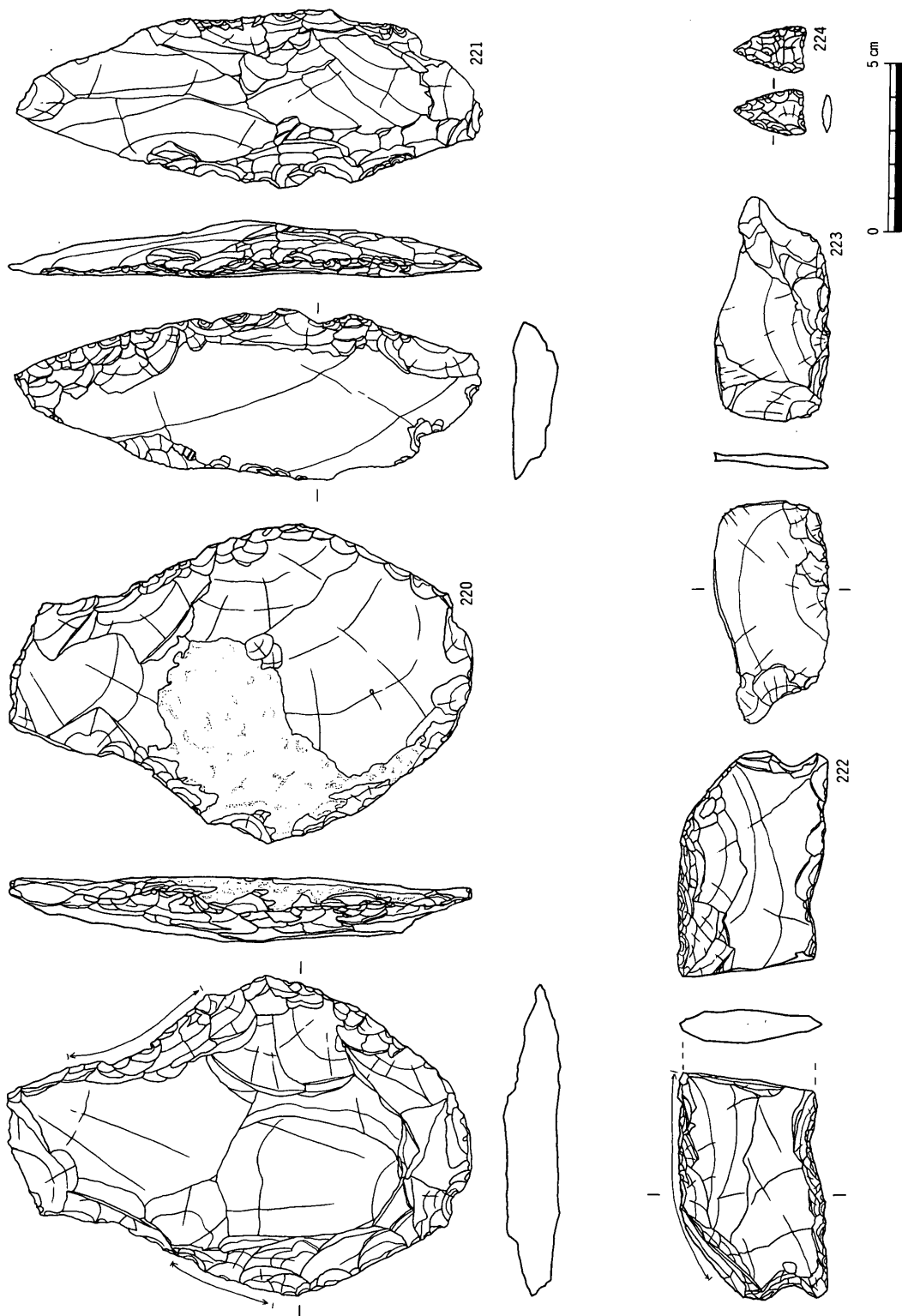
第53図 O, P-41, 42区 S D04上層 出土遺物実測図⑤

ている。

196～203は甕形土器である。196～200は、「く」の字状に屈曲し外湾する短い口縁をもつ。口縁端部は丸くおさめている。外面は叩きの後ハケを施している。201は器壁の薄いもので、球形の体部をもつものである。202は口縁端部を玉縁状におさめ、球胴化した体部をもつ。203は、「く」の字状に屈曲する口縁をもち、口縁端部を上方に摘み上げている。球胴状の体部をもち丸底である。下川津C類土器である。

第52図の204～207は壺もしくは甕形土器の底部である。208、209は甑である。208は焼成前に一孔を穿っている。外面は叩きの後ハケ、内面はヘラ削りであるが底部付近は粘土を足してハケ調整を施している。209は焼成前に6孔が穿たれている。

210は台付きの鉢もしくは甕である。倒杯形の脚台が付く。摩滅が著しい。211～214は鉢形土器である。211は不明瞭な平底をもちボウル状のものである。口縁部を欠損するが器壁の状況などから欠損部に近い位置で口縁になるようである。212は半球状を呈し、口縁端部を尖り気味におさめる。213は、器壁が上方に向かって序々に薄くなること、ハケ目が上端付近で乱れていることから、欠損部のすぐ上に口縁部のある鉢形土器と考えられる。214は半球状を呈し、弱く外反する口縁をもつ。



第54图 O, P-41, 42区 S D04 出土遺物実測図

215、216は高杯である。215は形態的には下川津C類土器に似るが、胎土が異なるものである。216は高杯脚部の破片である。屈曲をもたずに円錐状に広がるもので、中空である。円形の透孔が認められ、外面はハケ、内面は板ナデが施されている。

第53図217は鋭利な刃部をもつが、細部調整が為されていないため二次加工のある剝片に分類する。218は削器。折損した石包丁を転用し、折損部に刃を付けている。ただし刃部は雑で甘いつくりである。219は凹基式の石鏃である。基端の一部が欠損している。

第54図は、O、P-41、42区のS D04出土の石器のうち上下層の区分が不明瞭なものである。220は分銅形を呈する打製石斧である。片面および側面の一部に自然面を残す。側面の一部には敲打痕が認められる。肉厚で階段状剝離が目立つ。221は石槍状の石器である。尖頭部および基部にむかって幅を減じる平面形をなす。片面は剝離面を残し、片面は側面からの打撃によって整形している。222は石包丁である。やや内湾する刃部、背部に敲打痕が認められる。一端を折損する。223は削器。肉薄の剝片の一辺に直線状の刃部をつくっている。224は凹基式の石鏃である。

3. O、P-41、42区 S D05 (第42、55～57図・図版13)

① 概要

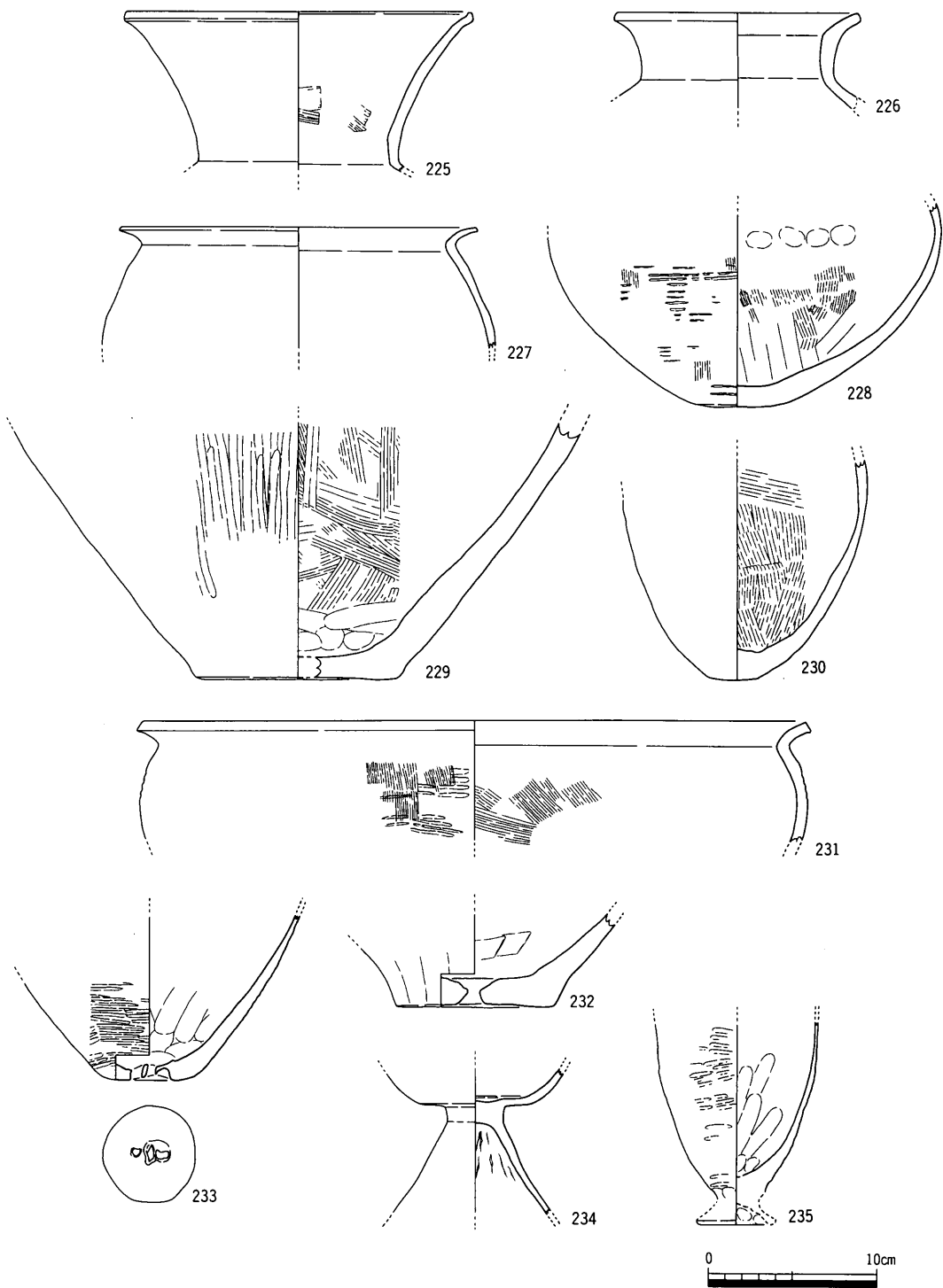
O、P-41、42区の東側、42ライン付近から北流する溝状遺構である。先述のS D04の埋没後にそれを壊して掘削されている。幅約5.2m、深さ約0.6mを測る。

埋積土は巨視的に2層に分けた。灰色から暗灰色系の砂で埋積された下層と暗灰色～暗茶灰色系で粘質土・シルト質土で埋積された上層である。

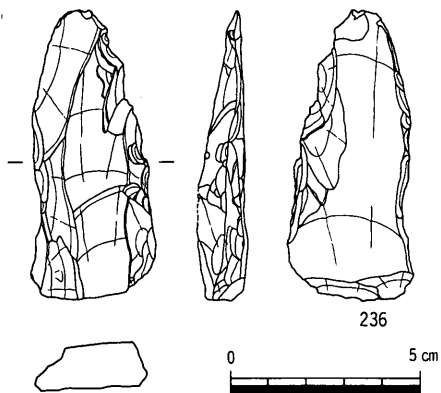
② O、P-41、42区 S D05下層出土の遺物

第55図は、O、P-41、42区のS D05の下層から出土した遺物実測図である。

225は広口壺の口縁部である。緩く外反しながら直線的に開いている。口縁端部は上方に僅かに摘み上げている。下川津C類土器である。226は広口壺の口頸部の破片である。やや外反気味の頸部から移行して短い口縁部となる。端部は丸くおさめている。226は、O-39、40区のS D04上層出土の312、O-39、40区のS D04出土の304と同一個体である可能性が高い。227は甕形土器の破片である。摩滅が著しい。229は壺形土器の底部破片である。外面はヘラミガキ、内面は2種のハケが施されている。なお、229の内面には赤色顔料が僅かに遺存していたが、分析の結果「朱」に同定された。231は「く」の字状に屈曲する口縁をもつ鉢であ



第55図 O, P-41, 42区 S D05下層 出土遺物実測図①



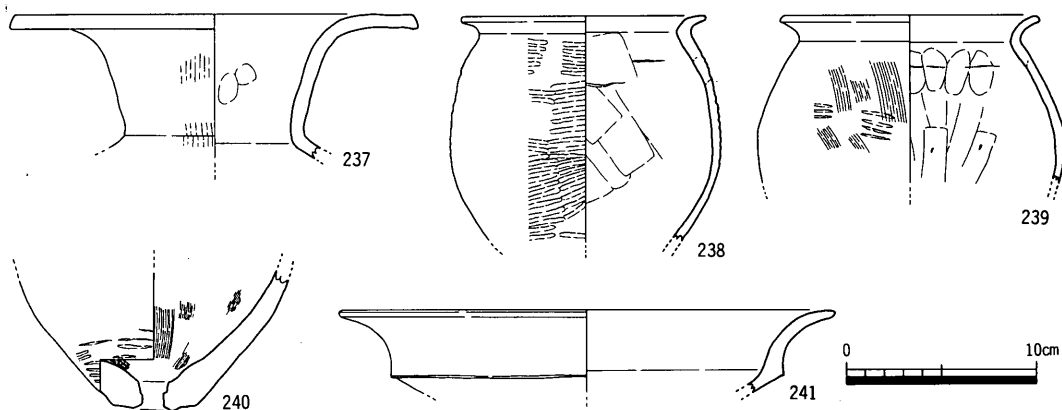
第56図 O, P-41, 42区
S D05下層 出土遺物実測図②

る。232、233は甑である。232は焼成後に一孔を穿っている。弥生時代前期の壺形土器を転用したものと考えられる。混入であろう。233は平底を呈する底部に焼成前に2孔を貫通させ、1孔は未通のまままで終らせている。234は小型の器台形土器と考えられる。川津二代取遺跡では、器台形土器はこの他にはほとんど認められない。235は製塩土器である。

第56図236は、旧石器時代の国府型ナイフ形石器である。混入したものであろう。

③ O, P-41, 42区 S D05上層出土の遺物

第57図は、O, P-41, 42区のS D05上層出土の遺物実測図である。237は広口壺の口頸部の破片である。外傾する頸部から水平に開く口縁をもつ。238, 239は甕形土器である。ともに「く」の字状に屈曲する短い口縁をもつ。端部は丸くおさめている。240は甑である。明瞭な平底を呈する底部に焼成前に一孔を穿っている。241は高杯と考えられる。内湾する体部に明瞭な稜をもって強く外反する口縁をもつ。



第57図 O, P-41, 42区 S D05上層 出土遺物実測図

4. O-39, 40区の概要

O-39, 40区では、O, P-41, 42区から続くS R01・S D04・05の他、S D04・05よりも古い溝状遺構（S D06）やS D07～10が検出された。

S R01は、調査区の東南方向から西南方向に流れ、S R01の埋没後にそれを「8」の字に交差するように溝状遺構が掘削されている。この溝状遺構は、O, P-41, 42区では把握されなかったS D06と、S D04・05の3条の流路からなっているが、埋積土が酷似している関係で、遺物を充分に分離することが出来なかった。O-39, 40区のS D05として報告するものはO, P-41, 42区S D05と同一と考えられるが、O-39, 40区S D05等出土の遺物としているものはS D05の他、S D04・06・S R01の遺物が混在する可能性が高い。

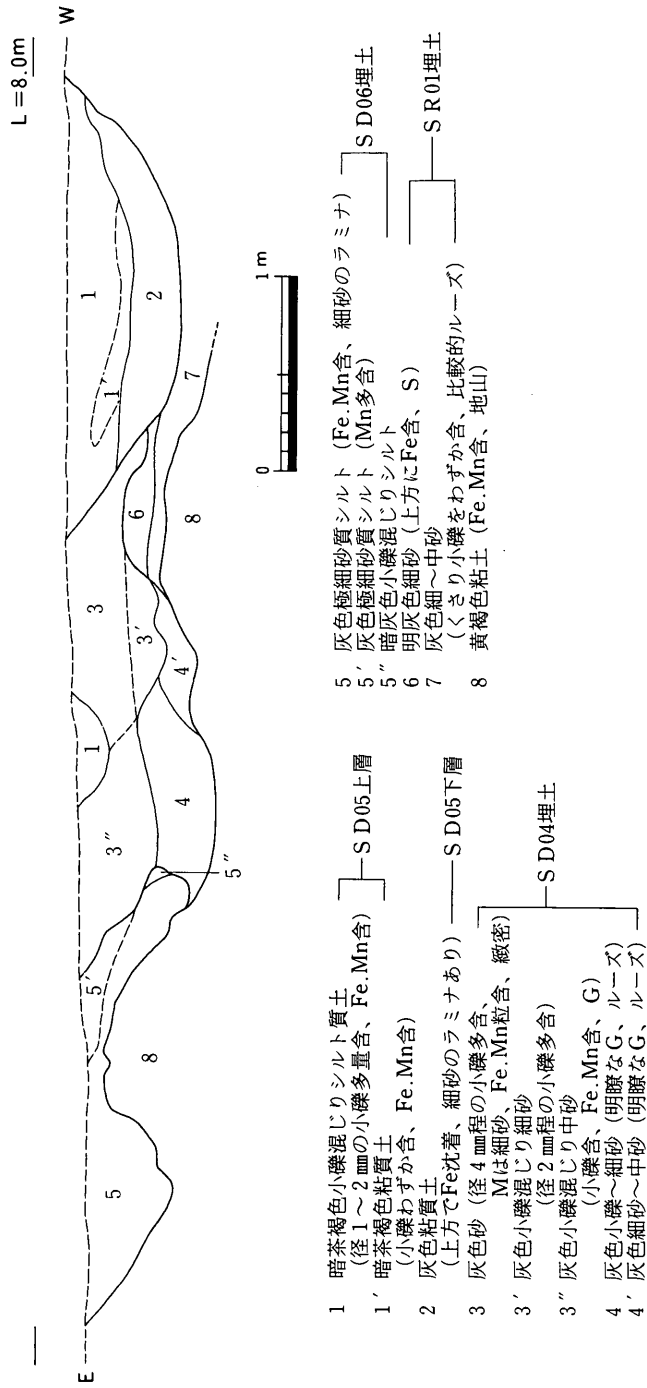
第42図にO-39, 40区の、S R01・S D04・05の断面図を掲げる。この図の土層番号の1～10までがS D05、11～15がS D04、16～20がS R01の埋積土と考え、遺物を採集した。また、第58図にS D04・05・06の層序関係を示す。

① O-39, 40区 S R01出土の遺物

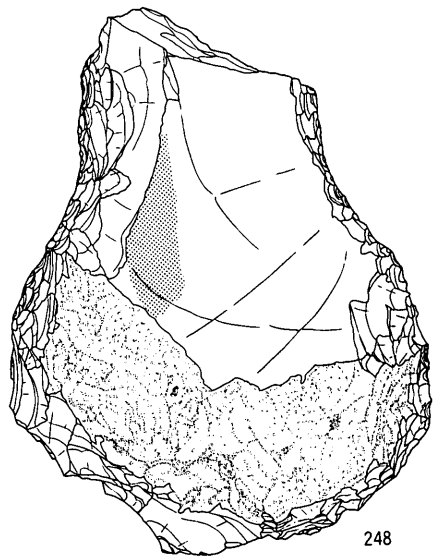
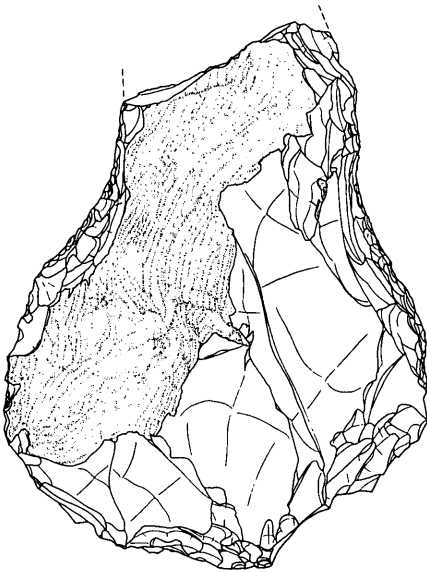
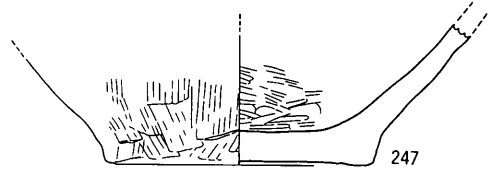
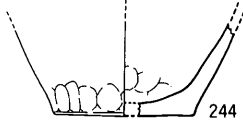
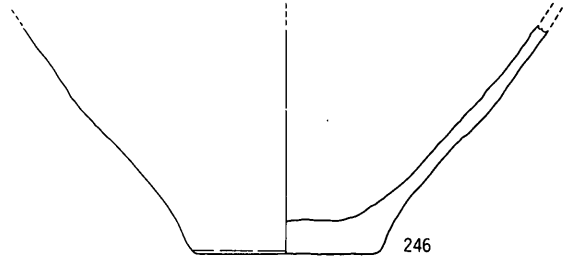
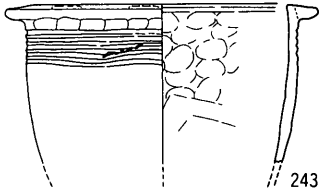
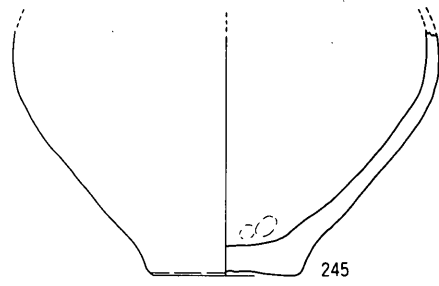
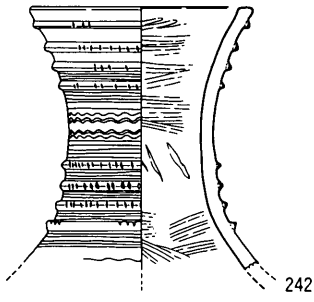
第59・60図は、O-39, 40区のS R01出土の遺物である。242は、壺形土器の口頸部である。榭描文を施した上に、刻み目を施した突帯を上下に各々4条ずつ貼り付けている。4条ずつの突帯間には榭状工具による複線波文が施されている。弥生時代中期の様相をもつ。なお、242はS D05等との交差部から出土しており、帰属が明確ではない。243は甕形土器。逆L字状の断面三角形の口縁を付する。体部上半に5条のヘラ描き沈線が巡る。244～247は壺・甕形土器の底部である。いずれも摩滅しているが、247の内面にはミガキが認められる。248～250は打製石斧と考えられる。248は分銅形を呈する。両面に自然面を残し、肉厚で調整は雑である。一面に使用痕と思われる擦痕が認められる。249は、刃部ではないかと思われるが、破片のため特定できない。250も刃部と考えられる。基部は欠損する。剝離の方向からみて欠損する基部はそれ程長くないものと思われる。

② O-39, 40区 S D05等出土の遺物

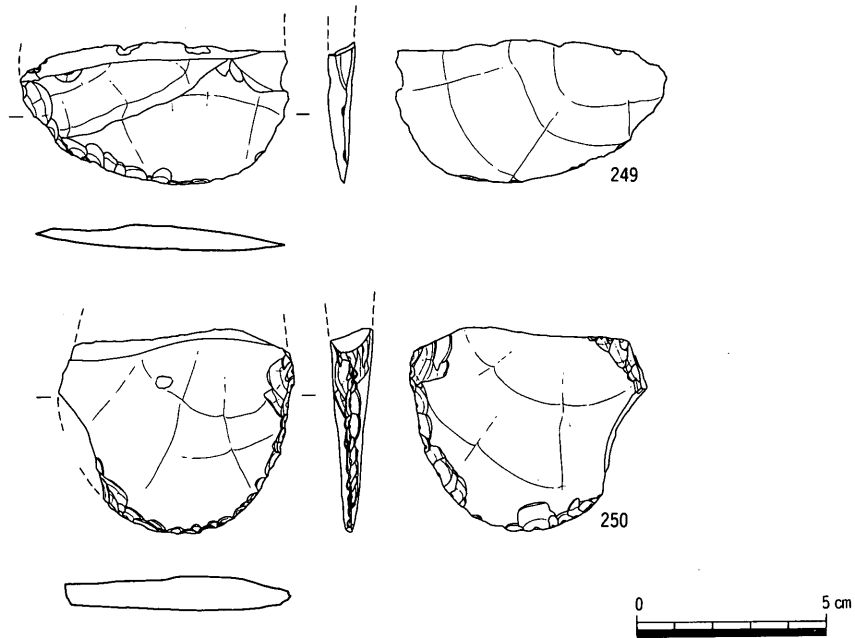
第61～64図はO-39, 40区のS D05等出土の遺物である。先述したように本資料はS D05を中心とするものであるが、S D04～06・S R01の遺物が混在している可能性が高い。251は壺形土器である。口縁部端面を上下に拡張し、端面に3つ一組の竹管文とヘラ描きによる山形文を一つ描いている。器外面は縦方向のヘラミガキが施されている。



第58図 O-39, 40区 SD04~06 断面図

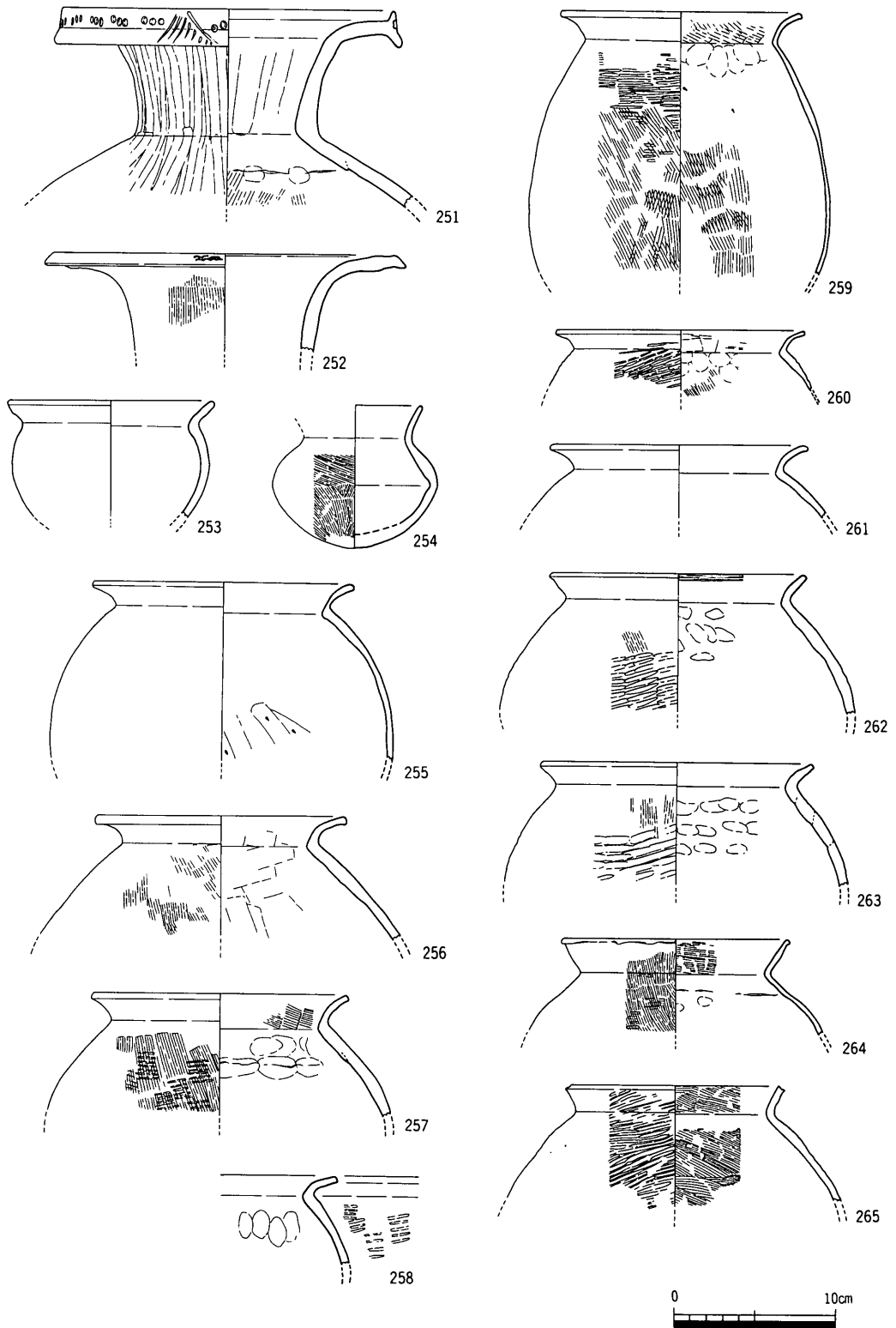


第59图 O-39,40区 S R 01 出土遺物実測図①

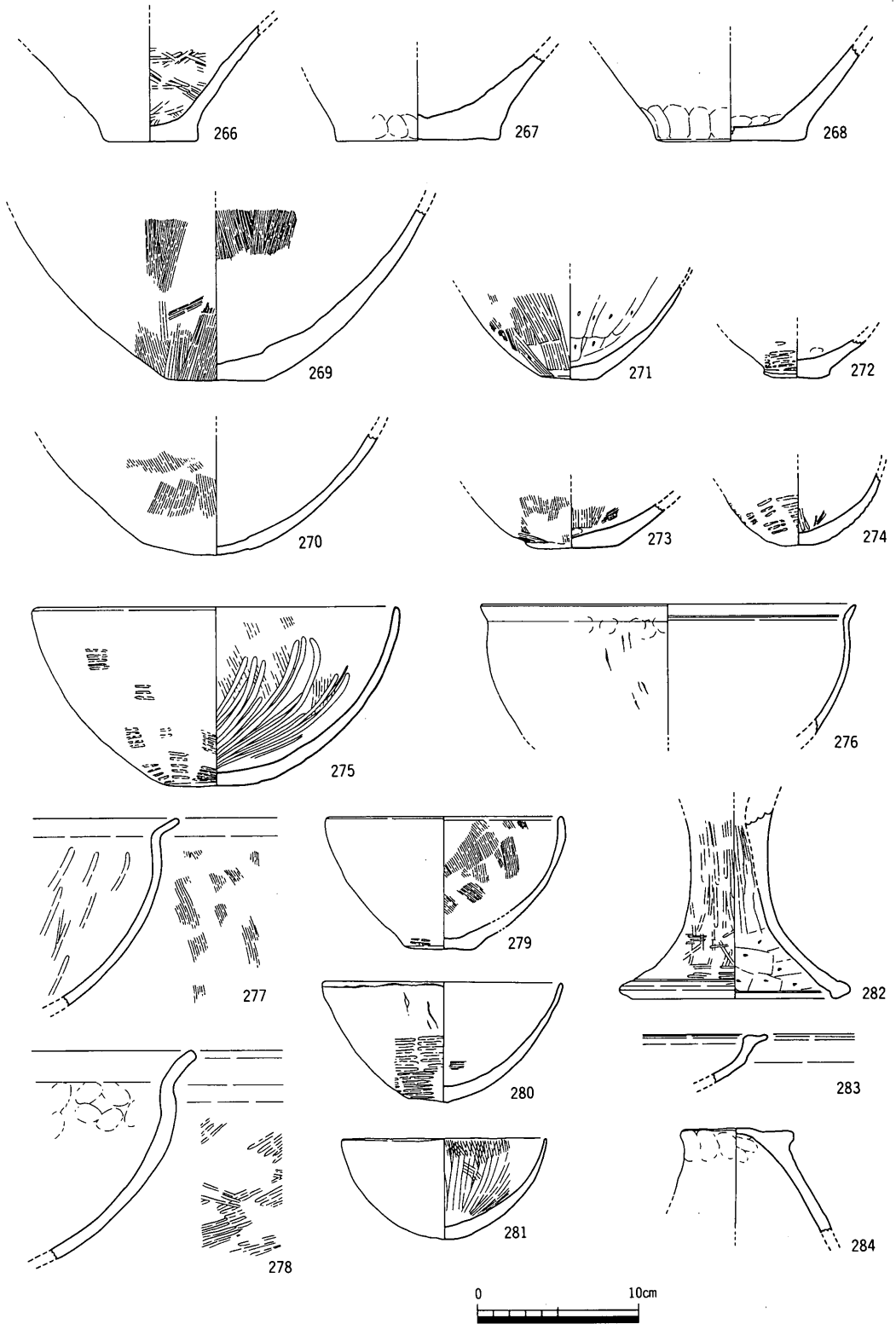


第60図 O-39, 40区 S R 01 出土遺物実測図②

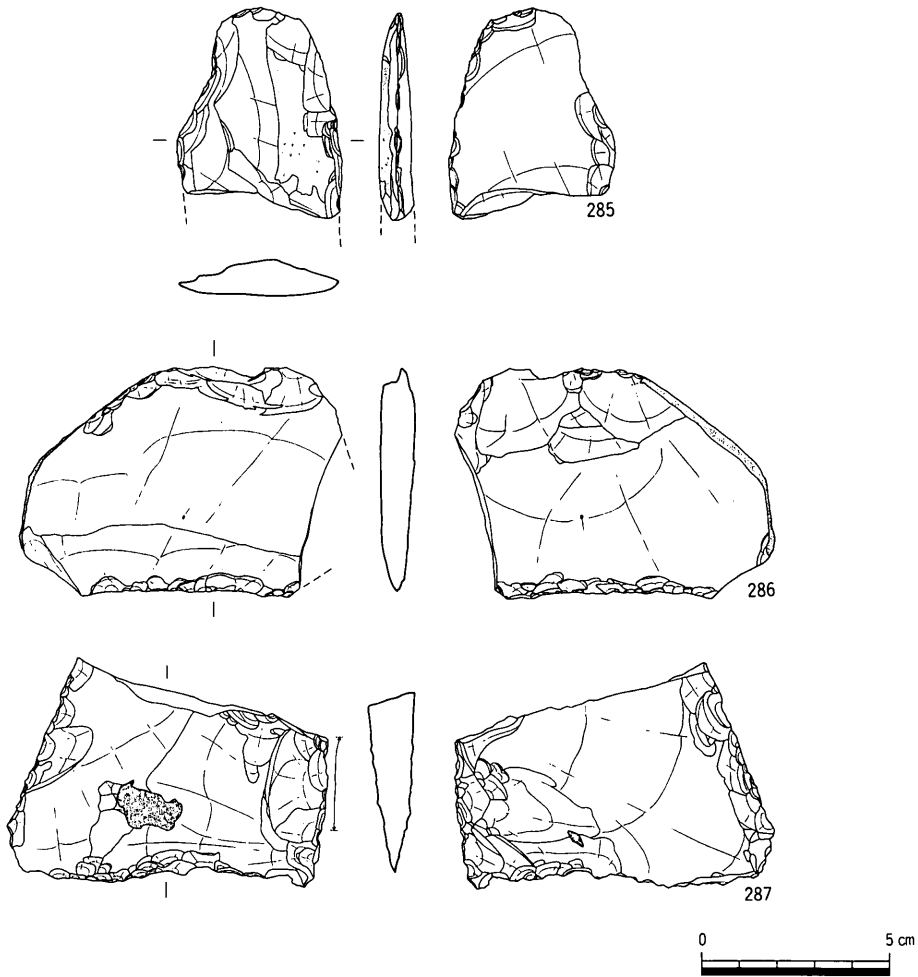
252は広口壺の口頸部である。やや外反気味の頸部から水平方向に湾曲する口縁をもつ。上方を向く口縁端面には複線の波文が施されている。頸部外面にはタテハケが認められる。253は小型の壺の破片である。胎土中に1cm近い鉾物粒が混入している。254は小型丸底壺である。緩く外反し直線的な口縁部を有し、体部は強く張り底部は丸底である。255～265は甕形土器である。いずれも「く」の字状に屈曲し、外反する短い口縁をもつ。口縁端部を丸くおさめるもの、面取りしたり角状におさめるもの、尖らせるものがある。262は口縁部内面に楡描きの沈線を巡らせている。また、265は口頸部の屈曲部において叩き目が連続しており、叩きの後に口縁部を屈曲させている。266～274は壺・甕形土器の底部である。266～268は弥生時代前期に属する壺形土器の底部であろう。266の内面にはヘラミガキが認められる。272、273は叩きによる成形後に粘土を足して底部を成形しており、273はややいびつな平底を呈する。275～281は鉢形土器である。275～278は口径が20cmを越えるものである。275はボウル状を呈し、不明瞭な平底、口縁端部は丸くおさめる。外面は叩き、内面はハケの後ヘラミガキを施している。276～278は口縁部が外反するものである。276の口縁部内面には不明瞭な沈線が一条巡るが、これはヨコナデの際に生じたものと思われる。282は高杯形土器の脚部。上半は細長い柱状を呈し、稜をもたずに下方に広がる。下端は上下に拡張され、下端面は凹線文状にナデられている。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリが認められる。弥生時代中期後半のものと考えられる。283は、小片であるが高杯の口縁部



第61图 O-39, 40区 S D05等 出土遗物实测图①



第62图 O-39, 40区 S D 05等 出土遺物実測図②

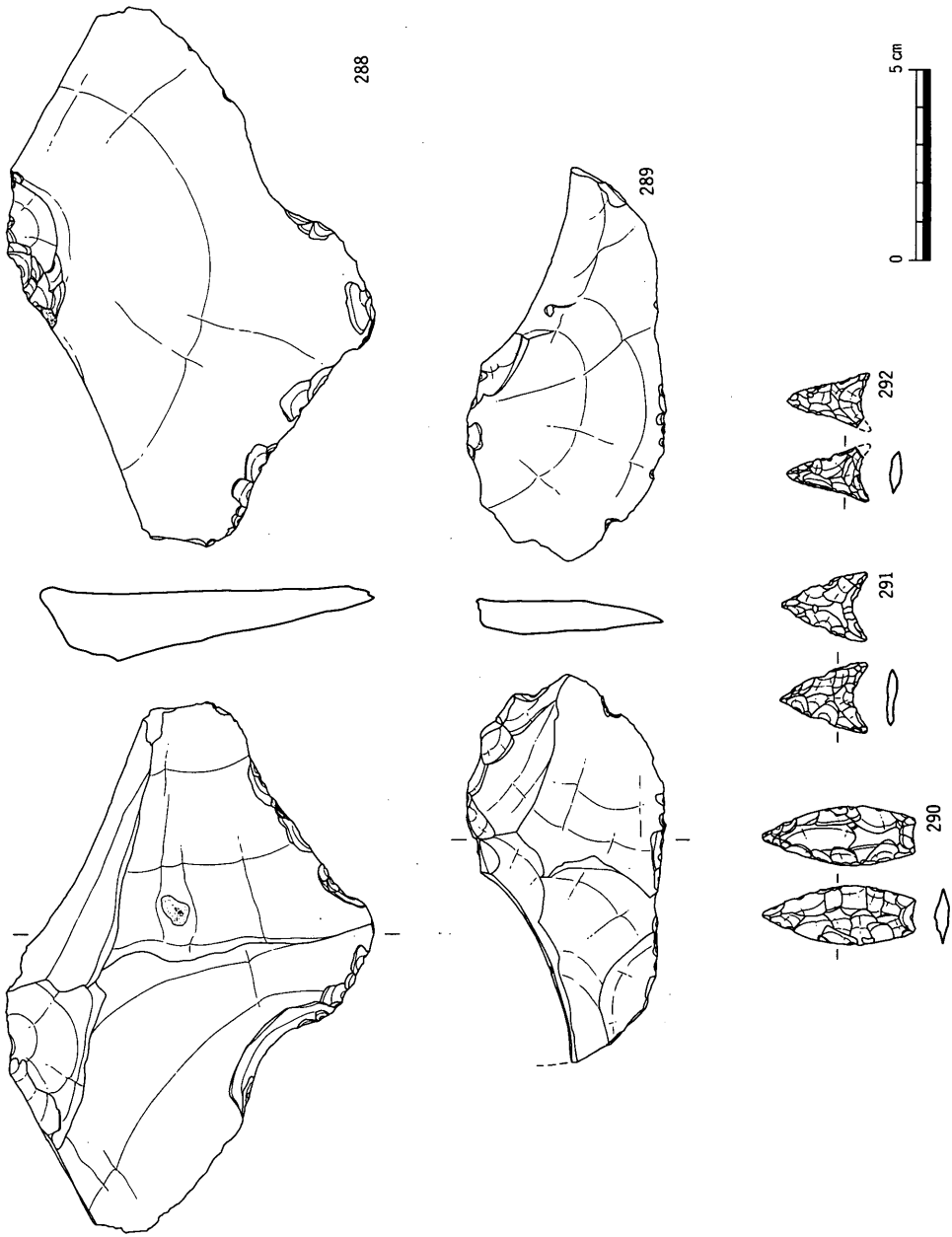


第63図 O-39, 40区 S D 05等 出土遺物実測図③

と考えられる。杯体部から上方に屈曲し、さらに水平方向に屈曲して口縁を形成する。口縁端部は僅かに上方に摘み出している。284は蓋形土器である。

第63図285は打製石斧の基部と思われる。刃部は欠損する。一面に自然面を残す。286は削器。直線状の刃部をもつ。一端は欠損する。背面には自然面が残る。287も削器と考えられる。恐らく欠損した打製石斧を再加工したもので、やや内湾する刃部をもつ。右側面には敲打痕が認められる。第64図288は一辺に細部調整を施しているが、種類不明。二次加工のある剥片と分類する。289は削器。一次成形の際の鋭利な部分に若干の細部調整を施し外湾気味の刃部をつくっている。290～292は石鏃である。290は基辺が僅かに窪み、最大幅が中位にくる形状で、佐原分類^(注)による凹基無茎式石鏃B型である。291、292は凹基無茎式石鏃A型である。

(注) 佐原真「石器」 詫間町文化財保護委員会『紫雲出』 1964

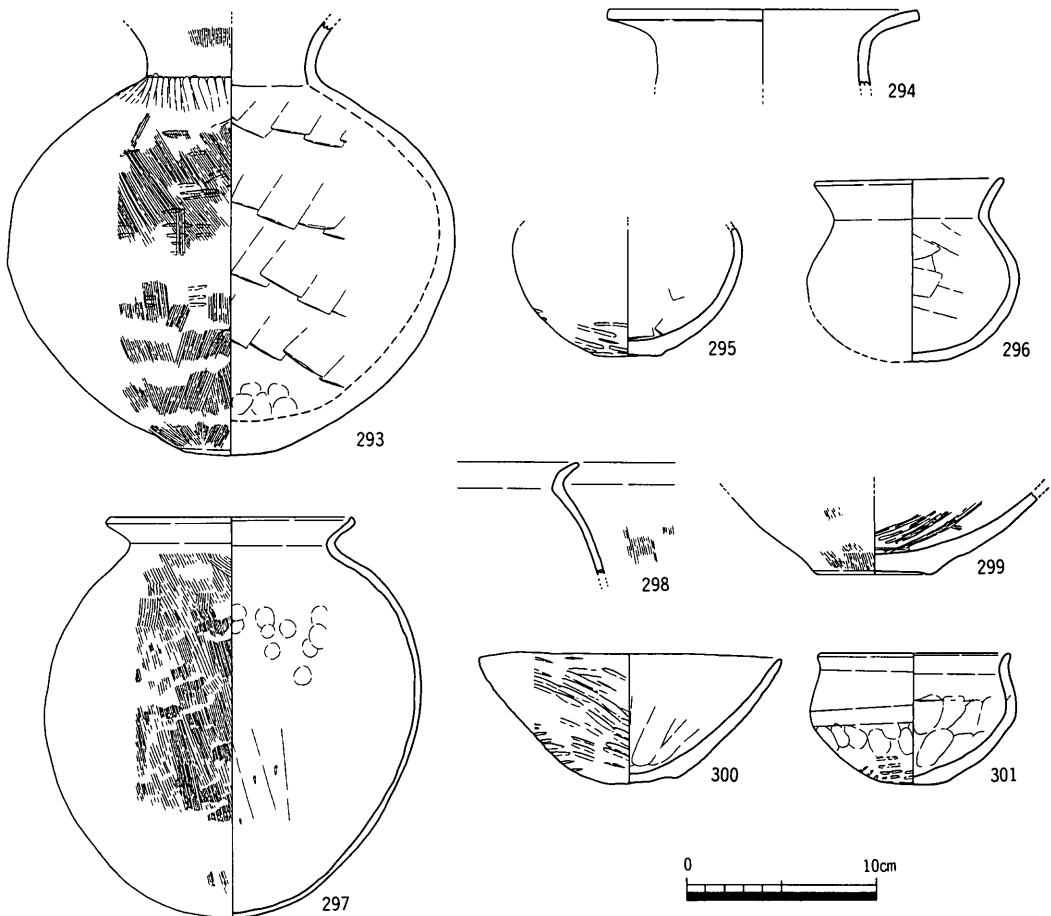


第64图 O-39, 40区 S D05等 出土遗物实测图④

③ O-39, 40区 S D05下層出土の遺物

第65・66図はO-39, 40区のS D05下層出土の遺物である。第65図はO-39, 40区の西北部のS D04~06が分岐する部分から出土したものであり、第66図はO-39, 40区の東南端で層序関係が把握できた箇所から出土したものである。

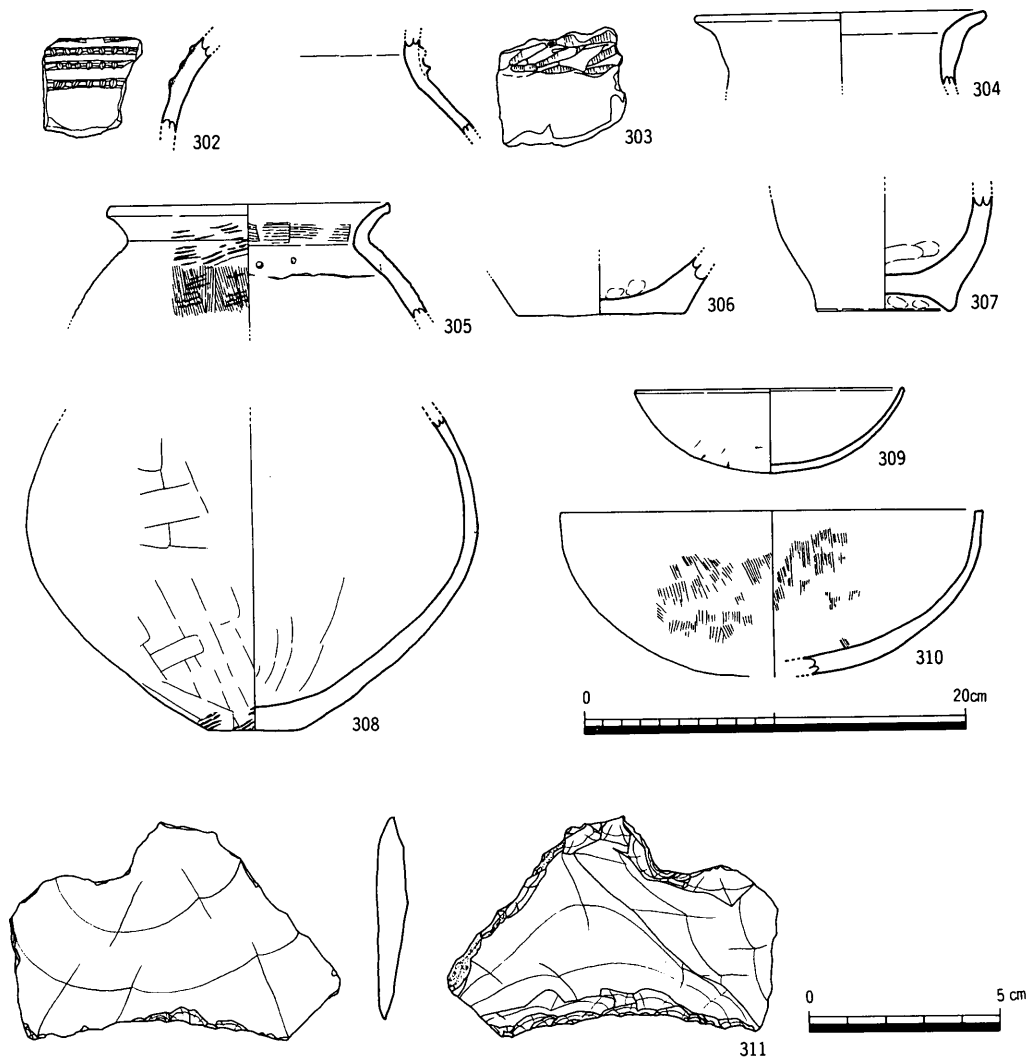
第65図293は広口壺の頸部から底部にかけてである。溝底に据え置かれた状態で出土した。いびつであるがほぼ丸底、体部は球形を呈する。頸部と体部の境を小棒状の工具で縦方向に丁寧に磨いている。口縁部は欠損する。294は広口壺の口縁部の破片。摩滅している。295は球形の体部をもつ壺であろう。平底、外面は叩き、内面に板ナデが認められる。296は小型丸底壺である。緩く屈曲する口縁を有する。摩滅しているが、内面には強いナデが認められる。下川津C類土器である。297も下川津C類土器の範疇で捉えられる甕である。球形の体部の外面は縦方向のハケ、内面の下半はヘラ削り、上半は指押えである。口縁端部を僅かに



第65図 O-39, 40区 S D05下層 出土遺物実測図①

摘み上げているが、明瞭でない。胎土中に多量の火山ガラスを含んでいる。298は甕形土器の口縁部破片である。299は鉢形土器の底部と考えられる。円盤状に突出する底部で、内面にはヘラミガキが認められる。300は鉢形土器である。口縁端部は尖り気味におさめており、外面に叩きが明瞭に残る。301は鉢形土器と考えるが、器種については検討の余地がある。厚手のつくりで、口縁部は外方に短く湾曲させる。底部は平底である。

第66図302は壺形土器の口縁部の小破片である。3条の刻み目突帯が付されているが、この面が凹面をなすことから内面と考えられる。弥生時代前期のものであろう。303は壺形土器の頸部の破片と考えられる。斜め方向に太い刻み目を施した突帯を貼り付けている。なお、



第66図 O-39, 40区 S D05下層 出土遺物実測図②

図の天地については検討の余地を残す。304は広口壺の口頸部の破片である。やや外反する頸部から移行して短い口縁部となる。口縁端部は丸くおさめている。226・312と接合出来ないが、同一個体である可能性が高い。305は甕形土器の口縁部の破片である。内面に焼成前の未貫通の刺突が認められる。306、307は壺・甕形土器の底部である。307は上げ底である。306、307ともに弥生時代前期に属するものと思われる。308は壺形土器の体部から底部の破片である。体部下半と平底の底部に叩きが認められる。体部外面は板ナデ、内面はナデが施される。309、310は鉢形土器。309は浅いボウル状を呈する。摩滅している。胎土中に火山ガラスを含む。下川津C類土器である。310も鉢形土器。内外面にハケが認められる。311は削器である。折損した石包丁を再加工したものと考えられる。内湾する刃部をもつ。一側面には自然面が残る。

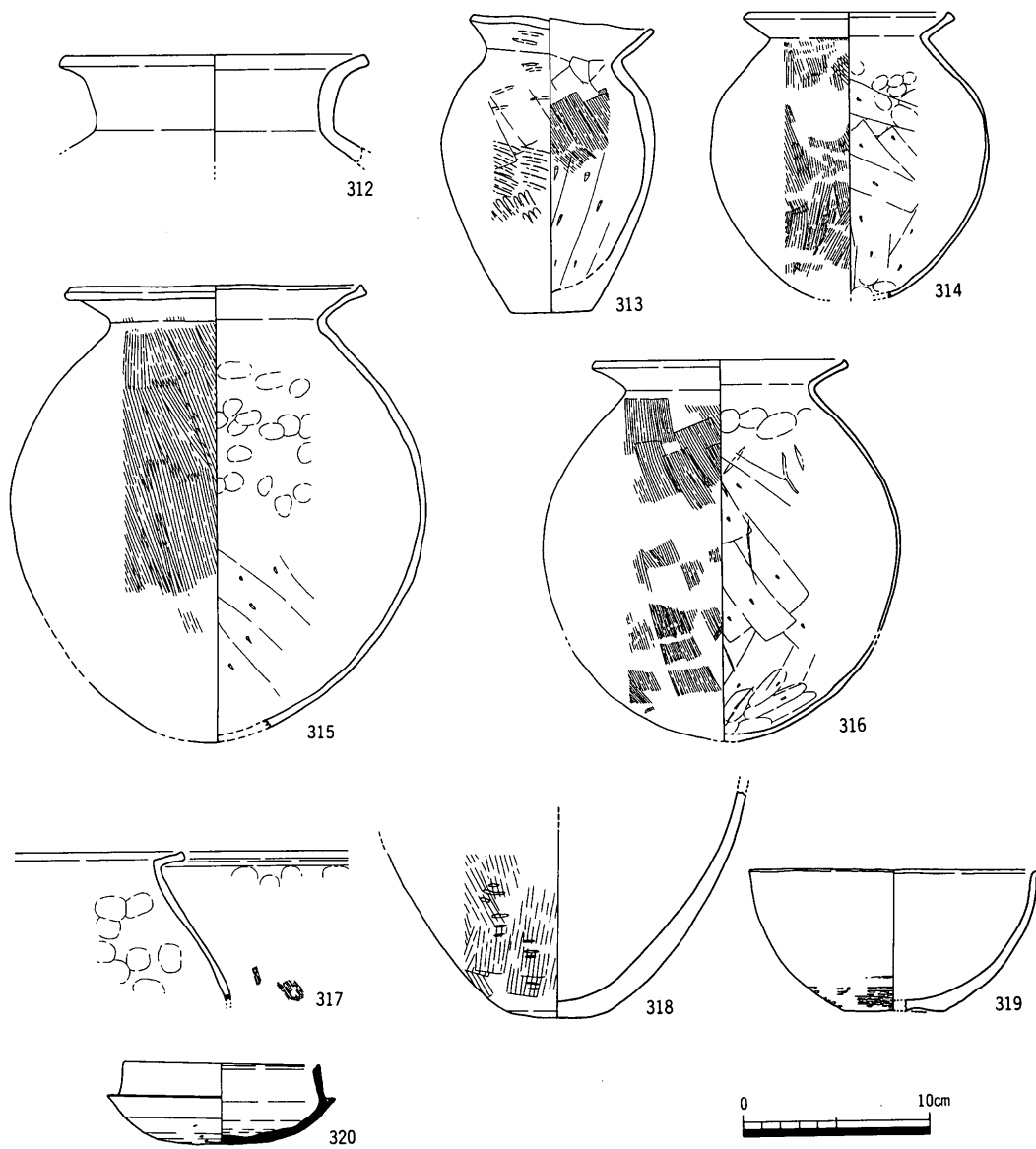
④ O-39, 40区 S D05上層出土の遺物

第67図はO-39, 40区のS D05上層から出土した遺物である。312は、先述した226・304と同一個体と考えられる広口壺である。313は器高15cm程の小型の甕形土器である。完形、口縁部を下流に向け横倒しの状態で出土した。平底、長胴形を呈する体部から「く」の字状に屈曲させた口縁をもつ。

314～316は下川津C類土器の甕形土器である。「く」の字状に屈曲する口縁で、口縁端部を上方に摘み上げている。球形を呈する体部外面は細かいハケ、内面は上半が指押え、以下へラ削りを施し、薄い器壁に仕上げている。315には口縁端面に一条の擬凹線が巡っている。314～316は形態的には「東阿波型」と呼称される土器^(注)のうちの甕形土器に、形態・技法の点で酷似するものであるが、胎土が異なるものである。なお、下川津C類土器については後述することとする。

317は甕形土器。「く」の字状に屈曲する短い口縁をもち、体部が最大径付近まで直線的な形状を有する。胎土中に金雲母・角閃石を含む。下川津B類土器である。318は甕形土器の底部。やや丸味をおびる平底である。摩滅している。319は鉢形土器。平底でボウル状を呈する。320は須恵器の蓋杯の杯身である。比較的高く、僅かに内傾するたちあがり^{たちあがり}を有する。端部は内傾し段を有する。外上方にのびる受部はやや丸くおわる端部である。混入したものであろう。

(注) 菅原康夫「阿波弥生時代終末期社会の特質」『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』1992 ほか



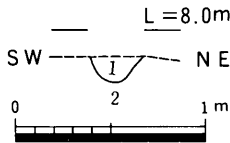
第67図 O-39,40区 S D05上層 出土遺物実測図

⑥ O-39,40区 S D08～10 (第68～70図)

O-39,40区では、上記の溝状遺構のほかにS D07～10が検出された。このうちのS D08～10からは遺物が検出されなかったが、埋積土や他の溝状遺構との関係から弥生時代後期から古墳時代前期に属するものと判断される。

S D08は、O-39,40区の中央部で検出されたもので、ほぼ東西方向に流れる。幅約0.35m、

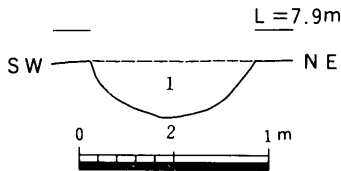
深さ約0.14mを測り、断面はU字形を呈する。西端はSD06によって壊されており、東端は弘光9トレンチによって壊され詳細不明であるが、SD07によって壊されているようである。検出長は10mである。遺物は検出されなかった。



- 1 暗灰色極細砂質土 (Fe, Mn含)
- 2 明灰色シルト質土 (高師小僧状Fe含、地山)

第68図 O-39, 40区 SD08 断面図

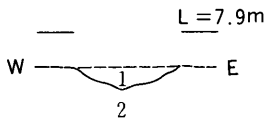
SD09は、O-39, 40区の東端で検出した溝状遺構である。幅約0.85m、深さ約0.45mを測り、断面は皿状を呈する。SD09はSD07上層に合流しており、両者に時間的前後関係はない。検出長は4mである。遺物は検出されなかった。



- 1 暗灰色小礫混じり砂質土 (くさり礫多含、Fe, Mn含)
暗灰色シルトのラミナ
- 2 明灰色シルト質土 (高師小僧状にFe含、地山)

第69図 O-39, 40区 SD09 断面図

SD10は、O-39, 40区の東北端付近で検出された溝状遺構である。SD07と平行するように蛇曲しながら流れる。幅0.5~0.6m、深さ0.14~0.22mを測る。第70図で明らかのようにSD07上層と切り合い関係があり、SD07上層よりも古い。南端はSD09によって壊され、北は調査区外に延びる。検出長12mを測る。遺物は採集されなかった。



- 1 灰色極細砂質シルト質土 (Fe, Mn粒多含)
- 2 明灰色シルト質土 (高師小僧状Fe含、地山)



- 1 暗茶褐色粘質土 (小礫混じる、Fe, Mn含) —— SD07上層
- 2 暗灰色小礫~細砂 (暗灰色粘土のラミナ、Fe, Mn含、G) —— SD07下層
- 3 灰色極細砂質シルト質土 (Mn粒、Fe多含) —— SD10埋土
- 4 明灰色シルト質土 (高師小僧状Fe含、地山)

第70図 O-39, 40区 SD10 断面図 ・ SD07・10 断面図

5. S D07 (第70～76図・図版14、15)

① S D07の概要

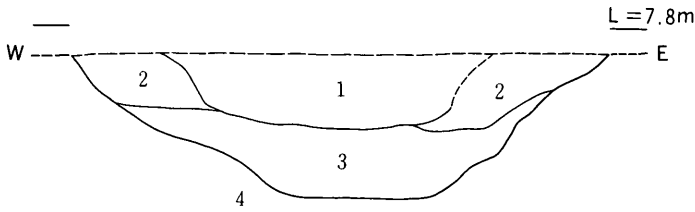
S D07は、O-39, 40区の調査区東端から、O-37, 38区・N-37, 38区・M, N-36区を経てM, N-35区で調査区北側の調査区外に延びる溝状遺構である。規模の小さい溝状遺構との重複はあるものの、先述したS D04と05のような規模の大きい溝状遺構同士の重複が無いため一条の溝状遺構として把握し易かった。そのため、五つの調査区を一括して報告する。

S D07は、幅2.05～3.45m、深さ0.51～0.77m、概ね幅約2.6m・深さ約0.65mを測る。断面形は皿状を呈する。埋積土は2ないし3層に分類される。第71図のO-37, 38区・S D07断面では暗茶褐色で細粒の堆積物よりなる1層が上層、主に砂からなる3層が下層にあたる。

(2層と3層は同一層が級化構造をなすものと考えられる。)また、断面図から2層でS D07が完全に埋没した後に、1層が再掘削されていることを窺うことができる。事実、M, N-35区においてS D07上層は下層とは分離して流路をとる(S D18)ものがあり、S D07の上層と下層との間には時間的な差のあることが考えられる。

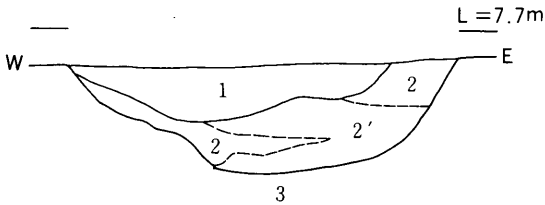
② S D07下層出土の遺物

第72～75図はS D07下層出土の遺物実測図である。321は二重口縁壺の口頸部である。内傾する頸部を強く屈曲させ、粘土紐を付加して、やや内傾する幅広の口縁部を有する。口縁部には櫛状工具による波状文が施されている。322は壺形土器の口縁端部の破片と考えられる。上下に拡張させた口縁端面に二列の円形浮文を貼り付け、口縁部内面に2条の突帯を貼り付けている。323は二重口縁の壺の口頸部である。やや外反する頸部から湾曲し鋭い稜をもって再び外湾する口縁を有する。口縁部の屈曲の度合はやや甘い。下川津C類土器である。324・325は広口壺。接合できないが、同一地点で出土したもので同一個体と考えられる。324は斜め上方を向く口縁端面にヘラ状工具で斜め方向の平行線文を施している。325はやや外反気味の頸部で、体部は強く張り、扁平な形状である。底部は不明瞭な平底を呈する。326も広口壺である。溝底から横倒しの状態で出土した(図版15②)。やや外反する頸部から外湾する口縁部を有する。口縁端部は上下に摘み出し、端面には二列の半截竹管文を施している。体部は胴の張った倒卵形を呈し、やや不明瞭な平底を有する。327は直口壺の体部と考えられる。扁平な算盤玉状の体部を呈する。328は異形の壺形土器。球形の体部内面は粗いヘラ削り、体部と頸部の境には粘土紐接合痕が明瞭に残る。頸部内面は指頭痕。外面はハケの後ナデているようである。全体的に凹凸が目立ち、器壁も厚くつくられたものである。胎



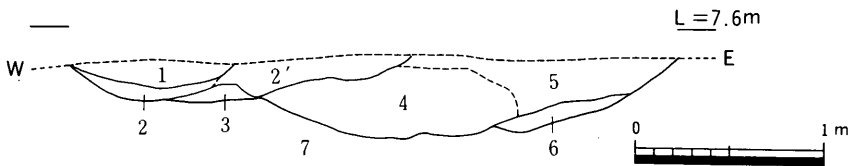
N-37,38 S D07

- 1 暗茶褐色シルト質土 (Fe, Mn含、わずかに小礫混じる) — 上層
 (右岸側、暗灰色が卓越
 ブロック状に暗茶褐色の粘質土が入る)
- 2 暗灰色砂質土 (Fe, Mn含、小礫含)
 (上部は小礫多く緻密、下部は細砂主体)
- 3 灰色砂 (小礫・くさり小礫多含、粗～細砂・ラミナ) — 下層
- 4 明灰色粘質土 (Fe含、地山)



O-37,38 S D07

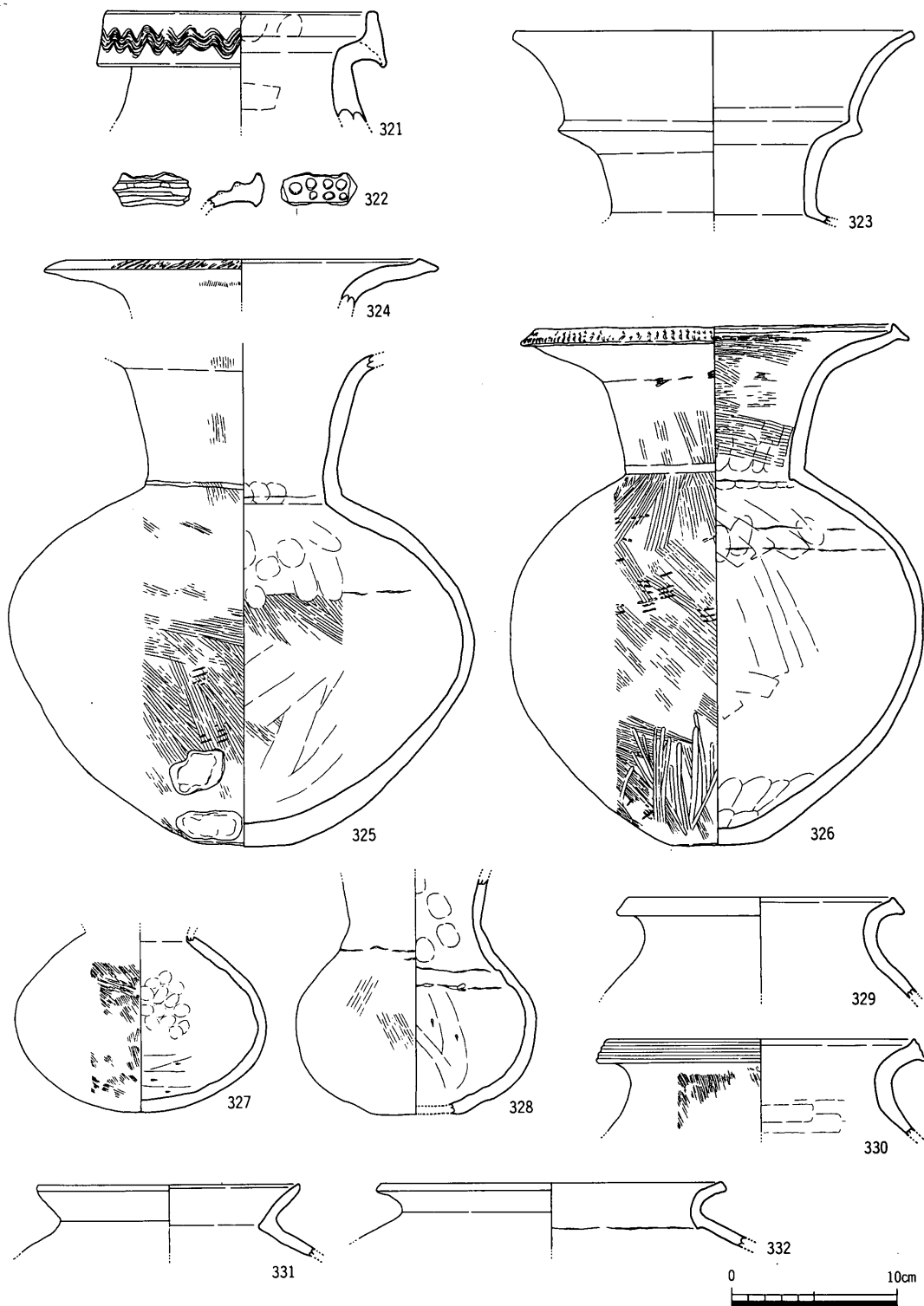
- 1 暗茶褐色粘質土 (Fe含、小礫まばら含)
 (ラミナ状に灰色粘質土のバンド) — 上層
- 2 暗灰色砂混じり粘質土 (Fe, Mn粒多含、小礫をブロック状に含)
- 2' 灰色砂 (細砂、中砂、粗砂、小礫が乱雑に混じりながら)
 (巨視的には数層に縞状の堆積相を為す
 G, S共に認められない) — 下層
- 3 黄褐色粘質土 (地山)



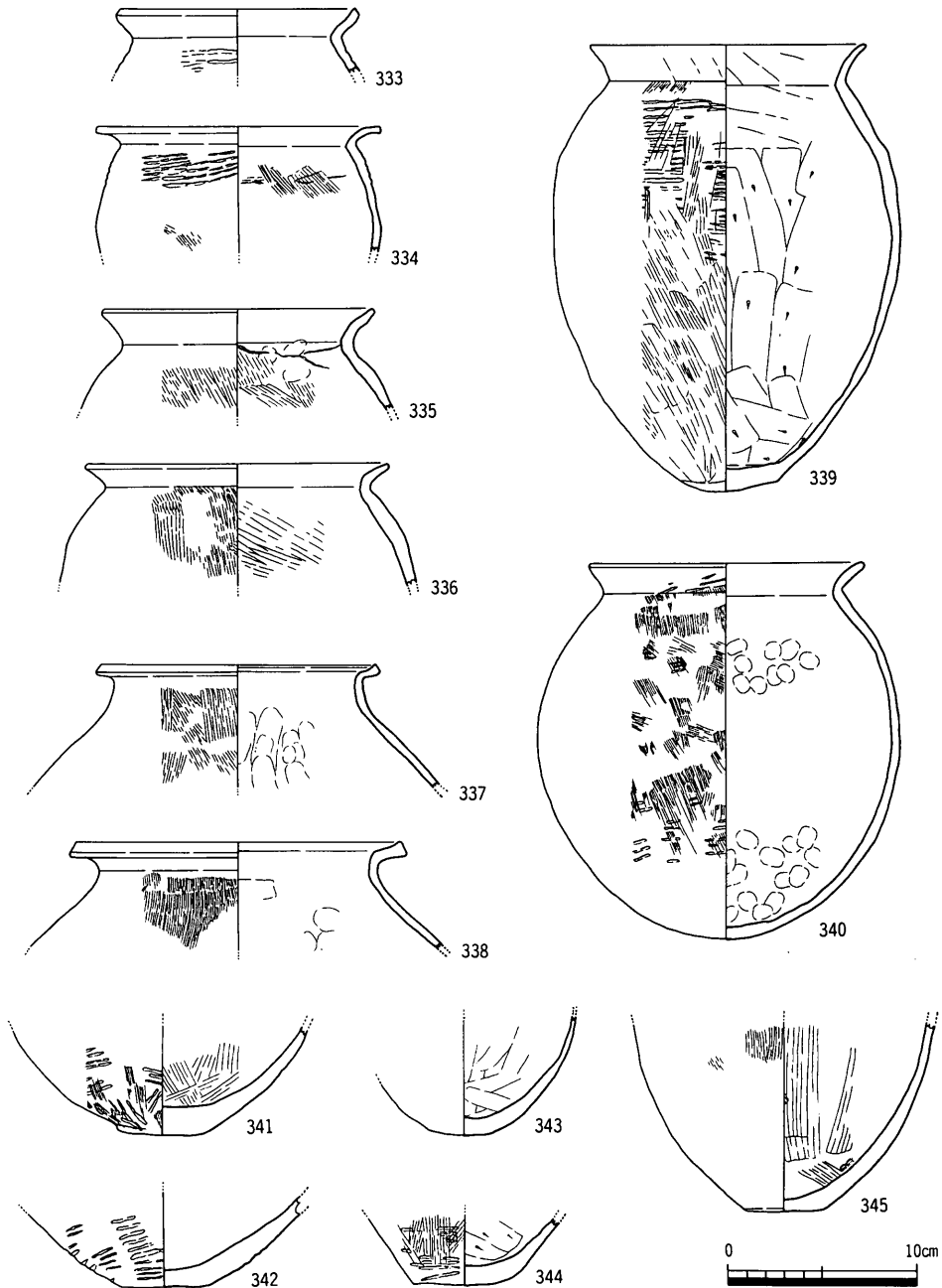
M, N-36 S D07・11

- 1 黒色小礫混じり粘質土 (Fe, Mn含) — S D11埋土
- 2 灰色粘質土 (小礫含)
- 2' 灰色シルト質土 (小礫含、Fe, Mn含)
- 3 灰色細砂 (小礫含)
- 4 灰色砂 (細～中砂主体、小礫含、S、Fe, Mnわずか含)
- 5 灰色小礫混じりシルト質土 (くさり小礫含、Fe多含、Mn含、緻密)
- 6 灰色小礫混じり極細砂質土 (くさり小礫含、Fe多含、Mn含、緻密)
- 7 明灰色粘質土 (Fe, Mn含、地山)

第71図 S D07・11 断面図



第72図 S D07下層 出土遺物実測図①



第73図 S D07下層 出土遺物実測図②

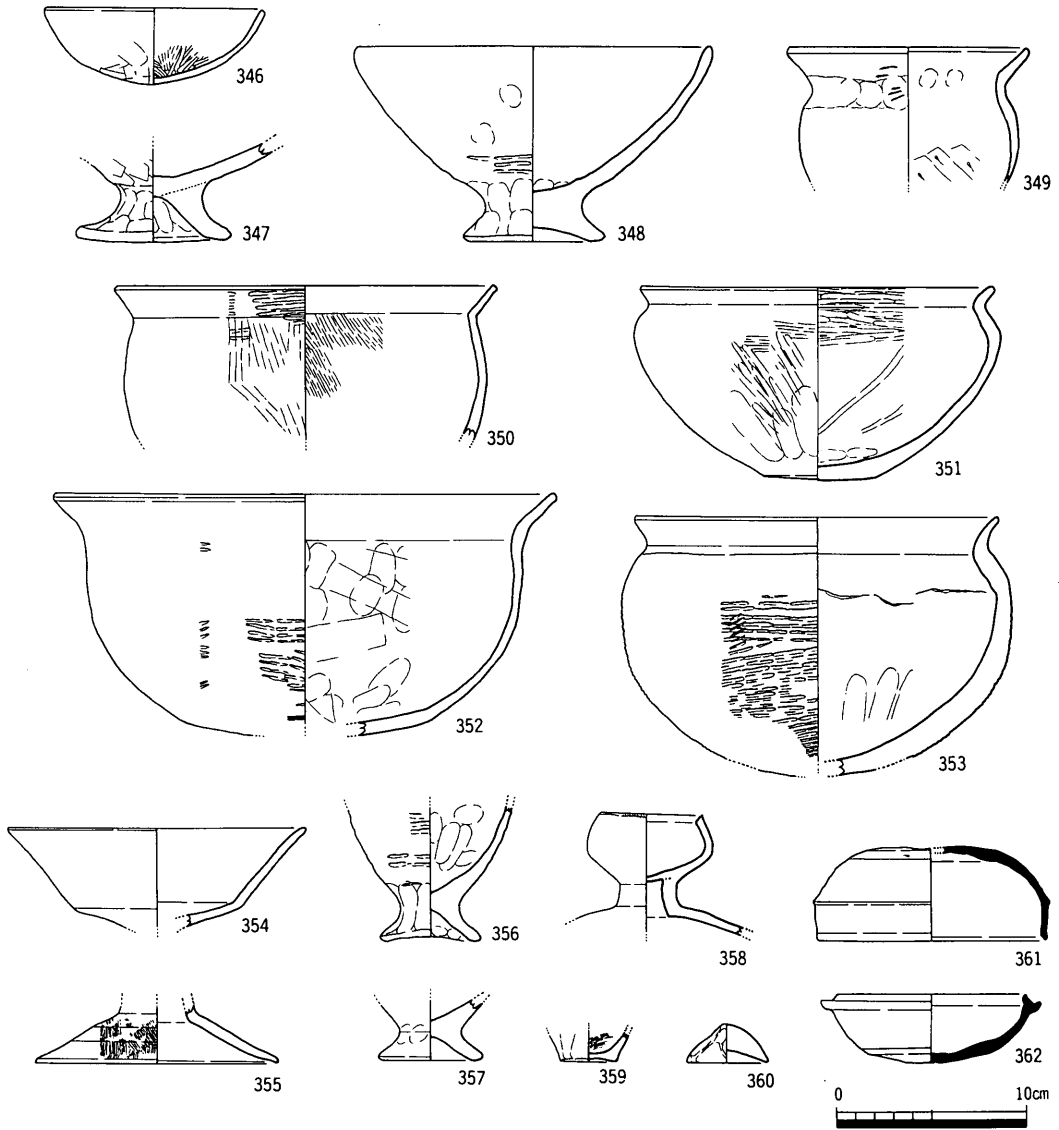
土中に金雲母を多く含んでいる。329は甕形土器。体部から外湾する口縁で、口縁端部を上下に僅かに拡張させている。摩滅している。330は体部から外湾する口縁で口縁端部を上下に拡張させて幅広の端面を形成し、ヘラ状工具で3条の擬凹線を巡らせている。頸部内面上半まで横方向のヘラ削りが認められ、岡山県(吉備地方)の鬼川市II式の特徴を備えている。

331・332は甕形土器の口縁部の破片。摩滅している。

第73図333～340は甕形土器である。337・338は器形および胎土中に角閃石を含むことから下川津B類土器と考えられる。339は弱く「く」の字状に外反する口縁部を有する。口縁端部は尖り気味におさめている。長胴形を呈する体部外面は叩きの後、粗雑な板ナデを施している。340は下川津C類土器と考えられる。いわゆる「東阿波型土器」の系統に属する可能性があるが、本遺跡で出土しているものに比して、①口縁端部を摘み上げていない。②体部外面の叩き目がハケによって完全に消しさらされていない。③器壁がやや厚く、体部内面のヘラ削りが明瞭でない、といった差異がある。また、下川津C類土器としたグループの土器胎土に認められる火山ガラスを殆ど含まないという点で、明確に下川津C類土器と把握することも出来ない、やや異質なものである。341～345は壺・甕形土器の底部である。

第74図346は鉢形土器である。浅いボウル状を呈する。外面は下半がヘラ削り、上半はナデ、内面は見込み部から放射状に丁寧なヘラミガキが施されている。下川津C類土器である。347は体部の傾きから脚台付の鉢形土器と考えられる。脚台は倒杯形で指頭圧痕が顕著に残る。348は脚台付鉢。本資料は153と形態・大きさ・胎土・色調共に酷似しており、同一製作者による製作を推定させるものである。349は鉢形土器と考える。口縁は外反し、屈曲部の外面には指押えが為され、稜はもたない。350～353は鉢形土器である。351は平底で浅いボウル状を呈する。体部が内傾した後「く」の字状に外反する短い口縁を有する。352は緩く外反する口縁部をもつ。下川津C類土器である。353もボウル状を呈し、体部がやや内傾した後、緩く外反する口縁を有する。体部に比して口縁部の器厚は薄い。354は高杯の杯部破片。355は高杯の脚部の破片である。両者は接合出来ないが、近辺から出土していることから同一個体の可能性が高い。下川津C類土器である。356は製塩土器の脚台部の破片。体部外面は叩き、脚台部はナデが施されている。357も製塩土器の脚台部の破片。358は高杯形土器である。椀形を呈する小型の杯部に中空の柱状部を接合している。椀状に大きく広がる裾部を有する。359・360は、いわゆるミニチュア土器である。359は壺・甕形土器の底部、360は蓋形土器を模したものである。361は須恵器の蓋杯の蓋である。天井部と体部の境にやや甘い稜を有する。口縁端部は内傾し段を有する。中村編年I型式5段階併行と考えられる。362は須恵器の蓋杯の杯身である。たちあがりは内傾し短い。端部は丸くおさめられる。中村編年II型式4段階併行と考えられる。

第75図363・364は石包丁である。363はやや凹凸があるが直線状の刃部をもつ。背部には敲打痕が認められる。364は一端を折損する。直線状の刃部を片面からの押圧剝離によって

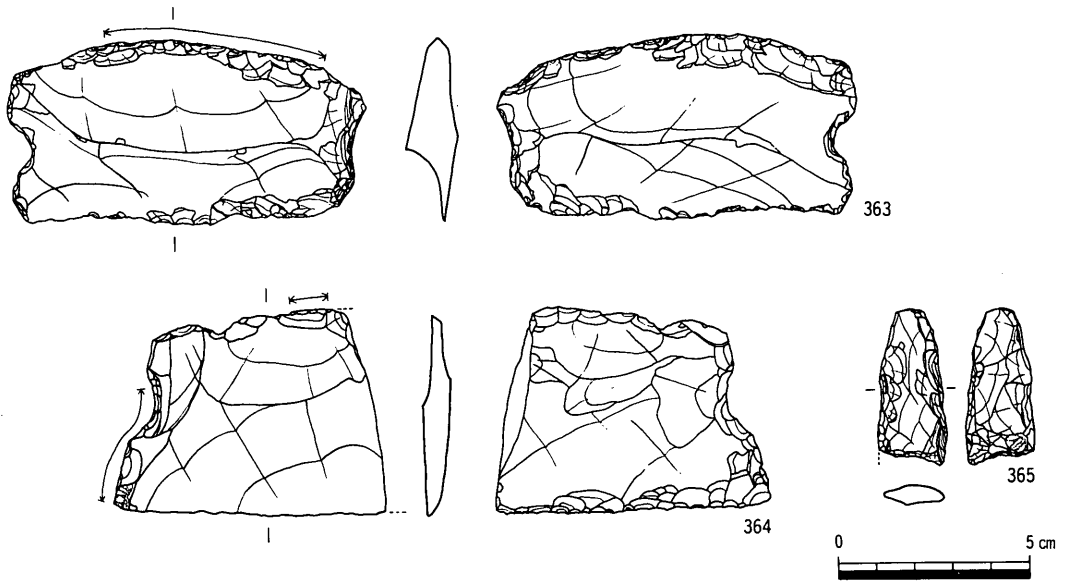


第74図 S D07下層 出土遺物実測図③

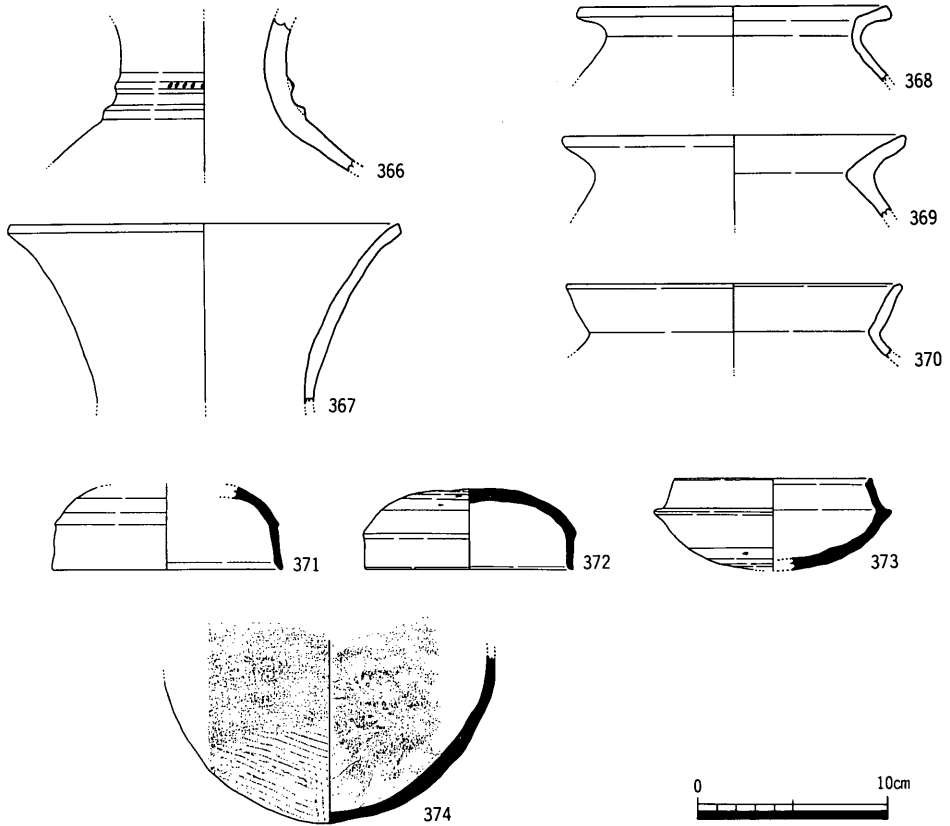
のみで作り出している。背部および側面に敲打痕が認められる。365は凹基式の石鏃である。基端の一部を折損する。本資料は石鏃としては肉厚であり、刃部の成形が十分に為されていないため未製品であると考えられる。

③ S D07上層出土の遺物

第76図はS D07上層出土の遺物実測図である。366は壺形土器の頸部の破片である。2条の刻み目をつけた突帯を貼り付けている。367は広口壺の口縁部の破片である。下川津C類



第75图 S D07下層 出土遺物実測図④



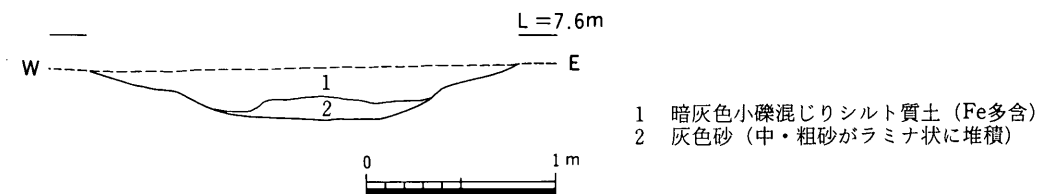
第76图 S D07上層 出土遺物実測図

土器である。368～370は甕形土器である。368は摩滅しているが、体部内面は頸部直下までヘラ削りされている。胎土中に角閃石、金雲母を含み下川津B類土器と考えられる。370は内湾気味に外上方に開く口縁を有する。摩滅している。371・372は須恵器の蓋杯の蓋である。371は天井部と体部の境に明瞭な稜を有する。口縁端部は内傾し段を有する。372は天井部と体部の稜はやや甘い。373は須恵器の蓋杯の杯身である。内傾するたちあがりで端部は内傾する。受部は外上方にのび、端部は丸くおわる。371～373は中村編年のI型式5段階に併行するものと考えられる。374は須恵器の甕の底部である。丸底を有し、外面は底部付近が平行叩き、遺存する破片の上半は格子目叩きが施され、後に遺存する破片の中位より上を回転ヘラ削りしている。内面は同心円状のあて具痕をナデ消している。

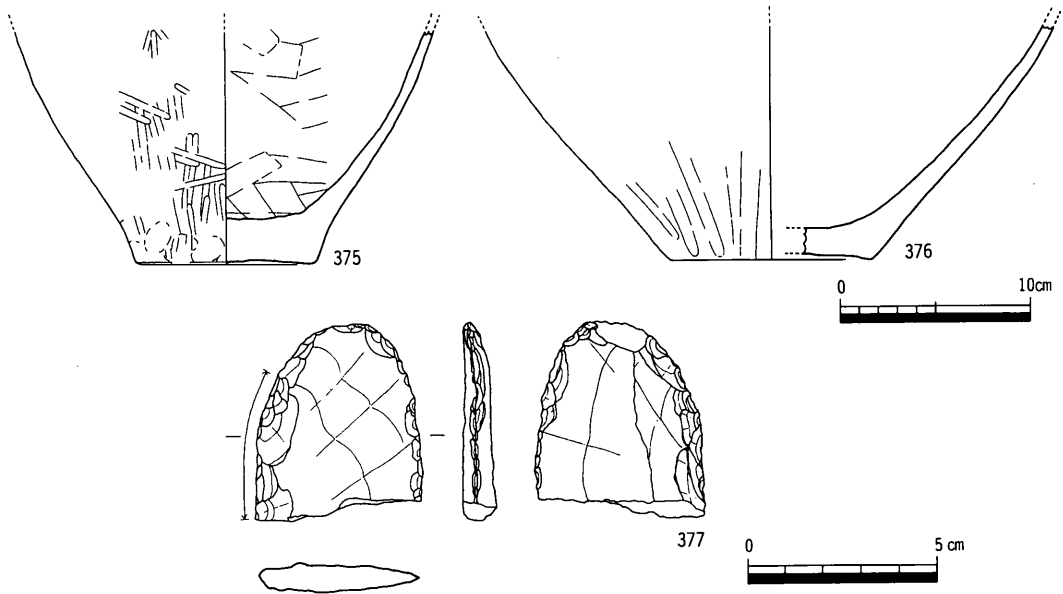
6. S D 06 (第77、78図)

O-39, 40区・N-37, 38区・O-34～36区で検出された溝状遺構である。幅2.4～3.65m、深さ0.28～0.47m、概ね幅約2.5m、深さ0.3mを測る。断面は浅い皿状を呈する。O-39, 40区では後に掘削されたS D 04・05によって流路の殆どを壊されており、調査区北部で検出されたのみである。N-37, 38区においてはS D 04・05・07などと平行して東南から西北方向に流れ、調査区北部で東北方向にほぼ直角に屈曲する。O-37, 38区において再びほぼ直角に屈曲し、O-34～36区で消滅する。ここでは溝が比較的急な立上りで終わっており、自然に消滅しているというよりは、ここで溝の掘削が終っているという感じである。埋積土は二層からなるが、上層の埋積土と地山およびS R 01の埋積土のそれぞれが酷似している関係で平面的な検出は難しく、先述のS D 03との前後関係が把握できないという失敗をしてしまった。

第78図はS D 06出土の遺物実測図である。S D 06検出の遺物は少なく28ℓ入りコンテナ1/3程度である。375・376は壺形土器の底部。ともに平底で、外面はヘラミガキが施されている。弥生時代前期に属するものと考えられる。377は打製石斧。基部と思われる。



第77図 S D 06 断面図



第78図 S D 06 出土遺物実測図

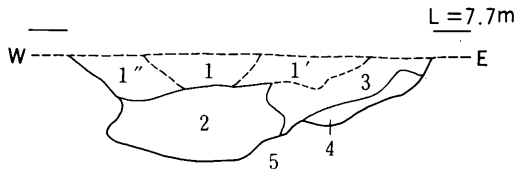
S D 06からの出土遺物は弥生時代前期の様相を示すものが多い。しかし、N-37, 38区においては弥生時代前期に埋没したS R 01の埋積土上にS D 06が掘削され、S R 01の遺物が混入している可能性があること、また、図化していないが、叩き目が器表にのこる破片も含まれていることから、弥生時代後期から古墳時代前期に掘削・埋没したものと考えられる。

7. S D 04 (N-37, 38区ほか)(第79～81図・図版16、17)

O, P-41, 42区・O-39, 40区・N-37, 38区・M, N-36区・M, N-35区で検出された溝状遺構である。O, P-41, 42区・O-39, 40区については先述している。

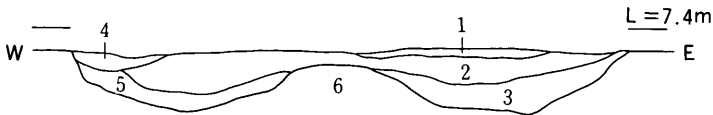
N-37, 38区以北では、S D 05・06・07などと平行して流れ、調査区の北端から調査区外に延びている。途中、S D 14・15などの溝状遺構と交差する。

第79図はS D 04の断面図である。S D 04は、本遺跡で検出された当該期の溝状遺構が細粒堆積物の上層と相対的に粗粒堆積物によって埋積される下層の2層からなるのに対し、概ね砂によって埋積されている。所々に暗茶褐色系の細粒堆積物からなる堆積層が最上部に堆積していたが、これは再掘削などによるものではなく下層と同一の層が変色したものと考えられる。なお、遺物は変色していると考えられる部分を上層、以下を下層として採集している。



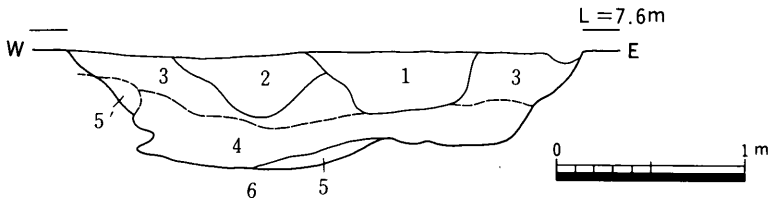
N-37,38 SD04

- 1 暗茶褐色小礫混じり粘質土 (Fe, Mn含)
 - 1' 灰色小礫混じり粘質土 (Fe, Mn含)
 - 1'' 灰色小礫 (Mは灰色細砂~シルト, Fe, Mn含)
 - 2 灰色砂 (中砂~粗砂, ラミナ状に堆積)
 - 3 灰色砂質土 (細砂主体, Fe, Mn含)
 - 4 灰色砂 (小礫~細砂, Fe上方でわずか含)
 - 5 明灰色粘土 (地山)
- 上層
 下層



M,N-36 SD04

- 1 灰色極細砂 (Fe, Mnわずか含)
 - 2 灰色細砂 (ブロック状に小礫含, S)
 - 3 暗灰色砂 (シルト~小礫を含む細砂の互層)
 - 4 暗灰色小礫混じり極細砂 (Fe多含, Mn含)
 - 5 暗灰色細砂 (小礫を含)
 - 6 明灰色粘質土 (Fe, Mn含, 地山)
- (同一層の Gかもしれない)



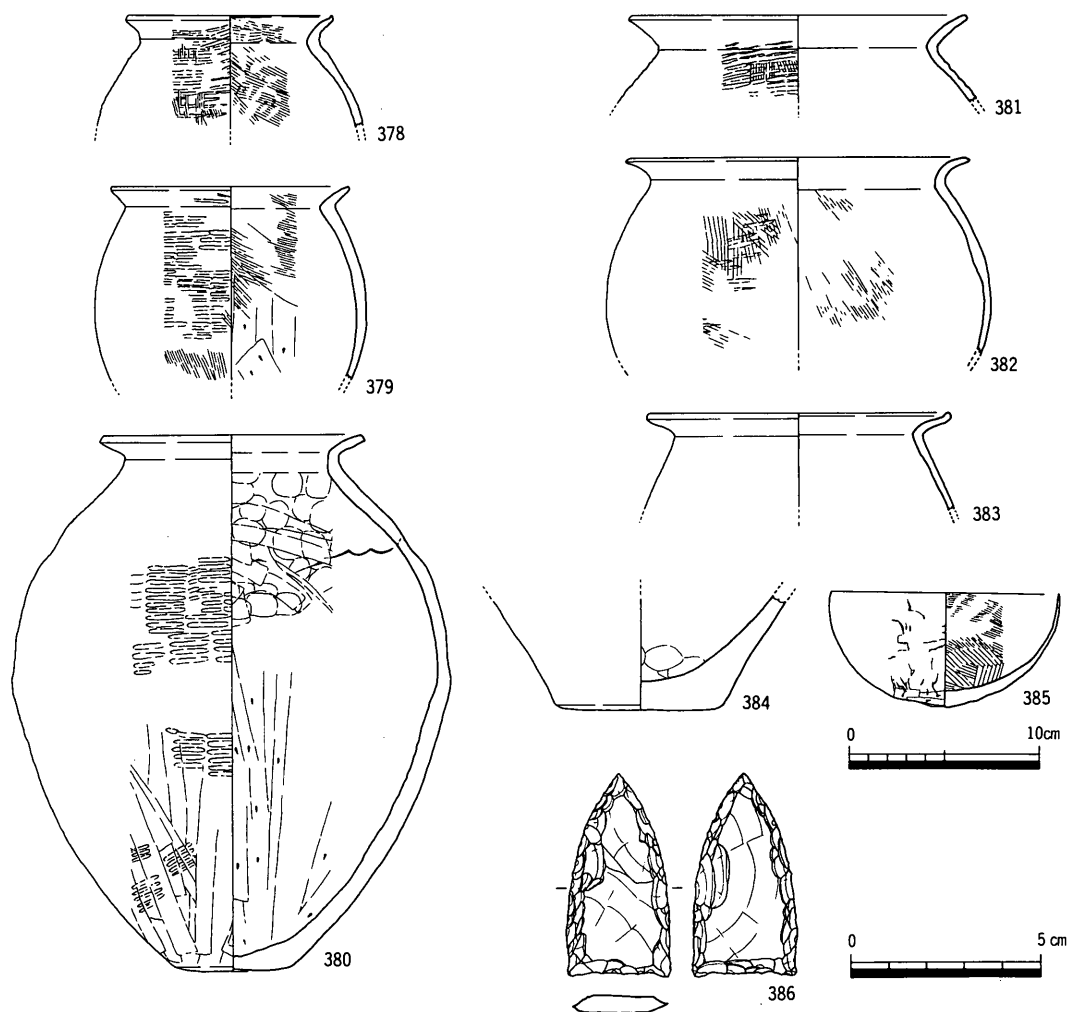
M,N-35 SD04

- 1 暗茶褐色小礫混じり極細砂質土 (Mn, Fe含)
- 2 暗茶褐色小礫混じりシルト質土 (Mn, Fe含, 1より小礫少ない)
- 3 茶灰色小礫混じり砂 (小礫は10~20%, 細砂主, Mn, Fe含)
- 4 灰色砂 (S, 細砂主体, 小礫のベニヤ, Fe, Mnわずか含)
- 5 灰色細砂 (S)
- 5' 灰色粘質土 (小礫わずか含, Mn, Fe含)
- 6 明灰色粘質土 (Mn, Fe多含, 地山)

第79図 SD04 断面図

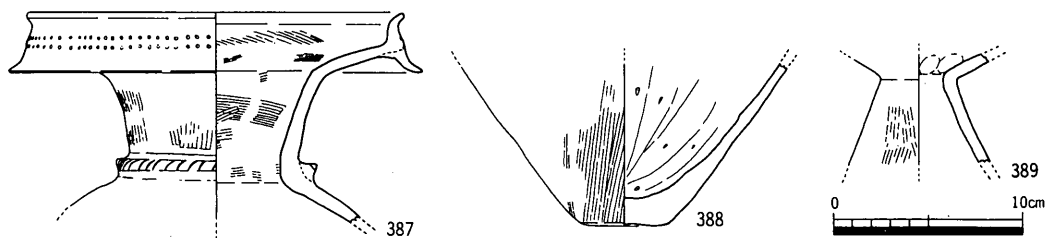
第80図は S D04の下層出土の遺物実測図である。378～383は甕形土器である。380は平底で長胴形を呈する。体部外面は叩き後板ナデ、内面は上半部が指おさえ後板ナデ、下半はヘラ削りが施されている。383は摩滅のため調整不明であるが、口縁屈曲部の稜は明瞭、口縁端部はわずかに摘み上げている。384は壺形土器の底部と考えられる。平底で肉厚である。弥生時代前期に属するものと考えられる。385は鉢形土器。ボウル状を呈する。口縁端部は尖り気味におさめている。外面には絞り目状のシワ（亀裂）が認められ、底部付近にはヘラ削りが認められる。内面は放射状にハケが施されている。

386は平基式の石鏃である。長さ5.3cmを測る。



第80図 S D04下層 出土遺物実測図

第81図はS D04上層出土の遺物実測図である。387は二重口縁壺の口縁部の破片である。外反する頸部から屈曲して開く口縁を有し、大きく屈曲し外湾する口縁端部をつくる。端部には下部に粘土を付加して上部と同様の端部をつくっており、広い端面を持つ。この端面には二条の列点文が施され、頸部と体部の境には刻み目を施した突帯を貼り付けている。装飾性の高いものである。388は甕形土器の底部である。平底で、外面はタテハケ、内面にはヘラ削りが施されている。389は細片であるが器台形土器と考える。内傾する体部の外面にハケが認められ、口縁部内面には指おさえが多く認められる。



第81図 S D04上層 出土遺物実測図

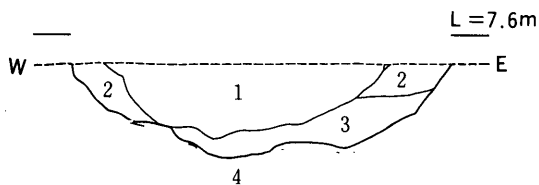
8. S D05 (N-37, 38区ほか) (第82~85図・図版16)

O, P-41, 42区・O-39, 40区・N-37, 38区・M, N-36区・M, N-35区で検出された溝状遺構である。O, P-41, 42区・O-39, 40区については先述している。

N-37, 38区以北では、S D04・06・07などと平行して流れ、調査区の北端から調査区外に延びている。

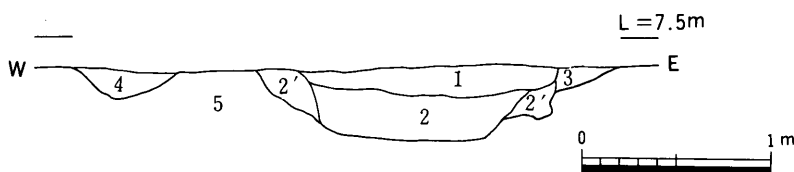
第82図はS D05の断面図である。S D05も巨視的には細粒堆積物で埋積される上層と砂によって埋積される下層の二層の埋土よりなり、下層の堆積物によって埋積された後、上層部分が再掘削されている。

第83・84図はS D05下層出土の遺物実測図である。390は広口壺の口縁部の破片である。緩やかに外反する口縁で、端部は角状におさめ、僅かに上方に摘み上げている。391は広口壺の頸部の破片である。天地については検討の余地を残す。392~397は甕形土器である。392の内面はハケの後にヘラ削りを行なっている。395は口縁端部を僅かに上下方に摘み出し、体部外面はハケ、内面は屈曲部付近までヘラ削りを施している。胎土中に僅かに角閃石を含むが、下川津B類土器の胎土とはやや異なる胎土である。396の外面は叩きが口縁端部に及び端部は面取りしている。398はほぼ球形の体部で、「く」の字状に弱く屈曲し、やや内湾



N-37,38 S D 05

- | | | |
|---|-------------------------------------|----|
| 1 | 暗灰色粘質土(上方は小礫含.下方は小礫まばら含
Feをわずか含) | 上層 |
| 2 | 灰色小礫混じりシルト質土(小礫多く含) | 下層 |
| 3 | 灰色粘土混じり砂(小礫~中砂まで乱雑) | |
| 4 | 明灰色粘質土(地山) | |



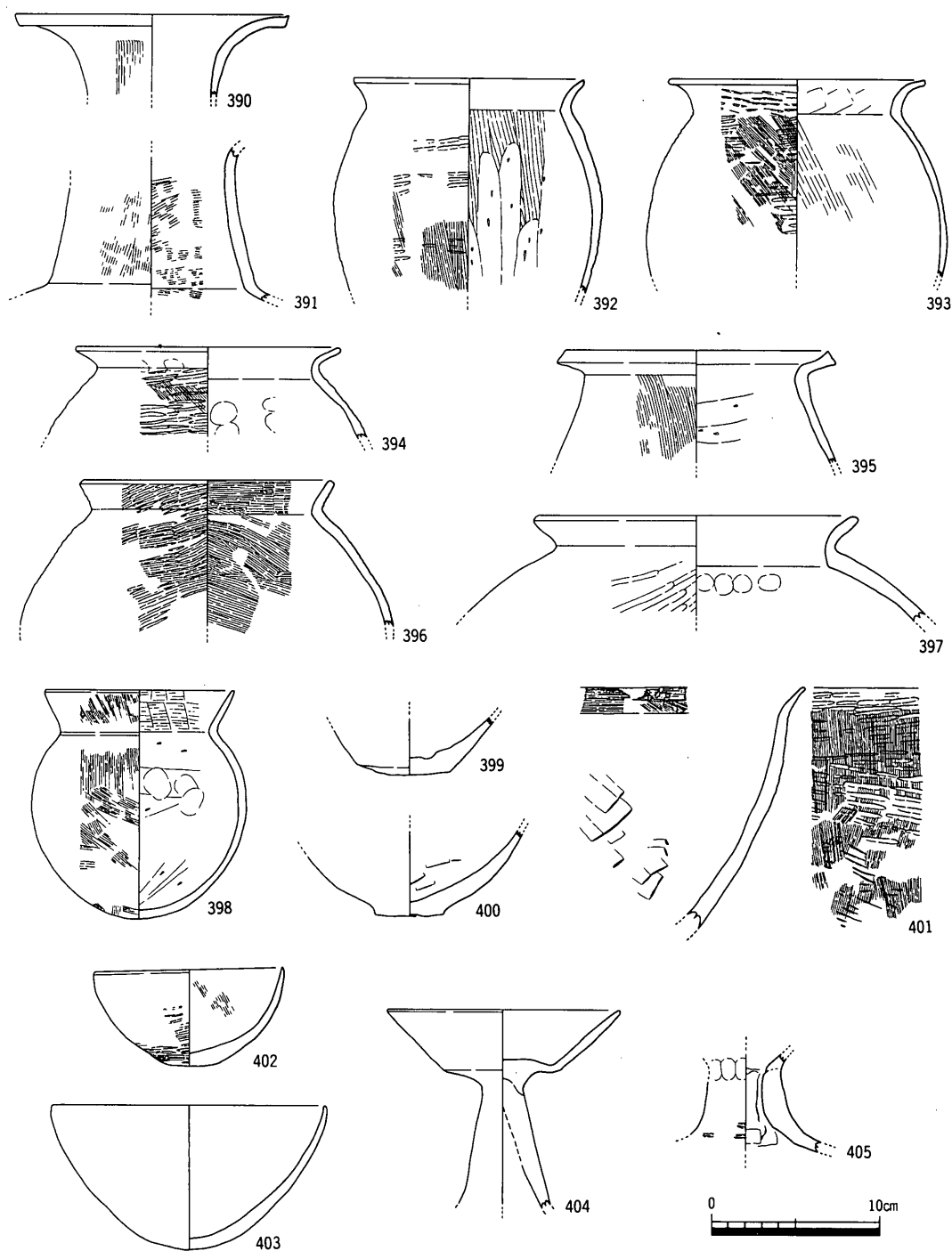
M,N-36 S D 05・15

- | | | |
|----|----------------------------|----------|
| 1 | 暗灰色粘質土 (Fe 含) | S D 05上層 |
| 2 | 暗灰色小礫混じり砂
(細砂.中砂が乱雑に入る) | S D 05下層 |
| 2' | 灰色極細砂質土 (Fe 含、小礫わずか含) | |
| 3 | 灰色極細砂 (Fe 含、小礫わずか含) | S D 15埋土 |
| 4 | 灰色シルト質土 (Fe、Mn 含) | |
| 5 | 明灰色粘質土 (Fe 含、地山) | |

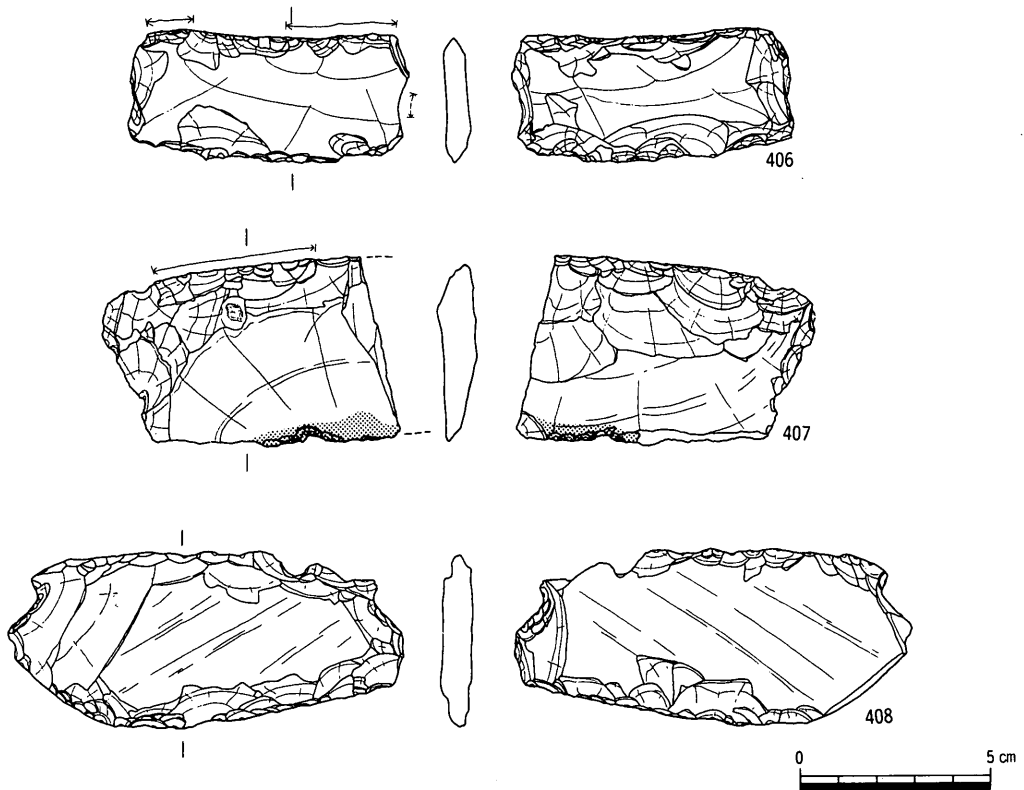
第82図 S D 05・15 断面図

気味で、端部を尖り気味におさめる口縁を有する。外面はていねいなハケ、体部内面はヘラ削り、口縁部内面は横方向のハケが施されている。399、400は壺・甕・鉢形土器のいずれかの底部である。401は大型の鉢形土器の破片。口縁部を僅かに外反させている。402、403は鉢形土器である。ともに摩滅が著しいが、403の外面には絞り目状のシワ（亀裂）が認められる。404は高杯形土器である。柱状部は下方に直線に広がる中空のものである。裾部は欠損する。杯部は横方向に開いて後、直線状に外反する口縁部で、杯部と柱状部は挿入付加法によって接合する。405は高杯形土器の柱状部もしくは器台形土器と考えられる。上部の屈曲部外面に指頭痕、外面に叩き目が認められることから、器台形土器と考える。

第84図406~408は石包丁である。406は小型で、やや外湾気味の刃部をもつ。背部には敲打痕が認められる。また、片方の挟り部には使用痕と思われる潰れが認められる。407は直線状の刃部をもつ。刃部付近に使用痕と思われる摩滅が認められる。408は結晶片岩製の打



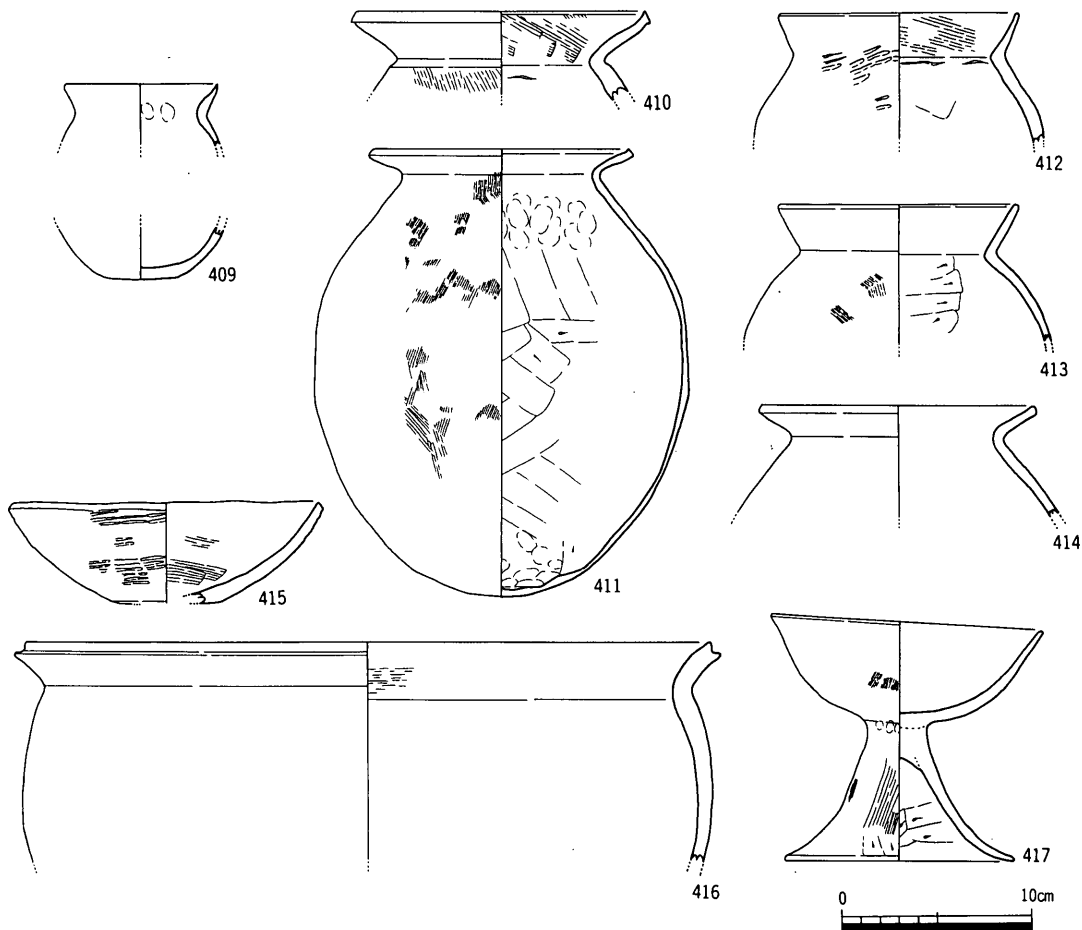
第83图 S D 05下層 出土遺物実測图①



第84図 S D05下層 出土遺物実測図②

製の石包丁である。押圧剥離によって外湾する刃部をつくっているが、刃は甘い。

第85図はS D05上層出土の遺物実測図である。409は小型丸底壺である。体部欠損のため接合できない。「く」の字状に屈曲し、内湾気味の口縁で、端部は尖り気味におさめている。屈曲部の稜は内外ともに不明瞭である。やや不明瞭な平底をなす体部は指おさえの後ナデられている。410～414は甕形土器である。411は下川津C類土器の甕形土器である。やや長胴形を呈し、丸底である。口縁端部はわずかに摘み上げられ、体部外面はハケ、内面は底部付近と口縁部屈曲部付近が指おさえ、それ以外はヘラ削りが施されている。412、413はともに内湾気味の口縁を有する。414も下川津C類土器の甕形土器である。415は底部を欠損しているが、鉢形土器と考えられる。浅いボウル状を呈し、口縁端部は面取りしている。416は大型の鉢形土器の口縁部破片。復元径は36.0cmである。口縁端部は上下に分けて面取りしたためか凹線状に窪んでいる。摩滅している。417は高杯形土器である。杯部はやや外湾気味のボウル状を呈し、口縁端部は尖り気味におさめる。杯部内面はナデ、外面は摩滅しているがハケが認められる。裾広がり脚部外面はハケ、内面はヘラ削りが認められる。杯部と脚部は接合法によって接合している。

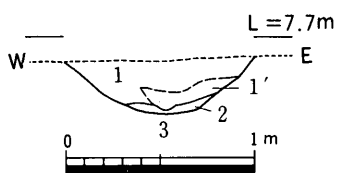


第85図 S D05上層 出土遺物実測図

9. その他の溝状遺構

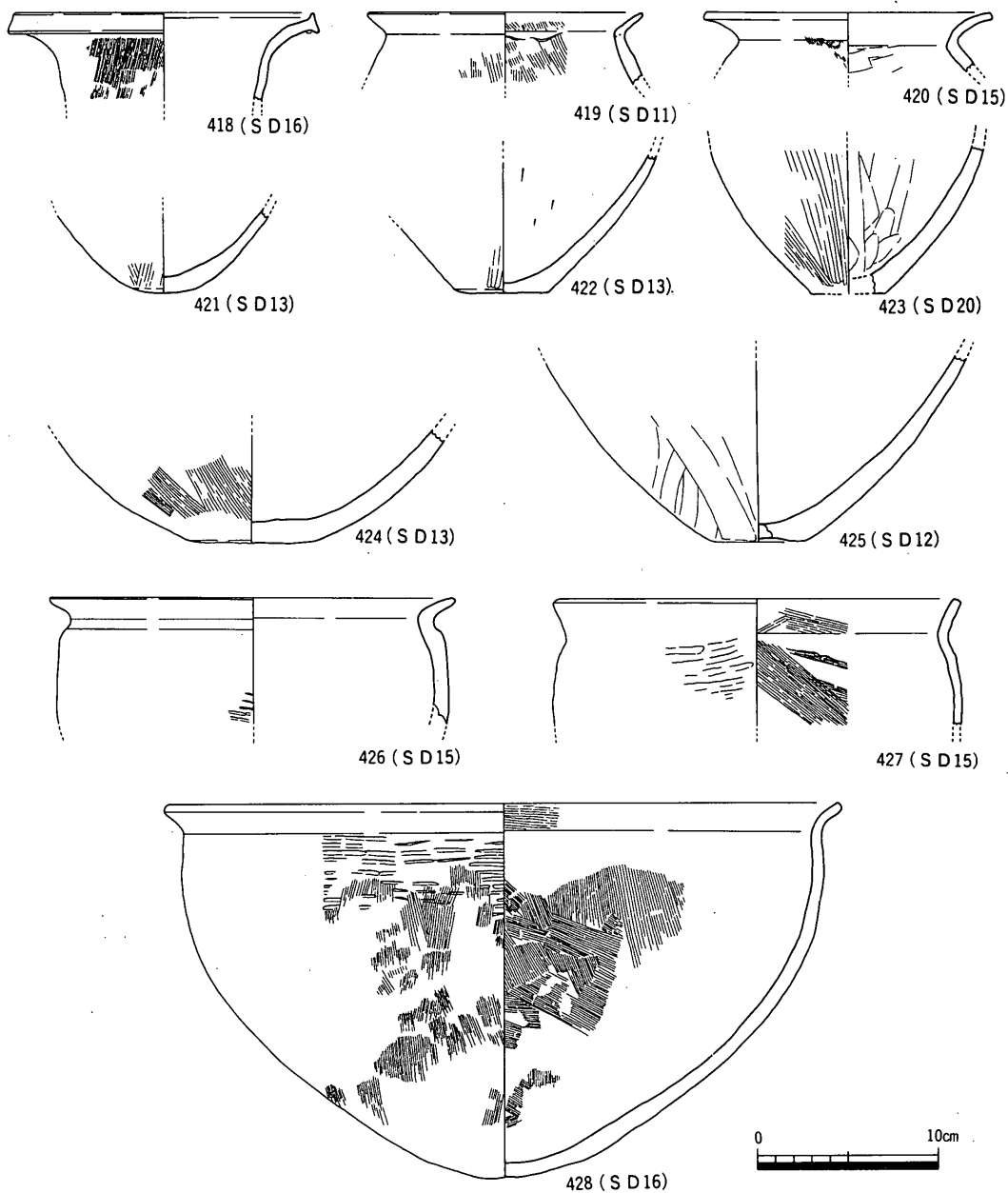
① S D11 (第71, 86, 87図)

O-37, 38区でS D07から分岐する溝状遺構である。S D07・06などと平行して流れ、M, N-36区で再びS D07と合し、M, N-35区でS D07から分岐し、調査区北端から調査区外に延びる。S D07上層を壊しているが、両者の埋積土は酷似しており、断面観察によって両者の違いが識別できる程度である。幅0.95m、深さ0.35m程の規模で、断面はU字形を呈する。埋積土は概ね黒色で粗砂の混じるシルト質土一層で、所によって溝底に砂が堆積している。出土遺物は僅少で、第87図419の甕形土器の他に数点の土器細片が採集されたに過ぎない。第87図419は甕形土器の口縁部である。「く」の字状に屈曲する口縁を有し、端部は尖り気味におさめている。口縁部はナデ、体部外面はハケが施されている。

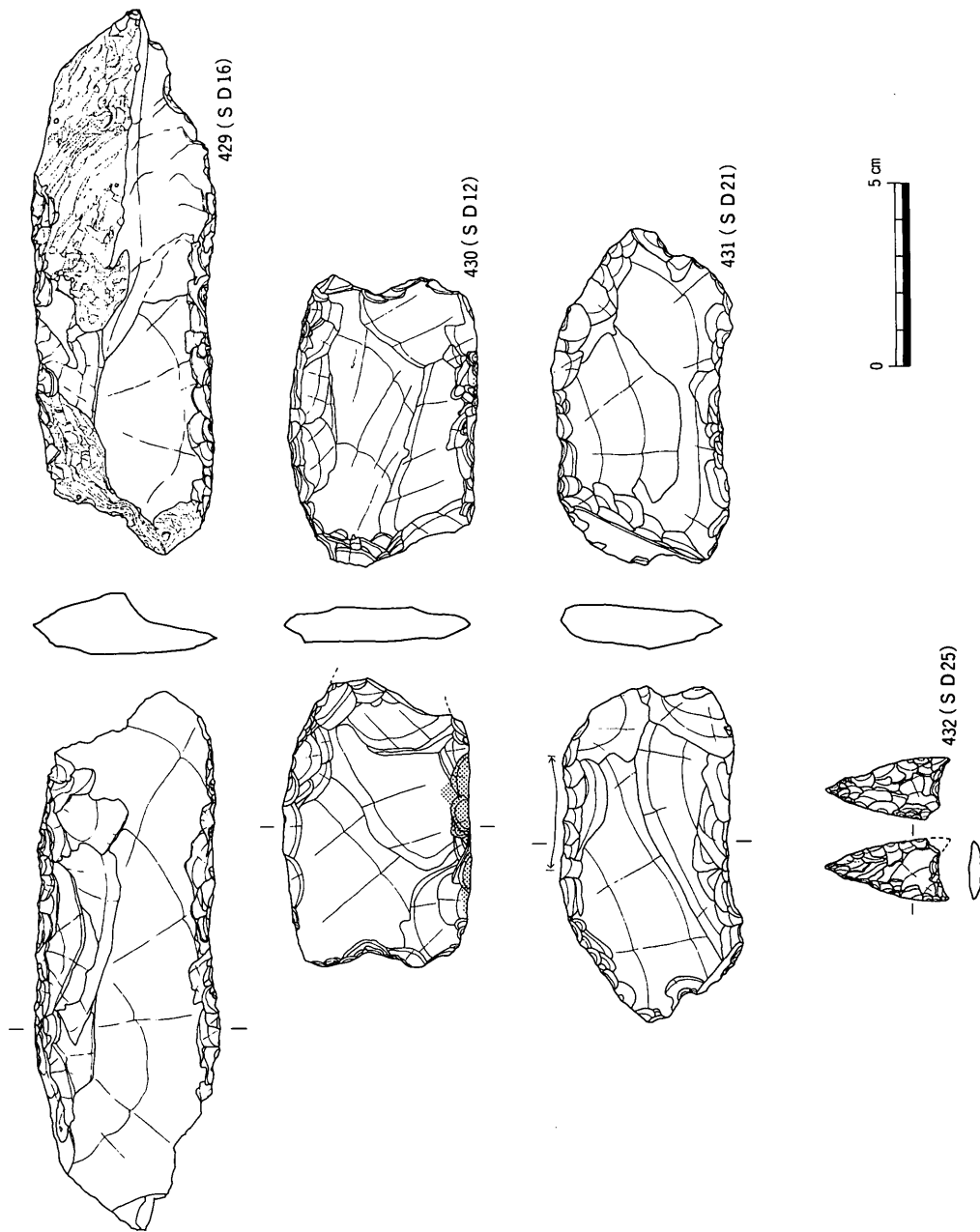


- 1 黑色粗砂混じりシルト質土 (Fe, Mn 含)
- 1' 黑色粘質土
- 2 暗灰色小礫混じり中砂
- 3 明灰色粘質土 (Fe 多含、地山)

第86図 S D 11 断面図



第87図 S D 11・13・15・16・20 出土遺物実測図

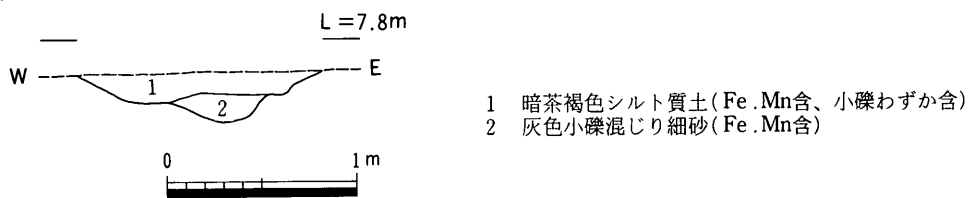


第88図 S D 12・16・21・25 出土遺物実測図

② S D 12 (第89図)

O-37, 38区で検出された溝状遺構である。O-37, 38区の東南隅から検出され、一度東に凸の湾曲をしてから、西に凸に大きく弧状に流れ、O-34~36区で調査区外にのびる。幅0.85~1.4m、深さ0.18~0.23mを測り、断面は浅い皿状を呈する。埋積土は概ね暗茶褐色シルト質土一層で、所によってその下層に砂が堆積している。遺物は大半が砂層より出土した。

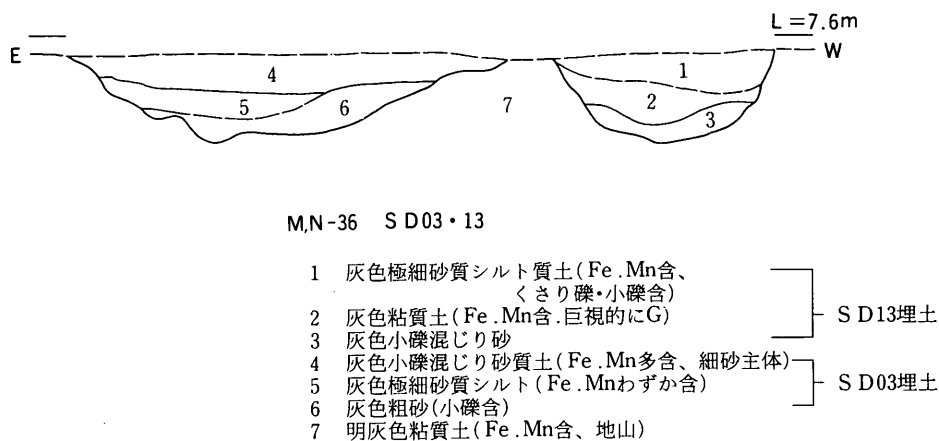
S D12の出土遺物は僅少で、第87図424、第88図429の他に数点の遺物が検出されたに過ぎない。424は壺・甕形土器の底部である。平底を呈する。摩滅が著しく調整不明であるが、外面に板ナデの痕跡が認められる。429は石包丁である。直線状の刃部は階段状剥離の後に、押圧剥離を加えている。背部に一部自然面が残る。また、刃部には一部に使用痕と考えられる摩滅が認められる。



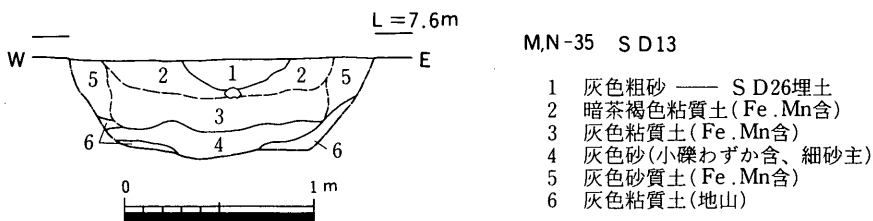
第89図 S D12 断面図

③ S D13 (第90図)

M, N-36区でS D07から分岐する溝状遺構である。S D07上層がS D13の埋積土を壊しており、S D07上層より古い。S D04・05などと平行して流れ、調査区北に延びている。幅1.1m、深さ0.4m程の規模で、断面形はU字状を呈する。埋積土は砂よりなる下層、粘質土・極細砂質シルト質土よりなる上層の二層で、上層はさらに二層に細分される。位置関係、埋



M,N-36 S D03・13



M,N-35 S D13

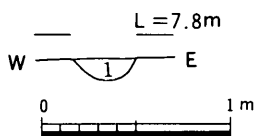
第90図 S D03・13 断面図

積土からS D14とつながる可能性があるが、確定的なことはいえない。出土遺物は僅少である。

第87図421～423はS D13出土の遺物で、壺・甕形土器の底部である。421はほぼ丸底、422は不明瞭な平底、423は平底を呈する。それぞれ摩滅しているが、421、422は外面にハケ調整が認められ、423は外面にヘラミガキ、内面にヘラ削りが施されている。

④ S D15 (第82, 87, 91図)

M, N-36区でS D04から分岐する、幅0.6m、深さ0.1～0.2m程の溝状遺構である。断面形はU字状を呈する。S D15は西に流れるS D05の右岸に近接して流れ、S D05の屈曲ともほとんど合致した流路をもつ。このことからS D04とS D05上層とは同時期に併存していたことを推定できる。出土遺物は僅少で、第87図425、426の他に数点の遺物が検出されたに過ぎない。425、426は鉢形土器である。425は体部が内傾した後、「く」の字状に屈曲する口縁で、端部は丸くおさめている。摩滅しているが、外面に叩きが認められる。426は「く」の字状に緩く外反する口縁をもつ。端部は面取りしている。外面は叩き後ナデ、内面はハケが施されている。



1 暗茶褐色粘質土 (Fe, Mn含)

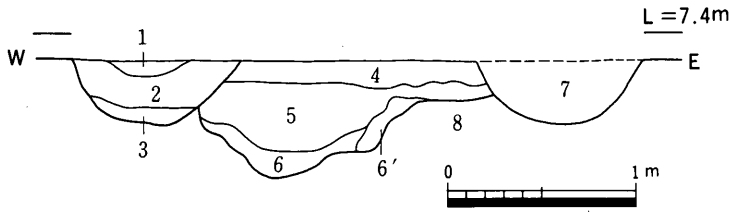
第91図 S D15 断面図

⑤ S D16 (第92図)

M, N-35区で検出された溝状遺構である。S D07上層から派生するものであるが、S D07上層との関係を明確に把握することは出来なかった。幅0.75～1.5m、深さ0.3m程を測り、断面はU字状を呈する。出土遺物は僅少である。第87図427は鉢形土器である。ボウル状を呈し、口縁部は外上方に短く屈曲し、端部は面取りしている。体部外面は叩きの後ハケ、内面は不定方向にハケを施している。第88図428は石包丁である。やや内湾気味の刃部をもつ。片面および一側面には広く自然面が残る。風化が著しい。

⑥ S D20 (第93図)

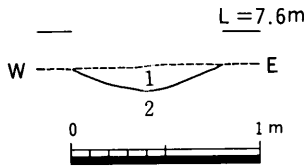
O-37, 38区・O-34～36区で検出された溝状遺構である。幅0.3～0.8m、深さ0.04～0.08mの小規模なものである。O-37, 38区の東北端で東南から西北方向に流れ、O-34～36区で北方に屈曲し、やや湾曲しながら北流している。第87図423はS D20出土の遺物である。壺・



- 1 暗茶褐色小礫混じりシルト質土 (Fe, Mn含)
 - 2 暗茶褐色小礫混じりシルト質土 (Fe, Mn含、
1層より色調明るい)
 - 3 暗茶褐色シルト質土 (Fe, Mn含)
 - 4 茶灰色砂質土 (小礫～細砂、小礫、粗砂主)
 - 5 灰色粘質土 (小礫～極細砂のブロックあり)
 - 6 灰色極細砂質土 (粗砂のラミナ、Mn含)
 - 6' 灰色細砂質土 (Fe, Mn含)
 - 7 暗茶褐色小礫混じり極細砂質土 (Fe, Mn含)
 - 8 灰色粘質土 (地山)
- S D 17埋土
 S D 16下層
 S D 16上層

第92図 S D 16・17 断面図

甕の底部である。外面にミガキが認められる。この他にS D 20からは弥生土器と思われる細片を僅かに採集しており、中にはハケ目を持つものが含まれている。

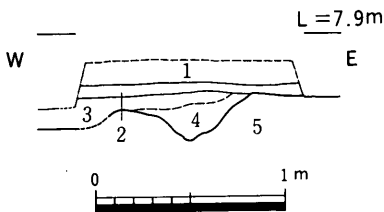


- 1 暗茶褐色粘質土
(粘土と細砂小礫を含むブロックあり、Fe, Mn含)
- 2 灰色粘質土 (地山)

第93図 S D 20 断面図

⑦ S D 21 (第94図)

O-34～36区で検出された小規模な溝状遺構である。幅0.3～0.75m、深さ0.04～0.1mを測る。東に凸の弧状に流れ、両端は消滅している。第88図431はS D 21出土の石包丁である。肉厚で内湾気味の刃部をもつ。背部に敲打痕が認められる。

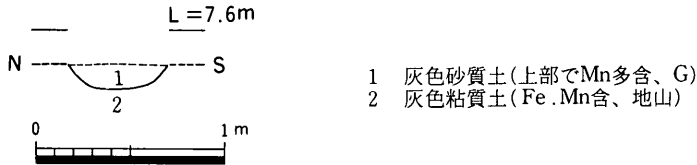


- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 灰色極細砂質土 (Fe多含、床土)
- 3 暗灰色小礫混じりシルト質土 (Fe, Mn含)
- 4 灰色砂質土 (上部にFe含、G)
- 5 灰色粘質土 (Fe, Mn含、地山)

第94図 S D 21 断面図

⑧ S D25 (第95図)

O-34～36区で検出された溝状遺構である。切り合い関係からS D23・24より古いと判断される。幅0.4m、深さ0.13m程の規模で、西南から東北方向に流れる。検出長は約15m。遺物は検出されなかった。

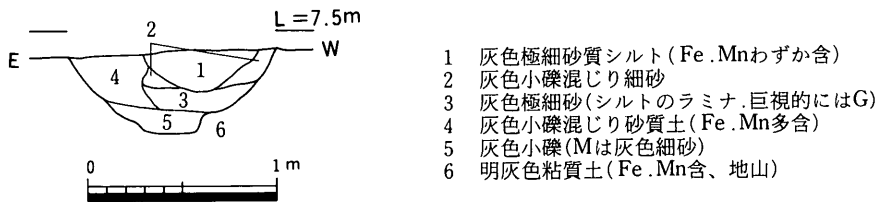


第95図 S D25 断面図

以下に記載するS D14、17～26は図化出来るような遺物が無かったか、あるいは遺物は検出されなかったが、埋積土・層位関係・切り合い関係などから、当該時期の遺構と推定される。

⑨ S D14 (第96図)

M, N-36区で検出された溝状遺構である。S D04から分岐し、S D07上層によって壊されている。断面観察ではS D04より古いもので、S D07上層より古いのが、下層との前後関係は不明である。幅1.1m、深さ0.45m程の規模で、断面はU字状を呈する。遺物は若干量出土したが、図化できるものは無い。破片の中にハケ目をもつものなどが散見することから当該時期の遺構と考えられる。



第96図 S D14 断面図

⑩ S D17 (第92図)

M, N-35区で検出された溝状遺構である。S D07上層から派生するが、S D07上層・S D16・18との前後関係は明確にし得なかった。幅0.75～0.95m、深さ0.28～0.33m程の規模で、断面はU字形を呈する。遺物は若干量出土しているが、図化できるものは無い。破片の大半が赤色系の素焼き土器片であるが、一部須恵器片を含む。

⑪ S D18

S D07上層として把握していた層が、M, N-35区でS D07下層とは異なる流路をもつようになる。この部分をS D18と呼称する。S D18はS D07の流路から大きく屈曲して西流し、S D05の流路に至って再び屈曲しS D05の流路に沿って流れている。幅1.4m、深さ0.3mを測り、断面は浅い皿状を呈する。若干量の遺物が出土したが、図化し得るようなものは無い。すべて赤色系素焼き土器の破片である。

⑫ S D19

M, N-35区の西北部で検出した溝状遺構である。幅0.7m、深さ0.03~0.09m程の規模で、断面は浅い皿状を呈する。検出長は約12mで、北は調査区外に延び、南側は消滅している。赤色系素焼き土器の細片が僅かに出土している。

⑬ S D22

O-34~36区で検出された小規模な溝状遺構である。幅0.2~0.35m、深さ0.08m程の規模である。検出長は約16mで、両端は消滅している。遺物は検出されなかった。

⑭ S D23 (第97図)

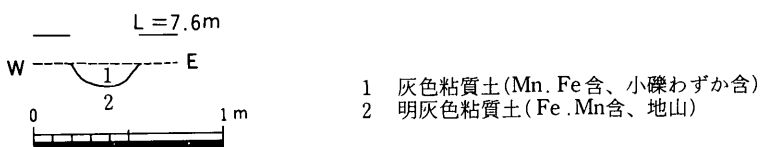
M, N-35区・M, N-36区・O-34~36区で検出された溝状遺構である。幅0.55~0.7m、深さ0.15m程の規模である。南端はS D07上層によって壊され、以南は不明。以北はほぼ北流する流路をもつ。途中S X01の埋積土上を流れている。遺物は検出されなかった。



第97図 S D23 断面図

⑮ S D24 (第98図)

O-34~36区で検出された溝状遺構である。S D23によって壊されており、S D23より古いものと判断される。幅0.4m、深さ0.12m程の規模である。検出長は約14m。遺物は検出されなかった。



第98図 S D24 断面図

⑩ S D 26 (第90図)

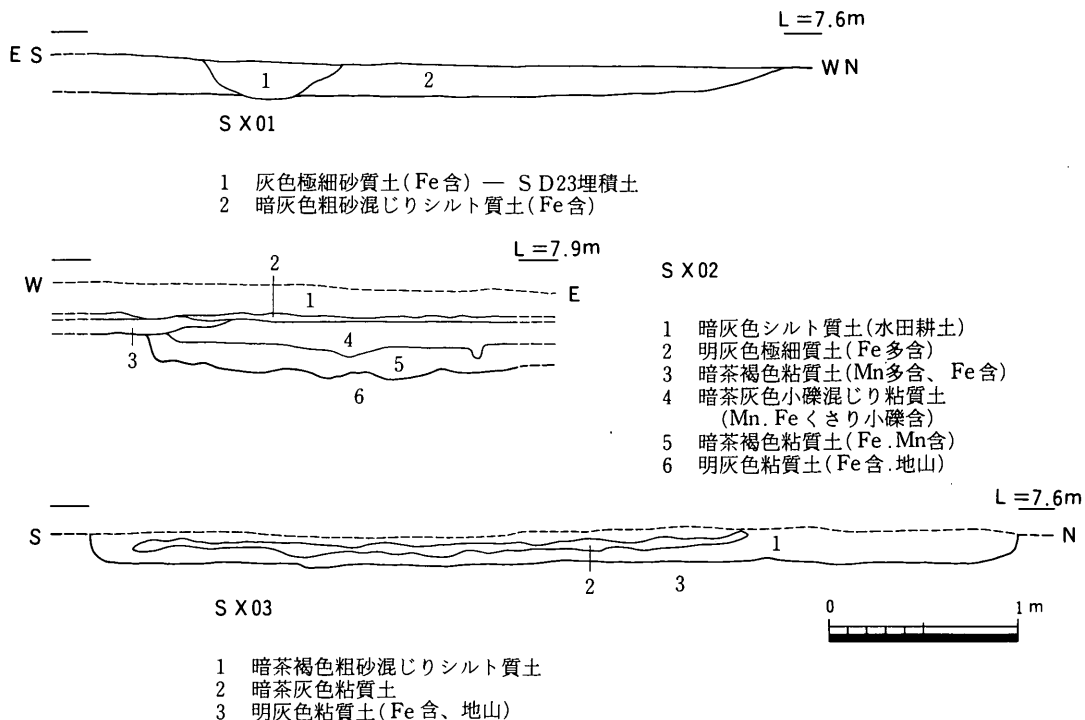
M, N-35区で検出された小規模な溝状遺構である。S D 13の埋積土上面に掘られ、途中で東北方向に屈曲する。幅0.45m、深さ0.12m程の規模で、検出長は約5mである。遺物は検出されなかった。

10. 性格不明遺構 (第99図)

M, N-35区とO-34~36区で検出された三つの落ち込みである。埋積土の底のラインは比較的しっかりしたもので人為による可能性が認められるが、平面形に企画性は認められず、また、遺物も検出されなかった。溝状遺構との切り合い関係や、埋積土、掘り込み層などから当該時期のものと推定される。これらが遺構であるのか否かは不明であるが、概要を報告する。

① S X 01

M, N-35区の東南隅で検出された。平面形は不整形円で、径は5m程である。深さは0.15~0.2mである。埋積土は暗灰色粗砂混じりシルト質土で、下層の明灰色シルト質土との境界は明瞭である。S X 01埋没後にS D 23が掘削されている。



第99図 S X 01~03 断面図

② S X 02

O-34~36区で検出された。落ち込みは調査区東側の外に延びる。平面形は一端が不整な方形になるが、それ以外は不明である。深さ0.3m程で、埋積土は暗茶灰色小礫混じり粘質土、暗茶褐色粘質土の二層からなる。下層の明灰色粘質土層との層境は明瞭である。遺物は検出されなかった。

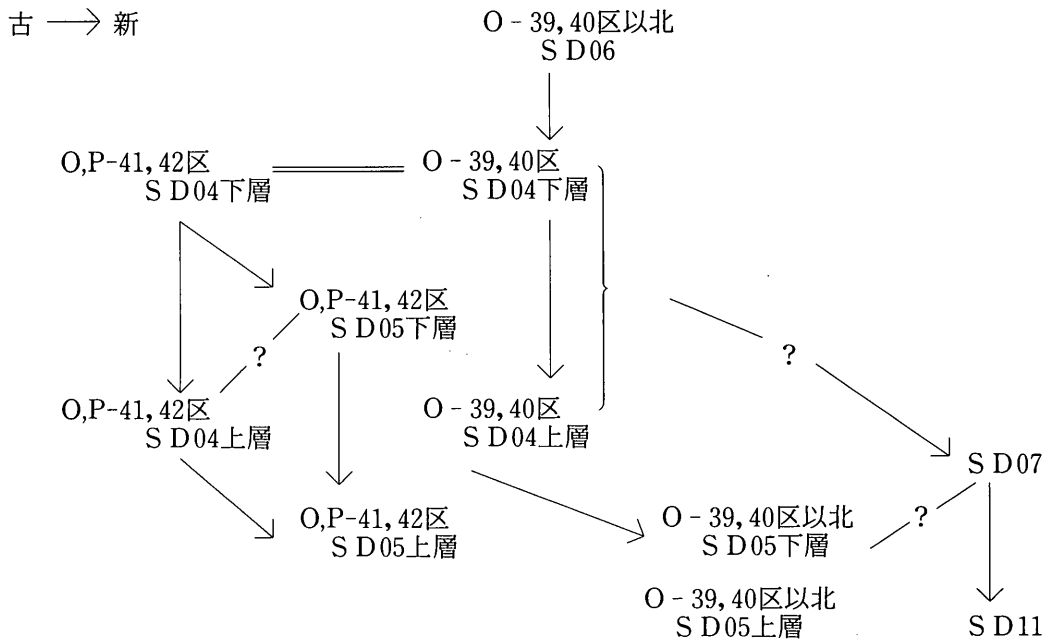
③ S X 03

O-34~36区で検出された。落ち込みは調査区東側の外に延びる。平面形は不定形である。埋積土は暗茶褐色粗砂混じりシルト質土中に暗茶灰色粘質土が挟在している。遺物は検出されなかった。

11. 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物のまとめ

(1) 溝状遺構について

本遺跡からは多数の溝状遺構が複雑な切り合い関係をもって検出された。これらは古墳時代中期ないし後期の遺物を出土したものがあるが、主体は弥生後期から古墳前期のものである。これらの溝状遺構のうち、切り合い関係のわかるものを整理すると第6表のようになる。



第6表 弥生時代後期～古墳時代前期の溝 整理表

この他の小溝についても切り合い関係のわかるものがあるが、遺物の出土がないため割愛する。上表のように各々の溝の上下層の關係に不明なものがあり、また、ある溝の上下層の出土遺物には明らかに時代的な前後關係が認められるものが含まれており、出土遺物の前後關係を層位的に並べることは困難である。

(2) 石器について

弥生時代後期～古墳時代前期の溝状遺構群からは、比較的多量の石器が出土している。これらは、前章における弥生時代前期の遺構から出土した石器と比べ、風化の度合いを示す色調に明瞭な違いが認められ、当該期の石器の可能性が高いものと思われる。通常、弥生時代後期になると石器の出土量が急速に減少するのが一般であり、県内の遺跡においても同様の傾向があるが、川津二代取遺跡においては弥生時代後期もかなり遅い段階まで石器が製作されるようである。これは石器原産地として著名な金山まで直線距離で2 kmという近さが原因と考えられる。石器の形態や製作技法に相違があるかどうかといった検討を今後深める必要がある。

(補注) 下川津C類土器(仮称)について

当該期の土器には、菅原康夫氏の設定する「東阿波型土器」⁽¹⁾と形態・調整技法が酷似する土器が含まれる。「東阿波型土器」の胎土には結晶片岩粗粒を含むものが多いことが報告されており⁽²⁾、川津二代取遺跡の土器について、肉眼と40～80倍程度の倍率の実体顕微鏡によって胎土を観察した。この結果、本遺跡出土の「東阿波型土器」と似る土器の胎土にはいずれも結晶片岩粗粒は含まれないことがわかった。反面、これらの土器の胎土は以下に述べる特徴をもち、この特徴をもった土器を抽出した結果、第100図に掲げるように31点の土器が抽出された。

これらの土器の胎土は、①胎土中に多量の火山ガラスを含むものが多い。②胎土中に含まれる砂粒の径は概ね1 mm以下で、水篩した胎土を用いていると思われる。③土器の色調は「標準土色帖」で5Y7/1(灰白)や2.5Y7/2(灰黄)といった共通する色調を示す、といった特徴があげられる。

火山ガラスは無色透明のバブルウォールタイプのもので、観察表で「多く含む」としているものは、顕微鏡の視野(約3 mm)の中に10片以上、「含む」が数片含むものである。これらは川津二代取遺跡での当該期の土器300点程の観察結果からすると、極めて多量に含むものであり、31点中26点を数える。残りの5点は「わずかに含む」とするものであるが、これ

も観察した300点の土器の胎土のうちでは相対的に多量のガラスを含むものである。火山ガラスは広域に存在するものであるから、胎土の産地を推定するような指標にはならないが、火山ガラスの濃集層を胎土として用いていると推定され、これらの土器の大きな特徴である。

胎土中に含まれる砂粒の径は2.5mm程のものを含むものが1点のみ存在するが、概ね1.0mm以下の石英・長石と磁鉄鉱かと思われる鉱物粒を含むものであり、砂粒の混入量は少なく、ほとんど砂粒を含まない土器も7点ある。このことから意識的に砂粒を除去した胎土を用いているものと判断される。

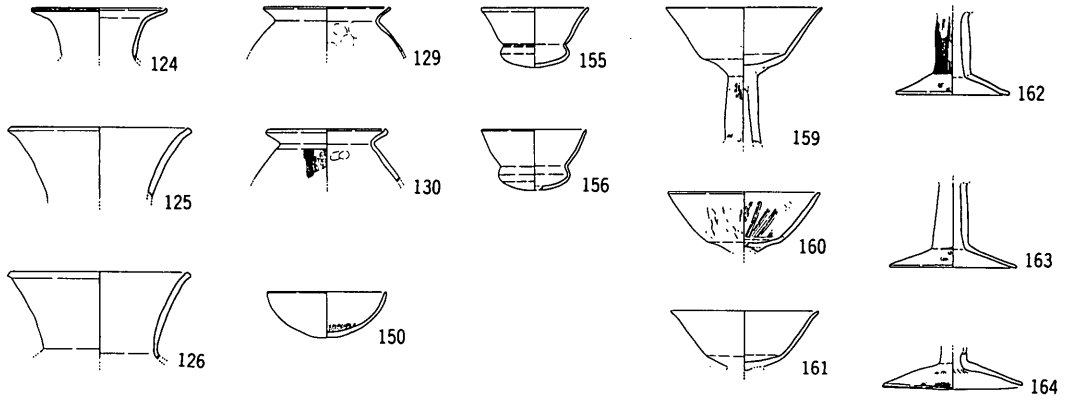
以上が、胎土の特徴が共通する一群の土器である。次にこれらの土器に共通し、他と区別されるような形態的特徴や、製作技法が存在するかどうかが問題になる。この点については、現在、川津二代取遺跡以外での類例を収集している段階であり、今のところ結論めいたことを述べることは出来ない。しかし、見通しとしては、「東阿波型土器」として報告される土器群の中の「壺」と「甕」と酷似する形態・製作技法をもつものを含む反面、「東阿波型土器」には認められないタイプの「高杯」・「小型丸底壺」が含まれていることが指摘でき、形態や技法のうえでも一群の土器として把握することができるものと思われる。

以上のことから、これらの土器群を「下川津C類土器」と仮称することにしたい。「下川津C類土器」とするのは、川津二代取遺跡の北方1kmに所在する下川津遺跡の整理調査の際の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての土器の検討⁽³⁾について補足する事項であるという点が根底にある。蛇足になるが、ここに掲げる「下川津C類土器」は下川津編年でいう「下川津VI式」期以降に含まれると考えられるが、形態や技法の問題のほか、分布、時期的な消長については今後の検討課題としたい。

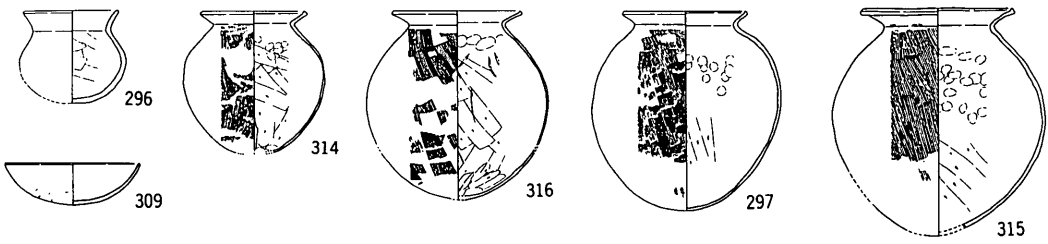
(1) 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』 1986 徳島県教育委員会、菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』 1987 徳島県教育委員会、菅原康夫ほか『黒谷川郡頭遺跡Ⅲ・Ⅳ』 1989 徳島県教育委員会、大西浩正『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』 1990 徳島県教育委員会ほか

(2) (1)に同じ

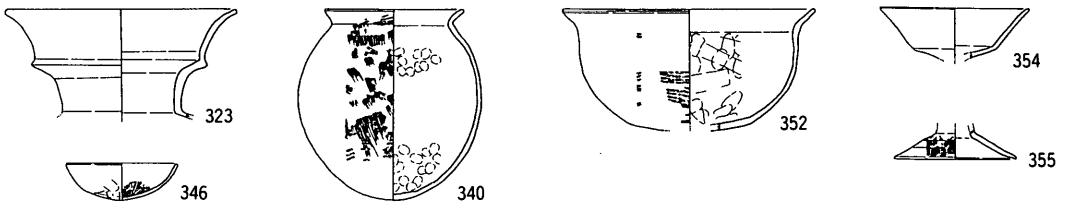
(3) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』 1990 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団



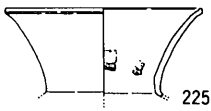
O,P-41,42区 S D04下層



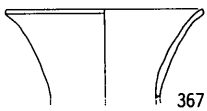
O-39,40区 S D05下層



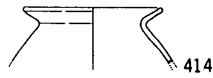
S D07下層



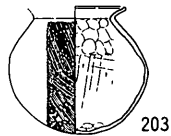
O,P-41,42区 S D05下層



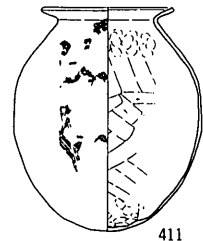
S D07上層



M,N-36区 S D05上層



O,P-41,42区 S D04上層



N-37,38区 S D05上層



第100図 下川津C類土器

第4節 中世の遺構・遺物

中世に所属すると考えられる遺構・遺物を、主としてN-39～42区・O-37,38区・N-37,38区から検出した。

1. 掘立柱建物・柵列・柱穴

(1) 概要

調査区では約900個の柱穴を検出したが、この内から20棟の掘立柱建物を復元した。柱穴の埋積土は細かく見ると幾つかに類型化が出来るが、巨視的には同一視してよいものである。したがって掘立柱建物の復元は主として柱穴の平面的な配列を基準としている。復元した掘立柱建物のうちには比較的復元のし易かったものもあるが、どの柱穴が掘立柱建物に伴うものか不明確なものも多く、以下に報告するものは一つの復元案である。なお、掘立柱建物の復元は柱穴の配列が方形になる、あるいは方形に近似するものに拠ったが、床面積・桁行方位などは、復元した方形から計測している。

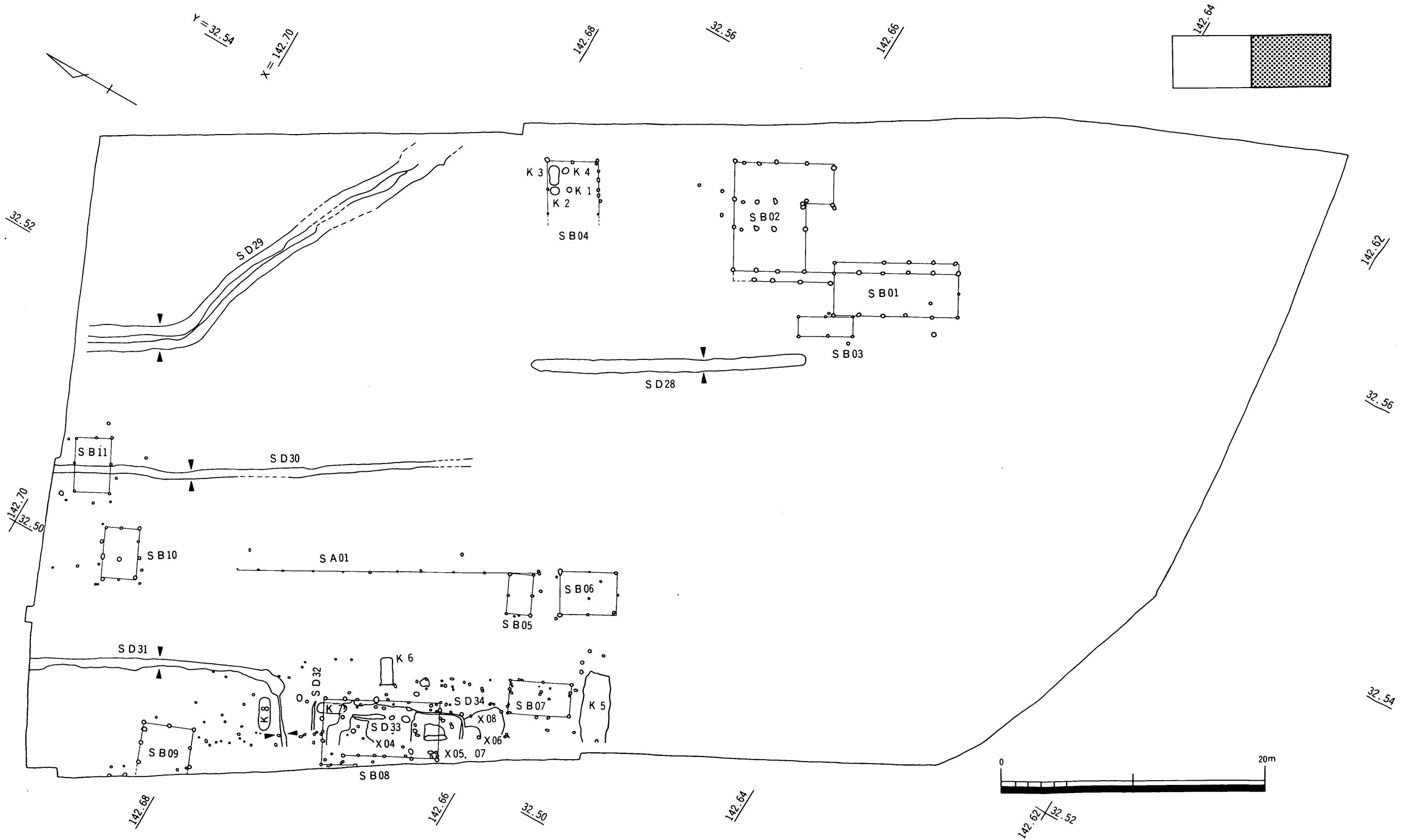
(2) S B 01～03 (第103図・図版19)

O, P-41, 42区で検出された掘立柱建物である。O, P-41, 42区では整然とした配列をもつ柱穴が検出された。柱穴の並びはすべてにおいて企画的であり、これらの柱穴によって構築される掘立柱建物が同時併存であることを示すと思われる。このうちS B 03は、他の柱穴よりは規模が小さく分離することが可能であるが、S B 01・02は幾つかの復元案が成立する余地がある。なお、S B 01と02の間には両建物をつなぐ廊的な構造物があるものと考えた。

① S B 01 (第104図)

O, P-41, 42区で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁行は北側一間、南側は二間(3.4 m)、桁行五間(9.3 m)の規模で、東側に廂を持つ。主軸方位はN-29° -Wで、廂部分を合わせた床面積は39.5㎡を測る。柱間は桁行が芯芯で1.7～2.0 m(平均1.85 m)、梁行が北側が2.45 m、二間となる南側は1.9、1.6 mを測る。柱穴の掘り方は概ね円形で、径は30 cm前後のものが多い。柱穴の埋積土は茶褐色粘質土のブロックを含む明灰色極細砂質土か、明灰色極細砂質土で、焦土のブロックを含むものが多い。

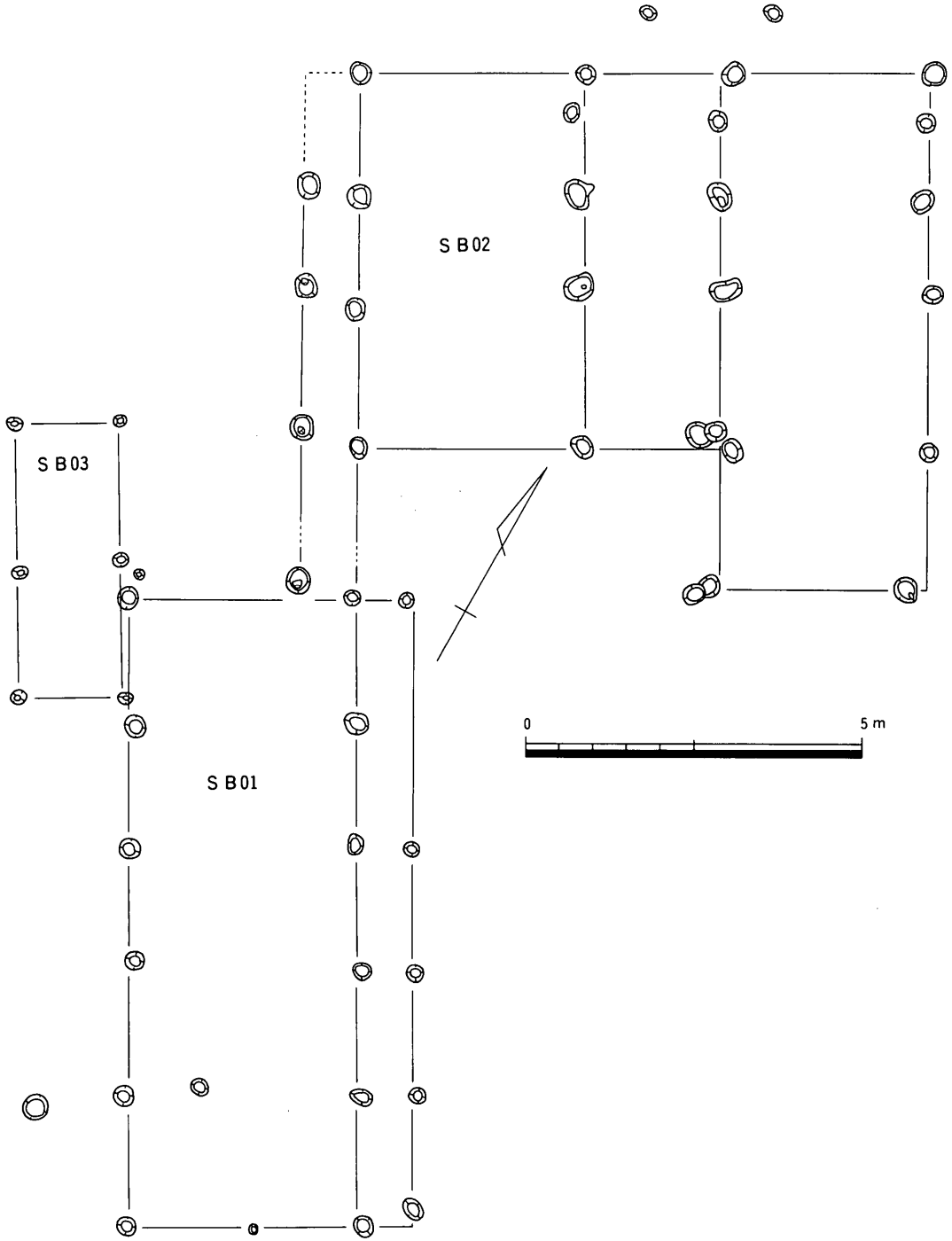
出土遺物は、図化していないが8つの柱穴から遺物が出土している。土師器杯、小皿・弥生土器の破片である。



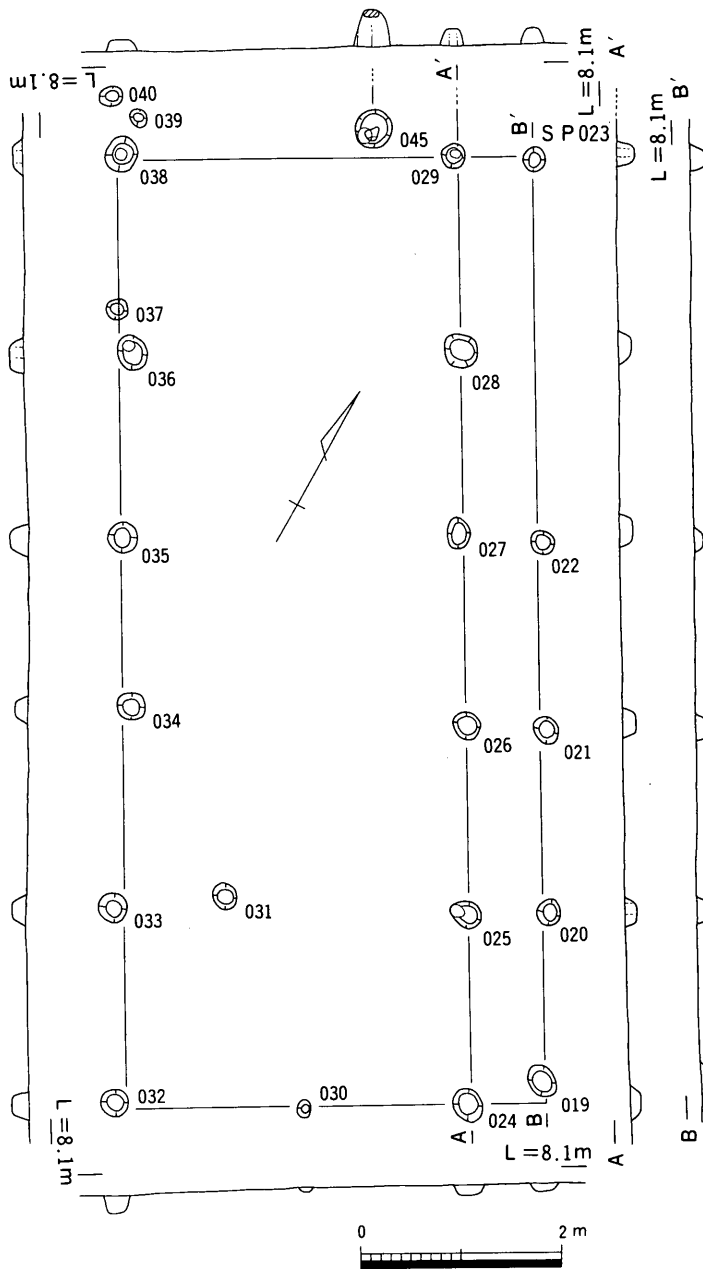
第101図 南部 遺構配置図 (中世)
 (▶は断面図作成位置)



第102図 北部 遺構配置図 (中世)



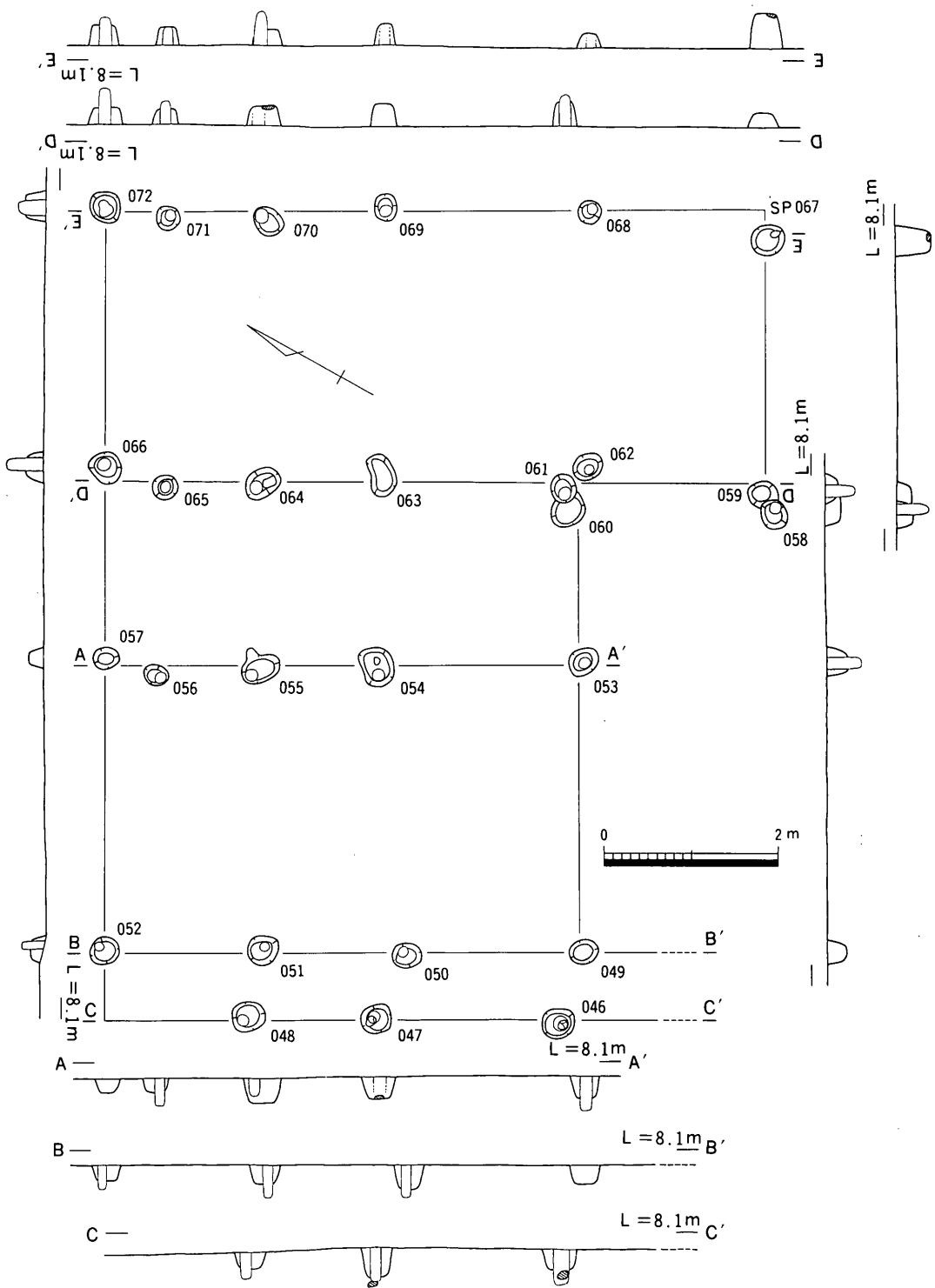
第103图 SB01~03 平面图



第104図 SB01 平面・断面図

② SB02(第105、106図)

O, P-41, 42区で検出した掘立柱建物である。芯芯で2.0m 離れて、梁行一間・桁行五間と梁行一間・桁行三間の二棟の掘立柱建物が並立しているとも考えられるが、両者を併せて一棟の掘立柱建物の復元した。その理由は、柱穴の配列がすべて規則的であること、束柱か



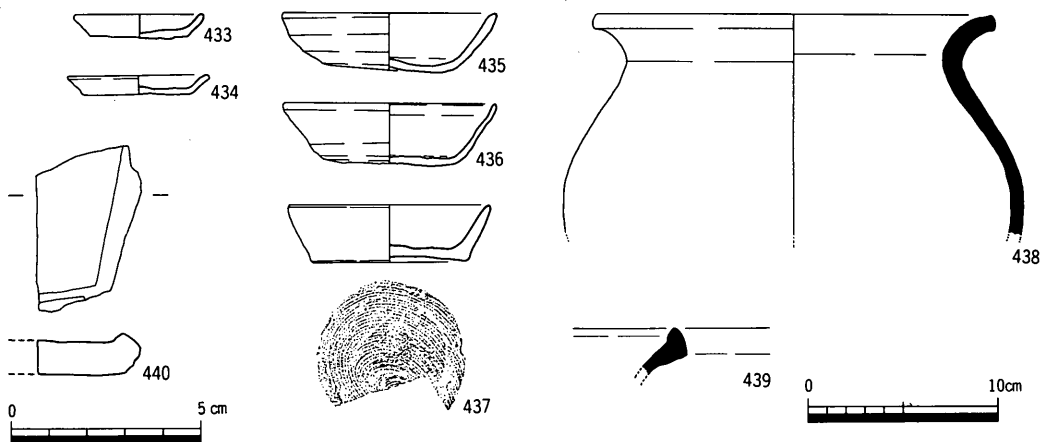
第105图 SB02 平面·断面图

と思われる柱穴(S P 056・065・071)も規則的で、この柱穴がS P 051、052間に認められないことから、S P 056・065・071を一連のものとして考えたためである。しかし、この場合、上部構造が東西南北のいずれの方向になるのか不明確となるが、S P 051-070もしくはS P 050-069が棟持柱となる東西棟と復元した。

主軸方位はN-61°-Wで、隣接するS B 01の主軸と直交する位置関係である。床面積は54.0 m²を測る。柱間は桁行は3.2、2.0、3.4mを測り、梁行も不揃いで0.7~2.3mを測る。柱穴の掘り方は概ね円形を呈するものが多いが、建物内部の柱穴は不整形を呈するものが目立つ。円形の柱穴の径は30~40cm程度である。柱穴の埋積土は茶褐色粘質土のブロックを含む明灰色極細砂質土か明灰色極細砂質土からなり、焦土のブロックを含むものが多く認められる。また、根石をもつ柱穴も認められる。

S P 045-048の柱穴はS B 02の西端の柱穴列とともにS B 01とをつなぐ幅0.85m程度の廊的な構築物である可能性がある。

第106図はS B 02の柱穴から出土した遺物実測図である。433、434は土師器小皿である。口径は433が6.5cm、434が7.4cmである。底部は回転ヘラ切りである。435~437は土師器杯である。435、436の底部は回転ヘラ切りで、板状圧痕が認められる。435は完形、436は体部内面に粘土を足しており、やや歪んでいる。437は本遺跡出土の土師器杯の中では珍しく底部に静止糸切り手法が認められる。また、体部と底部の境界は明瞭な稜を持っており、形態的にもやや特異である。438は須恵器の甕の破片である。「く」の字状に緩く外反する形態を呈し、口縁端部は拡張することなくおさめている。口縁部と体部の境界は不明瞭である。



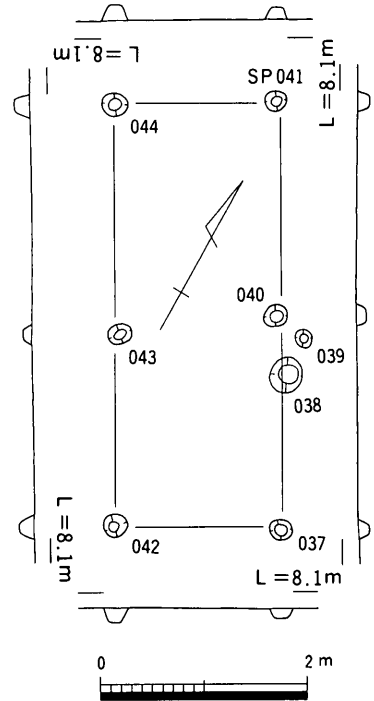
第106図 S B 02 出土遺物実測図

439は須恵器の鉢の口縁部の小片である。東播系のこね鉢であると思われる。440は用途不明の石製品である。流紋岩を用いたもので、一面に周囲に凸部を残し、平坦面をつくっている。S B 02の柱穴からはこの他に、土師器杯・小皿の破片、須恵器の細片、器種不明の土師質土器の破片が出土している。

③ S B 03 (第107図)

O, P-41, 42区で検出した南北棟の掘立柱建物である。梁行一間(1.6m)、桁行二間(4.1m)の規模である。主軸方位はN-29° -Wで、S B 01と同一方向をもち、柱穴の配列が一部重複しており、また、S B 03が床面積6.0m²と小規模であることから、S B 01に伴う「角屋」的な機能をもつ建物である可能性がある。柱穴の埋積土は明灰色極細砂質土からなり、柱穴の径は25cm程度である。

4つの柱穴から遺物が出土している。いずれも図化不能の細片で、土師器の杯もしくは小皿と考えられる。



第107図
S B 03 平面・断面図

(3) S B 04 (第108～110図・図版20)

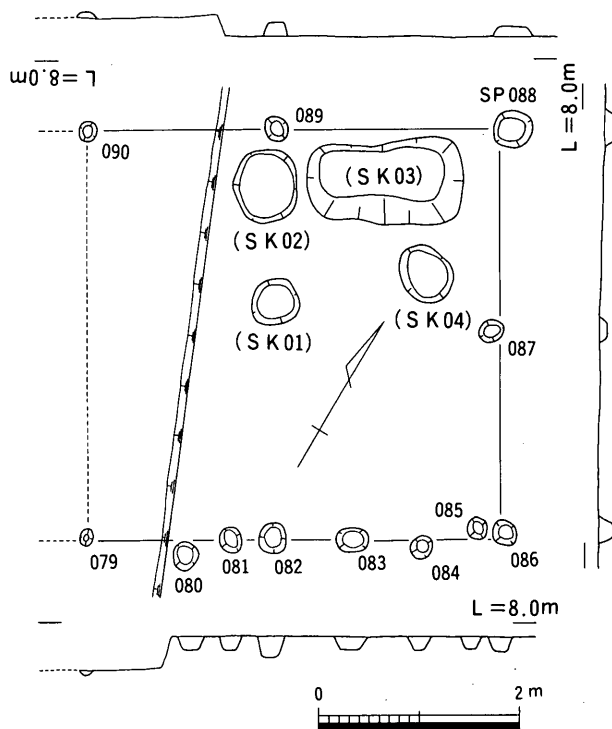
① 概要

O, P-41, 42区東北隅で検出した東西棟の掘立柱建物である。この付近は調査開始時には中世遺構が存在しないと判断していた所で、遺物の包含の希薄な包含層を重機で除去し、直接弥生時代後期の遺構を検出した。ところが、その作業中に柱穴が存在することがわかり、包含層の除去を中止し、遺構検出を行なった。この結果、一部中世の遺構面を20cm程掘り下げ過ぎてしまい、S B 04の柱穴の上部を削平してしまった。西側至近に予備調査トレンチが掘削された関係で、建物が西側に更に延びるかは不明であるが、梁行二間(4.0m)、桁行二間(4.1m)以上の規模で、床面積は16.4m²以上、主軸方位はN-60° -Eを測る。柱間は、桁行北側は1.9、2.25mの間隔であるが、南側はこの間に2ないし3つの柱穴があり、0.3～1.0mの狭い間隔で柱穴が並んでいる。柱穴は概ね円形を呈し、径は23～30cm程である。埋積土は明灰色シルト質土である。

S B 04からは7つの柱穴から遺物が出土している。第108図441はS P 090から出土した土師器小皿の破片である。復元径8.0cm、底部は回転ヘラ切りである。この他は図化不能の細

片で、土師器の杯もしくは小皿、弥生土器が出土している。

S B 04の建物内部の東北隅にあたる場所に四つの土坑が存在する。周囲の中世に属すると思われる遺構配置の粗密さから見て、これらの土坑はS B 04に伴う可能性が高く、また、埋積土が共通することからS K 01～04はセットで把握できると思われる。



第108図 S B 04 平面・断面図

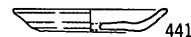
② S K 01

やや不整な円形を呈し、径45

cm、深さ18cm、断面形は皿状を呈する土坑である。埋積土は暗茶褐色粘質土のブロックを多く含む明灰色極細砂質土である。遺物は図化していないが、土師器杯と考えられる小片、土師器碗の底部の小片が出土している。

③ S K 02

概ね円形で、径約64cm、深さ19cm、断面形は皿状を呈する土坑である。埋積土は暗茶褐色粘質土のブロックを多く含む明灰色極細砂質土である。遺物は図化していないが、土師器の小皿、土師器杯と考えられる小片、弥生土器と考えられる小片が出土している。



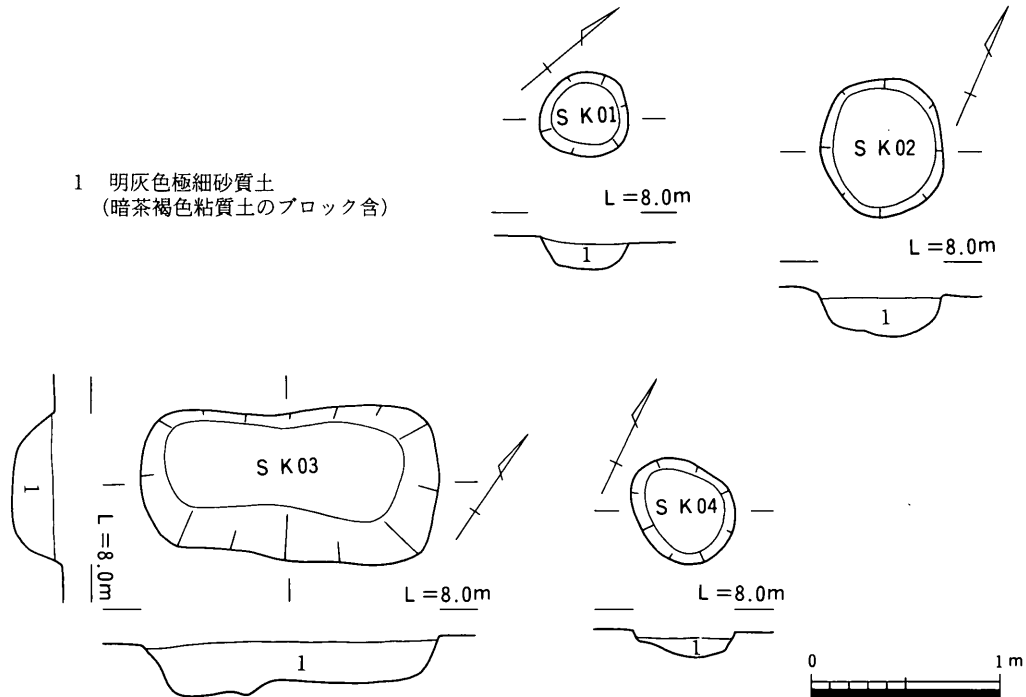
第109図 S B 04
出土遺物実測図

④ S K 03

やや不整形な隅丸の長方形を呈する土坑である。長辺155cm、短辺80cm、深さ24～28cmを測る。断面は皿状を呈し、底面に一部凹凸が認められる。埋積土は暗茶褐色粘質土のブロックを多く含む明灰色極細砂質土である。遺物は図化していないが、土師器杯と考えられる小片、弥生土器と考えられる小片が出土している。

⑤ SK04

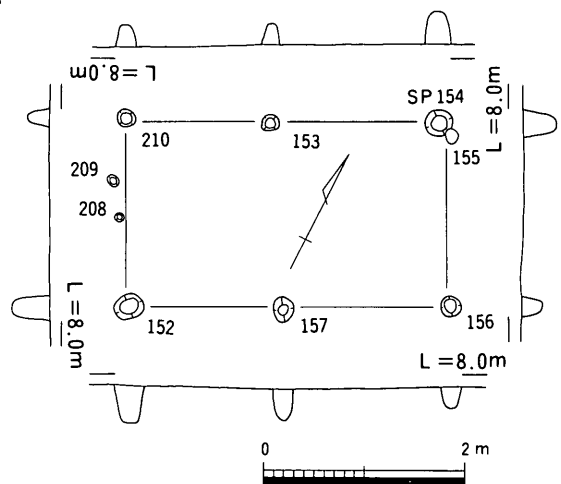
平面形はやや不整な円形で、径50cm、深さ14cmの規模で、断面は浅い皿状を呈する土坑である。埋積土は暗茶褐色粘質土のブロックを多く含む明灰色極細砂質土である。遺物は図化していないが、弥生土器と考えられる小片が出土している。下層からの混入であろう。



第110図 SK01~04 平面・断面図

(4) SB05 (第111図・図版20)

N-39~42区のN-41グリッドで検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行一間(1.8m)、桁行二間(3.1m)の規模で、床面積は5.7m²と小規模である。主軸方位はN-66°-Eを測る。柱間は梁行が1.8m、桁行は1.45~1.7mを測る。柱穴は概ね円形で、径18~30cm程、埋積土は明灰色極細砂質シルトである。SP152から遺物が出土している。図化していないが底部ヘラ切りの土師器の杯の破片である。

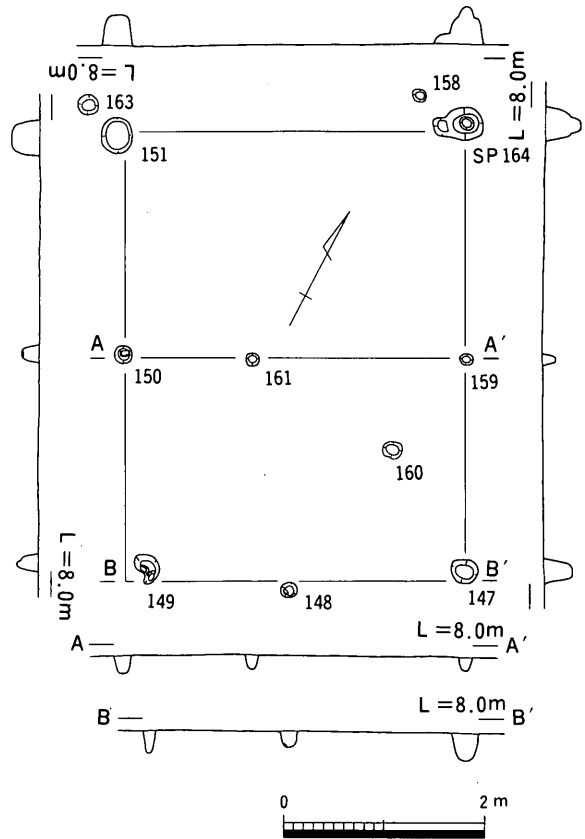


第111図 SB05 平面・断面図

(5) S B 06

(第112、113図・図版20)

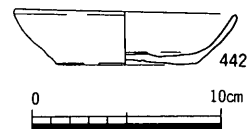
N-39~42区のN-41グリッドで検出した南北棟の掘立柱建物である。梁行は北が一間、南が二間(3.3m)、桁行二間(4.3m)で、床面積は14.5㎡を測る。柱間は桁行は2.0~2.3mで、梁行は不揃いな位置に柱を配している。柱穴は概ね円形を呈し、四隅の柱穴の掘り方の径が28~40cm程、それ以外が13~20cm程を測る。埋積土は、大半が明灰色小礫混じりシルトで、一部が明灰色極細砂質シルトである。3つの柱穴から遺物が出土した。第113図442はS P 164から出土した土師器杯である。ほぼ完形、口径は11.6cmを測る。体部と底部の境界は明瞭、やや内湾気味の口縁部をもつ。底部は回転ヘラ切り、板状圧痕が認められる。この他、図化していないが、土師器杯、小皿の破片が出土している。



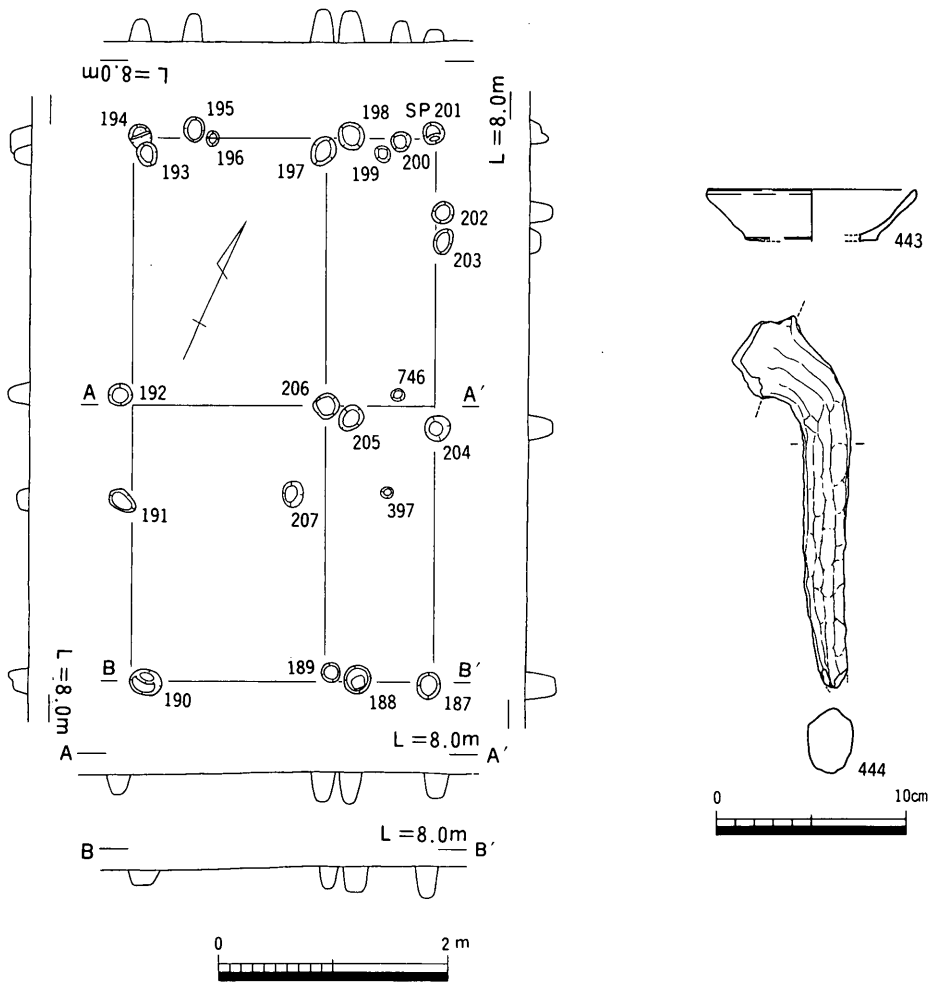
第112図 S B 06 平面・断面図

(6) S B 07 (第114図・図版20)

N-39~42区のN-41グリッドで検出した南北棟の掘立柱建物である。S B 07は柱穴の集中の度合によって図示したような規模の建物として復元した。厳密には、柱穴の配列が整然とせず、どの柱穴がS B 07に対応するのか判然としないところがある。巨視的には、S P 198-205-188かS P 197-206-189が棟持柱となる梁行二間(2.6m)、桁行二間(4.75m)の規模で、主軸方位はN-25°-W、床面積は12.4㎡を測る。柱穴の掘り方は、概ね円形で、径は20~30cmで23cm程度のものが多い。埋積土は、暗灰色極細砂質シルト、灰色細砂質土、明灰色極細砂質シルトなど多様であるが、これらは巨視的には類似するもので同一埋土と把握することができる。図中のうち、10の柱穴から遺物が出土している。第114図はS B 07出土の



第113図 S B 06
出土遺物実測図

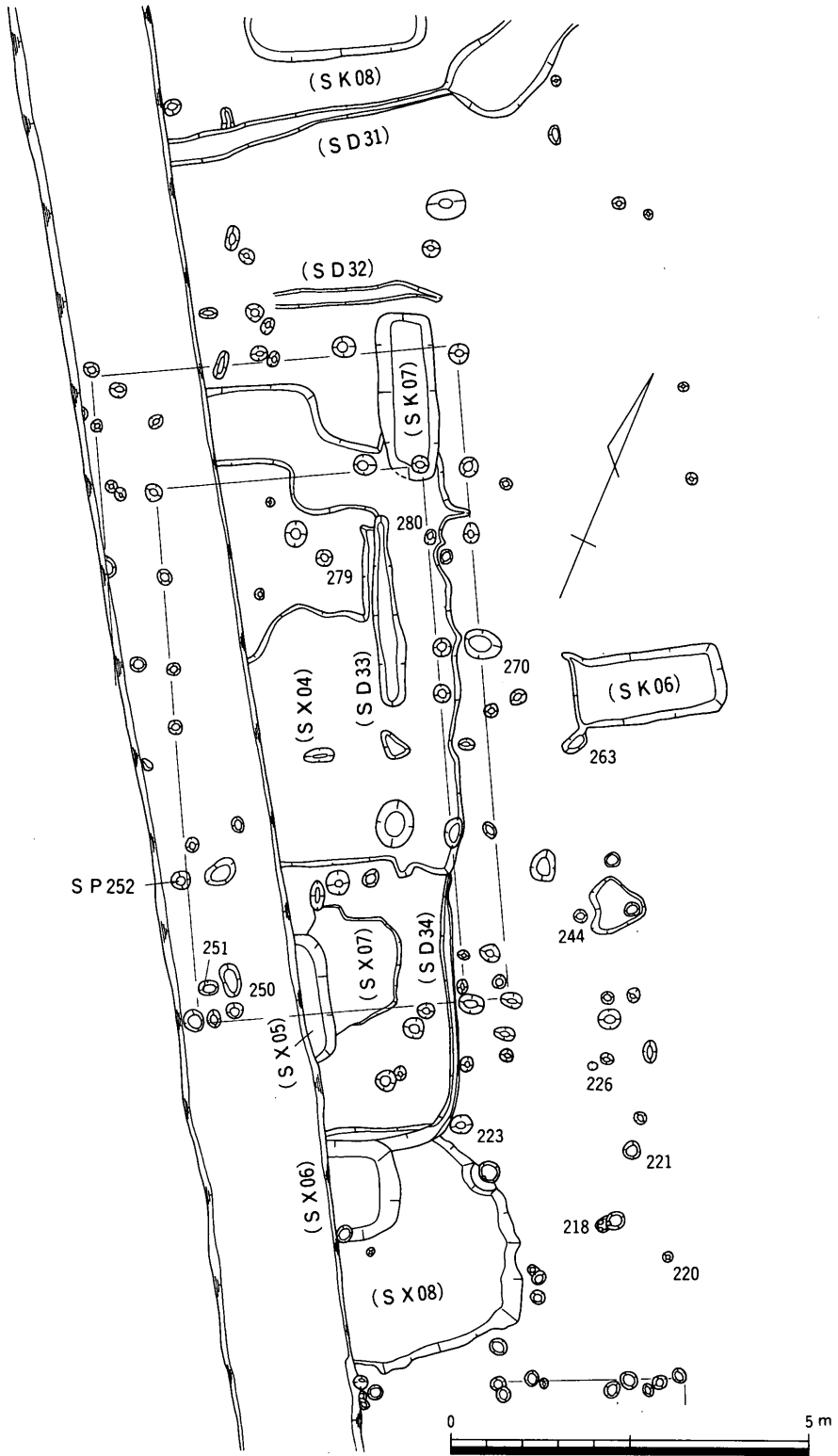


第114図 SB07 平面・断面図、出土遺物実測図

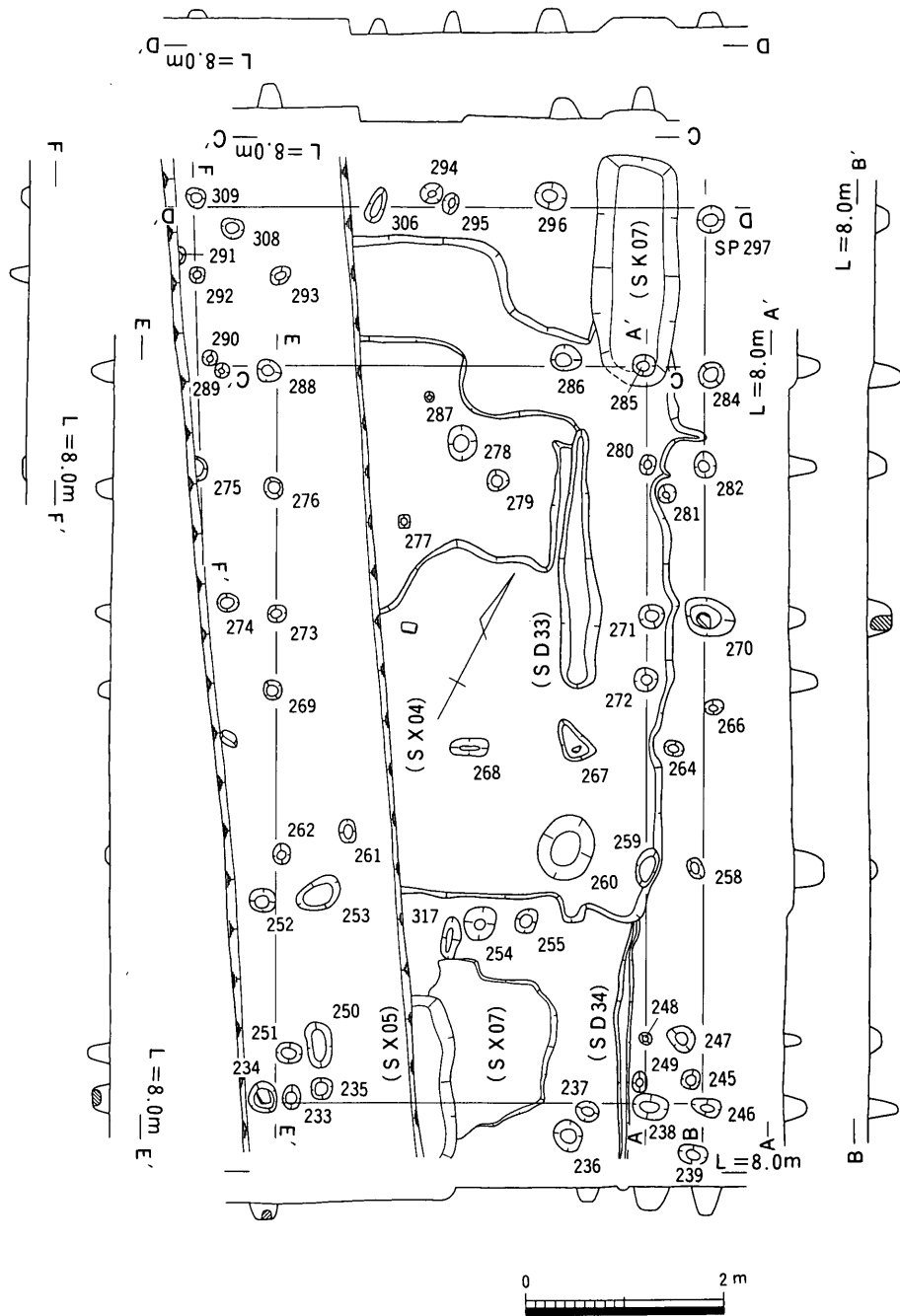
遺物実測図である。443はS P 205から出土した土師器杯の破片である。体部と底部の境界明瞭、底部は回転ヘラ切りである。444はS P 202から出土した土師質土釜の脚部である。指おさえの後板ナデを施している。この他、図示していないが、土師器の杯、小皿の破片、瓦質土器の椀か杯の破片、土鍋か土釜の破片、弥生土器と考えられる小片が出土している。

(7) SB08 (第115～117図・図版21～23)

N-39～42区のN-40グリッド西半は多数の柱穴が集中して検出された。ここには、SX04と呼称する深さ10cm程の微凹地があり、明灰色極細砂質土で埋積されていた。この層を除去すると、さらに幾つかの柱穴が検出された。SB08は、この付近の柱穴の密集具合とSD32の方向（雨落ち溝の可能性が考えられる）や、不整形ではあるがSX04の東側及び、南側のラインなどを参考に復元したものである。西側一部が調査区外にのびることもあって、柱穴



第115図 S B 08周辺 遺構配置図

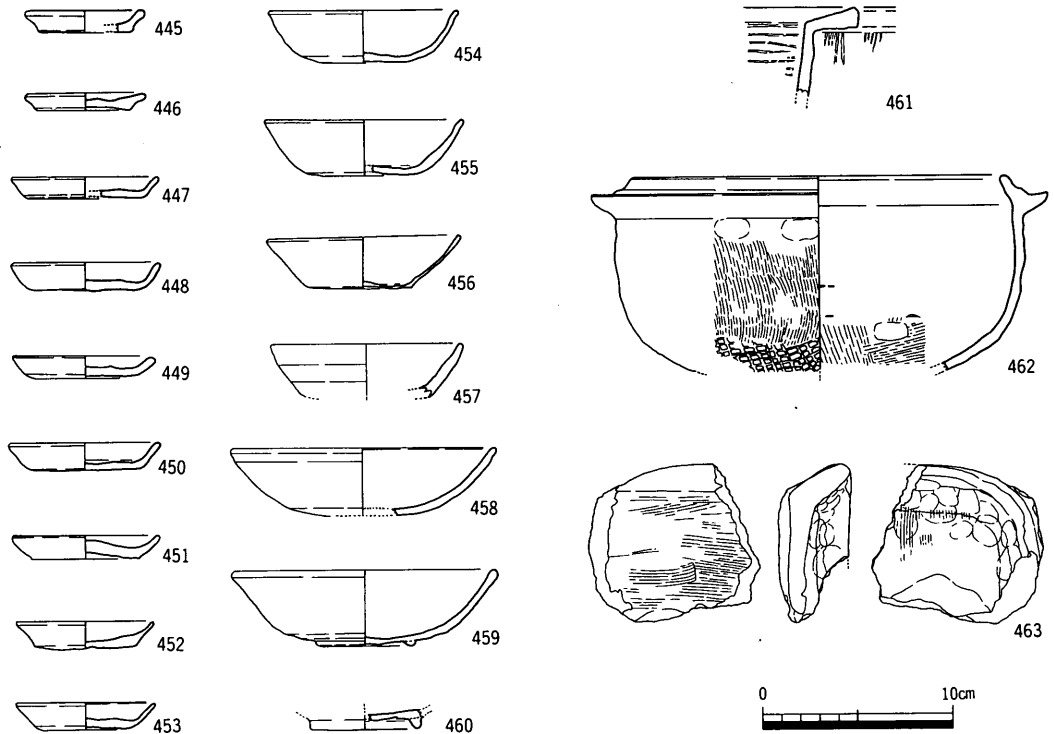


第116図 SB08 平面・断面図

の配列が判然としないものがあるが、梁行二間(3.8m)、桁行六間(7.5m)で、東、北、西側に廂をもつ南北棟の掘立柱建物と考えられる。主軸方位はN-28.5°-W、廂部分を含めた床面積は46m²程と推定される。柱穴は、円形を呈するものが大多数であるが、一部楕円形を呈

するものもある。径は25～35cm程のものが多いが、中には長径が50cmを越えるものがある。またSD33としているものは、いわゆる「布掘り」である可能性を考えている。埋積土は明灰色シルト質土ないし灰色シルト質土であるが、巨視的には同一埋土として把握できる。なお、SK07はSP285より新しいものである。

第117図はSB08及びその周辺の柱穴から出土した遺物の実測図である。445～453は土師器小皿である。446と449はほぼ完形で出土した。底部はすべて回転ヘラ切りで、452はその後にナデを施している。また、底部に板状圧痕が認められるもの(446、449)がある。口径は5.8～8.1cmを測るが、7cm代のものが多い。454～457は土師器杯である。破片で出土している。454、455は底部と体部の境界は不明瞭で、底部は回転ヘラ切り、454はその後にナデている。456は体部と底部の境界は明瞭で、底部は回転ヘラ切りの後ナデ、板状圧痕が残る。薄手に仕上げられている。457は比較的硬質の焼成である。458は瓦質土器の杯ないし碗の破片である。459は瓦質土器の碗の破片である。底部は回転ヘラ切りの後に矮小な高台を貼り付けている。460は土師器碗の高台部の小破片である。461は土師質土鍋の口縁部の破片、強く屈曲する口縁である。外面はタテハケ後ナデ、内面はヨコハケの後ナデられている。462



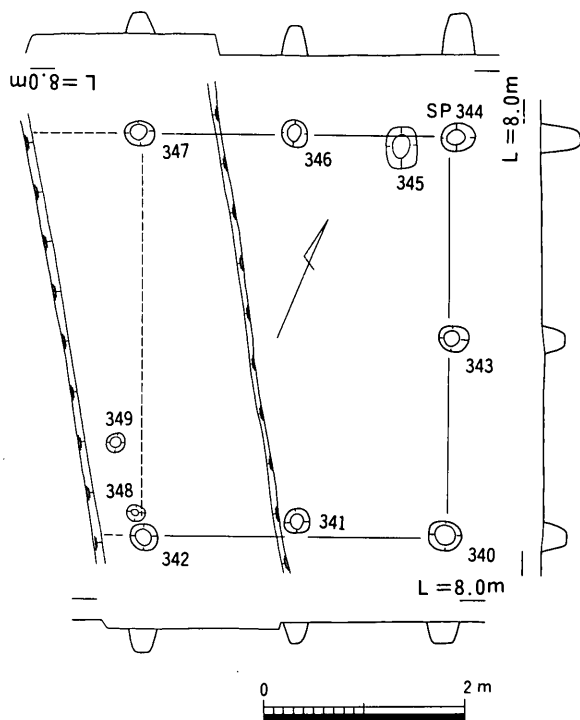
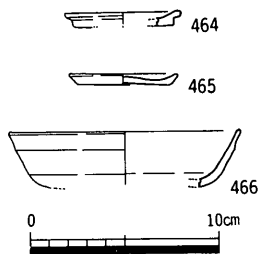
第117図 SB08およびその周辺 出土遺物実測図

は土師質土釜である。斜め上方を向く鏝の上部は、そのまま口縁部となっている。形態からみて脚の付く土釜であろう。体部内面はハケおよびナデ、外面は下半が格子目叩き、上半がタテハケである。463は土師質甕の破片である。

(8) S B 09 (第118図・図版23)

N-39~42区のN-40グリッド杭付近で検出した東西棟の掘立柱建物である。西側は調査区外にのびるものと思われる。梁行二間(3.9m)、桁行二間(3.1m)以上の規模で主軸方位はN-68.5°-E、床面積は12.1m²以上を測る。柱間は梁行が芯芯で1.95m、桁行が1.5~1.6mを測る。柱穴の掘り方は、概ね円形で径は30cm前後、埋積土は大半が灰色シルト質土、一部、明灰色シルト質土である。

4つの柱穴から遺物が出土している。第118図464, 465はS B 09出土の遺物実測図である。ともに土師器小皿である。465は完形で出土し、口径は5.6cmを測る。底部は回転ヘラ切りされている。この他、図化していないが土師器の杯か小皿の小片が出土している。

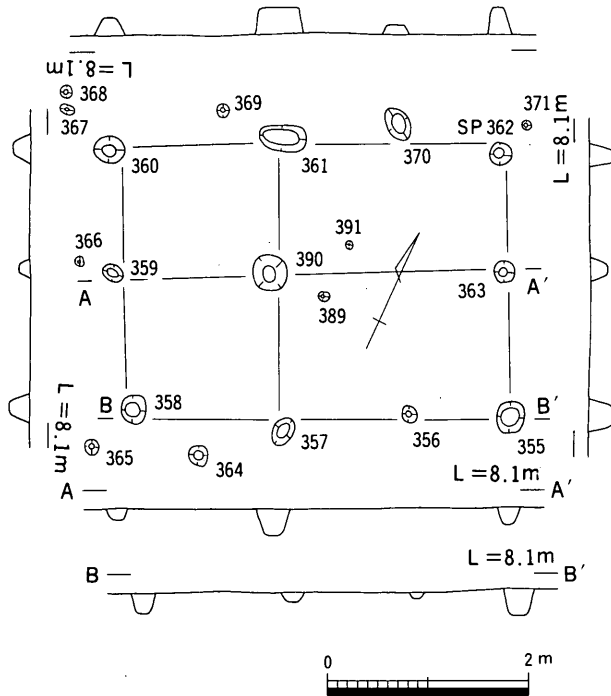


第118図 S B 09 出土遺物実測図、平面・断面図

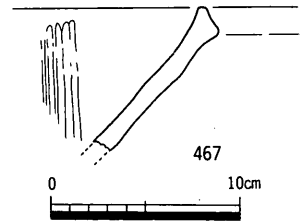
(9) S B 10 (第119図・図版24)

N-39~42区のN-39グリッドで検出した東西棟の掘立柱建物である。梁間二間(2.5m)、桁行三間(4.0m)の規模で、主軸方位はN-63°-E、床面積は10.5m²を測る。柱間は梁行が1.2~1.4mで、S P 363-390-359が棟持柱になるものと思われる。桁行は芯芯で1.05~1.8mを測り、柱穴は直線に並ばず、やや不揃いである。柱穴の掘り方は円形のものが多いが、S

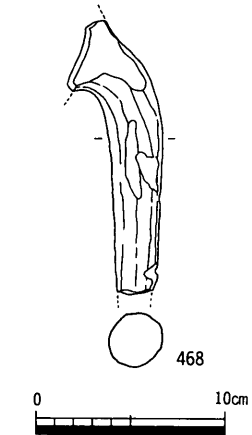
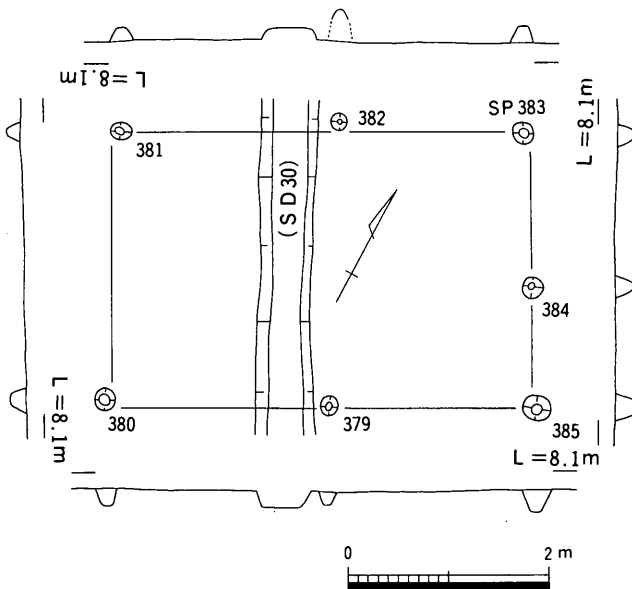
P361は楕円形を呈する。径は15~35cmとやや不揃いである。柱穴埋積土は明灰色シルト質



土である。3つの柱穴から遺物が出土している。第118図の467はSP390から出土した土師質すり鉢である。口縁端部を上方に僅かに摘み上げている。内面には4ないし5条のおろし目がつけられている。また、図化していないが、この他に土師器の杯が小皿の小片が出土している。



第119図 SB10 平面・断面図、出土遺物実測図



第121図 SP377 出土遺物実測図

第120図 SB11 平面・断面図

(10) S B 11 (第120、121図・図版24)

N-39～42区の東北隅、O-39,40区の西北端にまたがって検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行は東側二間、西側一間(2.8m)、桁行二間(4.25m)の規模で、主軸方位はN-61.5°-E、床面積は11.9㎡を測る。柱間は、東側梁行が1.2～1.6m、桁行は1.9～2.25mを測る。柱穴掘り方は、円形で20cm前後のものが多い。遺物は検出されなかったが、至近の同一埋積土であるS P 377からは土釜の脚部が出土している(第121図468)。なお、S B 11は後述するS D 30と交差する関係にあるが、両者の前後関係は不明である。

(11) S B 12～14 (第122～126図・図版25、26)

① 概要

O-37,38区の南半部から柱穴を集中して検出した。これらの柱穴の埋積土は巨視的には同一のものであった。掘立柱建物の復元は主として柱穴の配列によったが、直線的な配列をもつ柱穴列に平行あるいは直交する配列を探していくと第122図に示すように建物として完結するようなまとまりがないものとなる。復元案として幾つかのパターンが考えられるが、以下に述べるようにS B 12～14の三棟の掘立柱建物を復元した。

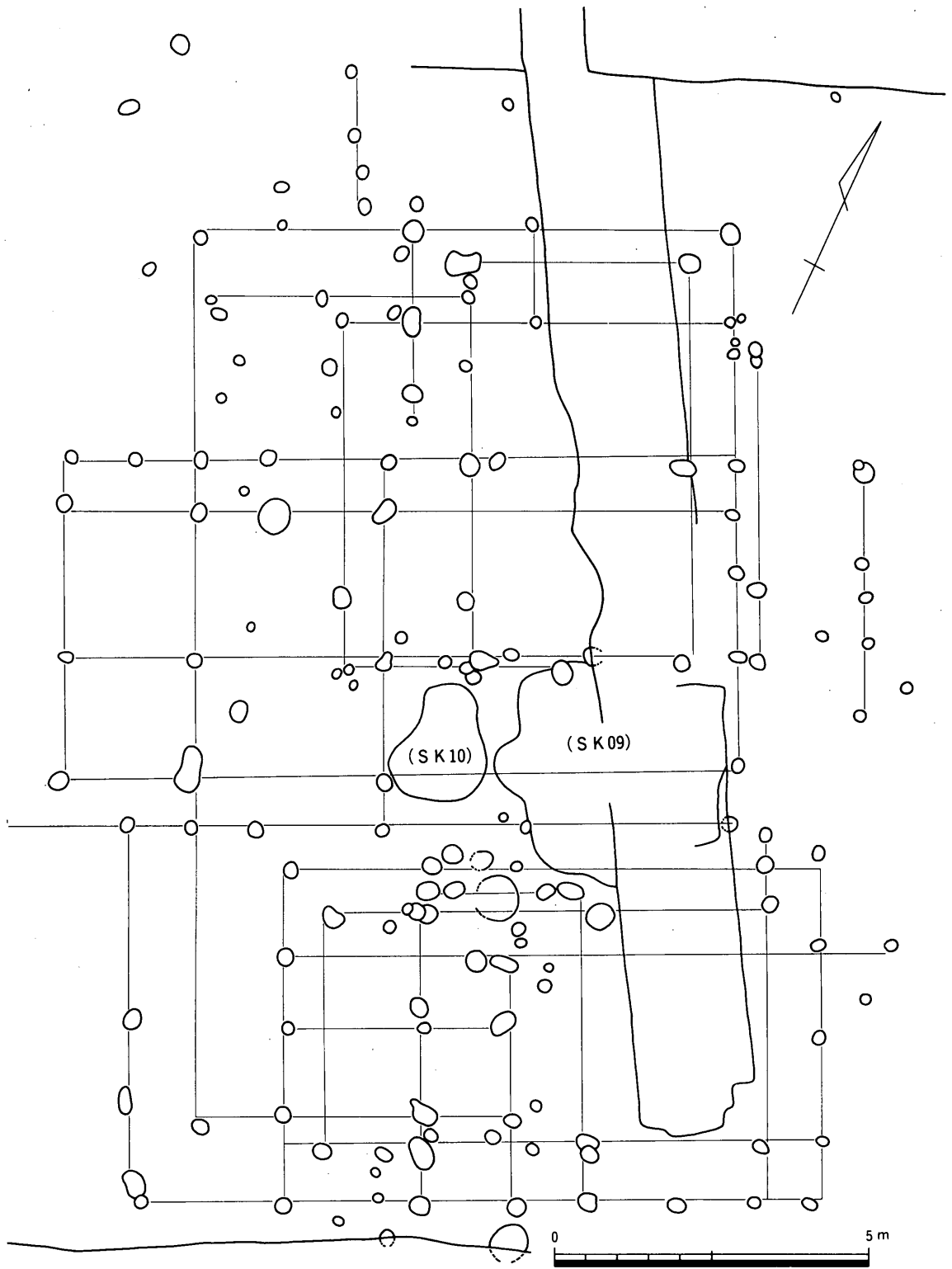
② S B 12 (第123図)

O-37,38区南端に復元した東西棟の掘立柱建物である。身舎は梁行一間(3.8m)、桁行は柱が不揃いであるが、四間(7.0m)程で四面に廂がつく。廂部分を含めた床面積は45.9㎡で、主軸方位はN-65°-Eを測る。柱穴の埋積土は明灰色シルト質土で、柱穴の掘り方は円形のものが多いが、楕円形のもの、不定形のものも含まれる。円形のもの径は30cm程度のもので20cm程度のものが多い。根石をもつものもある。

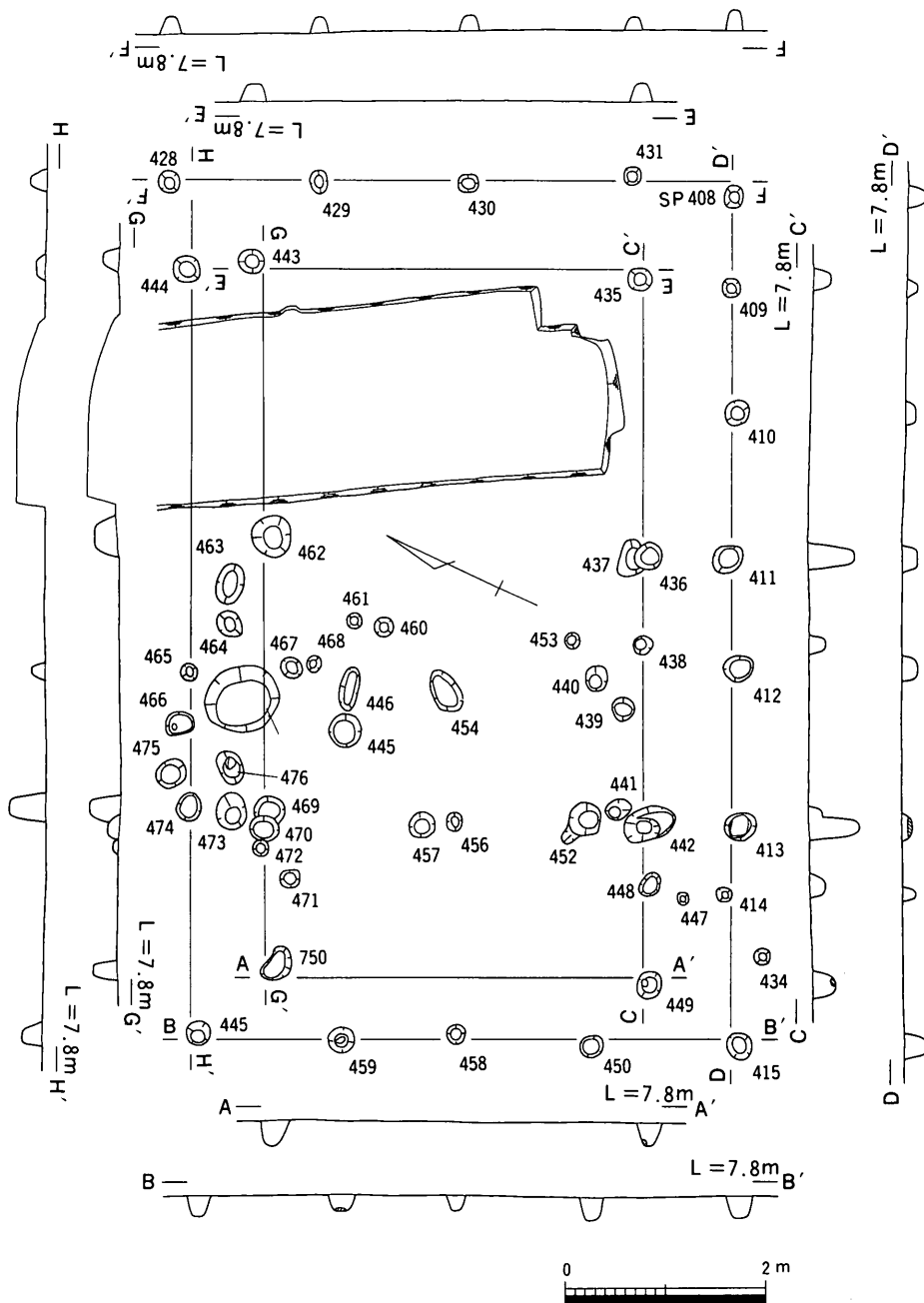
S B 12に伴うと考えられる柱穴及びS B 12内部に所在する柱穴の多数から遺物が出土している。いずれも図化不能の小破片であるが、土師器の杯、小皿・瓦質土器の椀か杯・器種不明の土師質土器片、須恵器片、瓦質土器片が出土している。

③ S B 13 (第124図)

O-37,38区で検出した梁行一ないし二間(3.5m)、桁行二間(6.2m)の規模の南北棟の掘立柱建物である。東面と北面および西面の一部に柱穴が巡っており、柵列(S A 04)と解釈しているが、廂である可能性もある。主軸方位はN-26.5°-W、床面積は21.7㎡である。柱間は桁行が3.1m、梁行は南面が1.9m、1.55mを測る。柱穴の掘り方は円形、楕円形、不定形のものがあり、径は25～50cmである。柱穴の埋積土は明灰色シルト質土である。

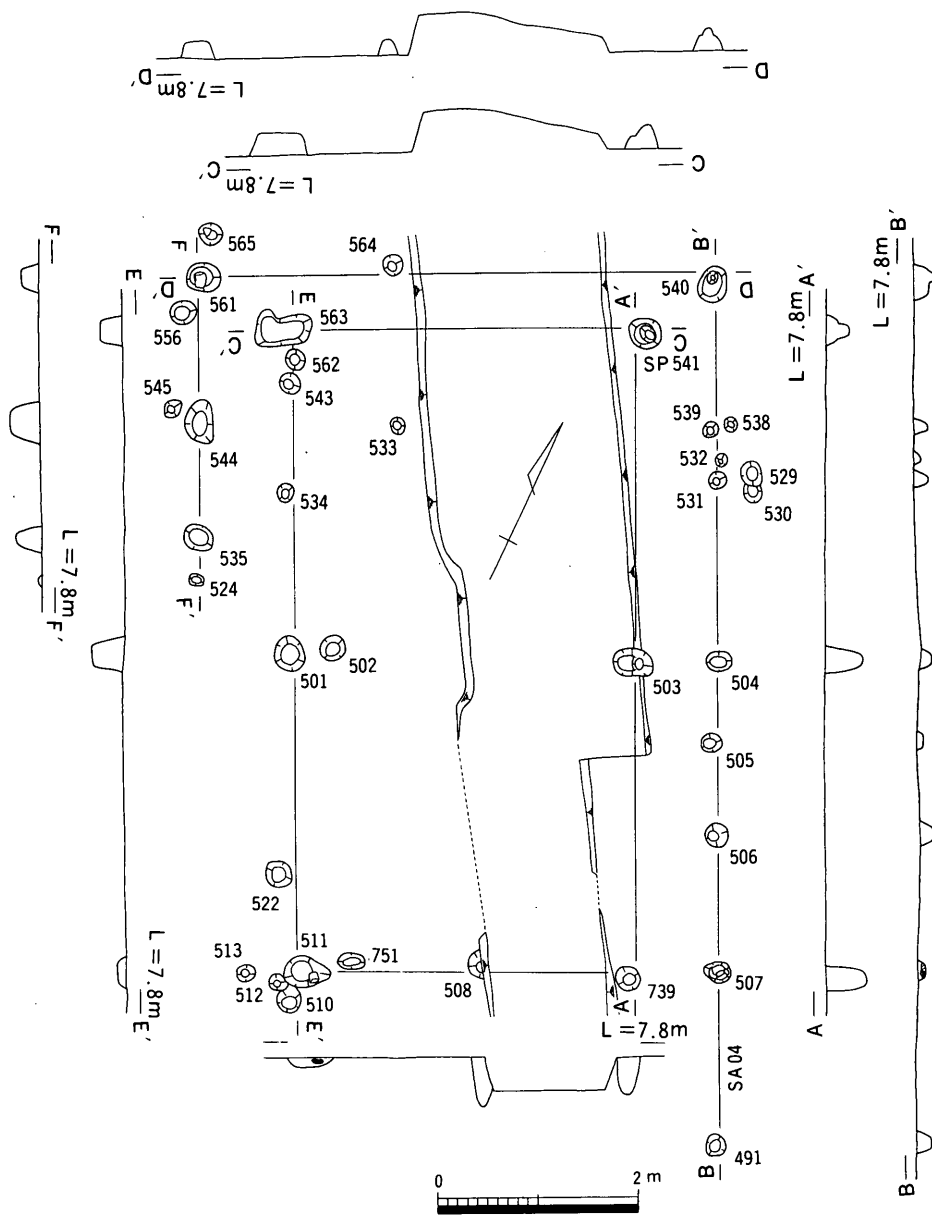


第122图 O-37, 38区 柱穴集中部 平面图



第123図 SB12 平面・断面図

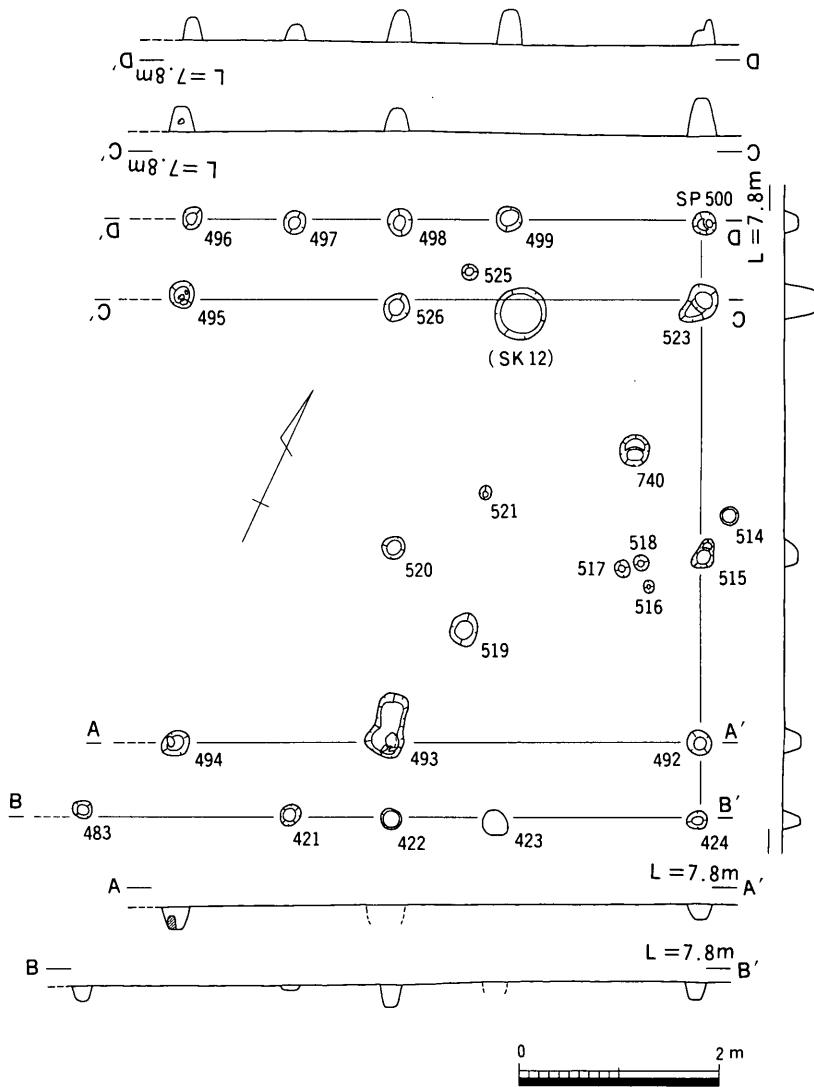
S P511から遺物が出土している。図化不能の細片であるが、土師器の杯か小皿、器種不明の土師質土器である。



第124図 SB13、SA04 平面・断面図

④ SB14 (第125図)

O-37, 38区で検出した東西棟の掘立柱建物である。建物西側に現代の用水路があり、遺構面が乱されているため、本来の規模は不明であるが、梁行二間(4.4m)、桁行二間(6.0m)以上の規模である。南北面に廂がつく。主軸の方位はN-66°-E、廂を含めた床面積は35.4m²以上を測る。SP515-520-734が棟持柱となるのであろう。柱穴の掘り方は一部不定形のものがあるが概ね円形で、身舎部分の径は28~35cm、廂部分が23~28cm程である。柱穴の埋



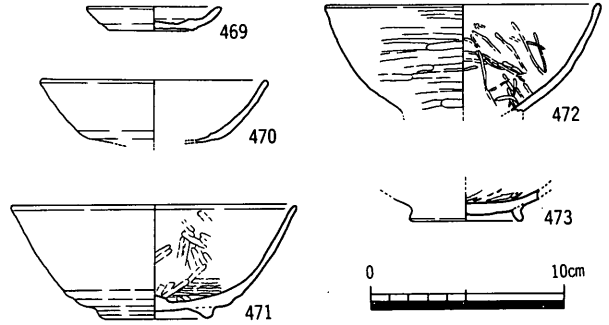
第125図 S B 14 平面・断面図

積土は明灰色シルト質土である。S B 14に関連すると思われる柱穴の多数から遺物が出土しているが、いずれも図化不能の細片である。土師器の杯、小皿片・土師器碗の高台部分の破片・土師質土釜の脚部の破片・器種不明の土師質土器、須恵器、瓦質土器の破片が出土している。

⑤ O-37, 38区の柱穴出土の遺物

S B 12~14に直接関わるとと思われる柱穴からは図化出来るような遺物に恵まれなかった。第126図は、S B 12~14の周辺の柱穴から出土した遺物実測図である。470はS A 04のS P 56 1から出土したもので瓦質土器の杯の破片と思われる。底部は回転ヘラ削り、板状圧痕が残

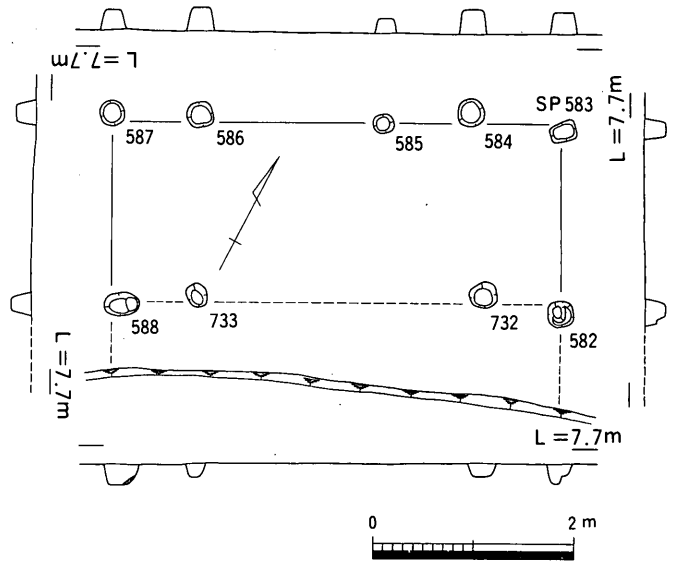
る。471はSB13の西北側にあるSP565から出土した内面黒色の黒色土器碗の破片である。やや摩滅している。見込み部に臍状の突出が残るのが特徴である。472も内面黒色の黒色土器碗である。SB13東側にあるSP529から出土した。外面は3～4mm幅の横方向のヘラミガキ、内面は不定方向にヘラミガキが施されている。473も内面黒色の黒色土器碗の底部破片である。SA03のSP489から出土したものである。



第126図 SB12～14周辺
柱穴出土の遺物実測図

(12) SB15 (第127図)

N-37, 38区で検出した掘立柱建物である。柱の配列から見て東西棟よりも南北棟になる確率が高いと思われ、建物南半は調査区外にのびるものと思われる。主軸方位はN-25°-Wで、床面積は8.3m²以上を測る。柱穴の掘り方は一部楕円形のものがあるが、大半は円形で、径は23～30cm程である。埋積土は灰色シルト質土、灰色粘質土など一定しない。SP584、586、587から遺物が出土している。図化していないが587は土師器の小皿か杯、他は器種不明の土師質土器の細片である。

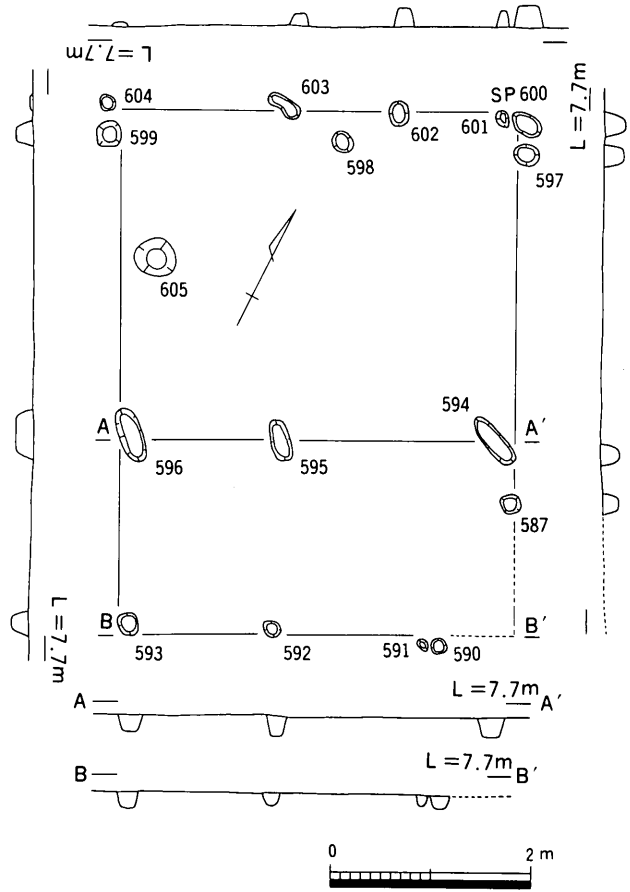


第127図 SB15 平面・断面図

(13) SB16 (第128図)

N-37, 38区の西南隅で検出した掘立柱建物である。調査区隅のため建物は調査区外に広がる可能性が高く、桁行の方向はわからないが、軸はN-26°-WもしくはN-64°-Eの方で

ある。床面積は19.7m²以上を測る。柱穴の掘り方は円形のものが多いが、一列は楕円形である。円形のものには径は18~28cm程、楕円形のものには長径33~58、短径20~23cm程度である。埋積土は灰色粘質土および灰色極細砂質土である。SP589、605から遺物が出土している。いずれも図化していないが、土師質土釜の鏝の破片、土師器の器種不明の細片である。

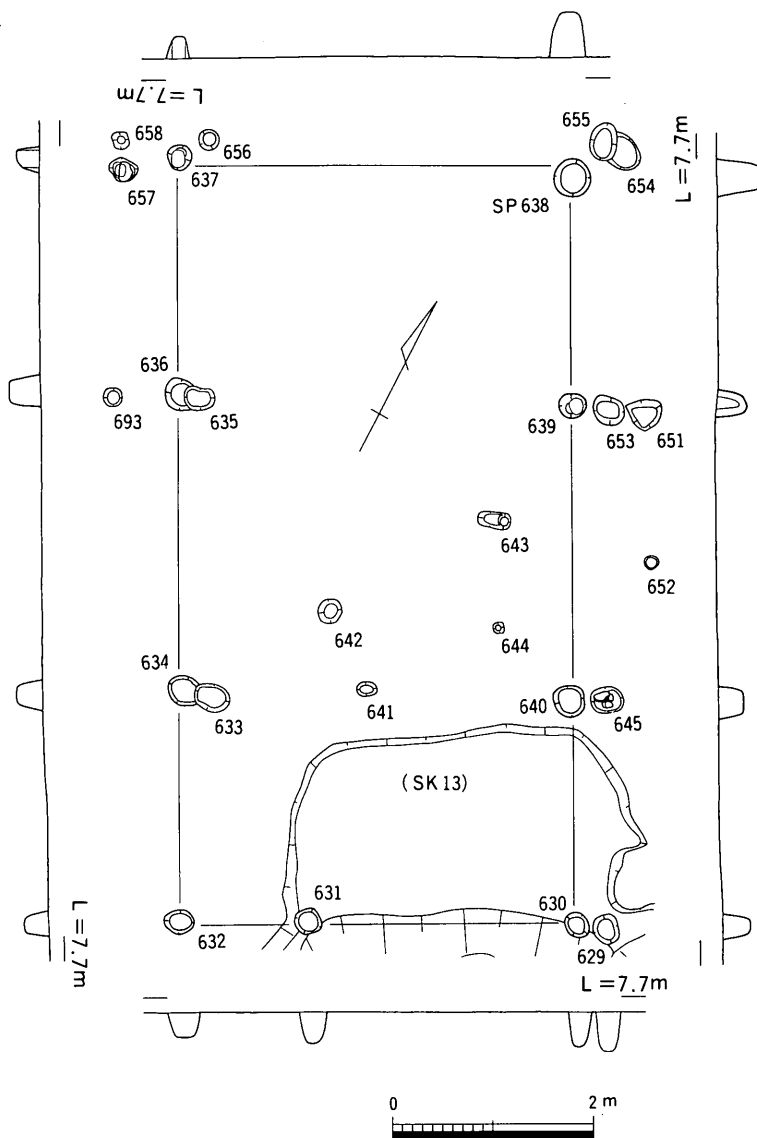


第128図 SB16 平面・断面図

(14) SB17・20 (第129~131図)

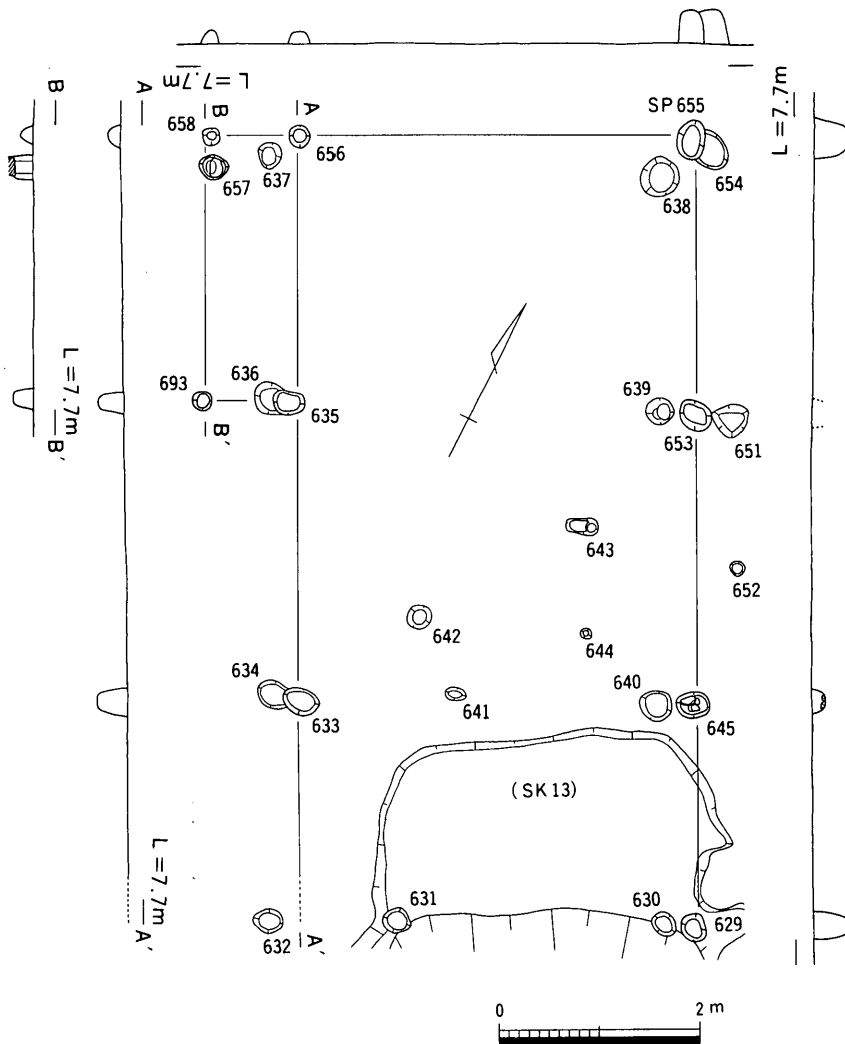
N-37, 38区で検出した南北棟の掘立柱建物である。SB17とSB20は柱穴の芯芯で約30cmずれる位置で、ほぼ同一規模の二棟の建物に復元される。二棟の柱穴は、埋積土においては差が無いが、切り合い関係がある。先に建てられたSB17は、梁行一ないし二間(3.9m)、桁行三間(7.4m)の規模で、主軸方位はN-27°-E、床面積29.6m²を測る。SB20は南端の柱穴がSK13によって壊されている可能性があり、本来の規模は不明であるが、梁行一間(4.0m)、桁行三間(7.7m)以上の規模で、西北隅に張り出し部をもつ。主軸方位はSB17と同一で、張り出し部を含めた床面積は33.0m²を測る。SB17、20の柱穴はともに概ね円形で、埋積土は灰色シルト質土と明灰色極細砂質シルトであり、SB17と20の埋積土に相違は認められない。径は30cm台のものが多い。

第131図474~480はSB17、20関係の柱穴から出土した遺物実測図である。478がSB17、479がSB17の至近にある柱穴から出土した遺物で、それ以外はSB20関係の遺物である。

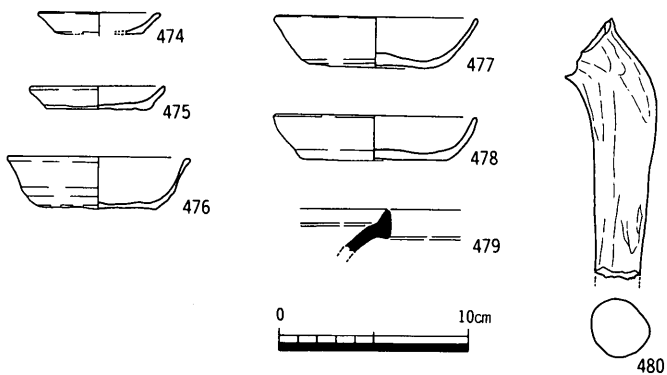


第129図 SB17 平面・断面図

474、475は土師器の小皿の破片である。外上方にのびる口縁をもつ。476～478は土師器杯である。478はほぼ完形で出土した。ともに底部は回転ヘラ切りで、476、477には板状圧痕が残る。478はやや摩滅している。479はSB17、20の東側至近のSP646から出土した東播系の須恵器のこね鉢の口縁と考えられるものである。480は土師質土釜の脚部の破片である。図化遺物の他に四つの柱穴から遺物が出土している。SB17、SB20に伴うもの、いずれに属するのか不明のものがあるが、いずれも土師器の杯か小皿と考えられる小片が出土してい



第130図 S B 20 平面・断面図



第131図 S B 17・20およびその周辺 出土遺物実測図

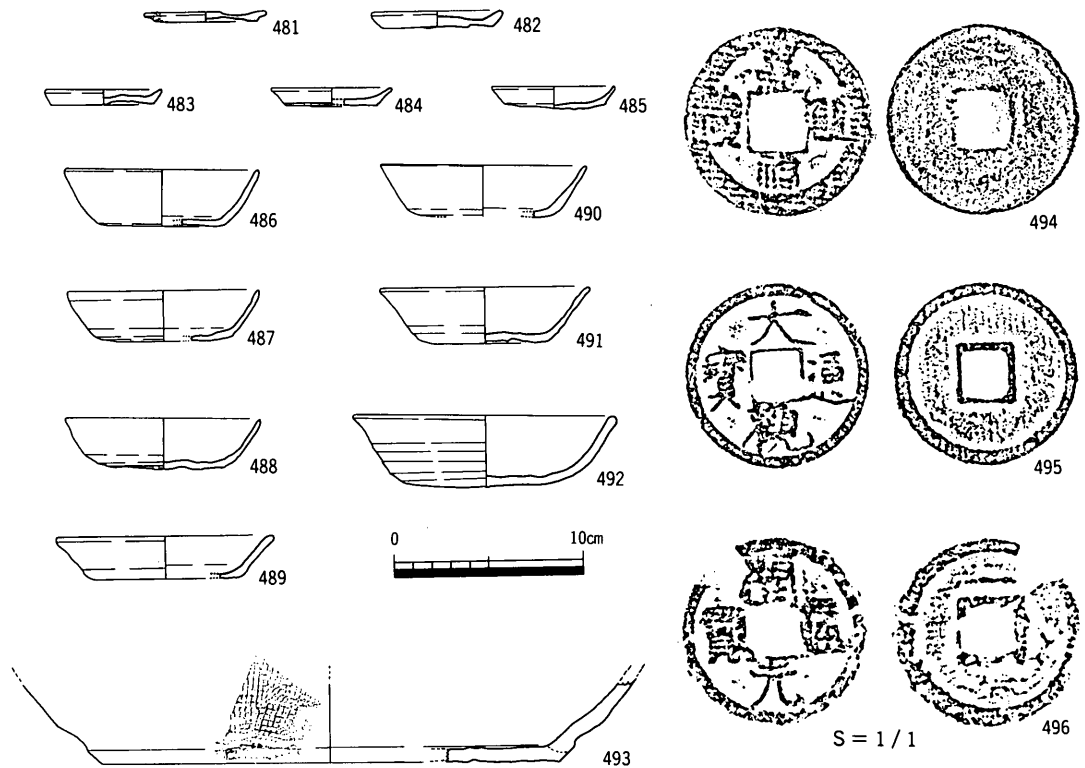
る。

なお、S B 17、20とS K 13は
切り合い関係からS K 13の方が
新しい。

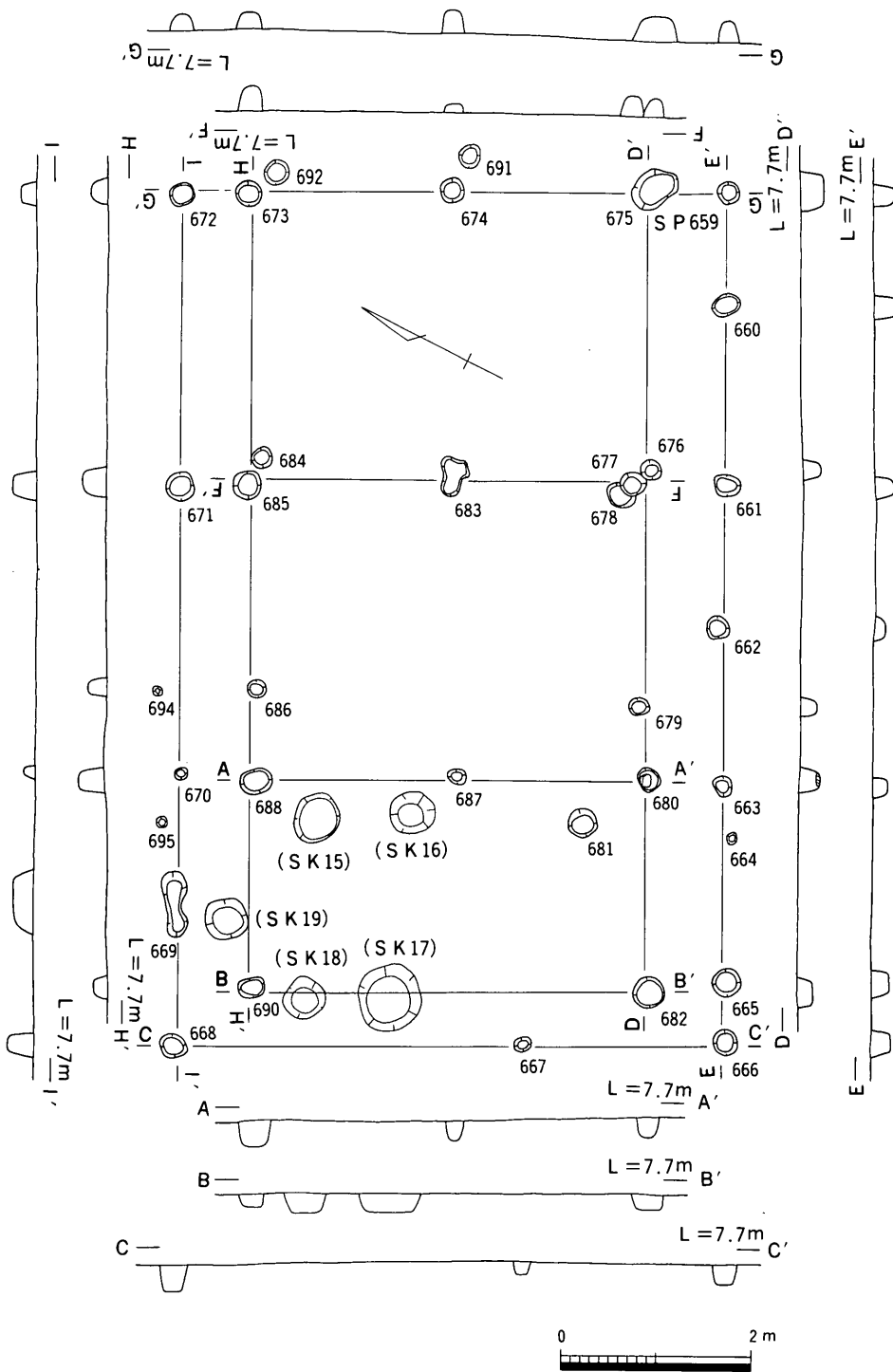
(15) S B 18 (第132、133図・図版27～29)

N-37, 38区で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行二間(4.15m)、桁行四間(8.4m)の規模で、北西南面に廂をもつ。主軸方位はN-62.5°-E、廂部分を含めた床面積は51.2m²を測る。S P 674-683-687が棟持柱になるものと思われる。また、S B 18の西端付近にはS K 15~19の五つの土坑を検出している。これらはS B 18に伴うものと考えられる。柱間は梁行が1.95~2.15m、桁行は西から2.2、0.8、2.5、2.9mを測る。柱穴の埋積土は明灰色極細砂質シルトか灰色シルト質土である。柱穴の掘り方は、一部不定形のものがあるが、概ね円形である。径は15~40cmで、25~35cm程のものが多い。

第132図はS B 18関連の柱穴、土坑から出土した遺物の実測図である。481~485は土師器小皿である。481、485は完形で482、483はほぼ完形で出土した。口径は6.0~6.4cm、底部はすべて回転ヘラ切りである。薄手や厚手のつくりのものがある。486~491は土師器杯である。このうち488はS P 682の柱痕中から底部を上にした状態で出土した(図版29②)。柱抜き取り時に杯を伏せ置いたものと理解される。486~491の杯は、いずれも底部は回転ヘラ切りで、口縁が内湾気味にのびるものと外湾気味にのびるものがある。492は瓦質土器の杯である。

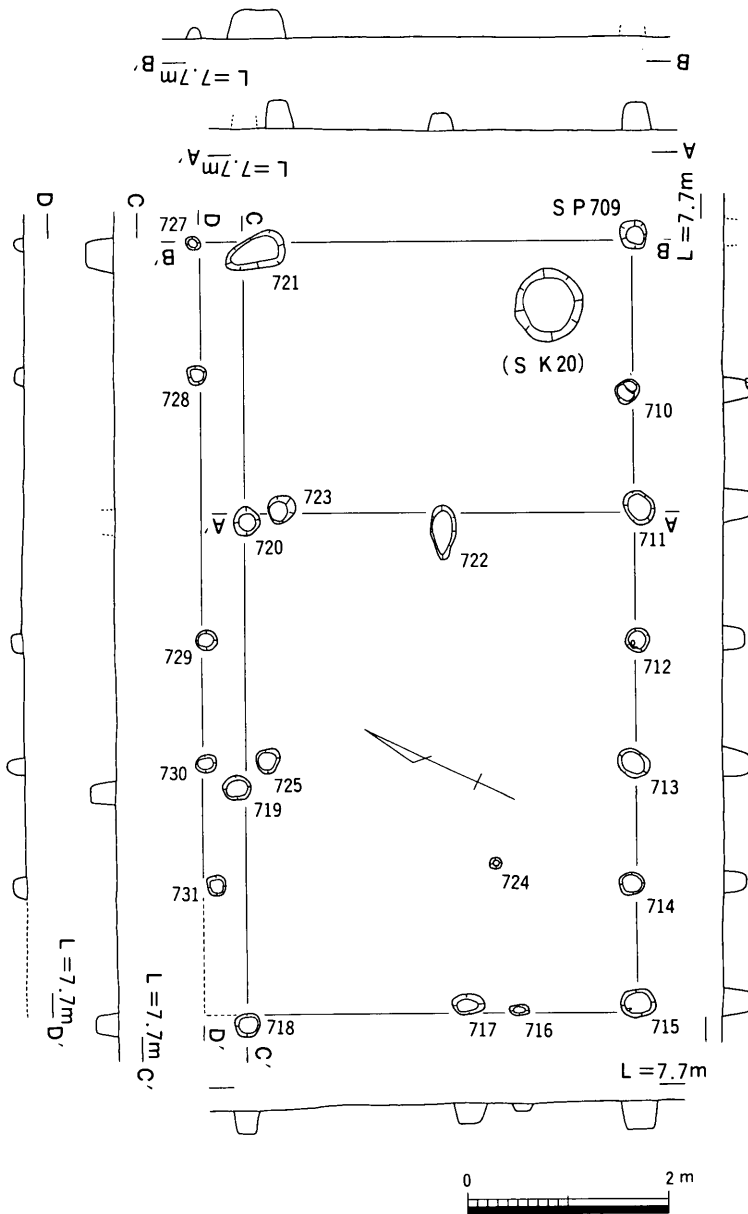


第132図 S B 18 出土遺物実測図



第133图 SB18 平面·断面图

外上方にのびる口縁を有する。底部と体部の境界は不明瞭、底部は回転ヘラ切りの後ナデられている。板状圧痕が残る。493は瓦質土器の甕底部の破片である。平底を呈し、体部外面には2～3mm目の格子目叩き、内面は同心円状のあて貝痕がナデられ、同心円文はほとんど消されている。岡山県の亀山焼の製品である。494～496は銅銭である。494は「嘉祐通宝」で1056年初鑄の宋銭である。495は「大觀通宝」で1107年初鑄の宋銭である。496は「開元通宝」

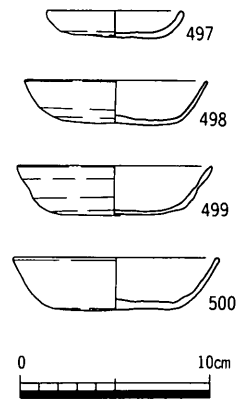


第134図 SB19 平面・断面図

である。「開元通宝」は唐代のものや五代十国代のものなどがあるが、いずれに該当するかは分からない。この他にS B 18からは土師器の杯、小皿・土師質土釜の脚部・器種不明の土師質土器の細片が出土している。また、S P 672には柱材が遺存しており、分析の結果マキ属の一種に同定されている。

(16) S B 19 (第134、135図・図版30、31)

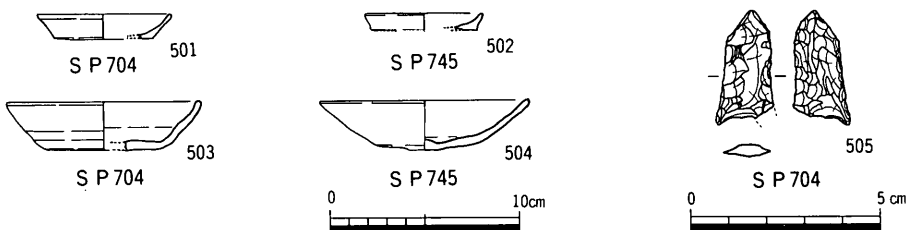
N-37, 38区で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行一ないし二間(3.9m)、桁行三間(7.5m)の規模である。北面に張り出し部があり、北側桁行と張り出し部の柱が、南側桁行の柱に対応する関係にある。主軸方位はN-65° -E、張り出し部を含めた床面積は32.0㎡を測る。建物西側には雨落ち溝と考えられるS D 35が、建物内部の東南隅付近にはS B 19に伴うと考えられるS K 20がある。柱穴の埋積土は灰色シルト質土を中心に明灰色極細砂質シルトなどからなる。柱穴の掘り方は一部楕円形のものがあるが、概ね円形で、径は25~35cm程である。S K 20の他に八つの柱穴から遺物が出土した。第135図はS B 19出土の遺物実測図である。497は土師器小皿、完形で出土した。厚手なつくりで内湾気味の口縁を有する。498~500は土師器杯である。498、499はS K 20から出土したもので、ともに完形のものである。この他にS B 19からは須恵器の椀か杯、須恵器の甕、器種不明の土師質土器の破片が出土している。



第135図 S B 19
出土遺物実測図

(17) その他の柱穴から出土した遺物 (第136図)

第136図は復元した掘立柱建物に関連する柱穴以外の柱穴から出土した遺物の実測図である。501、502は土師器小皿、503、504は土師器杯である。504の杯は歪んでいる。505は凹基式の石鏃である。風化している。



第136図 その他の柱穴出土の遺物実測図

(18) S A 01～05

① S A 01 (第137図・図版32)

N-39～42区で検出した十柱穴からなる柵列である。全長約19mである。南側にS B 05、06が存在するが、柱穴が三者のどれに属するのか不明確である。柵列は概ね直線で、方位はN-29.5° -Wを測る。柱穴間の距離は1.6～2.55mで、柱穴埋積土は明灰色極細砂質シルトである。柱穴掘り方は円形ないし楕円形で、長径は18～28、短径は10cm前後である。柱穴から遺物は出土しなかったが、S B 05、06をはじめ周辺の中世の遺物を出土する柱穴と埋積土が同一であるため当該期の遺構と推定される。

② S A 02 (第137図)

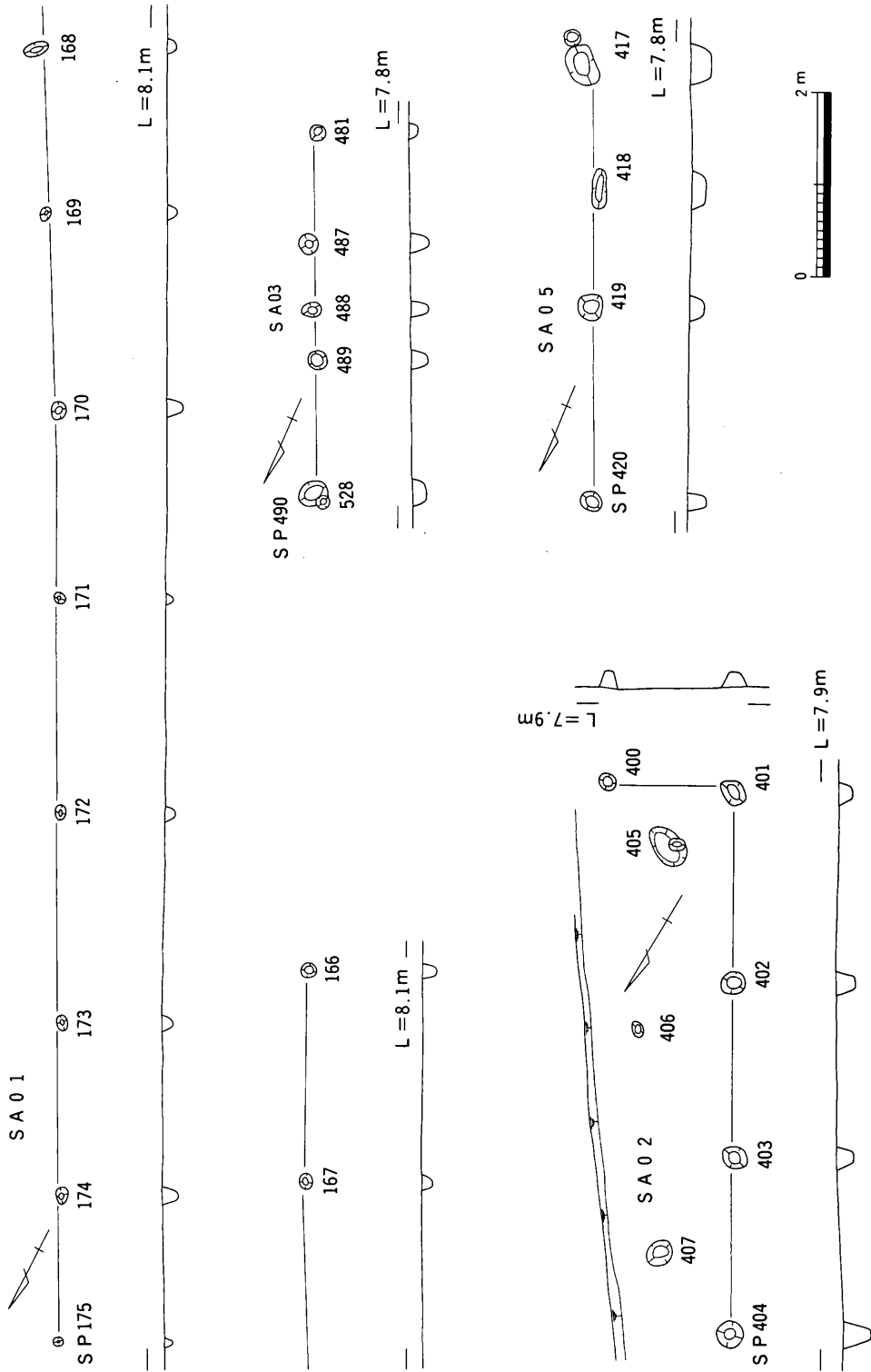
O-37, 38区の東南端で検出した五柱穴からなる柵列である。4柱穴が直線に並び直角に折れて1柱穴がある。調査区の隅にあたるため掘立柱建物に復元される可能性がある。柱穴の間隔は4柱穴間は1.9～2.1m、屈曲部は1.4mを測り、4柱穴の方位はN-30.5° -Wを測る。柱穴の掘り方は概ね円形で、径は15～30cmを測る。埋積土は明灰色シルト質土である。遺物は出土しなかったが、周辺の柱穴の埋積土との関連から中世に属するものと推定される。

③ S A 03 (第137図)

O-37, 38区で検出した五柱穴からなる柵列である。全長約3.7m、方位はN-26° -Wを測る。柱穴の間隔は北から1.2、0.54、0.7、1.2mと不揃いである。柱穴の掘り方は円形ないし楕円形で長径は18～30cm、短径は13～21cmを測る。埋積土は明灰色シルト質土である。S P 489から遺物が出土している(第126図473)。内面黒色の黒色土器碗の底部の破片である。

④ S A 04 (第124図)

O-37, 38区で検出された。S B 13の東面、北面と西面の一部を圍繞する柵列で十一の柱穴からなる。S B 13の東面とは約0.7m、北面とは約0.5m、西面とは約0.9m離れた位置にあり、全長約15mを測る。S A 04は、S B 13の廂部分の可能性もあるが、西側が途中で途切れていること、S B 13の柱穴の配置との関係が不整合であると考えられることから柵列と推定した。柱穴の間隔は北面側が3.2、1.9mで、東西側は0.4～1.7mと不揃いである。柱穴埋積土は明灰色シルト質土である。柱穴掘り方は円形のものが多く、径は15～40cmを測る。3つの柱穴から遺物が出土している。第126図470はS P 561から出土した瓦質土器の杯の破



第137图 SA 01~03·05 平面·断面图

片である。底部は回転ヘラ切り、板状圧痕が残る。この他に図化していないが土師器小皿の小破片が出土している。

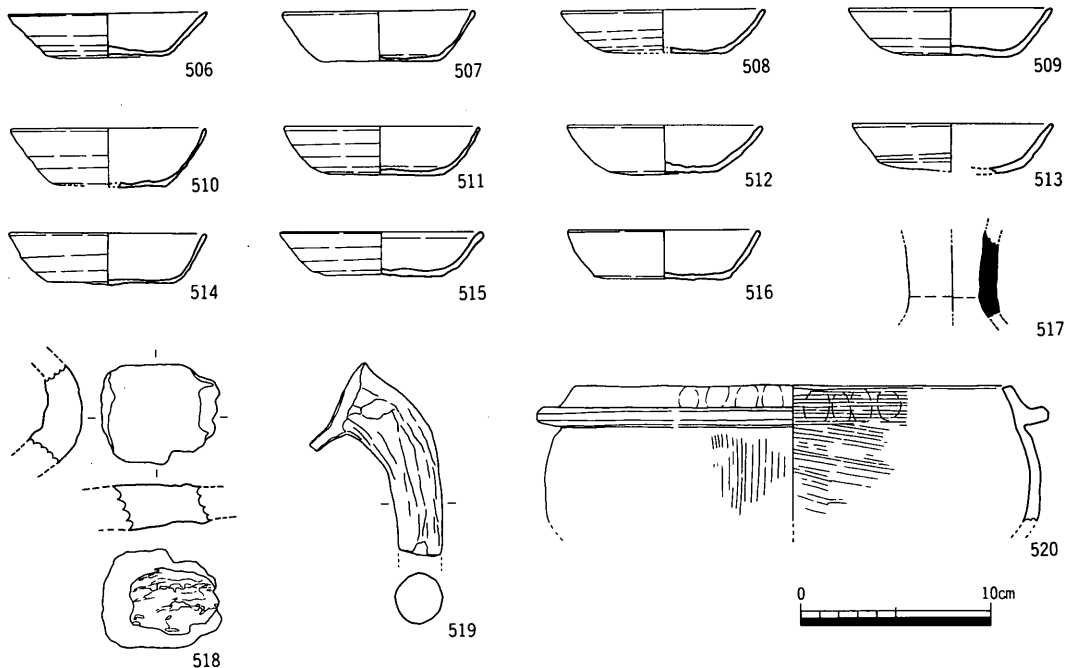
⑤ SA05 (第137図)

O-37, 38区の西南で検出した四柱穴からなる柵列である。全長約4.8m、方位N-24° - Wを測る。北へ1m離れたSB14のSP421とも柱穴の配置が並ぶため、ここまで延びている可能性がある。柱穴の間隔は北から2.1、1.3、1.4mで、柱穴の掘り方は円形ないし楕円形である。楕円形のは長径45cm、短径18、24cm程で、円形のは30cm程と不揃いの大きさである。埋積土は明灰色シルト質土である。SP417から遺物が出土している。図化していないが、土師器の杯の口縁部の小破片である。

2. 土坑・性格不明遺構

(1) SK05 (第138、139図・図版32)

N-39~42区のN-41グリッドで検出した土坑である。平面形はやや不整な長方形を呈するものと思われる。西側は弘光10トレンチで壊されているが、調査区西端の壁面にSK05の断

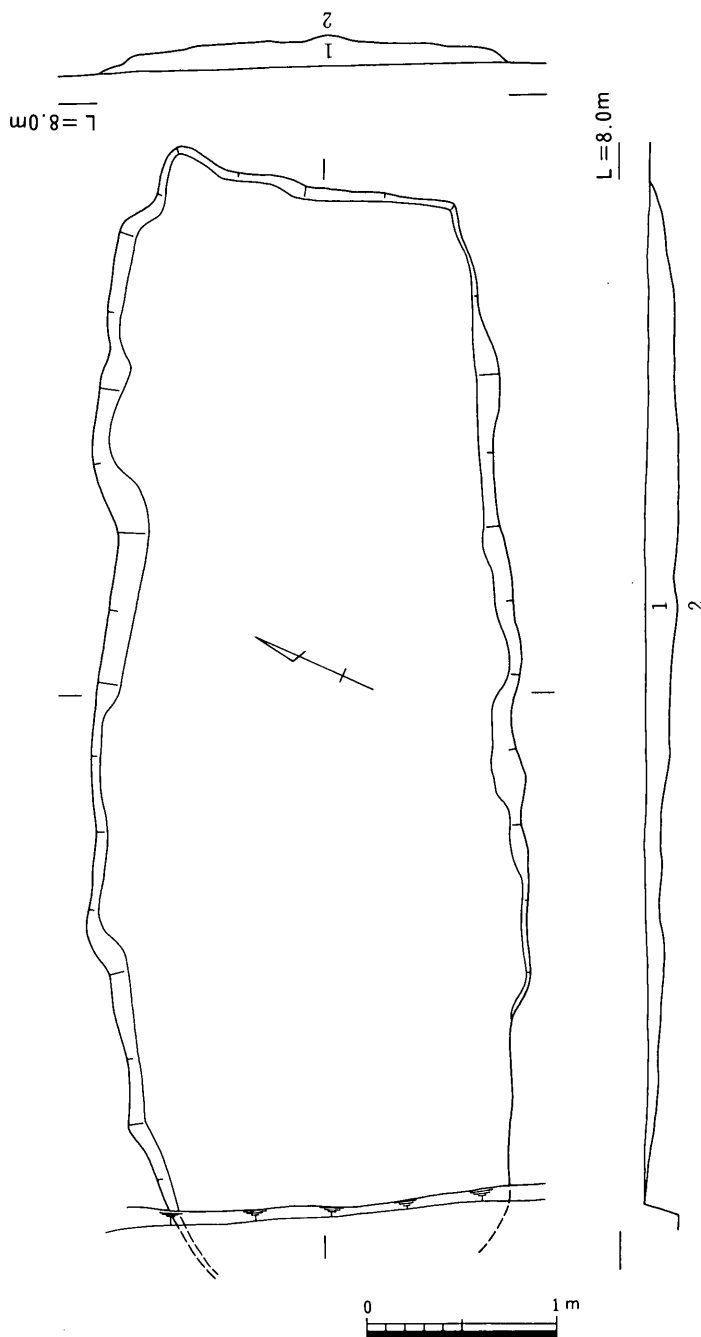


第138図 SK05 出土遺物実測図

面がかからないことから、長軸は現存の5.4m以上で6.2m以内、短軸は2.2m程の規模である。軸方位はN-63.5°-Eを測る。深さは最深で20cm、極めて緩やかな皿状の断面形を呈する。埋積土は灰色粘質土一層である。

S K05からは28混入りコンテナ1/3箱と他と比較して多くの遺物が出土している。すべてが土器片で土師器の杯が圧倒的に多く、そのうちには完形のものも多く含まれている。遺物は乱雑な状況で出土し、廃棄されたものと推定される。

第138図はS K05出土の遺物実測図である。506～516は土師器杯である。口径10cm内外、器高2.2～2.7cmを測る。底部はすべて回転ヘラ切りで、板状圧痕の認められるものがある。517は須恵器の長頸壺の頸部の破片と考えられるが、小片のため特定は出来ない。また、図の天地も検討の余地を残す。摩滅している。518



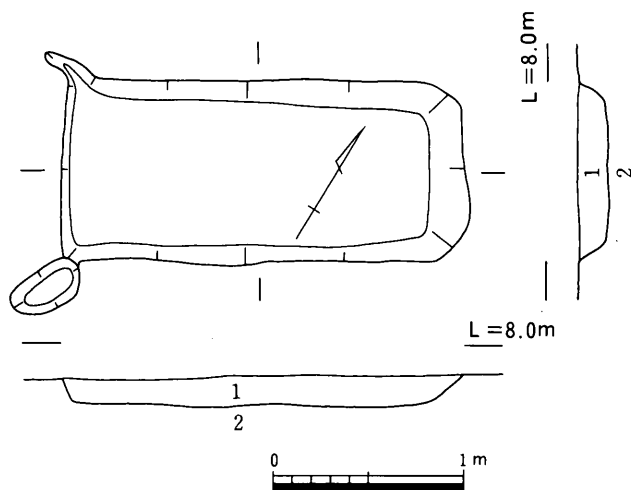
- 1 灰色粘質土 (Fe, Mn 含)
- 2 明灰色粘質土 (Fe, Mn 多含、地山)

第139図 S K05 平面・断面図

は土師質でふいごの羽口かと思われる粘土塊である。摩滅している。519は土師質土釜の脚部である。体部との接合部にはハケを施している。520は土師質土釜の破片である。形態からみて脚部が付くものと思われる。この他にS K05からは図化していないが、土師器杯・小皿の破片、土師質土釜の破片、器種不明の須恵器片が出土している。

(2) S K06 (第140、141図・図版33)

N-39~42区のN-40グリッドで検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、西端は片方はヒレ状に突出し、片方には柱穴が重複している。柱穴とS K06との前後関係は明らかに出来なかった。長軸は2.1m、短軸は0.95m、深さ0.16mを測る。断面は比較的急傾斜の掘り込みをもち、平坦な底部を有する皿状を呈する。長軸の方位はN-58° - Eを測り、周囲の掘立柱建物などの方位と概ね合致している。埋積土は灰色極

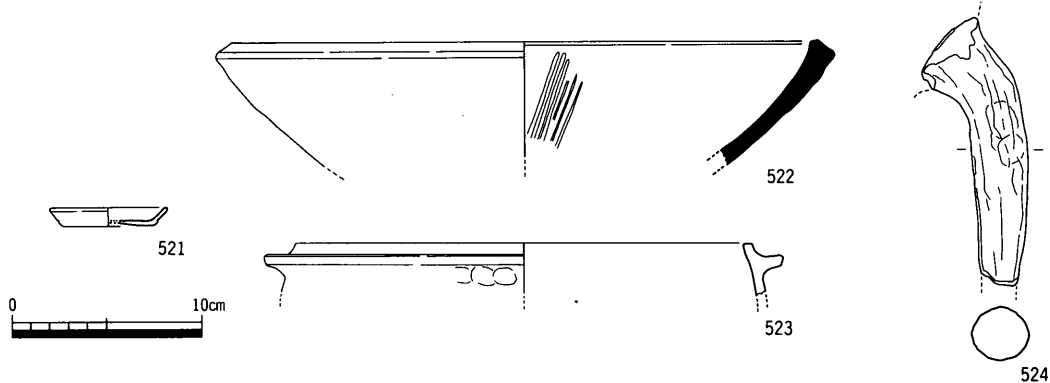


- 1 灰色極細砂質シルト質土
 { 明灰色粘土のブロック含、Fe.Mn 含 }
 { 2mm厚の暗灰色粘質土のバンドあり }
- 2 明灰色粘質土 (Fe.Mn 含、地山)

第140図 S K06 平面・断面図

細砂質シルト質土で、その中に2mm程の厚さの暗灰色粘質土のバンドが挟在している。墓の可能性を考えて精査したが詳細はわからなかった。

第141図はS K06出土の遺物実測図である。521は瓦質土器の小皿と考えられる。522は備前焼のすり鉢の小破片である。口縁上面を斜めに切ったように作っている。備前焼III期に属



第141図 S K06 出土遺物実測図

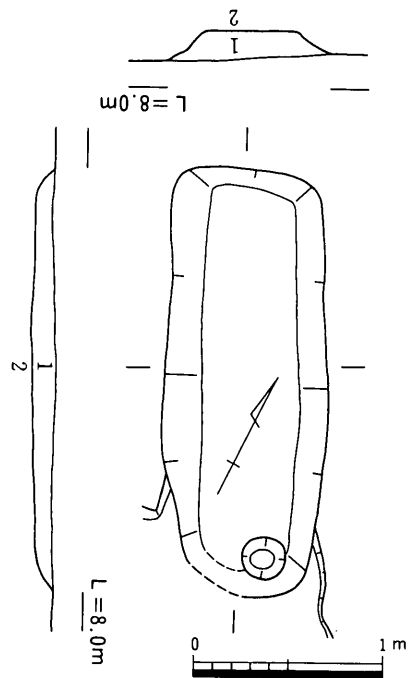
するものと思われる^(注)。523は土師質土釜の口縁部小片である。鏝下面には鏝接合の際の指おさえの跡が顕著に残っている。524は土師質土釜の脚部である。S K06からは図化した遺物の他に、器種不明の瓦質土器片・土師質土器片、土師質土釜の脚部破片が出土している。

(注) 間壁忠彦『備前焼 考古学ライブラリー60』1991

ニュークリアサイエンス社

(3) S K07 (第142図)

N-39~42区のN-40グリッドで検出した土坑である。平面形は楕円に近い隅丸の長方形で、長軸2.3m、短軸0.85mを測る。S K07はS X04の埋積土を除去した後に検出したもので、検出面からの深さは0.12m程度で、断面形は浅い皿状を呈する。長軸の方位はN-28°-Eで、周囲の掘立柱建物の方角と概ね合致している。図化できた遺物はないが、土師器小皿の小片、土師器杯か小皿の小片、器種不明の須恵器および瓦質土器の小片が出土している。



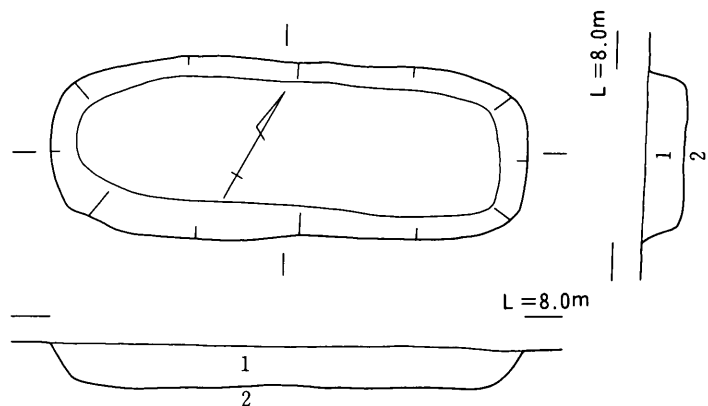
- 1 明灰色シルト質土 (Fe, Mn わずか含)
- 2 明灰色粘質土 (Fe, Mn 含、地山)

第142図 S K07 平面・断面図

(4) S K08

(第143図・図版34)

N-39~42区のN-40グリッドで検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長軸2.52m、短軸0.9mを測る。深さは0.22mで急傾斜に掘り込み平坦な底部をもつ。埋積



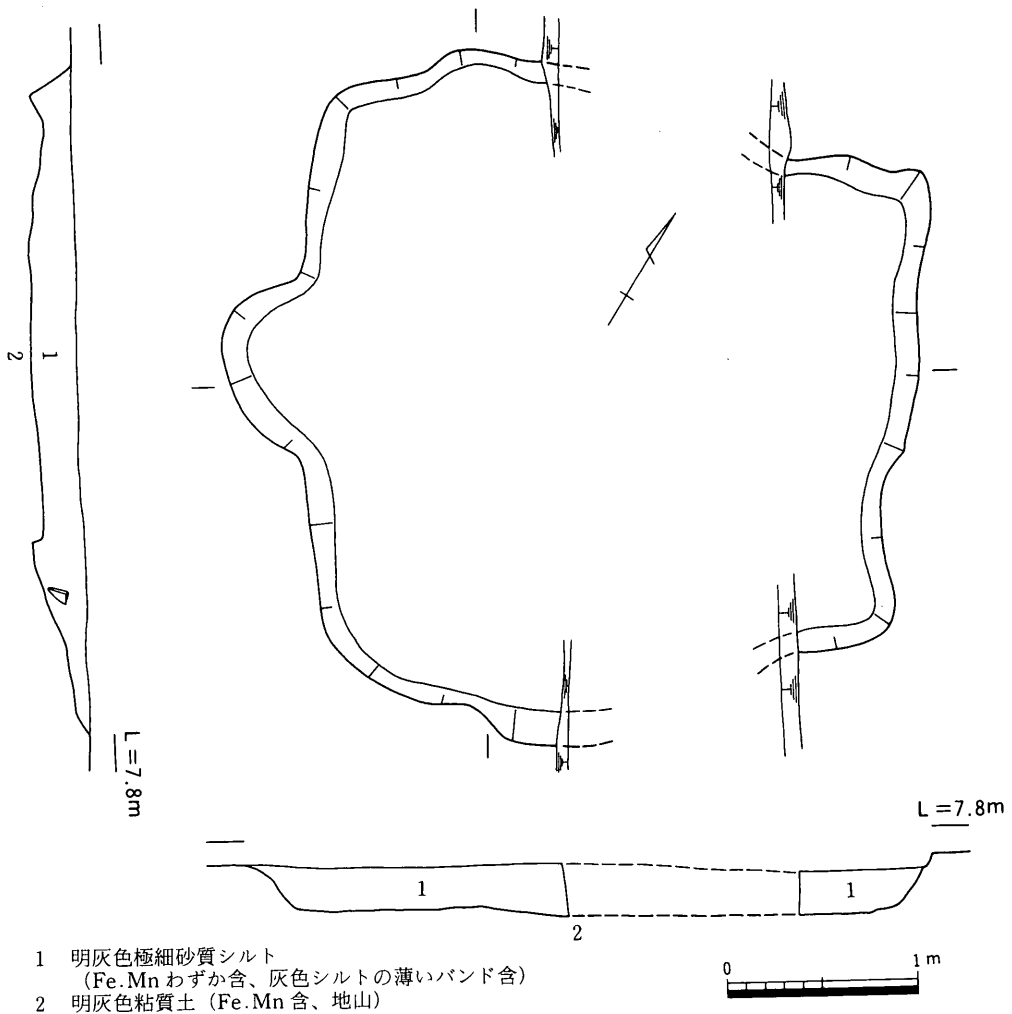
- 1 明灰色シルト質土 (Fe, Mn 含、明灰色粘質土のブロック含)
- 2 明灰色粘質土 (Fe, Mn 含、地山)

第143図 S K08 平面・断面図

土は灰色シルト質土で、その中に下層の明灰色粘質土が塊状に混ざっている。このことから人為的に埋め戻した可能性が考えられる。墓の可能性を考えて精査したが、詳細は不明である。遺物は出土しなかった。長軸の方位がN-60°-Eを測り、周囲の方位の分かる中世遺構と概ね合致していることから当該期の遺構と考えられる。

(5) SK09 (第144、145図・図版34)

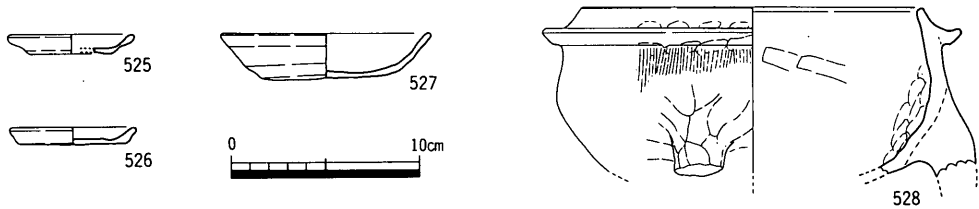
O-37, 38区で検出した土坑である。平面形は不定形で、東西幅3.5m、南北幅3.4m程の規模である。比較的急傾斜で掘り込んでおり、断面形は逆台形状を呈する。深さは25cmで、埋



第144図 SK09 平面・断面図

積土は灰と考えられる灰色シルトのバンドが散見される明灰色極細砂質シルトである。S K 09は廃棄土坑と考えているが、遺物は僅かに出土しただけである。

第145図はS K 09出土の遺物実測図である。525、526は土師器小皿の破片である。525は口縁が玉縁状に膨らんでいる。527は土師器杯である。ほぼ完形である。底部は回転ヘラ切りの後ナデ、板状圧痕が認められる。528は土師質土釜の破片である。外面には煤が付着している。鏝下面、体部内面の脚部を接合している付近は、顕著に指おさえの跡が認められる。この他にS K 09からは土師器杯、器種不明の須恵器・土師質土器の小片が出土している。

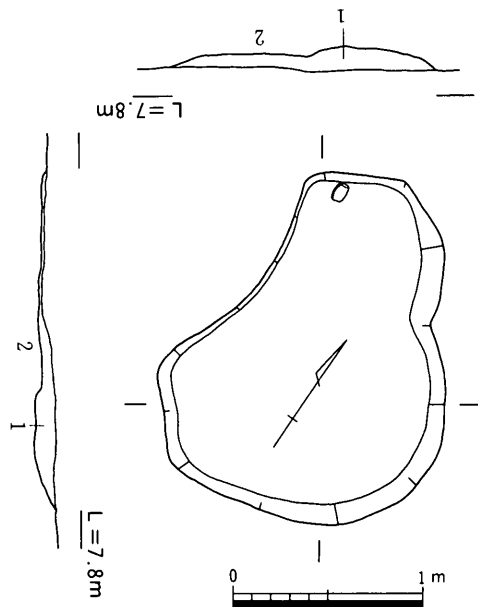


第145図 S K 09 出土遺物実測図

(6) S K 10 (第146、147図・図版35)

O-37, 38区で検出した土坑である。長軸が「L」字を呈する楕円形とでもいふべき不定形の平面形を呈する。東西幅1.3m、南北幅1.9m程の規模である。深さは10cm程で、きわめてなだらかな皿状の断面形を呈する。埋積土はS K 09と同一で、灰ではないかと思われる灰色シルトのバンドがインボリューション状に混じる、明灰色極細砂質シルトである。廃棄土坑の可能性を考えているが、出土遺物は僅かである。

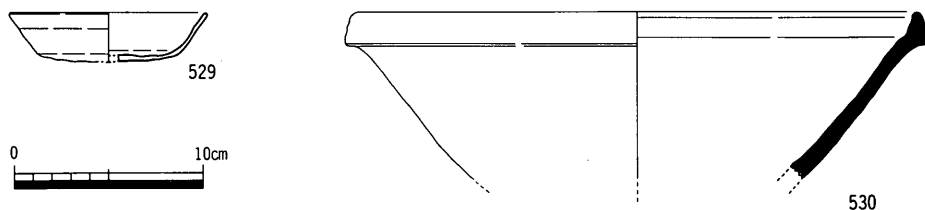
第147図はS K 10出土の遺物実測図である。529は土師器杯である。薄手のつくりで、底部は回転ヘラ切りの後ナデている。530は須恵器こね鉢の破片である。軟質な焼き上がりである。東播系の製品と考えられる。S K 10で



- 1 明灰色極細砂質シルト (Fe. Mn わずか含、灰色シルトの薄いバンド含)
- 2 明灰色粘質土 (Fe. Mn 含、地山)

第146図 S K 10 平面・断面図

はこの他に土師器の杯・小皿、器種不明の土師質土器の小片が出土している。



第147図 S K 10 出土遺物実測図

(7) S K 13 (第148～150・図版35、36)

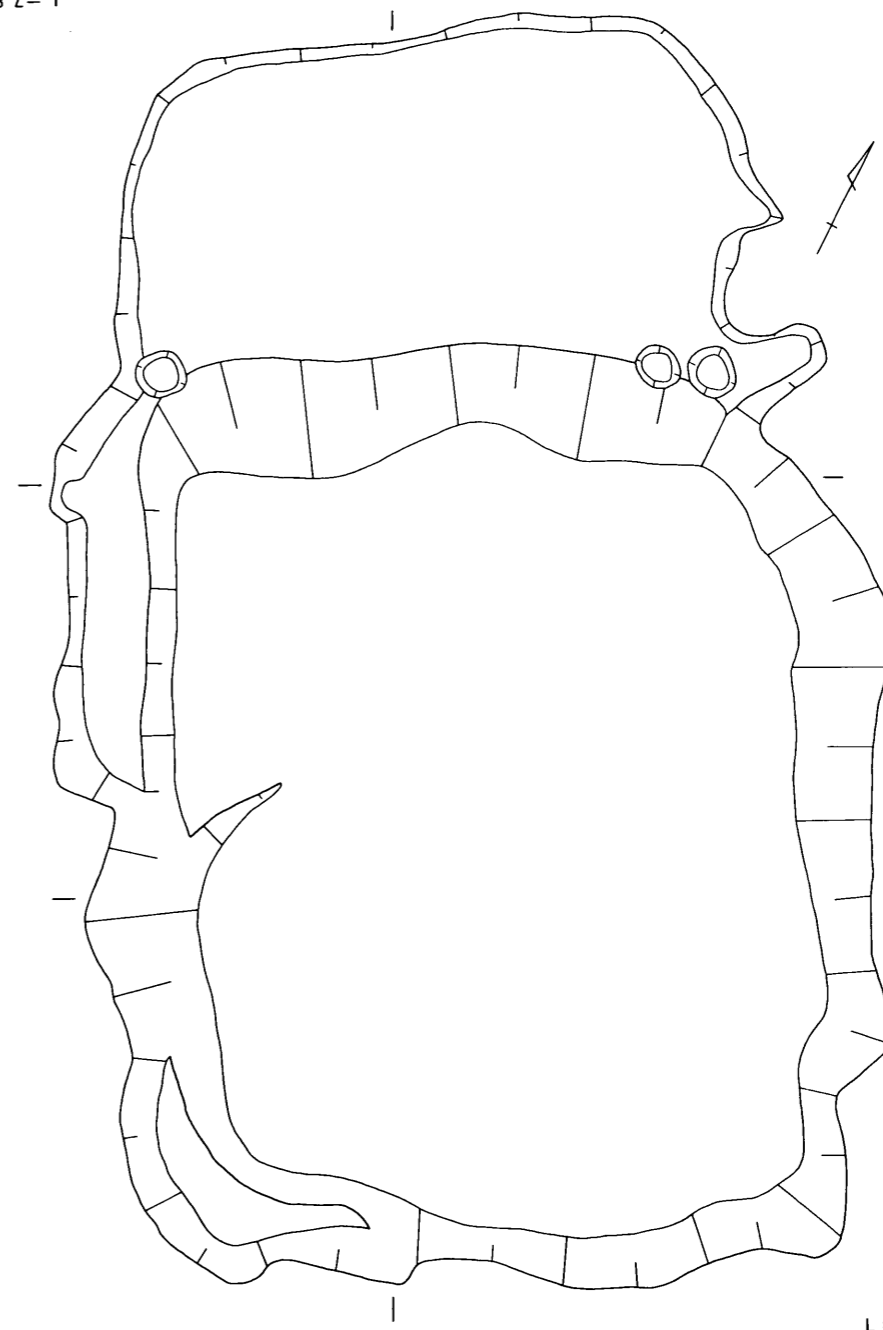
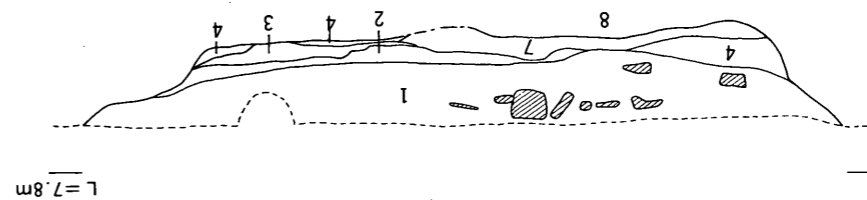
O-37, 38区で検出した土坑である。平面形は巨視的には隅丸の長方形を呈する。軸はおおよそN-28.5°-Wである。北側では0.1m程の深さで、途中からさらに0.5m程掘り込んでおり、浅い部分を含めた長軸幅は約6.8m、短軸幅は約4.5mを測る。深い部分の長軸幅は約5.0mである。埋積土は数層に細分される。下層には小礫を含む灰色砂や灰と考えられる黒灰色シルト質土が、上層には灰色極細砂質土が堆積する。灰色極細砂質土層には多量の自然石が包含されていた。これらは第148図に示す通りで、意図的に配置したのではなく廃棄したと考えられる出土状況である。石材は大多数がサヌカイトを含む安山岩の角礫で、一割程度が砂岩の円・垂円礫、ごく少数が凝灰岩・花崗岩である。これらの半分近くは煤などが付着しており火を受けたものと判断される。遺物は28リ入りコンテナ1/2箱出土している。出土状況は破片が乱雑に出土する状況である。これらのことからS K 13は廃棄土坑と考えられる。

第149、150図はS K 13出土の遺物実測図である。

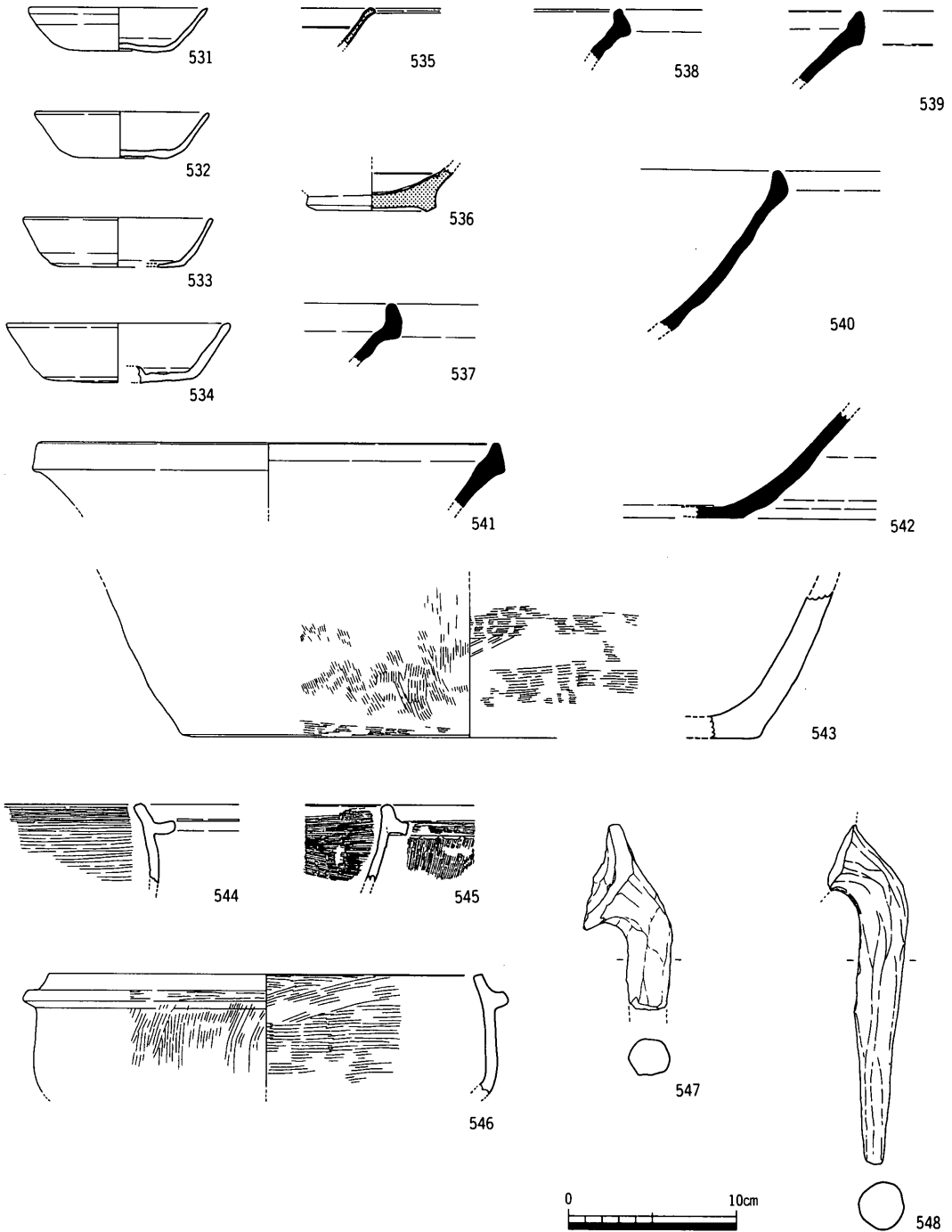
531～534は土師器の杯である。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕の認められるものがある。531はほぼ完形で出土した。また、534は復元径13.0cmを測り、本遺跡のなかでは大型である。535、536は白磁である。535は碗の口縁部の破片と思われる。端部を外反させて丸くさせている。内面には不明瞭であるが、一条の沈線が巡っている。灰白色の胎土中には黒色の細粒が含まれている。以上の特徴から白磁碗Ⅴ類(註)に該当すると思われる。536は碗の底部の破片である。削り出し高台を有するが削り出しは僅かである。釉は内面のみ認められ、見込み部周囲に一条の沈線が巡っている。灰白色の胎土には黒色の細粒が含まれる。白磁碗Ⅳ類に該当すると思われる。537～542は須恵器こね鉢の破片である。537は極めて軟質な焼き上がり、538、539も軟質な焼き上がりである。542は底部の破片で、回転ヘラ切りされている。これらは東播系の製品であろう。

543は土師質の甕の底部の破片である。不明瞭であるが、内外面にハケが認められる。

- 1 明灰色砂質 (シルト質、Fe 含、Mn わずか含)
- 2 灰色砂質土 (極細砂質、Fe 含、Mn わずか含)
- 3 茶灰色砂質土 (極細砂質、Fe 多含)
- 4 暗灰色シルト質土 (灰と上層土との混じり)
- 5 黒灰色シルト質土 (灰)
- 6 灰色粘質土 (Fe、Mn 含)
- 7 灰色砂 (粗砂・小礫主)
- 8 明灰色粘質土 (Fe、Mn 含、地山)
(Fe、Mn わずか含、灰色シルトの薄いバンド含)

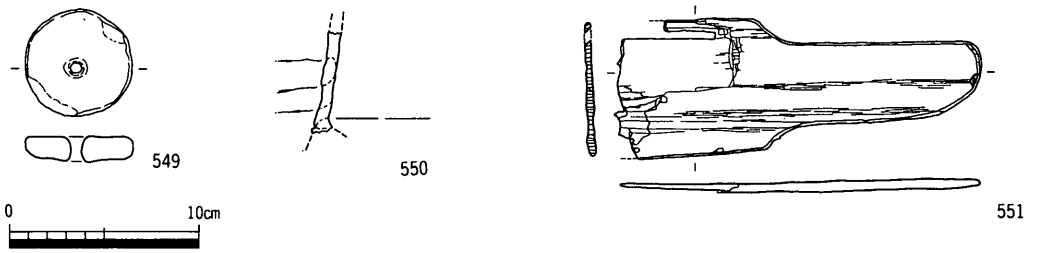


第148図 SK13 掘削状況 平面・断面図



第149図 SK13 出土遺物実測図①

544～546は土師質土釜の口縁部の破片である。544は内面にはハケが施されている。外面の鏝下半には煤が付着している。545、546は内外面にハケが施されている。546の鏝下半に



第150図 SK13 出土遺物実測図②

は煤が付着している。547、548は土師質土釜の脚部である。煤が付着している。549は紡錘車である。下層からの混入と考えられる。550は器種不明の土師質土器の小破片である。粘土帯を連ねて筒状にしたもので、一端は外方に屈曲している。551は木器である。杓文字と考えられる。スギ科の木材の柁目板を加工したものである。

SK13からは図化した遺物の他に、緑釉陶器の小破片の他、土師器の杯・小皿、須恵器の杯・鉢、土師質土釜の脚部片、弥生土器甕、器種不明の須恵器片・土師質土器片・弥生土器片が出土している。

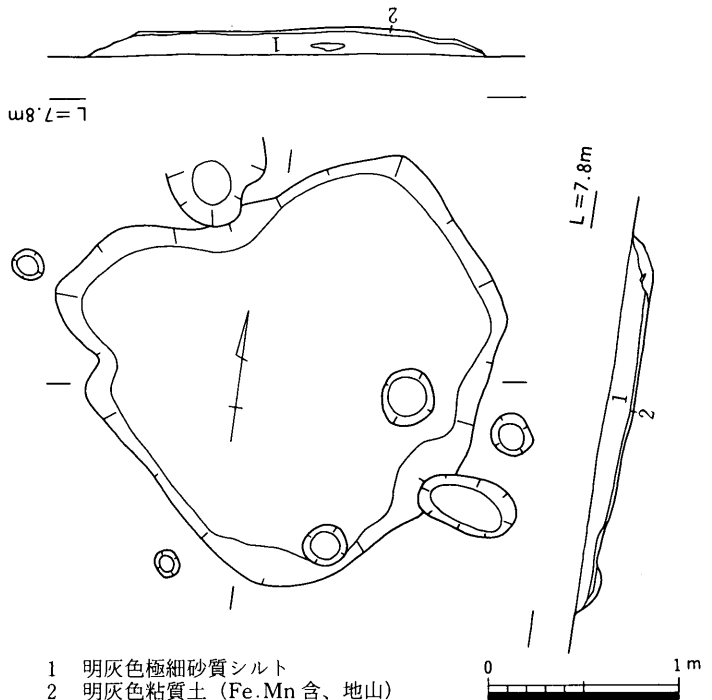
(注) 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 1978

(8) SK14

(第151、152図・図版37)

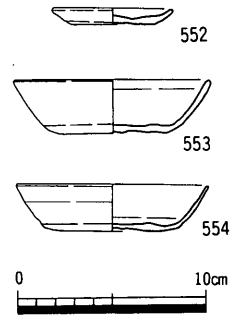
N-37, 38区で検出した土坑である。平面形は不定で東西幅約2.2m、南北幅約2.2m程度の規模である。深さは0.16m程で、断面形は浅い皿状を呈する。埋積土は下層の灰かと思われる明灰色粘質土層と上層の明灰色極細砂質シルト層の2層である。

第152図はSK14出土の遺物実測図である。



第151図 SK14 平面・断面図

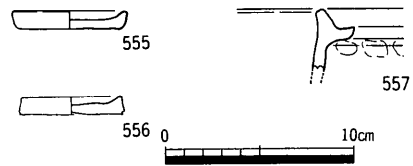
552は土師器小皿である。底部は回転ヘラ切り、板状圧痕が認められる。553、554は土師器杯である。553はほぼ完形で出土した。554の底部には板状圧痕が認められる。S K14からは図化した遺物の他に土師器の杯・小皿の破片、瓦質土器の杯か碗の破片、土師質土釜の破片、器種不明の須恵器片が出土している。



第152図 S K14
出土遺物実測図

(9) S X04 (第115、153図・図版23)

N-39~42区のS B08付近あるいはS B08に付随する深さ0.1m程の凹地である。西側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、検出部分では「コ」の字状の凹地となる。弘光10トレンチの西壁にはこの凹地が認められないため、S B08の西面付近で終わっている可能性が高い。埋積土は明灰色極細砂質土で、S B08の柱穴やS K07を覆っている。第153図はS X04出土の遺物実測図である。555、556は土師器小皿である。555は破片で復元径6.1cm、器高1.0cmを測り、本遺跡出土のものの中では小型品である。556も小型である。内傾気味に立ち上がる口縁を有する。557は土師質土釜の破片である。鏝下半に指おさえの跡が顕著に残る。図化していないがS X04からは、土師器の小皿の破片、瓦質土器の杯の破片、土師質土器のすり鉢の破片、土師質土釜の脚部の破片、器種不明の土師質土器・須恵器の破片が出土している。



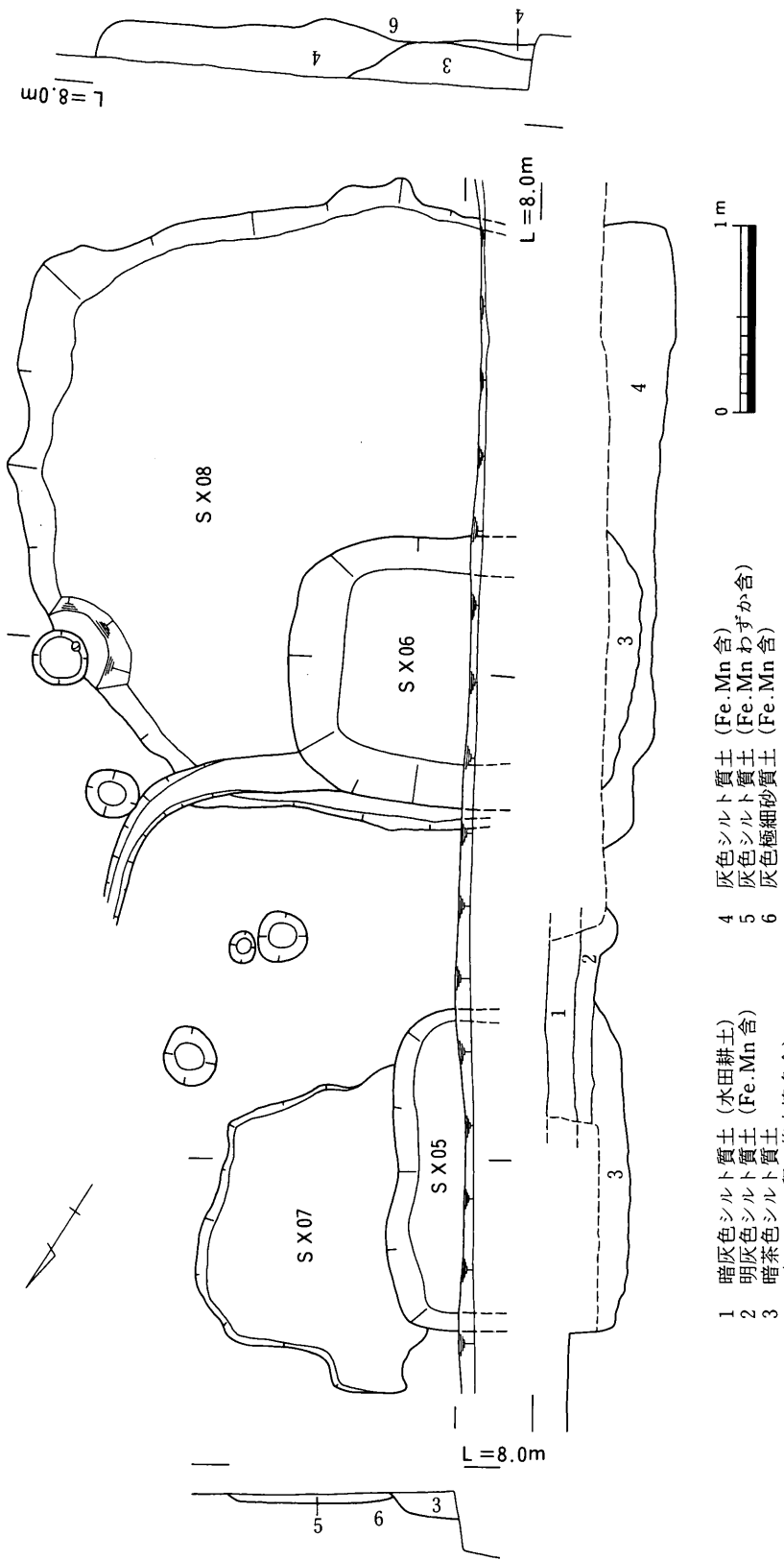
第153図 S X04
出土遺物実測図

(10) S X05 (第154、155図)

N-39~42区のN-40グリッドで検出した性格不明遺構である。大半が弘光10トレンチで壊されているため平面形は不明である。残存部は隅丸の方形を呈し、幅1.8m、深さ0.15mを測る。断面は皿状を呈する。なお、S X05は調査区西側の壁面にもかかっており、調査区の西側に続いており、土坑であるのか溝状遺構として把握されるのか不明である。

S X05の埋積土は暗茶色シルト質土層で橙色をした2~5cm程の焦土塊を多量に含んでいるのが特徴である。S X05の底面には火を受けたような痕跡が認められないことから、他所で生じた焦土をS X05に廃棄したものと思われる。

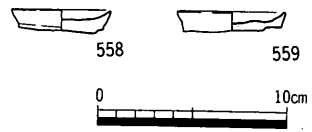
第155図はS X05出土の遺物実測図である。S X05は調査した部分が小面積であったためか、出土遺物は僅少である。558、559は土師器の小皿である。ともに完形で出土している。口径5.2、5.6cm、器高は1.2、1.5cmを測り、本遺跡出土の小皿の中では小型品である。



- 1 暗灰色シルト質土 (水田耕土)
- 2 明灰色シルト質土 (Fe.Mn 含)
- 3 暗茶色シルト質土 (2~5mm程の焦土塊多含)
- 4 灰色シルト質土 (Fe.Mn 含)
- 5 灰色シルト質土 (Fe.Mn わずか含)
- 6 灰色極細砂質土 (Fe.Mn 含)

第154図 SX05~08 平面・断面図

この他に S X 05からは土師器杯の破片が出土している。



(1) S X 06 (第154図・図版2)

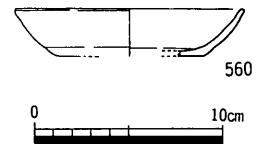
N-39～42区のN-41グリッドで検出した性格不明遺構である。S X 05と同じく大半が弘光10トレンチで壊されているため平面形は不明である。残存部は隅丸の方形を呈し、幅1.44m、深さ0.24mを測る。断面は皿状を呈する。S X 08を壊して掘削されており、S D 34と切り合い関係にあるが、S D 34との前後関係は不明確であった。S X 06もS X 05と同様で、調査区の西側に拡がっており、埋積土も同様である。

第155図 S X 05
出土遺物実測図

S X 06からの出土遺物は僅少である。図化不能の細片が多く、土師器の杯・小皿、瓦質土器の椀か杯の破片、土師質土釜の脚部の破片、器種不明の土師質土器の破片が出土している。

(2) S X 07 (第154、156図)

N-39～42区のN-40グリッドで検出した性格不明遺構である。S X 05に壊されている。平面形は不定で1.5×1.0m程の規模である。深さは2～3cm程度と極めて浅い。埋積土は灰色シルト質土で北側至近のS X 04の埋積土と近似する。



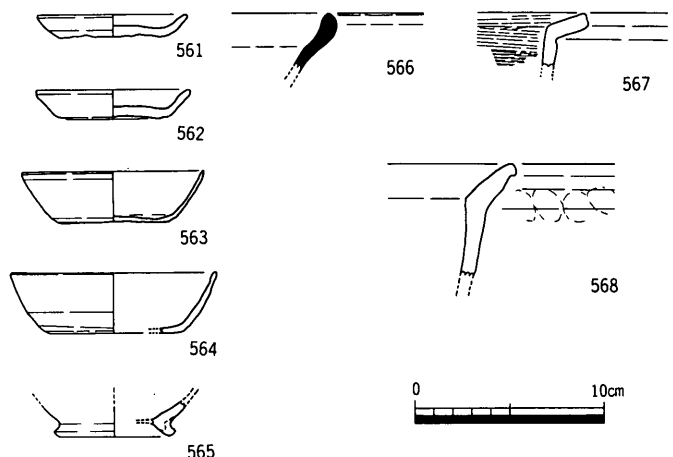
第156図560はS X 07から出土した瓦質土器の杯の破片である。この他に瓦質土器の椀か杯、土師器の杯か小皿の破片が出土している。

第156図 S X 07
出土遺物実測図

(3) S X 08

(第154、157図・図版33)

N-39～42区のN-41グリッドで検出した性格不明遺構である。S X 06に壊されている。検出部分は遺構の東側部分で、西側は調査区外に延びている。検出部分は隅丸方形の平面形で、短軸幅3.2m、長軸幅は4.3m以上を測る。深さは0.3～0.4mで、逆台形の断面を有する。第157図はS X 08出土の遺物実測図である。



第157図 S X 08 出土遺物実測図

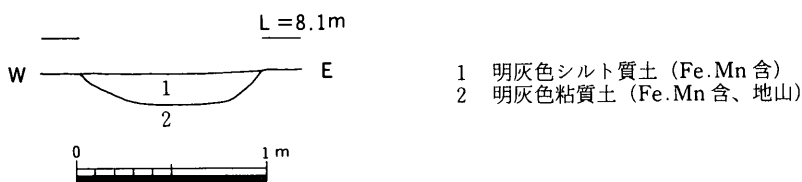
561、562は土師器の小皿の破片である。563、564は土師器の杯の破片である。563は薄手のつくりで、底部は回転ヘラ切りである。564はやや摩滅している。底部は回転ヘラ切りの後ナデている。565は器種不明の土師器の小破片である。椀底部と考えたが検討の余地がある。566は須恵器こね鉢の口縁部の破片である。やや軟質な焼成である。東播系の製品と考えられる。567、568は土師質土鍋の口縁部の破片である。この他にS X08からは、土師器の杯・小皿、瓦質土器の椀か杯、土師質土釜の脚部、器種不明の瓦質土器・土師質土器・須恵器の破片が出土している。

3. 溝状遺構

中世に属すると考えられる溝状遺構を数条検出した。これらは断片的に検出されたものが多く、調査区南部に集中する。これは北部の調査区が削平をうけているためと考えられる。

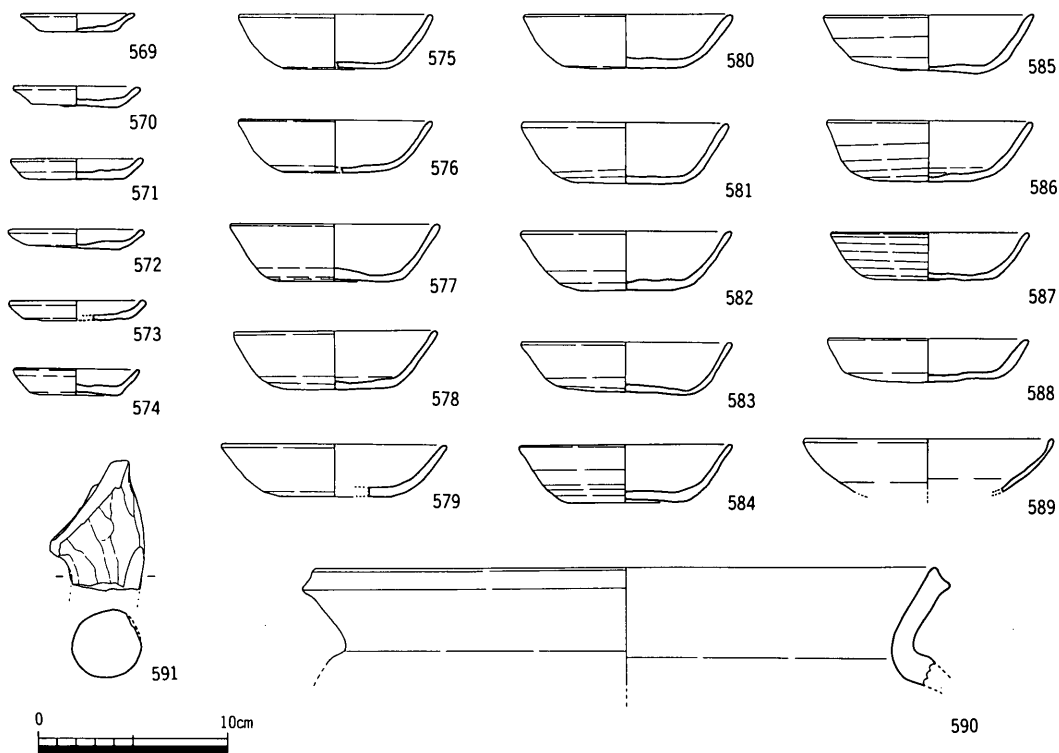
(1) S D28 (第158、159図・図版38)

O, P-41, 42区で検出した溝状遺構である。ほぼ直線の流路で、走向はN-31°-Wを測る。南北両端で途切れており、全長21mである。幅は0.9~1.0m、深さは10~17cmで、皿状の断面形を有する。埋積土は明灰色シルト質土である。



第158図 S D28 断面図

S D28からは28リットル入りコンテナ1/4箱程の遺物が出土している。土師器杯が圧倒的に多く、完形で出土したものも多い。これらのほとんどは底部を下にした状態で出土したが、これは人為によるものか自然現象であるのかは不明である。第159図はS D28出土の遺物実測図である。569~574は土師器の小皿である。570~572と574は完形で出土した。やや歪んでいるものがある(570, 572)。底部はすべて回転ヘラ切りで、板状圧痕の認められるものがある(571, 573)。575~588は土師器の杯である。578, 580, 581, 583, 585~588は完形もしくは完形に近い形で出土した。摩滅しているものがあるが、底部はすべてが回転ヘラ切りで、その後ナデているもの(575, 578, 581, 582, 586, 588)、板状圧痕の認められるもの(581, 583~585)がある。



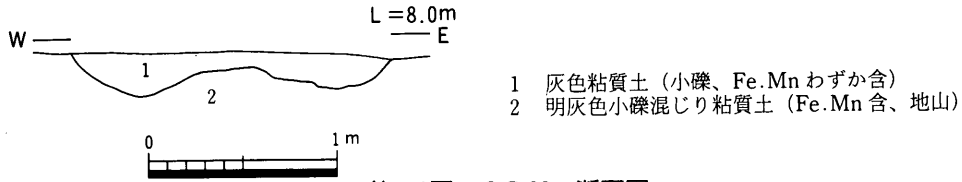
第159図 S D28 出土遺物実測図

なお、588は皿に類似するような形態を呈し、S D28出土の杯の中では異質な印象をうける。底部は丁寧にナデられている。589は瓦質土器の椀か杯の口縁部の破片である。590は瓦質土器の甕口縁部の破片である。体部外面、口縁部外面に格子目叩きが認められる。口縁部は上方に立上り、口縁端面はわずかに肥厚して、端面はくぼんでいる。以上の特徴から、岡山県の亀山焼の製品と考えられる。591は土師質土釜の脚部の破片である。体部との接合部には粗いハケが認められる。この他にS D28からは、図化遺物と接合できないが同一個体と考えられる破片の他、器種不明の須恵器の破片が出土している。

(2) S D29 (第160図・図版39)

O-39,40区で検出した溝状遺構である。調査区東端から概ねN-65° -Wの方向で直線状に流れ、途中でN-32° -Wの方向に屈曲している。検出長は約28mである。幅は1.6~2.1mで、断面形は中央部が盛り上がる「W」字状を呈する。深さは11~22cm程、埋積土は小礫をわずかに含む灰色粘質土である。S D29から出土した遺物は僅少で、弥生土器と考えられる

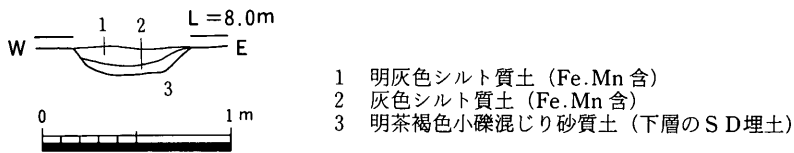
摩滅した細片が若干量あるのみである。S D29は古墳時代後期の遺物を包含する暗茶褐色シルト質土の上面から掘り込まれていること、埋積土が周囲の中世の遺物を出土する遺構と近似することの2点の根拠から、当該期の遺構と推定される。



第160図 S D29 断面図

(3) S D30 (第161図・図版40)

N-39~42区、O-39,40区で検出した溝状遺構である。やや湾曲するが概ねN-30°-Wの方向で直線状に流れる。検出長は約32m、幅は0.5~0.6m、深さは5~17cmで、皿状の断面形を呈する。徐々に浅くなっていき、O、P-41,42区では消滅している。埋積土は明灰色シルト質土の上層と灰色シルト質土の下層の2層からなる。S D30からは弥生土器と考えられる摩滅した土器細片が若干量出土したのみであるが、古墳時代後期の遺物を包含する暗茶褐色シルト質土の上面から掘り込まれていること、埋積土が周囲の中世の遺物を出土する遺構と近似することの2点から、当該期の遺構と推定される。

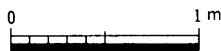
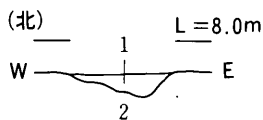
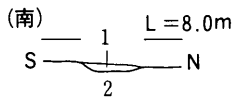


第161図 S D30 断面図

(4) S D31 (第162, 163図)

N-39~42区で検出した溝状遺構である。調査区西端から概ねN-54°-Eの方向に幅0.35m、深さ4cm程の小流が、幅1.1m、深さ21cm程の水溜め状部分を経て屈曲し、概ね直線状にN-26.5°-Wの方向に幅0.6m、深さ10cm程の流れとなって、北流するものである。この部分での断面は、最深部が溝幅の midpoint よりもやや東側に偏ったところにある形である。検出長は約25mを測る。埋積土は灰色シルト質土の一層である。遺物は土器破片が散在する状況で若干量出土している。

第163図は、S D31出土の遺物実測図である。592は瓦質土器の鉢の小破片である。593は土師質土釜の口縁部の小破片、594は土師質土釜の脚部の破片である。この他にS D31からは土師器の杯・小皿、瓦質土器甕の破片のほか、器種不明の瓦質土器・須恵器・土師質土器・弥生土器の破片が出土している。

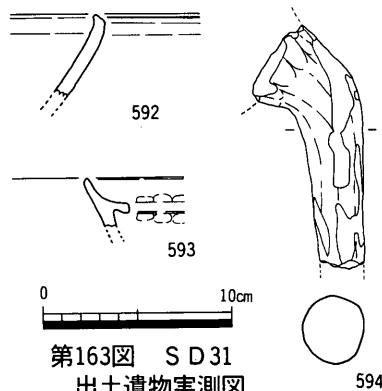


- 1 灰色シルト質土 (Fe. Mn 含)
- 2 明灰色小礫混じり粘質土 (Fe. Mn 含、地山)

第162図 S D 31 断面図

(5) S D 32 (第115図)

N-39~42区で検出した溝状遺構である。概ねN-61.5° -Eの方向に流れ、検出長は約2m 両端ともに消滅している。幅0.25m、深さ4cm程の規模で、埋積土は明灰色シルト質土である。S B 08の雨落ち溝と考えられる。遺物は出土しなかった。



第163図 S D 31
出土遺物実測図

(6) S D 33 (第115図)

N-39~42区で検出した溝状遺構である。N-28.5° -Wの方向で、全長約2.6m、両端は途切れており、長楕円形状を呈する。幅0.5~0.8m、深さ12cm程の規模である。S B 08の項で触れたとおり、S B 08の柱穴である可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

(7) S D 34 (第115図)

N-39~42区で検出した溝状遺構である。S X 04とS X 06を結んでいるが、前後関係は不明である。幅0.1m、深さ1~2cmを測る。遺物は出土しなかった。

(8) S D 35

N-37, 38区で検出した溝状遺構である。S B 19の西側に梁行の方向とほぼ合致して位置することから、雨落ち溝と考えられる。検出長約3.0m、幅0.6~0.95m、深さ1~9cmを測る。埋積土は灰色極細砂質シルト質土で、遺物は図化していないが、土師器の杯・小皿、土師質土釜の脚部の破片が出土している。

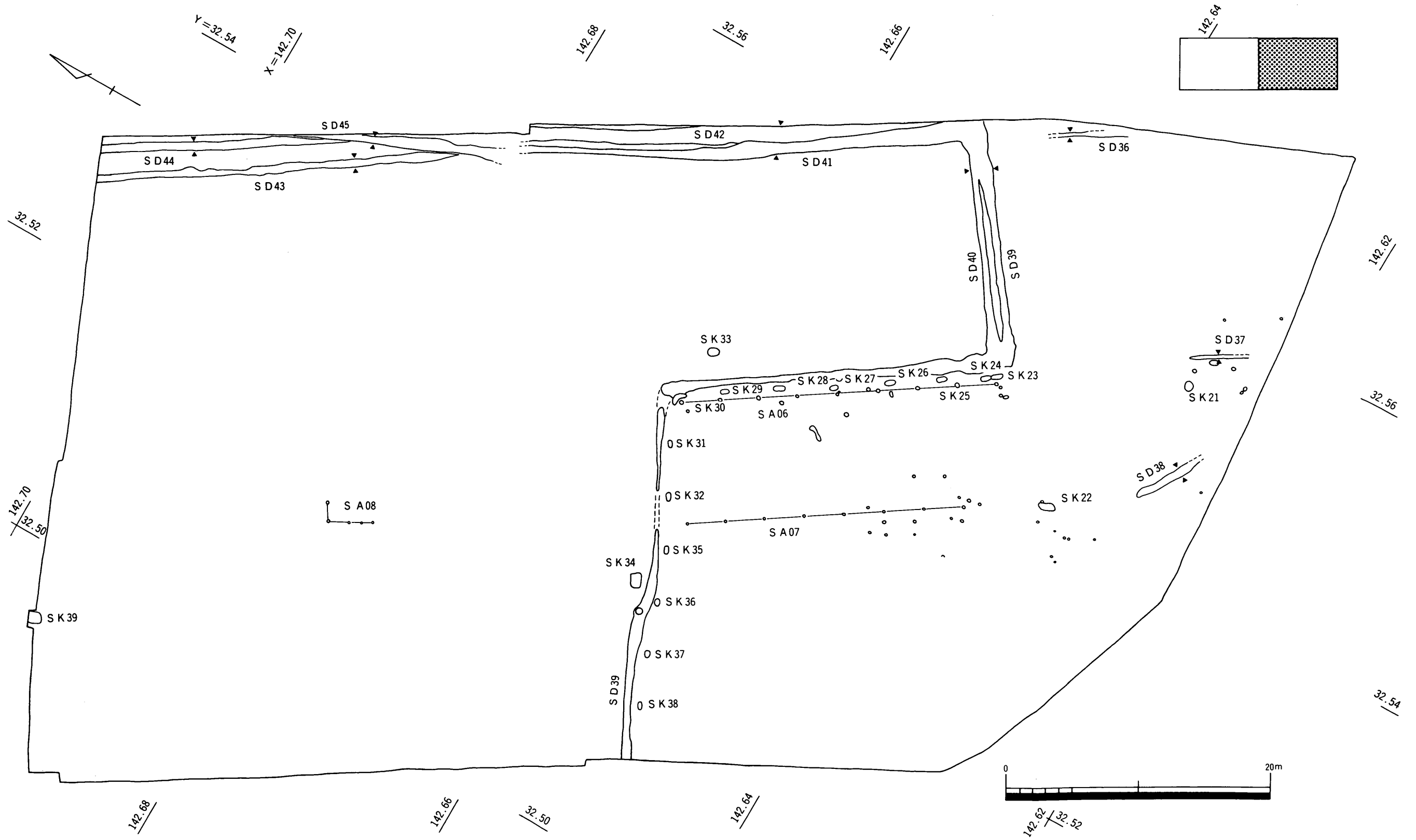
4. 中世の遺構・遺物のまとめ

中世の遺構として20棟の掘立柱建物をはじめ、土坑・溝状遺構などを検出した。これらには、S B11とS D30やS B17と20およびS K13などのように切り合い関係があるものがある。しかし、S K13は廃棄土坑でS B20などの廃絶時に掘られたものと考えられるから、絶対多数の遺構に顕著な時期差は認められず、むしろ川津二代取遺跡の当該期の集落は成立後に短期間で廃絶したようである。

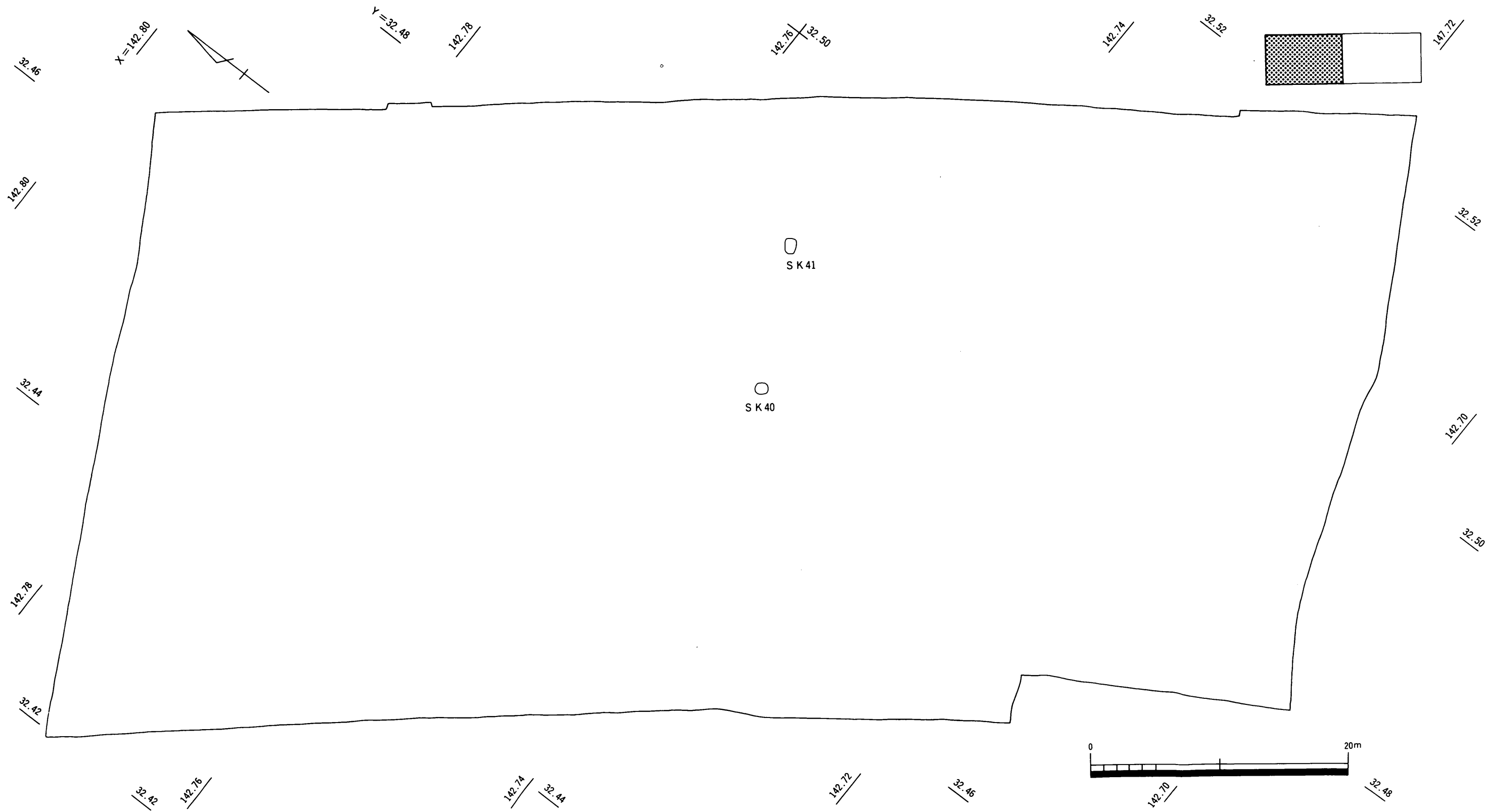
出土遺物は土器と少数の陶磁器、木器、銅銭などがあったが、土器の大多数は12世紀後半から13世紀前半に属するものと思われる。

集落の範囲については、集落が当地域の微地形と無関係に成立し、また、当該期の集落に多く認められる集落を画する溝状遺構も明瞭ではないため不明である。しかしながら、集落の北限はS B19（N-37, 38・O-37, 38区）以北において当該期の遺構が全く検出されないことから、この付近に考えられる。また、南限はS B01やS B06より南に当該期の遺構が検出されないことから、この付近に考えられる。東西の範囲については検討する資料がない。

なお、集落の廃絶について注意されることとして、出土遺物や遺構の状況の中に火をうけたと考えられるものが多く含まれている。たとえばS K13内に乱雑に投棄されていた石材の多くは火をうけて、煤が付着したりしているものが多く、また柱穴の埋積土に焦土を含むものが多い。集落の廃絶の原因については不明であるが、火災に遭っていることは確実と思われる、その後に整地のためにS K05・09・10・13・14などの廃棄土坑が掘削されたものと考えられる。



第164図 南部 遺構配置図 (近・現代)
 (▶は断面図作成位置)



第165図 北部 遺構配置図 (近・現代)

第5節 近・現代の遺構と遺物

近代ないし現代に属すると考えられる遺構・遺物を、主として南部(O, P-43、O, P-41、42、N-39～42、O-39, 40区)の調査区から検出した。これらは遺物を伴わないものが多いが、本遺跡において中世の遺物を出土する遺構の埋積土がほぼ同一であり、それとは異なる埋積土であること、一部の遺構については掘り込み面を知ることができたが、それは中世の遺構面より上層から掘り込まれていること、一部の遺構において出土した遺物の年代観、などより総合的に判断した。

1. 柵列

(1) S A 06 (第166図)

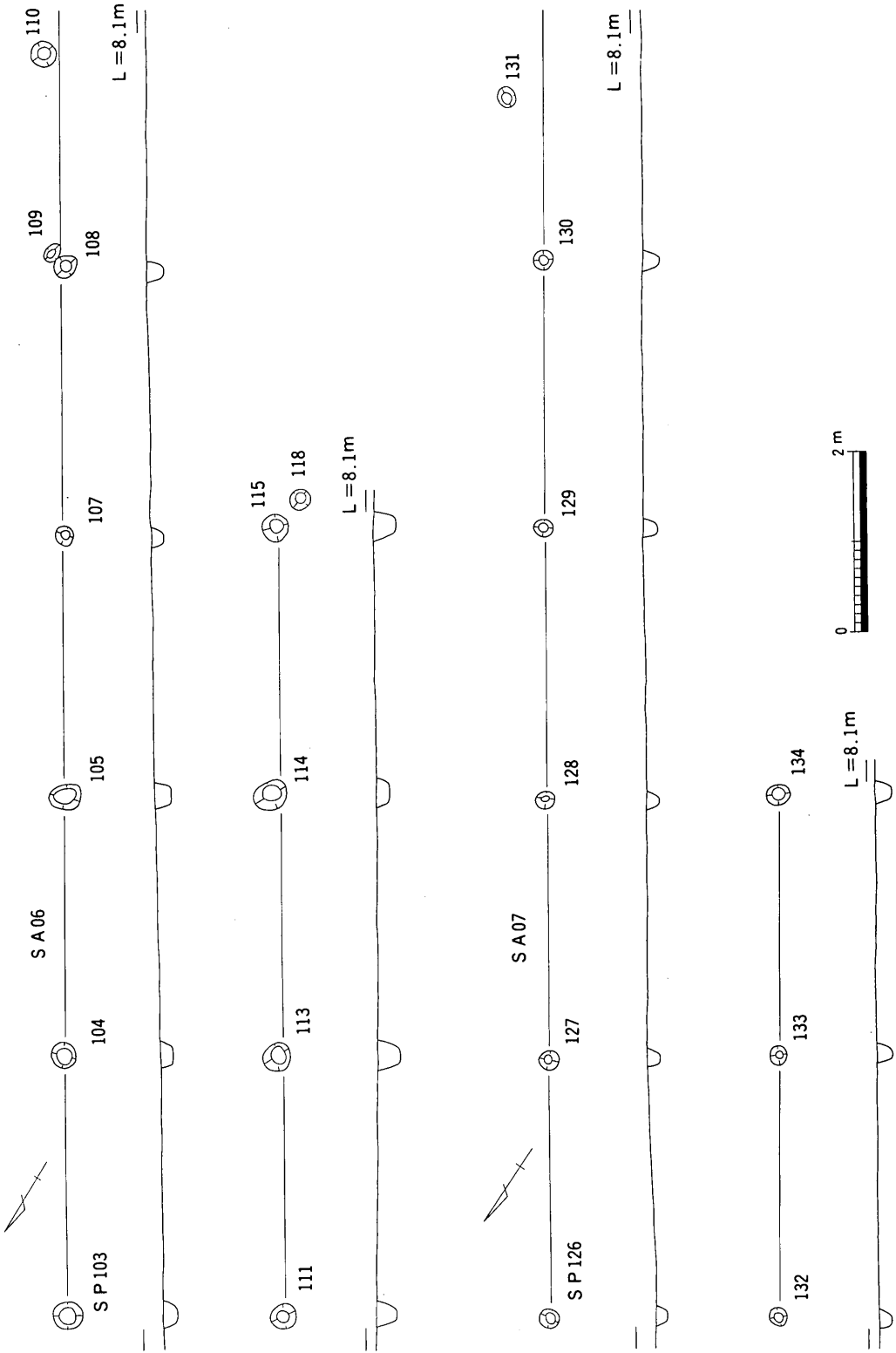
O, P-41, 42区で検出した九柱穴よりなる柵列である。全長約24mを測る。方位はN-33.5° -Wを測り、東側の至近のS D 39と西側に9.4m離れて存在するS A 07と平行する位置関係にある。柱穴の間隔は一様に3.0mを測る。柱穴の掘り方は概ね円形で、径は25～35cm程度のものである。柱穴の埋積土は暗灰色シルト質土で、最上層の現代の水田耕土に近似する。遺物は混入と考えられる土師器の杯か小皿の細片が出土しているが、埋積土から近・現代の遺構と考えられる。

(2) S A 07 (第166図)

O, P-41, 42区で検出した八柱穴よりなる柵列。全長約21mを測る。方位はN-33.5° -Wを測り、S A 06とS D 39と平行である。柱穴の間隔は一様に3.0mで、柱穴の掘り方は概ね円形、径は25cm前後のものである。埋積土は暗灰色シルト質土である。遺物は出土しなかったが、S A 06と同様に近・現代の遺構と考えられる。

(3) S A 08 (第167図)

N-39～42区のN-40グリッドで検出した五柱穴よりなる柵列。四柱穴が直線に並び、直角に折れて一柱穴がある。掘立柱建物跡の可能性を考えて精査したが、この他に柱穴は検出されなかった。N-28.5° -Wの方向で四柱穴が3.5mの長さで並び、直角に1.4m離れて一柱穴がある。柱穴の掘り方は概ね円形で、径は13～20cm程である。埋積土は暗灰色シルト質土で、遺物は出土しなかった。埋積土が現代の水田耕土と近似していることから近・現代の遺

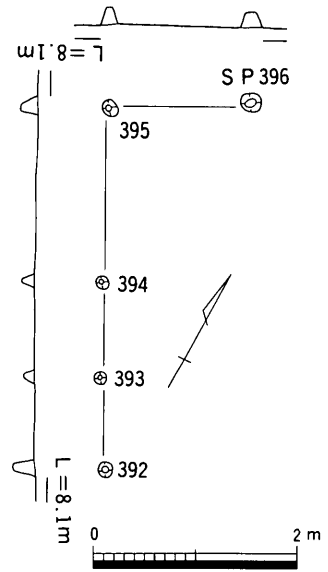


第166图 S A 06 · 07 平面 · 断面图

構と考えられる。

2. 土坑

近・現代に属すると考えられる21基の土坑を検出した。これらは表にまとめる。このうちSK23～32、35～38はSD39の片岸に沿ってほぼ4.0～4.5mの間隔で並んでいるものである。遺構の規模からみて土坑と考えたが、コンクリートで基礎を固めた支柱の掘り方とも考えられ、柵列と考えたほうがよいかもしれない。第170図595はSK25から出土した土釜、596はSK35から出土した土師器小皿の破片である。ともに混入したものであろう。



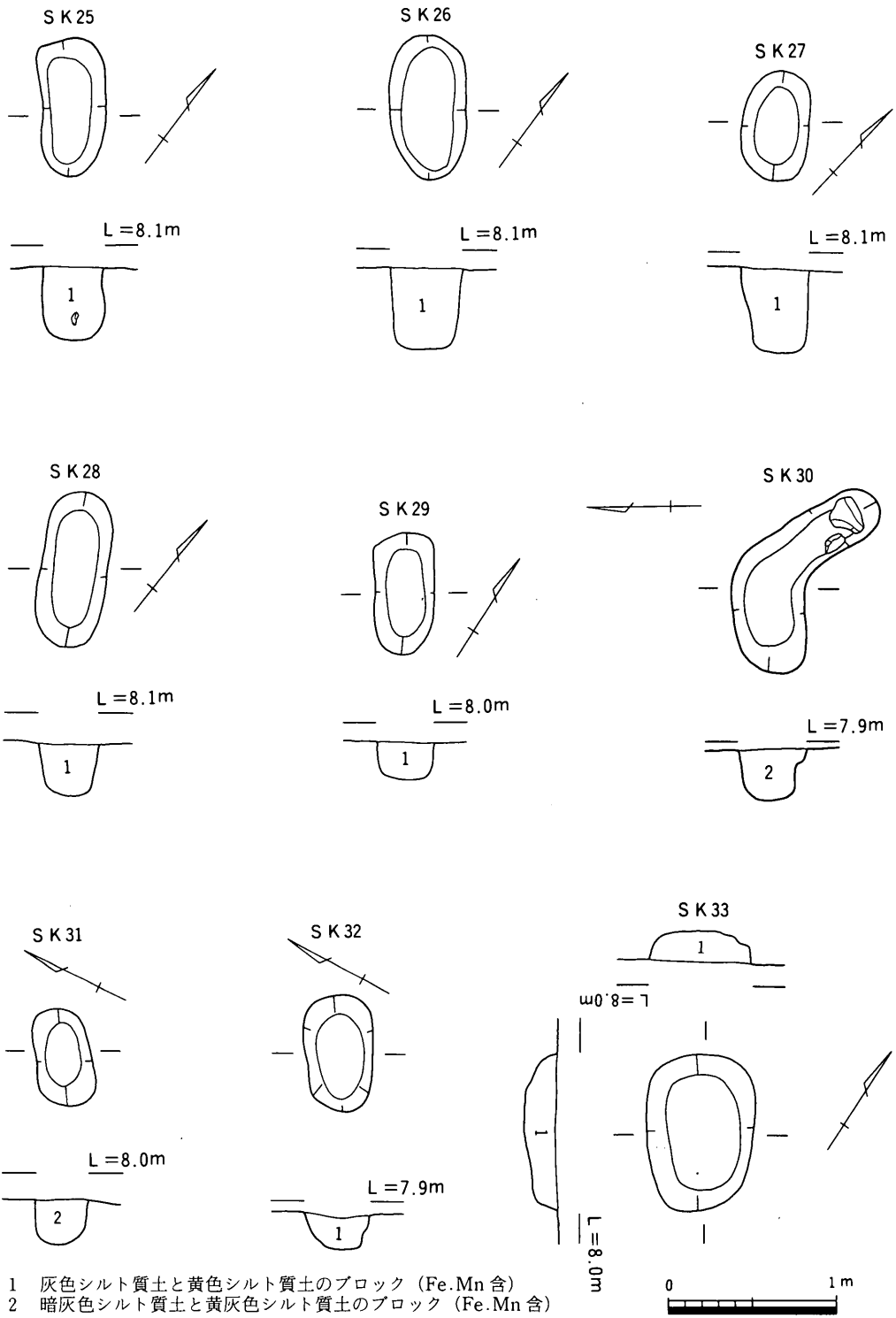
第167図 S A 08
平面・断面図

第7表 近・現代の土坑 観察表①

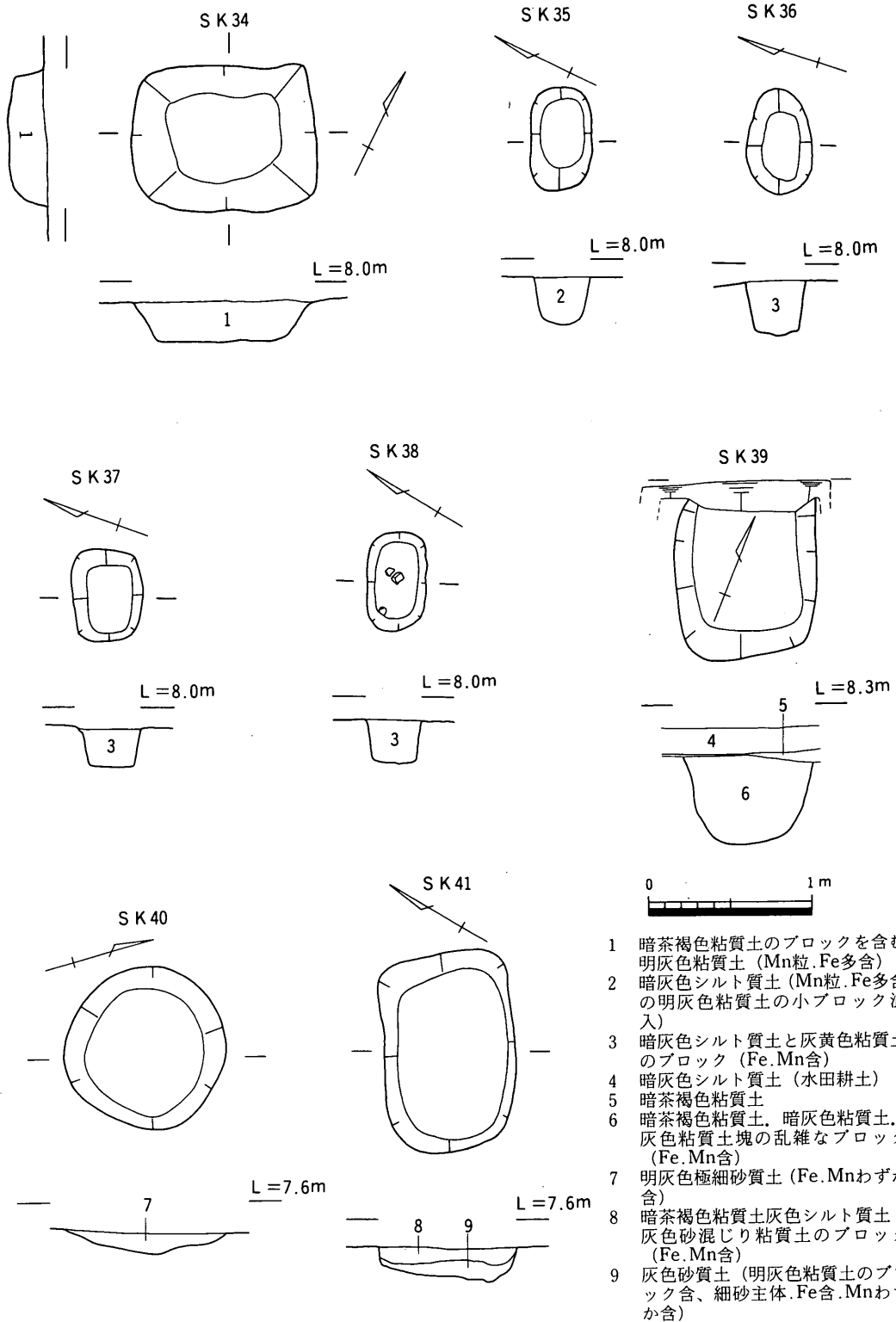
遺構名	平面形	断面形	規模 (m)	埋積土	遺物	備考
SK21	円形	逆台形	径0.8 深0.18	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe, Mn)	無	
SK22	楕円形	U字形	1.25×0.6 深0.37	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe, Mn)	無	
SK23	楕円形	逆台形	0.4以上×0.35 深0.30	茶色シルト質土と灰色極細砂質土のブロック (Fe, Mn 含)	無	
SK24	楕円形	逆台形	1.4×0.5 深0.56	暗青灰色シルト質土と黄褐色粘質土のブロック (Fe, Mn)	無	
SK25	楕円形	U字形	0.8×0.4 深0.44	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe, Mn)	有	土師器, 杯か小皿, 器種不明の土師質土器, 須恵器の破片
SK26	楕円形	逆台形	0.9×0.45 深0.48	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe, Mn)	無	
SK27	楕円形	U字形	0.65×0.4 深0.5	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe, Mn)	有	器種不明の土師質土器, 須恵器の破片

遺構名	平面形	断面形	規模 (m)	埋積土	遺物	備考
S K 28	楕円形	U字形	0.95×0.4 深0.31	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe.Mn)	有	器種不明の土師質土器の細片
S K 29	楕円形	U字形	0.75×0.35 深0.22	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe.Mn)	有	器種不明の土師質土器の細片 染め付け片
S K 30	楕円形	L字形	1.3×0.4 深0.30	暗灰色シルト質土と黄灰色シルト質土のブロック	有	器種不明の土師質土器の細片
S K 31	楕円形	U字形	0.6×0.35 深0.27	暗灰色シルト質土と黄灰色シルト質土のブロック	無	
S K 32	楕円形	U字形	0.7×0.4 深0.20	灰色シルト質土と灰黄色シルト質土のブロック (Fe.Mn)	無	
S K 33	楕円形	U字形	0.87×0.63 深0.19	灰色シルト質土 (黄灰色シルト質土のブロック含, Fe.Mn)	有	土師器の杯か小皿の細片 (摩滅している)
S K 34	楕円形	逆台形	1.15×0.84 深0.25	明灰色粘質土 (暗茶褐色粘質土のブロック含)	無	
S K 35	楕円形	U字形	0.6×0.4 深0.28	暗灰色シルト質土 (明灰色粘質土のブロック、Mn.Fe 多含)	無	
S K 36	楕円形	逆台形	0.6×0.4 深0.33	暗灰色シルト質土と灰黄色粘質土のブロック (Fe.Mn)	無	
S K 37	楕円形	逆台形	0.55×0.45 深0.23	暗灰色シルト質土と灰黄色粘質土のブロック (Fe.Mn)	無	
S K 38	楕円形	逆台形	0.6×0.35 深0.26	暗灰色シルト質土と灰黄色粘質土のブロック (Fe.Mn)	無	
S K 39	楕円形	U字形	1.0以上×0.9 深0.54	暗茶褐色・明灰色・灰色粘質土のブロック (Fe.Mn 含)	無	
S K 40	円形	皿状	径1.0 深0.12	明灰色極細砂質土 (Fe.Mn 含)	無	
S K 41	円形	皿状	1.2×0.85 深0.17	2層に分かれる 断面図を参照	無	

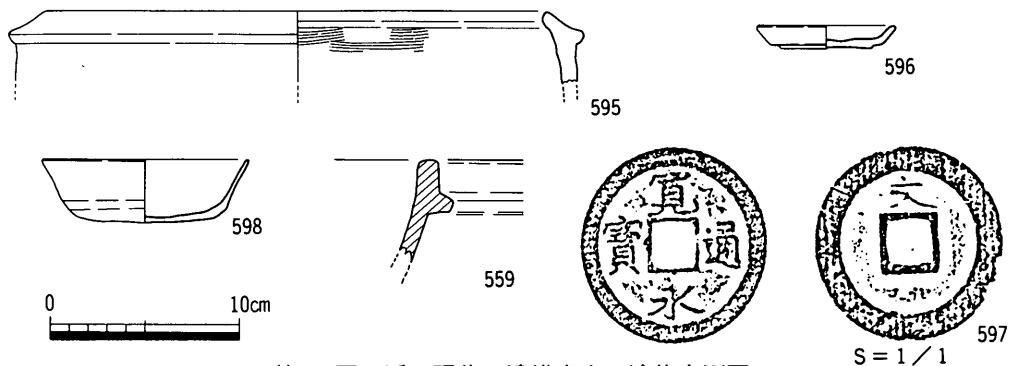
第 8 表 近・現代の土坑 観察表②



第168図 近・現代の土坑 平面・断面図①



第169図 近・現代の土坑 平面・断面図②



第170図 近・現代の遺構出土の遺物実測図

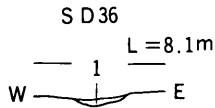
3. 溝状遺構

近・現代に属すると考えられる溝状遺構を9条検出した。このうちの7条は調査着手時に機能していた水路の残骸とその下層に残存していた前代の遺構である。また、残りの2条はいわゆる鋤溝と考えられるものである。溝状遺構の概要を一覧表にまとめる。

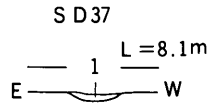
なお、第170図597はS D45から出土した「寛永通宝」である。598はS D39から出土した土師器の杯、混入であろう。599はS D45から出土した滑石製の石鍋の破片である。体部外面の鏝以下には煤が付着している。

遺構名	規模(約・m)	検出長	方 向	埋 積 土	遺物	備 考
S D36	幅0.3 深0.06	10m	N-30° -W	明灰色シルト質土	有	陶磁器片など
S D37	0.3 0.07	4m		灰色極細砂質土	無	
S D38	0.7 0.06	5m		灰色シルト質土	無	
S D39	0.7 0.20	74m	N-65° -E N-35° -W N-54° -E	暗茶褐色粘質土・ 明灰色極細砂質土 のブロック	有	陶磁器片, さん瓦片, 土 師質土器片など
S D40	0.55 0.19	17m	N-54° -E	茶灰色極細砂質土	有	上に同じ
S D41	1.3 0.28	33m	N-33° -W	明灰色極細砂質土 暗茶褐色粘質土の ブロックなど	有	上に同じ
S D42	1.05 0.25	30m	N-33° -W	灰色極細砂質土	有	上に同じ
S D43	0.6 0.07	26m	N-34° -W	灰色シルト質土	無	
S D44	0.65 0.11	16m	N-34° -W	灰色シルト質土	有	土師質土器片など
S D45	0.5 0.15	12m	N-23° -W	灰色シルト質土	有	陶磁器片, さん瓦片など

第9表 近・現代の溝状遺構 観察表



1 明灰色シルト質土 (Fe. Mn わずか含)



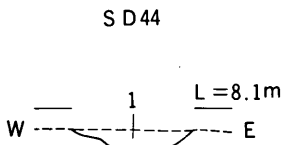
1 明灰色極細砂質土 (Fe. Mn 含)



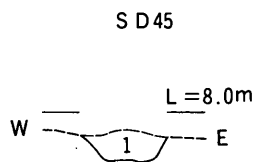
1 灰色シルト質土



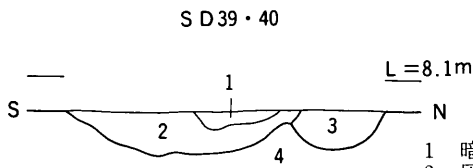
1 灰色シルト質土 (Fe 多含) ルーズ



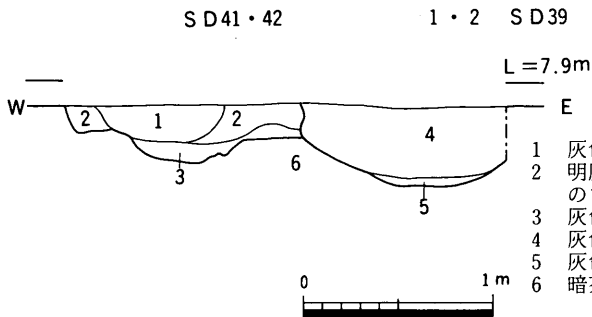
1 灰色シルト質土 (上方では小礫、Mn. 若干、Fe 含)
下方は粘性を帯びる、緻密
平面では Mn 多く認められる



1 灰色シルト質土 (極細砂質、Fe 多含)



1 暗茶褐色粘質土、明灰色極細砂質土の未分解のブロック (攪乱)
2 灰色砂質土 (Fe 含、上方で粘質土、下方で細砂に漸移)
3 茶灰色 (~明灰色) 極細砂質土 (Mn. Fe 多含)
4 黄褐色極細砂質土 (Mn. Fe 多含、偽地山)



1・2 S D 39 3 S D 40

1 灰色シルト質土 (小礫をわずかに含み未分解の土性)
2 明灰色極細砂質土、暗茶褐色粘質土からなる未分解
のブロック (Fe. Mn 含)
3 灰色粘質土 (Fe. Mn 含)
4 灰色 (~明灰色) 極細砂質土 (Mn. Fe 含)
5 灰色細砂 (混粘質土)
6 暗茶褐色粘質土 (Mn. Fe 含、黒包)

1~3 S D 41 4・5 S D 42

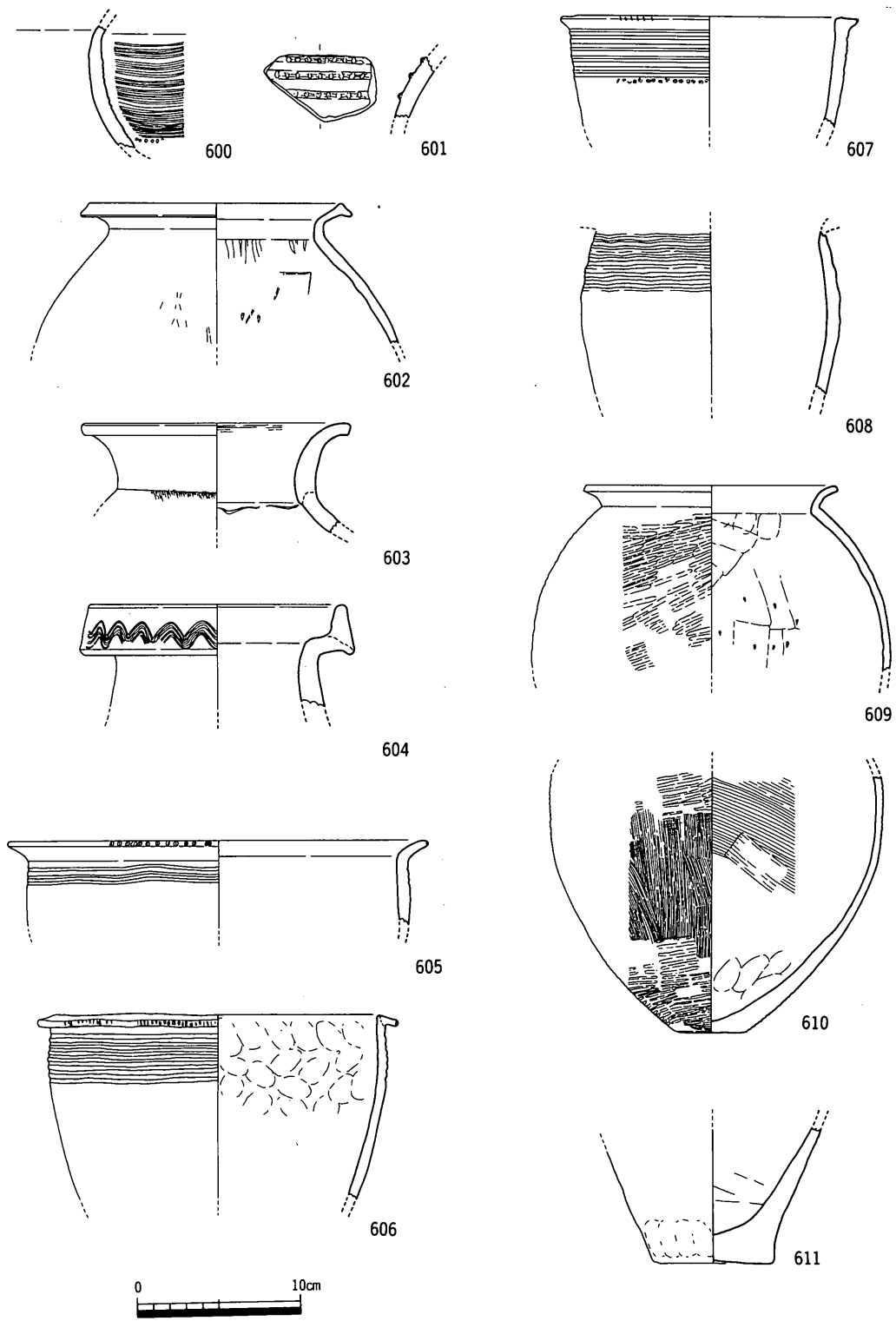
第171図 近・現代の溝状遺構 断面図

第6節 包含層及び出土位置不明の遺物

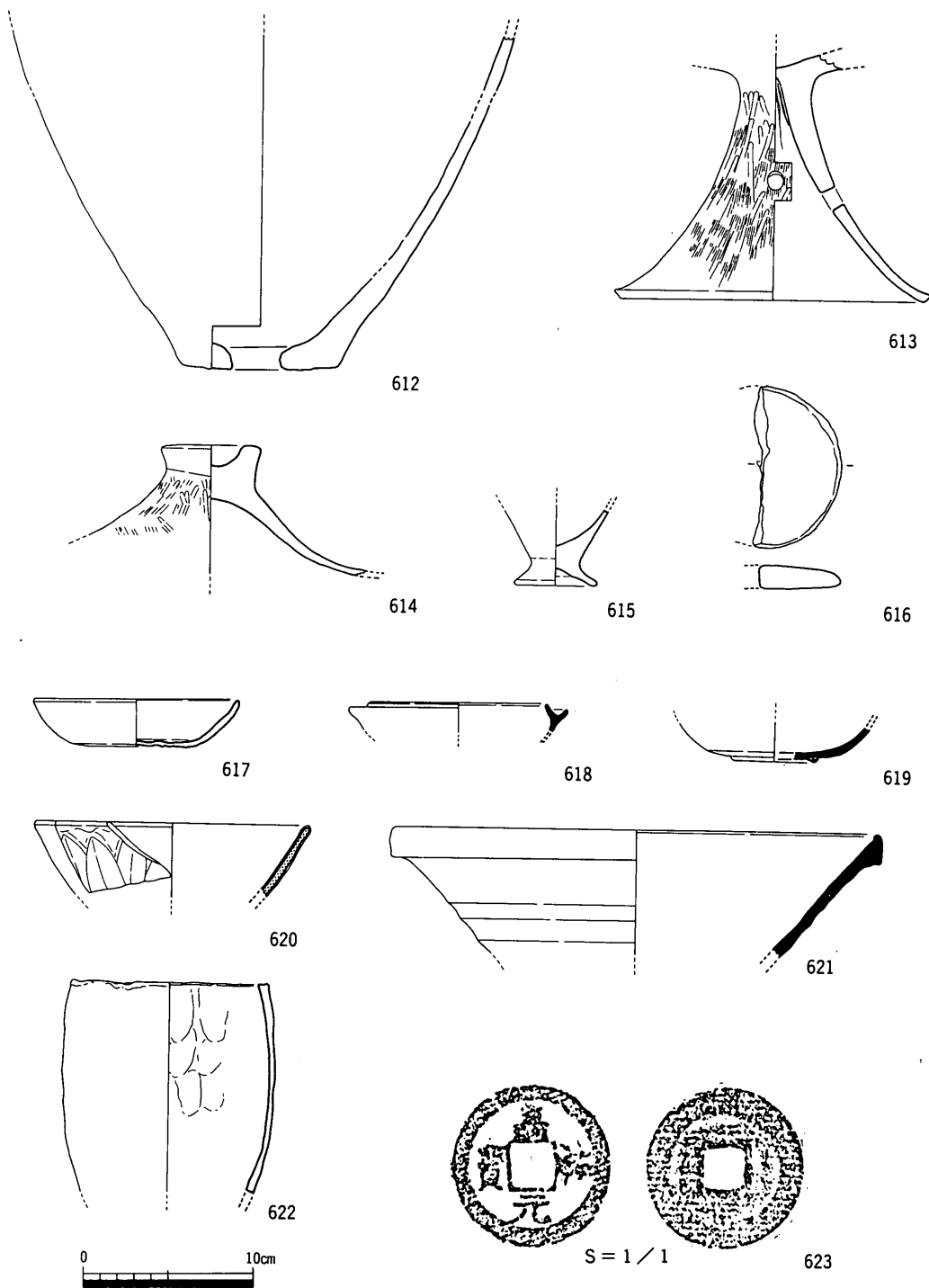
第172～174図は、包含層及び出土位置が不明となってしまった遺物の実測図である。

600は弥生時代前期の壺の頸部の破片である。櫛描きの沈線を施し、その下に刺突文を巡らせている。601は壺の口縁部と考えられる小破片である。口縁部の内面に刻み目を施した突帯を三条貼り付けている。弥生時代前期に属するものであろう。602～604は弥生時代後期から古墳時代前期に属すると考えられる壺の口縁部の破片である。602は短い頸部をもつ。内面の頸部付近には絞目目が認められる。602は広口壺。外反する頸部からそのまま移行して口縁部にいたる。摩滅している。603は二重口縁壺の口頸部の破片である。内傾する頸部を強く屈曲させ、粘土紐を付加させたやや内傾する幅広の口縁部を有する。口縁部に櫛状工具による波状文が施されている。なお、603はS D07下層出土の321と同一個体である可能性が高い。605～608は弥生時代前期の甕の口縁部の破片である。605は如意状の口縁で端部に刻み目をもつ。体部上半に3条のヘラ描き沈線を巡らせている。606は逆L字状の口縁をもち、端部に刻み目をもつ。体部上半に7条のヘラ描き沈線を巡らせている。607は断面三角形の口縁部をもち、端部に刻み目をもつ。体部上半に6ないし7条のヘラ描き沈線を巡らし、その下に竹管文を施している。608は体部上半に5条一単位の櫛描文を3列施している。口縁部は剥落している。609、610は弥生時代後期の甕の口縁部と底部である。611は弥生時代前期の甕の底部破片、612は同じく前期の甕の底部である。613は高杯の脚部の破片である。円錐状にスムーズに広がる形態で、透かし孔が認められる。614は蓋形土器の破片。頂部を窪ませている。615は製塩土器の底部、616は紡錘車の破片である。617は土師器の杯である。618は須恵器の杯身である。第12図の④層から出土した。619は瓦質土器の椀の底部破片である。620は青磁椀である。鎬蓮弁をもつ。龍泉窯の製品であろう。621は東播系と考えられるこね鉢の破片である。622は器種不明の土師質土器である。円筒状を呈する。623は『嘉祐元宝』。1056年初鑄の宋銭である。

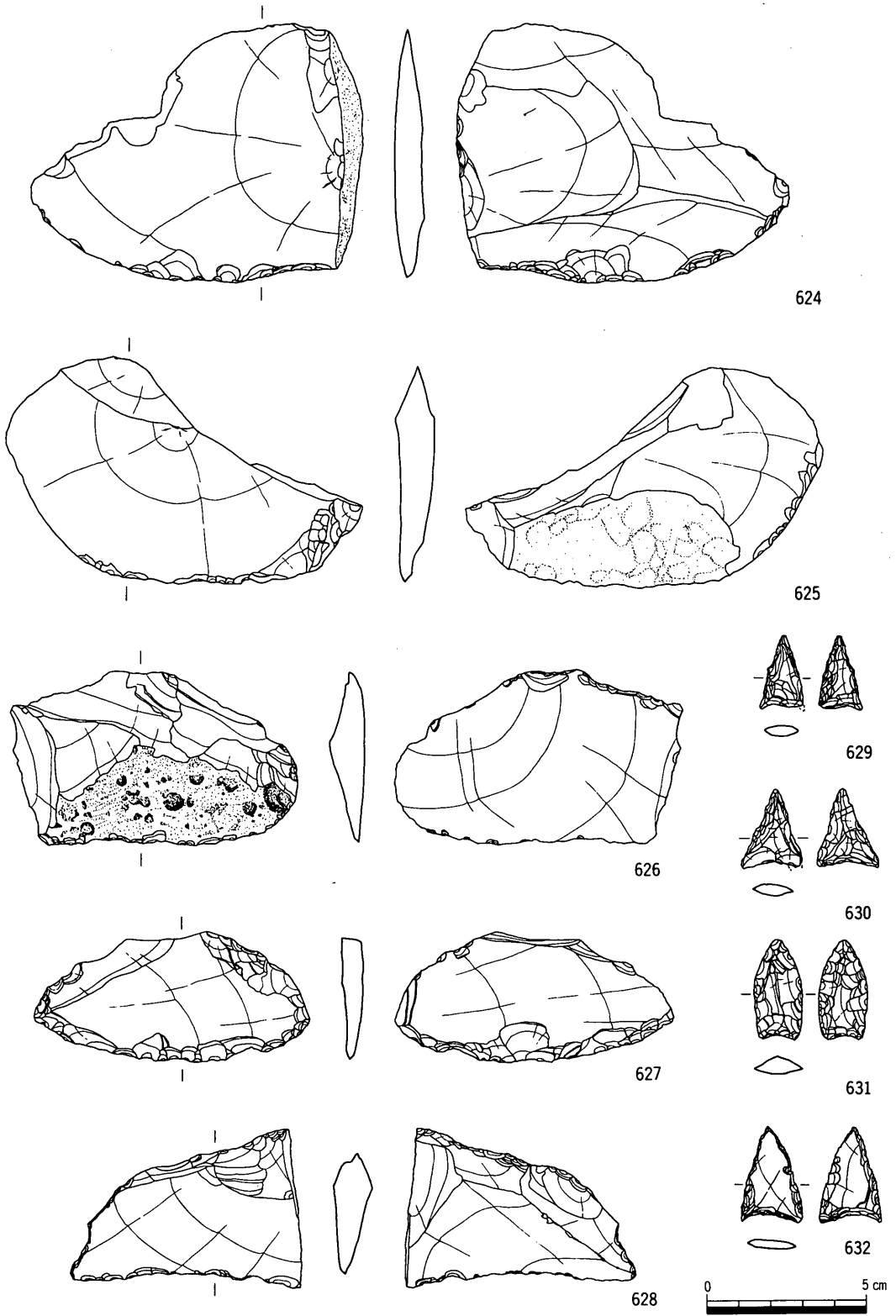
624～628は削器である。624は外湾する刃部をもつ。一側面に自然面、片面には打瘤が残る。626は片面に広く自然面を残す。押圧剝離をわずかに行ない刃部を整えている。628は内湾する刃部をもつ。一端は折損している。肉厚である。形態から見て石鎌などに分類される可能性もある。629～632は凹基式の石鏃である。629、630は風化している。



第172図 包含層および出土位置不明の遺物実測図①



第173図 包含層及び出土位置不明の遺物実測図②



第174図 包含層及び出土位置不明の遺物実測図③

第4章 自然科学的分析

第1節 川津二代取遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

香川県では、これまでに下川津遺跡、林・坊城遺跡、東山崎・水田遺跡、郡家一里屋遺跡、空港跡地遺跡等で出土した木製品について樹種同定が行なわれてきた。また、永井遺跡や林・坊城遺跡では、自然木の樹種同定や花粉分析等による古植生の検討が行なわれている。その結果、県内における過去の用材選択の実態や古植生が明らかになりつつある。

樹種同定の成果を見ると、柱材や井戸材等の建築材には、時代を問わずマツ属複維管束亜属（二葉松類）、モミ属、コウヤマキ等の針葉樹が多く用いられ、広葉樹材ではサクラ属、コナラ属コナラ節等が僅かに同定されているのみである。また、板状の加工を行なう木製品にも針葉樹が多く、スギ、モミ属、ヒノキ属等が同定されている。林・坊城遺跡では、板材に多数の広葉樹材が同定されているが、全てコナラ属コナラ亜属の樹皮であった。コナラ亜属の樹皮をどのような用途の板材として利用したのかは定かではないが、他地域でこれまでに当社が行なった調査の中にも同様の例がいくつか見られることから、過去に何らかの板材として広く利用されていたことが推定される。

全体を通してみると、用途によって使用される樹種に違いがあり、その傾向は時代や遺跡の立地に関わらず共通している。このことから、用途に応じた「適材適所の木材選択」が行なわれていたことが推定される。しかし、その全容を把握するには、今後さらなる資料蓄積が必要と考えられる。

今回の調査では、坂出市川津二代取遺跡から出土した木製品について樹種同定を行ない、過去の用材選択に関する検討と資料蓄積を行なう。

(1) 試料

試料は、中世（14世紀初め）の廃棄土坑（S K13）の埋積土中から出土した杓文字状の木製品、中世（14世紀初め）と推定される掘立柱建物の柱穴（S P672）に遺存していた柱材の2点である。

(2) 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製した。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定した。

(3) 結果

2点の試料は、杓文字状の木製品がスギ近似種、柱材がマキ属の一種にそれぞれ同定された。各樹種の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、学名・和名は、主として「原色日本植物図鑑 木本編<II>」(北村・村田、1979)にしたがい、一般的な性質については「木の事典 第2巻、第7巻」(平井、1979-1982)も参考にした。

・スギ近似種 (cf. *Cryptomeria japonica* (L. F.) D. DON) スギ科

試料名：杓文字状木製品

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型。放射組織は単列、1~15細胞高。以上の特徴からスギと考えられるが、樹脂細胞が観察できなかったため近似種とした。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

・マキ属の一種 (*Podocarpus sp.*) マキ科

試料名：S P 672柱材

早材部から晩材部への遺構は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の別なく散在し、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。

マキ属には、イヌマキ (*Podocarpus macrophyllus* (Thunb.) D. DON) とナギ (*P. nagi* (Thunb.) Zollinger et Moritzi) の2種がある。イヌマキは本州（房総半島以西）・四国・九州・琉球に分布し、ナギの自生地は本州から琉球に点在するが、神社などに植栽される常緑高木である。材はやや重硬で、加工性は中程度、割裂性は大きく、保存性・耐水性が高い。建築・土木・器具・薪炭材などの用途がある。

(4) 考察

杓文字状の木製品は、スギであった。木製品は薄い板状に加工されているが、柾目板なの

か板目板なのか、実測図からは判断できない。しかし、スギはその木材組織から柾目板、板目板どちらにも加工が比較的容易と推定される。島地・伊東(1988)や伊東(1990)によると、杓文字にはスギやヒノキ属をはじめ、針葉樹材が多く使用されている。今回の製品が杓文字だとすると、使用されているスギはこれまでの樹種同定の結果にみられる傾向と調和的である。

柱材は、マキ属であった。香川県における柱材の樹種同定では、時期を問わずマツ属複雑管束亜属が多い。また、その他の樹種もコウヤマキ等針葉樹材が多く、針葉樹材が広く柱材等の建築材に利用されていたことを示唆する。今回の結果は針葉樹という点からみれば、これまでに得られている結果と調和的である。しかし、県内の結果では広葉樹材もいくつか認められる。このような樹種の違いは、構築された時期や建物の使用目的の違い、使用者の階級等にも影響されると考えられるが、現時点では不明である。また、平城宮や法隆寺の例(伊東・島地、1979；西岡・小原、1978)や、7世紀末～8世紀初頭に編纂された日本書紀の須佐之男命の説話にみえる建築部材などの用材選択に関する記述から、針葉樹材の中でも建物の性格や用途等により使用される樹種が異なっていた可能性がある。

これらのことを明らかにしていくためには、より多くの資料蓄積を行なうとともに、検出された遺構の性格を詳細に検討し、樹種同定結果と比較していくことが必要である。

<引用文献>

平井信二(1979-1982)木の事典 第1巻～第17巻、かなえ書房。

伊東隆夫(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II。木材研究・資料、No26、p.91-189。

伊東隆夫・島地 謙(1979)古代における建造物柱材の使用樹種。木材研究・資料、No14、p.49-76。

北村二郎・村田 源(1979)原色日本植物図鑑 木本編<II>、545p、保育社

西岡常一・小原二郎(1978)法隆寺を支えた木。226p、NHKブックス。

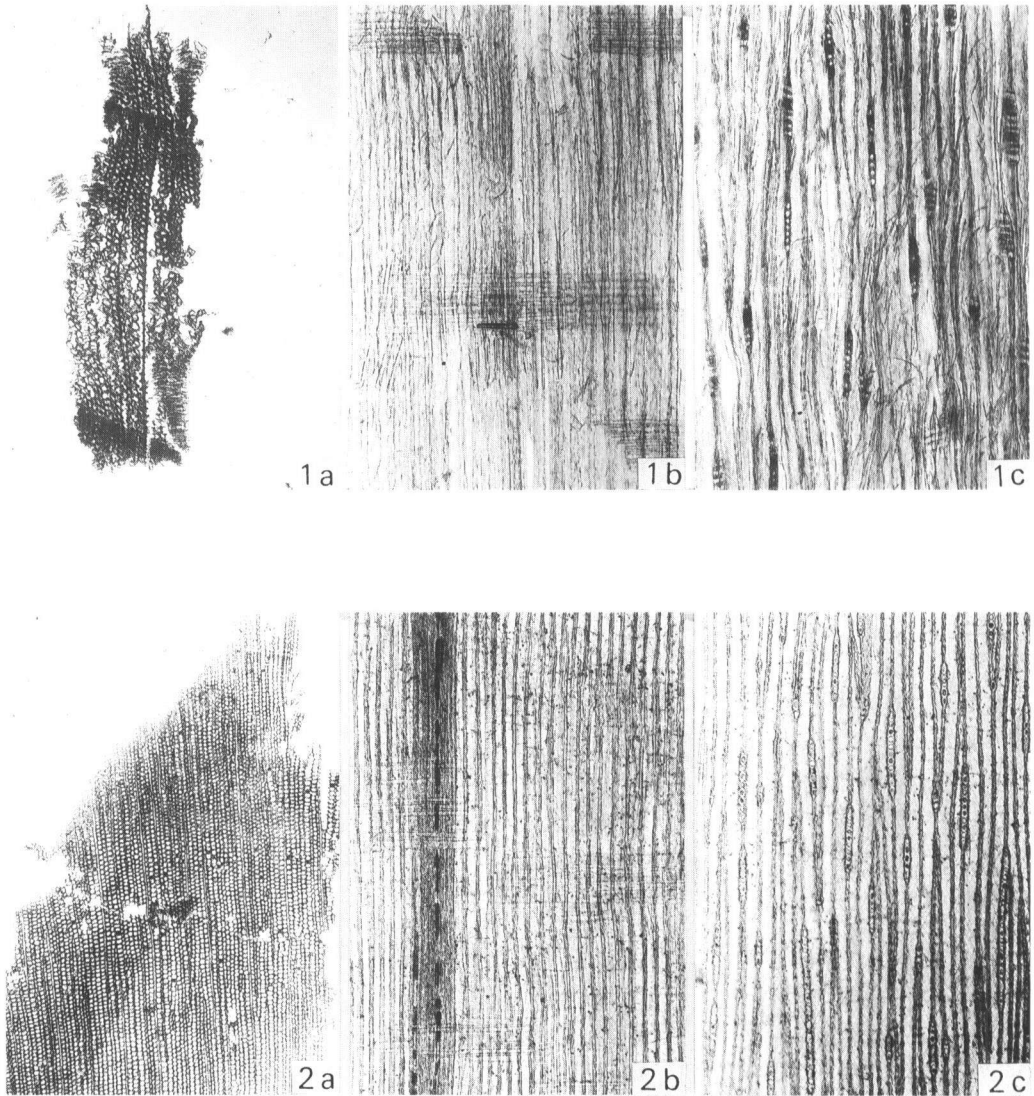
島地 謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。296p、雄山閣。

まとめ

川津二代取遺跡から出土した木製品2点について樹種同定を行なった。その結果、これまで香川県内で見られた樹種同定の結果とほぼ同様の結果が得られた。しかし、香川県における用材選択の時代差や地域差を把握するには、今後さらに多くの遺跡で資料を蓄積していく必要がある。

また、柱材については、これまでもいくつかの遺跡で調査が行なわれてきた。これらの結果を比較すると、マツ属複雑管束亜属が多いが、全体的に樹種が多い。これは、柱材が出土した遺構の性格や用途、使用者の階級等の違いを表している可能性があるが、現時点では不明である。遺構の性格の詳細な検討と樹種同定結果を併せた解析が必要である。

写真3 川津二代取遺跡出土木製品の材頭微鏡写真



1. スギ近似種 (SK13 杓文字状木製品)
2. マキ属の一種 (SP672 柱材)

200 μm : a
200 μm : b, c

第2節 川津二代取遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

川津二代取遺跡の発掘調査では、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺物を包含する溝状遺構が検出された。また、同遺構の北側では微凹地において水田跡が検出されていた。この調査は、水田遺構が検出された微凹地とほぼ同様な、溝状遺構に隣接する凹地においてプラント・オパール分析を行ない、稲作跡の調査を試みたものである。

2. 試料

試料は、検出された遺構面が次第に標高を下げる凹地部分の堆積層で、下位より7層、5層、4層の3点である。試料は、遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行なった。

- 1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μ m，約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μ m以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもに機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。なお、稲作跡の調査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。計数は、

ガラスビーズ個数が400以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。

4. 分析結果

試料1g中のプラント・オパール個数を表1に示す。巻末に主な分類群の顕微鏡写真を示した。

表1 試料1g中のプラント・オパール個数（単位：個/g）

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
4層	3,000	1,500	17,700	1,500	0
5層	2,000	2,700	22,900	0	0
7層	2,100	700	10,800	0	0

7層、5層、4層、について分析を行なった。その結果、イネはすべての試料から検出された。密度は2,000~3,000個/gとやや低い値である。ヨシ属、タケ亜科もすべての試料から検出された。このうち、タケ亜科はいずれも高い密度である。ウシクサ族は4層でのみ検出されたが低密度である。キビ族は検出されなかった。

5. 考察

(1) 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行なう場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行なわれていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行なわれていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行なった。

本遺跡では、分析を行なったすべての層からイネのプラント・オパールが検出された。し

たがって、これらの層で稲作が行なわれていた可能性が考えられる。ただし、密度がやや低い値であること、遺構が検出されていないことなどから、近傍で稲作が行なわれており、そこからイネのプラント・オパールが混入した可能性も考えられる。

(2) 古環境の推定

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

本地点では全体にタケ亜科が卓越している傾向が認められた。このことから、これらの土層が堆積した時期は、ネザサ節やクマザサ属が繁茂するような、比較的乾いた土壌条件であったものと推定される。

【参考文献】

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体 標本と定量分析法－。

考古学と自然科学，9：15-29。

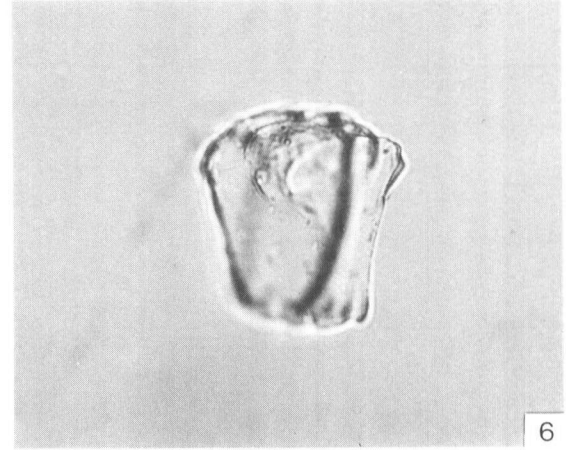
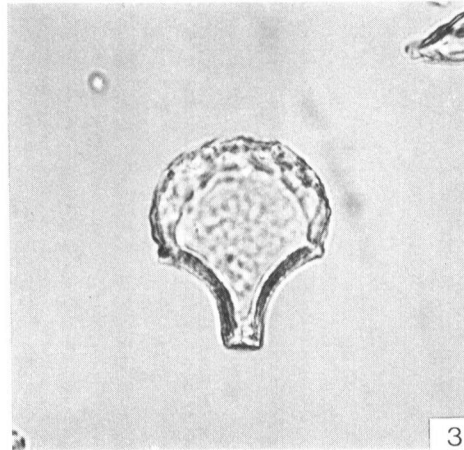
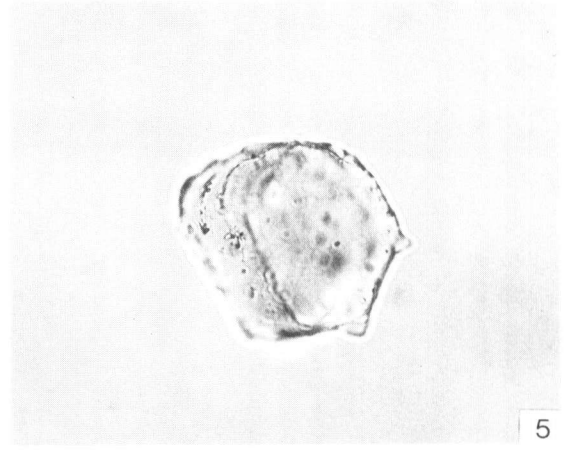
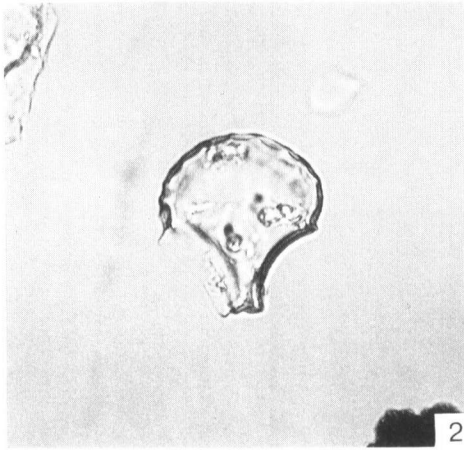
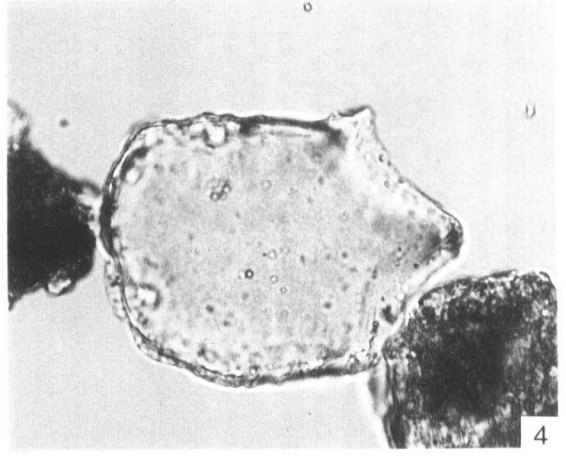
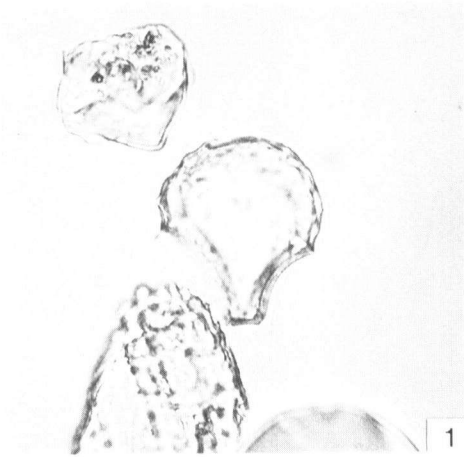
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－。考古学と自然科学，17：73-85。

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ		7層
2	イネ		5層
3	イネ		4層
4	ヨシ属		5層
5	タケ亜科属		7層
6	タケ亜科		4層

写真4 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真



- 1. イネ
- 2. イネ
- 3. イネ
- 4. ヨシ属
- 5. タケ亜科族
- 6. タケ亜科

倍率はすべて500倍

第3節 川津二代取遺跡出土土器にかかわる赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田博幸 金杉直子

川津二代取遺跡は、坂出市の西南部、飯野山の東を北流する大東川右岸の河岸段丘上（海拔約8m）に位置し、弥生時代前期～鎌倉時代にかけての遺跡が検出されている。

このたび、平成2年度の調査において、同遺跡より出土した弥生時代の土器に付着・残存している赤色顔料物質について化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法⁽¹⁾とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行ない、所見を得たので報告する。

試薬の外観および分析用試料の採取

試料「O, P-41, 42区 S D 05」下層より出土の弥生土器(229、壺または甕)の内面底部に付着・残存していた赤色顔料部分の数カ所から、調査担当者により鋼針などを用いて注意深く削り取り採取された赤褐色粉末約5mg。その2～3mgを分析用試料とする。

試料検液の作製

上記の分析用試料をガラス形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温して酸可溶性成分を溶解させたのち、適量の蒸留水を加えて遠心分離機にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙No. 51B (2cm×40cm)を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン(Fe^{3+})と水銀イオン(Hg^{2+})の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わつたろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は、検出試薬として1%ジフェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には、検出試薬として0.05%ジチゾンのクロロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置(Rf値で表現する)と色調を検した。

上記試料検液、ならびに、対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表1、表2のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：(Hg²⁺は紫色、Fe²⁺は紫褐色のスポットとして検出される。)

表1 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf 値(色調)
試料検液	0.84(紫色)
Fe ³⁺ 標準液	0.16(紫褐色)
Hg ²⁺ 標準液	0.85(紫色)

- (2) ジチゾンによる検出：(Hg²⁺は橙色スポットとして検出され、Fe³⁺は反応陰性のため呈色せず。)

表2 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf 値(色調)
試料検液	0.85(橙色)
Fe ³⁺ 標準液	呈色スポット発現せず
Hg ²⁺ 標準液	0.89(橙色)

判定

以上の結果のように、川津二代取遺跡より出土した弥生土器(229、壺または甕)の内面底部に付着していた赤褐色顔料の分析試料の検液中からは、Hg²⁺が検出された。したがって、同部分に付着・残存していたのは、ベンガラ(酸化鉄、Fe₂O₃)系の赤色顔料ではなく、水銀朱(辰砂、HgS)であることが確認されたわけである。この弥生土器がどのような用途のものであったかなど、今後のこの弥生土器に関する精査を期待したい。(1993年10月分析)

[註]

- 1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『斎藤忠編集日本考古学論集 1 考古学の基本的諸問題』古川弘文館 pp. 389-407(1986)
 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集』第7 古川弘文館 pp. 449-471(1984)

第5章 まとめにかえて

川津二代取遺跡からは、弥生時代前期の自然河川・弥生時代後期から古墳時代前期の溝状遺構群・中世の集落が検出された。これらについて、各々の報告の末尾に簡単なまとめを記述しているため、ここでは総括的なことを簡単に述べてまとめにかえたい。

① 微地形と遺跡の関係

第2章の遺跡の立地と環境の章で、遺跡周辺の微地形について述べた。ここで再び検出した遺構と微地形の関係をまとめておく。弥生時代前期の河川は巨視的に川津二代取遺跡の東南から北流し、遺跡北側に接する川津下樋遺跡に続いているが、これは第11図に掲げた微地形分類予察図の遺跡西側に存在する河道に相当するものと思われる。遺跡の東側の河道については、第3章第1節の層序の概要で述べている通り、年代不明の河道に相当するものと思われる。これらの河道は第11図に掲げる河道のように網状で複雑に重複しながら北流していると推定される。

中世の集落は、このような微高地や旧河道とは無関係に立地している。これも第2章で述べたように大東川の下刻による段丘化によるものと考えられる。

② 弥生時代後期～古墳時代前期の溝

本報告書では、弥生時代後期から古墳時代前期の溝群と呼称してきたが、正確には須恵器を含んでいるから古墳時代中期後半もしくは後期の溝も含まれている。これらは掘削しては埋没するというように掘削と埋没を繰り返しているようで、結果として多数の溝状遺構になったのであろう。これらの溝の連続すると思われるものが北側の川津中塚遺跡^(註)でも検出されており、下川津遺跡にまで連続する可能性が高い。想像をたくましくすると、S D15などのように本流となる溝状遺構の流れの方向に分岐する小溝があることから周囲に水を分水する目的もあったと思われ、下流域に存在する集落への生活用水という側面と農業用水という二つの側面を持っているものと想像される。

③ 中世の集落およびそれ以降

12世紀後半から13世紀前半の時期に当地に集落が営まれた。建物の主軸は概ね周辺の条里型地割の方向に平行か直交するものである。20棟の掘立柱建物を復元したが、本文中でも述べるように検討の余地を残すものが多い。集落は火災に遭っている模様である。その後の土

地利用は、水田もしくは畑地で、溝状遺構や柵列を検出している。

(注) 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十四冊 川津中塚遺跡』 1994香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

観察表 凡例

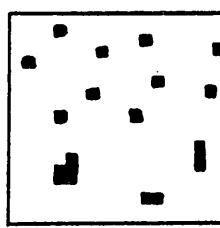
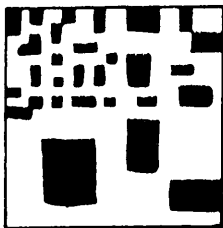
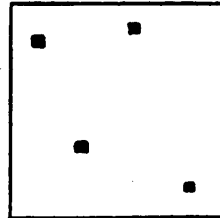
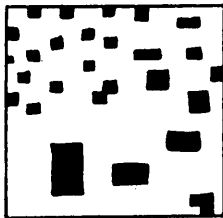
- ・遺物名称は以下のような略号を用いている。

弥 弥生土器、 弥前 弥生前期土器

弥後～古前 弥生時代後期から古墳時代前期の土器

- ・胎土は砂粒のおおまかな径と以下のような含有量を記載している。

「多含」 多く含む、「含」 含む、「わずか含」 わずかに含む、の3段階で含有量を示す。基準はおおむね下図の通りである。また、gl は火山ガラスの略である。



多く含む ————— 含む ————— わずかに含む

- ・色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修『新版標準土色帖1992版』を使用している。
- ・残存率は、遺物の図化に用いた復元径に対する実物の割合を示した。

土器観察表

挿入番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
22		1	O.P-41.42区 SD02	弥前 甕	-	-	(12.0)	3.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y6/4にぶい黄 外:2.5Y4/2暗灰黄	マメツ	指頭痕、ヘラ ミガキ	5/8	
22	41	2	O.P-41.42区 SD02	弥前 甕	-	(8.5)	(21.7)	3.0mm以下砂粒 多含	内:7.5YR4/1褐灰 外:2.5YR5/8明赤褐	指頭痕、マメ ツ	指頭痕、マメ ツ	3/8	
23		4	O-37.38区 SD03	弥前 甕	(19.4)	-	-	1.5mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/1 灰白 外:2.5Y8/2灰白	マメツ、指頭 痕	マメツ	2/8	ヘラ描き沈線 4 条
23		5	M.N-36区 SD03	弥前 甕	(21.6)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内 外:10R5/6赤	マメツ	マメツ	1/8	
23		6	O-37.38区 SD03	弥前 甕	-	-	-	2.0mm以下砂粒 含	内:10YR6/2灰黄褐 外:2.5Y6/3にぶい黄	マメツ	マメツ、ヨコ ナデ、指頭痕	-	
23		7	O-37.38区 SD03	弥前 甕	-	-	-	1.5mm以下砂粒 多含	内:2.5Y4/2暗灰黄 外:7.5YR7/6橙	剥落、ナデ、 指頭痕	ナデ	1/8	端部=刻み目、体 部=ヘラ描き沈線 2 条
25	41	9	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 甕	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含(金盞母含)	内 外:5 Y6/3オリーブ黄	ナデ、板ナデ	ナデ	2/8	ヘラ描き沈線、頸 部=1条、ヘラ描き 連弧文
25	41	10	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 甕	-	-	-	1.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/2灰黄 外:2.5Y6/2灰黄	マメツ	マメツ	1/8	ヘラ描き山形文
25	41	11	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 甕	-	-	-	3.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y2/1黒 外:5 Y6/2灰オリーブ	指頭痕、ナ デ、絞り目	ヘラケズリ、 ヘラミミガキ、 ナデ	4/8	刻み目突帯、ヘラ 描き沈線 4 条、12 条
25		12	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 甕	-	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/4浅黄 外:7.5YR8/6浅黄橙	マメツ	マメツ	-	棒状浮文、ヘラ描 き沈線 4 条以上同 列点文、No.59と向 一 個 体 ?

挿図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
25		13	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	8.3	1.5mm以下砂粒 多含	内: 5Y7/2灰白 外: 5Y6/2灰オリーブ	ヘラミガキ, 指頭痕	ヘラミガキ, 指頭痕	5/8	
25		14	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	9.5	1.5mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y4/2暗灰黄 外: 2.5Y6/4にぶい黄	ヘラミガキ, 指頭痕	ヘラミガキ, 指頭痕, ナデ	3/8	
25		15	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	9.8	1.0mm以下砂粒 含	内: 2.5Y6/2灰黄 外: 2.5Y8/3淡黄	ナデ, マメツ	指頭痕, マメ ツ	7/8	
25		16	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	7.6	2.0mm以下砂粒 多含	内: 5Y4/1灰 外: 2.5Y6/4にぶい黄	板ナデ	マメツ	7/8	
25		17	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	8.4	1.5mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y7/2灰黄	指頭痕, 板ナ デ, ナデ	指頭痕, マメ ツ	5/8	
25		18	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	6.5	2.0mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/4残黄 外: 2.5Y7/3残黄	ヘラミガキ	マメツ	6/8	
25		19	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	5.5	1.5mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y3/1黒褐 外: 2.5Y7/3残黄	マメツ	マメツ	2/8	
25		20	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	(6.9)	1.5mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y8/3淡黄 外: 2.5Y6/3にぶい黄	板ナデ	マメツ	4/8	
25		21	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	(4.2)	1.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y6/3にぶい黄 外: 2.5Y8/3淡黄	ナデ, 指頭痕	指頭痕, 板ナ デ, マメツ	5/8	
25		22	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 底部	-	-	5.7	1.5mm以下砂粒 多含	内: 7.5Y6/2灰オリーブ 外: 5Y6/4オリーブ黄	マメツ	板ナデ	6/8	

挿番	図番	図版番号	文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
25			23	O.P-43区 SR01(東)下層	弥前 甌	-	-	7.3	2.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y6/4にぶい黄 外:10YR5/6黄褐	マメツ	マメツ	6/8	焼成後1孔
28			31	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 壺	(21.0)	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内:5YR4/6橙 外:5YR6/8橙	指頭痕、マメ ツ	マメツ	3/8	ヘラ描沈線6条
28			32	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 壺	(17.2)	-	-	4.0mm以下砂粒 多含	内:7.5Y7/6橙 外:2.5Y7/3残黄	指頭痕、マメ ツ	マメツ	6/8	
28	41		33	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 壺	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y6/3にぶい黄 外:2.5Y6/2灰黄	マメツ	ヘラミガキ	1/8	削り出し突帯
28			34	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 壺	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/1灰白 外:2.5Y7/3残黄	剝落	ハケ、ナデ	-	ヘラ描き沈線2条
28			35	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 甌	(20.6)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y6/2灰黄 外:2.5Y7/3残黄	ナデ、指頭痕	ナデ、ヨコナ デ、指頭痕	1/8	口縁端部刻み目
28	41		36	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 甌	(21.4)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内:5Y7/3残黄	マメツ	ヨコナデ	1/8	ヘラ描き沈線8条 以上
28	41		37	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 甌	(23.9)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y6/3にぶい黄 外:2.5Y6/2灰黄	ナデ	指頭痕	1/8	簡描文、刺突文
28			38	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 壺	-	-	8.9	4.0mm以下砂粒 多含	内:5Y7/4残黄 外:10YR7/2にぶい黄橙	剝落	ナデ、指頭 痕、剝落	5/8	
28			39	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 壺 底部	-	-	6.2	1.5mm以下砂粒 含	内:2.5Y6/3にぶい黄 外:7.5Y7/6橙	指頭痕	ヘラミガキ	6/8	

挿 番	図 番	報 番	文 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
28		40	O.P-43区 SR01(東)上層	弥前 底部	-	-	8.0	2.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y4/1黄灰 外:10YR8/6黄橙	マメツ	板ナデ、ナ デ、マメツ	6/8		
28		41	O.P-43区 SR01(東)上層	甕 弥前 底部	-	-	6.2	2.0mm以下砂粒 多含	内:7.5YR8/1灰白 外:2.5Y8/3淡黄	マメツ	マメツ、指頭 痕	7/8		
28		42	O.P-43区 SR01(東)上層	甕 弥前 底部	-	-	6.8	3.0mm以下砂粒 多含	内:5Y6/4にぶい黄 外:7.5YR5/6明黄	マメツ	板ナデ、ナ デ、マメツ	5/8		
28	42	43	O.P-43区 SR01(東)上層	甕 弥前 底部	-	-	7.3	2.0mm以下砂粒 多含	内:5Y8/4淡黄 外:5Y7/3浅黄	指頭痕、ヘラ ミガキ	指頭痕、ヘラ ミガキ	7/8		
28	42	44	O.P-43区 SR01(東)上層	甕 弥前 底部	-	-	8.2	3.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y4/2暗灰黄 外:2.5Y6/4にぶい黄	ナデ、指頭 痕、剥落	板ナデ、ナ デ、マメツ	7/8	焼成後1孔	
28		45	O.P-43区 SR01(東)上層	甕 弥前 底部	-	-	6.5	3.0mm以下砂粒 含	内:5Y6/3灰オリーブ 外:5Y7/3浅黄	指頭痕、ヘラ ミガキ	ヘラケズリ、 ヘラミガキ	2/8	焼成後1孔	
28		46	O.P-43区 SR01(東)上層	甕 弥前 底部	-	-	7.0	4.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y6/3にぶい黄 外:10YR6/8明黄褐	マメツ	マメツ	7/8	焼成後1孔	
31		55	O.P-43区 SR01(東)	甕 弥前 底部	16.0	-	-	1.5cm以下砂粒 多含	内:10YR8/2灰白 外:10YR8/3淡黄橙	マメツ	マメツ	2/8	ヘラ描き沈線3条	
31		56	O.P-43区 SR01(東)	甕 弥前 底部	-	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y6/3にぶい黄 外:2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ	-	ヘラ描き沈線1条	
31	43	57	O.P-43区 SR01(東)	甕 弥前 底部	(9.9)	-	-	3.0mm以下砂粒 多含	内:5Y6/2灰オリーブ	マメツ、指頭 痕	ナデ	2/8	ヘラ描き沈線頭部 2条、体部6条、 焼成前穿孔6孔	

挿 番	図 号	図 版 番	報 告 番	文 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
31			58		O.P-43区 SR01(東)	弥前 壺	—	—	—	1.5mm以下砂粒 多含	内：5Y6/1灰 外：10YR6/8明黄褐	マメツ	マメツ	1/8	ヘラ描き沈線5条
31		43	59		O.P-43区 SR01(東)	弥前 壺	—	—	—	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/3浅黄 外：10YR7/4にぶい黄橙	剝落	マメツ、ハ ケ、ナデ	—	ヘラ描き沈線8条 以上、刺突文、棒 状浮文
31			60		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(24.4)	—	—	2.0mm以下砂粒 多含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/4浅黄	ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘ ラミガキ	1/8 以下	口縁端部刻み目
31			61		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(25.6)	—	—	3.0mm以下砂粒 多含	内：7.5YR5/8明褐 外：10YR4/3にぶい黄褐	マメツ、指頭 痕	マメツ、指頭 痕	1/8	ヘラ描き沈線7 条、端部刻み目
31			62		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(19.8)	—	—	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y7/3浅黄	指頭痕、ナデ	ナデ	1/8 以下	ヘラ描き沈線7条 以上、端部刻み目
31			63		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(20.2)	—	—	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y4/2暗灰黄 外：2.5Y5/3黄褐	マメツ	指頭痕	1/8	ヘラ描き沈線8条 以上、端部刻み目
31			64		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(16.0)	—	—	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5YR4/4にぶい赤 褐 外：10R5/6赤	マメツ、指頭 痕	マメツ	1/8 以下	ヘラ描き沈線7条
31			65		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(23.0)	—	—	1.5mm以下砂粒 多含	内：10YR5/3にぶい黄褐 外：5YR5/6明赤褐	マメツ	マメツ	1/8 以下	
31			66		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(18.7)	—	—	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：10YR6/3にぶい黄橙	マメツ	ハケ	1/8	
31			67		O.P-43区 SR01(東)	弥前 甕	(14.1)	—	—	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5Y5/3黄褐	マメツ	マメツ	1/8	ヘラ描き沈線6条 以上

挿 号 番	図 号 番	版 号 番	報 号 番	文 号 番	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
31	43		68		O.P-43区 SR01(東)	弥前 壺	(21.0)	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内：10Y R5/3にぶい黄褐 外：10Y R5/3にぶい黄褐	マメツ	マメツ	1/8 以下	へラ描き沈線11条
31	43		69		O.P-43区 SR01(東)	弥前 壺	(21.2)	-	-	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/2灰黄 外：2.5Y5/3黄褐	マメツ	マメツ	1/8 以下	へラ描き沈線5条 以上
31			70		O.P-43区 SR01(東)	弥前 壺	-	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y8/3淡黄 外：2.5Y8/3淡黄	剥落の為調 整不明	ナデ	-	へラ描き沈線3条 以上
32			71		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	(15.8)	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：10Y R7/6明黄褐	板ナデ, ナデ	板ナデ, ナ デ, 指頭痕	7/8	
32			72		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	12.3	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：10Y R7/3にぶい黄橙	指頭痕, マメ ツ	ナデ, マメツ	7/8	
32			73		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	(8.6)	2.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：10Y R6/4にぶい黄橙	指頭痕, 板ナ デ, ナデ	板ナデ, ナデ	7/8	
32			74		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	9.7	4.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：10R5/8赤	マメツ, 指頭 痕	マメツ	8/8	
32			75		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	8.8	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5Y6/3にぶい黄	指頭痕, マメ ツ	指頭痕, へラ ケスリ, マメ ツ	8/8	
32			76		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	(8.4)	1.5mm以下砂粒 含	内：5 Y7/3浅黄 外：2.5Y7/4浅黄	剥落	へラミガキ, 板ナデ	3/8	
32			77		O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部 壺	-	-	6.7	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/3にぶい黄	板ナデ, ナデ	板ナデ, ナデ	6/8	

挿図番号	図版番号	文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
32		78	O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部	-	-	7.2	4.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y5/2暗灰黄 外:2.5Y7/4浅黄	マメツ	ナデ	6/8	
32		79	O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部	-	-	6.2	3.0mm以下砂粒 多含	内:7.5Y6/3オリーブ黄 外:5YR5/6明赤褐	剝落	マメツ	5/8	
32		80	O.P-43区 SR01(東)	弥前 底部	-	-	6.1	3.0mm以下砂粒 含	内:7.5YR6/6橙 外:5YR5/8明赤褐	マメツ	マメツ	6/8	
34		91	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺	17.0	-	-	1.5mm以下砂粒 多含	内:2.5Y6/4にぶい黄 外:10YR6/6明黄褐	ナデ	ナデ、ヘラミ ガキ	1/8	ヘラ描き沈線上半 3条、下半3条以 上
34		92	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/2灰黄 外:2.5Y8/2灰白	マメツ	指頭痕、ナデ	2/8	貼り付け突帯(刻 み目)、ヘラ描き沈 線2案以上
34	43	93	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:5Y4/2灰オリーブ 外:5Y6/3オリーブ黄	マメツ	指頭痕、ナ デ、マメツ	-	貼り付け突帯(刻 み目)、端部刻み目
34	44	94	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺	(27.3)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y6/4にぶい黄 外:2.5Y7/4浅黄	ナデ	ヨコナデ、ナ デ、指頭痕	3/8	櫛描文、刺突文、 ヘラ描き沈線1条
34		95	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺 底部	-	-	7.9	3.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/4浅黄	ヘラケズリ	ヘラケズリ、 ナデ、ハケ	3/8	
34		96	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺 底部	-	-	(7.1)	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y3/1黒褐 外:5YR4/6赤褐	マメツ	ヘラケズリ	3/8	
34		97	O.P-43区 SR01(西)	弥前 壺 底部	-	-	(6.6)	0.8mm以下砂粒 多含	内:7.5YR3/2黒褐色 外:7.5YR5/6明褐	板ナデ	ヘラケズリ	2/8	

挿入 番号	図号 番号	図版 番号	文 報 番 号	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	調整 (内面)	調整 (外面)	残存	備考
34			98	O-P-43区 SR01(西)	弥前 底部	-	-	6.5	1.5mm以下砂粒 多含	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：7.5YR5/8明褐	板ナデ	ハケ	8/8	
34			99	O-P-43区 SR01(西)	弥前 甌	-	-	(8.1)	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y8/3淡黄 外：2.5Y6/4にぶい黄	マメツ	マメツ	3/8	焼成後1孔
34			100	O-P-43区 SR01(西)	弥前 甌	-	-	7.7	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/4浅黄 外：2.5Y7/3浅黄	指頭痕	マメツ	8/8	焼成後1孔
34			101	O-P-43区 SR01(西)	弥前 蓋	-	12.6	(20.5)	3.0mm以下砂粒 多含	内：10YR6/6明黄褐	ナデ、指頭 痕、板ナデ	マメツ、ナ デ、ハケ	6/8	
36		44	106	N-37.38区 SR01河底	弥前 壺	13.7	32.4	9.0	3.0mm以下砂粒 含	内：5Y6/3オリーブ黄 外：10YR6/4にぶい黄橙	ヘラミガキ、 ナデ	ヘラミガキ ナデ、マメツ	7/8	貼り付け突帯、ヘ ラ描き沈線3条、 竹管文
36		44	107	N-37.38区 SR01河底	弥前 壺	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：10YR5/4にぶい黄褐 外：2.5Y5/3黄褐	マメツ	ナデ	1/8	貼り付け突帯
36			108	N-37.38区 SR01河底	弥前 壺	(21.4)	-	-	2.0mm以下砂粒 含	内：5YR5/4にぶい赤褐 外：5YR5/6明赤褐	マメツ	マメツ	2/8	ヘラ描き沈線1条 以上
36			109	N-37.38区 SR01河底	弥前 壺	13.8	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：5Y8/3浅黄 外：2.5Y8/4浅黄	マメツ	マメツ	2/8	
36		45	110	N-37.38区 SR01河底	弥前 壺	-	16.2	6.0	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ	7/8	貼り付け突帯(刻 み目)、ヘラ描き沈 線4~5条
36			111	N-37.38区 SR01河底	弥前 底部	-	-	8.9	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y4/6オリーブ褐 外：2.5Y5/3黄褐	指頭痕	マメツ	6/8	

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	報 文 番 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
36	45	112	N-37,38区 SR01河底	弥前 甕	(21.1)	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/3淡黄	ナデ	ナデ	1/8	端部刻み目、削出 し突起(刻み目)	
36	45	113	N-37,38区 SR01河底	弥前 甕	20.1	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/3浅黄 外:2.5Y7/4浅黄	指頭痕、マメ ツ	指頭痕、ナデ	1/8	端部刻み目、ヘラ 描き沈線2条	
38	45	117	N-37,38区 SR01上層	弥前 甕	21.9	28.6	8.3	3.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/2灰黄 外:2.5Y5/2暗灰黄	マメツ	マメツ、ハケ	6/8	ヘラ描き沈線10~ 11条	
43	46	118	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	(19.7)	-	-	4.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/3浅黄 外:2.5Y6/2灰黄	ハケ、ナデ	ナデ、タタキ 後ナデ、ハケ	7/8		
43	46	119	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	22.1	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内:2.5Y5/6明赤褐 外:5YR7/8橙	ヨコナデ	ナデ、ハケ	7/8	口縁端部刻み目	
43	46	120	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	(25.0)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:5Y6/2灰オリーブ 外:2.5Y7/3浅黄	ナデ、ハケ、 マメツ	ナデ、ハケ	1/8	191と同一個体 か?	
43	46	121	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	(15.9)	-	-	3.0mm以下砂粒 含	内:10YR7/4にぶい黄橙	ナデ、指頭 痕、板ナデ	ハケ、ナデ、 ヘラミガキ	6/8		
43	46	122	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	(15.5)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y4/2暗灰黄 外:5YR5/6明赤褐	ナデ、ハケ	ナデ、タタキ 後ハケ	2/8		
43	46	123	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	(17.7)	-	-	2.0mm以下砂粒 含(金雲母含)	内:7.5YR5/4にぶい褐 外:7.5Y5/6明褐	ナデ、板ナ デ、指頭痕	ナデ、タタキ 後ハケ	3/8		
43	46	124	O,P-41,42区 SD04下層	弥後~古前 壺	(14.0)	-	-	0.8mm以下砂粒 わずかな含(g多 含)	内:5Y7/2灰白 外:5Y8/2灰白	ナデ、板ナデ	ナデ	2/8	沈線1条・下川津 C類	

挿 番	図 号	図 版 番	報 文 番	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
43			125	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 壺	(18.3)	—	—	1.0mm以下砂粒 含(g多含)	内：2.5Y7/2淡黄 外：2.5Y8/2灰白	ナデ, マメツ	ナデ, マメツ	3/8	下川津C類
43		46	126	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 壺	19.2	—	—	1.0mm以下砂粒 含(gわずか含)	内：2.5Y8/4淡黄 外：2.5Y8/2灰白	マメツ	マメツ	7/8	下川津C類
43			127	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 甕	(14.7)	—	—	1.0mm以下砂粒 多含	内：7.5Y7/6橙 外：2.5Y7/4浅黄	指頭痕	マメツ	2/8	
43			128	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 甕	(14.1)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5 Y 6/3オリ ーブ黄	ナデ, ヘラク スズリ, 指頭 痕, 板ナデ	ナデ, タタキ 後ハケ	1/8	
43			129	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 甕	(13.0)	—	—	1.0mm以下砂粒 含(g多含)	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y8/3淡黄	ナデ, マメツ (指頭痕)	ナデ, マメツ	2/8	下川津C類
43			130	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 甕	(12.2)	—	—	1.0mm以下砂粒 わずか含(gわ ずか含)	内：5 Y 7/3浅黄 外：2.5Y8/2灰白	ナデ, 指頭 痕, ヘラク スズリ, ナデ	ナデ, ハケ	1/8	下川津C類
44		46	131	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 甕	(26.0)	29.5	(6.1)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/1灰白 外：2.5Y7/2灰黄	指頭痕, ヘラ クスズリ, ハ ケ, ナデ	タタキ, ヘラ クスズリ, ナデ	3/8	
44			132	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後～古前 壺 底部か	—	—	4.6	2.5mm以下砂粒 多含	内：5 Y 7/3浅黄 外：5 Y 7/2灰白	マメツ	指頭痕	6/8	
44			133	O, P-41, 42区 SD04下層	弥前 甕 底部	—	—	(6.2)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y5/2暗灰黄	ナデ, マメツ	ナデ, 指頭痕	5/8	
44			134	O, P-41, 42区 SD04下層	弥前 甕 底部か	—	—	5.0	2.0mm以下砂粒 含	内：5 Y 8/2灰白 外：2.5Y8/2灰白	指頭痕, 板ナ デ	板ナデ, マメ ツ	6/8	

挿入番号	図番	版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
44			135	O, P-41, 42区 SD04下層	弥前 底部	-	-	5.0	1.5mm以下砂粒 含	内: 10YR5/4にぶい浅褐 外: 2.5Y6/3にぶい黄	剥落, ナデ	板ナデ, ナデ	5/8	
44			136	O, P-41, 42区 SD04下層	弥前 底部	-	-	6.4	1.5mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y7/4浅黄 外: 5 Y6/2灰オリープ	マメツ	指頭痕	6/8	
44			137	O, P-41, 42区 SD04下層	弥前 底部	-	-	7.6	2.5mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y8/1灰白 外: 2.5Y R6/6橙	マメツ	マメツ	2/8	
44			138	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 甕 底部	-	-	3.1	1.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/3浅黄	指頭痕, ハケ	タタキ, ナデ	7/8	
44			139	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 甕 底部	-	-	3.9	1.5mm以下砂粒 含	内: 5 Y7/2灰白	指頭痕, ナデ	タタキ, ハ ケ, ナデ	5/8	
44			140	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 甕 底部	-	-	3.2	2.0mm以下砂粒 含	内: 10YR8/2灰白 外: 2.5Y7/2灰黄	ヘラケズリ, 指頭痕	ナデ, タタ キ, ハケ	5/8	
44			141	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 甕 底部	-	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内: 5 Y6/1灰 外: 10YR7/3にぶい黄褐	指ナデ	タタキ, ハケ	-	
44			142	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 底部	-	-	3.4	1.0mm以下砂粒 含	内: 5 YR7/4にぶい橙 外: 2.5Y7/2灰黄	ハケ, 指頭痕	タタキ	5/8	
44			143	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 底部	-	-	3.1	2.0mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y8/1灰白 外: 7.5Y7/2灰白	指ナデ	タタキ, ハケ	6/8	
44			144	O, P-41, 42区 SD04下層	弥後~古前 底部	-	-	(3.2)	1.5mm以下砂粒 含	内: 5 Y6/2灰オリープ 外: 5 Y7/2灰白	指頭痕, 板ナ デ	タタキ	6/8	

挿入番号	図号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
44			145	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 底部	—	—	3.3	2.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y5/3黄褐	ハケ	タタキ、ハ ケ、ナデ	7/8	
44			146	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 底部	—	—	—	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y8/2灰白	ナデ、指頭痕	タタキ、ハ ケ、指頭痕	5/8	
44			147	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 底部	—	—	3.8	2.5mm以下砂粒 含	内：5Y3/1オリブ黒 外：5Y7/2灰白	マメツ	タタキ、ハケ	5/8	
44			148	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 鉢	(8.0)	4.0	1.0	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：5Y5/2灰オリブ	板ナデ	板ナデ	3/8	
44		46	149	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 鉢	(21.0)	6.5	—	4.0mm以下砂粒 含	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：2.5Y6/3にぶい黄	ハケ、ナデ、 マメツ	タタキ、ナ デ、マメツ	3/8	
44		46	150	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 鉢	12.6	4.5	—	2.5mm以下砂粒 含(g含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/2灰黄	マメツ、ヘラ ミガキ	マメツ	7/8	下川津C類
44			151	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 鉢	11.3	3.6	—	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5YR7/4淡赤橙 外：5YR7/4にぶい橙	マメツ	マメツ	7/8	
44			152	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 鉢	(15.7)	6.5	(4.1)	2.0mm以下砂粒 含	内：5YR4/4にぶい赤褐 外：5YR7/3にぶい橙	ハケ、ナデ	ナデ、タタキ	2/8	マメツ
44		47	153	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 脚台付鉢	20.0	9.1	6.3	4.0mm以下砂粒 含	内：7.5Y7/6橙 外：7.5YR8/6残黄橙	ヘラミガキ、 マメツ	指頭痕、タタ キ、マメツ	6/8	348と形態・胎土 ・色調が似る
44			154	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 鉢 底部	—	—	4.5	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y6/4にぶい黄	ハケ、ナデ	タタキ、ハ ケ、指頭痕	6/8	

插图番号	图版番号	报告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
44	47	155	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 小型丸底鉢	(11.2)	5.6	—	1.0mm以下砂粒 わずか含(g _多 含)	内：2.5Y8/2灰白 外：—	ナデ	ナデ	4/8	下川津C類
44	47	156	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 小型丸底鉢	(11.0)	6.2	—	0.8mm以下砂粒 わずか含(g _多 含)	内：2.5Y7/2灰黄 外：—	ナデ	ナデ, マメツ	2/8	下川津C類
45	47	157	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	(21.8)	—	—	1.0mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：7.5YR6/6黄橙 外：10YR6/4にぶい黄橙	ナデ	マメツ, ナデ	2/8	櫛描文
45	47	158	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	(25.4)	—	—	2.0mm以下砂粒 多含(金雲母 含)	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：10YR7/3にぶい黄	ヘラミガキ, マメツ	マメツ	2/8	
45	47	159	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	(16.4)	—	—	1.5mm以下砂粒 含(g _多 含)	内：2.5Y8/2灰白 外：5Y8/2灰白	マメツ	マメツ, ハケ	4/8	下川津C類
45	47	160	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	(15.8)	—	—	0.8mm以下砂粒 わずか含(g _多 含)	内：2.5Y8/2灰白 外：—	ヘラミガキ	マメツ	3/8	下川津C類
45	47	161	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	15.5	—	—	1.5mm以下砂粒 含(g _多 含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/3淡黄	マメツ	マメツ	2/8	下川津C類
45	47	162	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	—	—	12.5	1.5mm以下砂粒 含(g _多 含)	内：5Y7/3淡黄 外：5Y7/2灰白	ナデ	ハケ, ナデ	7/8	下川津C類
45	47	163	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	—	—	13.8	1.5mm以下砂粒 含(g _多 含)	内：5Y7/2灰白 外：—	ナデ	ナデ, マメ ツ, ハケ	6/8	下川津C類
45	47	164	O, P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 高杯	—	—	14.6	1.5mm以下砂粒 含(g _多 含)	内：2.5Y5/1黄灰 外：2.5Y8/2灰白	ナデ, ハケ	ナデ, 板ナデ	8/8	下川津C類

挿 番 号	図 番 号	報 文 番 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
45		165	O.P-41.42区 SD04下層	弥前 蓋	7.0	-	-	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y8/2灰白	指頭痕、マメ ツ	指頭痕、マメ ツ	2/8	
45	48	166	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 製塩土器	-	-	(5.4)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/1灰 外：10Y8/1灰白	ナデ	指頭痕、タタ キ	4/8	
45		167	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 ミニチュア	-	-	2.9	1.0mm以下砂粒 含	内：10YR8/3残黄橙 外：2.5YR7/2灰黄	ナデ	ナデ	7/8	
45	48	168	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 ミニチュア	-	-	2.5	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y5/4黄褐 外：10YR5/4にぶい黄褐	指頭痕	指頭痕	5/8	
45		169	O.P-41.42区 SD04下層	弥後～古前 ミニチュア	-	-	(3.6)	1.0mm以下砂粒 含	内：7.5YR4/6褐	板ナデ	ハケ、ナデ	6/8	
49	48	184	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 蓋	(13.5)	34.0	(5.1)	2.5mm以下砂粒 含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/6橙	ナデ、指頭 痕、板ナデ	ナデ、ハケ、 タタキ	5/8	
49		185	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 蓋	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：2.5Y7/3残黄	ナデ、指頭痕	ナデ、指頭 痕、ハケ	1/8	
49	48	186	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 蓋	-	-	4.7	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/3残黄 外：10YR7/4にぶい黄橙	ハケ、ナデ、 指頭痕	ナデ、指頭 痕、ハケ	6/8	
49	49	187	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 蓋	21.7	-	-	2.0mm以下砂粒 含(角閃石、金 雲母含)	内：2.5Y7/3残黄 外：2.5Y7/4残黄	ナデ、ハケ	ハケ、ナデ	7/8	貼り付け突帯(刻 み目)、鋸歯文
49	49	188	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 蓋	(19.4)	-	-	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/3残黄	ナデ、ハケ	ナデ、ハケ	3/8	鋸歯文

挿番号	図番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
49	49		189	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	18.0	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：N3/0暗灰 外：2.5Y8/4淡黄	ナデ、マメツ	ナデ、マメツ	4/8	
49			190	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	(19.2)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y4/1黄灰 外：2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ	1/8	
49			191	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	(24.3)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/4浅黄	ナデ、指頭 痕、ハケ、板 ナデ	タタキ、ナ デ、ハケ、指 頭痕	2/8	120と同一個体 か？
49			192	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	(20.6)	—	—	1.5mm以下砂粒 多含(角閃石)	内：7.5YR6/6橙 外：2.5YR5/8明赤褐	マメツ	マメツ、ハケ	5/8	端部ヘラ描き波状 文1条
50		3	193	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	38.6	—	12.2	1.0mm以下砂粒 多含	内：10YR4/3にぶい黄褐	指頭痕、ナデ	マメツ、ハケ	4/8	下川津B類
51		49	194	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 小型丸底壺	7.5	7.9	2.5	2.0mm以下砂粒 多含(金雲母)	内：7.5Y5/6明褐 外：2.5Y6/4にぶい黄	指頭痕、マメ ツ	指頭痕、マメ ツ	7/8	
51		49	195	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 小型丸底壺	(10.0)	8.3	(2.7)	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5YR7/3浅黄 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ、ナデ、 板ナデ	ナデ、ハケ	3/8	
51		49	196	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	(17.0)	—	—	4.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y8/3淡黄	ハケ、ヘラケ ズリ	タタキ、ハケ	3/8	
51			197	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	(15.4)	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内：10YR7/6明黄褐 外：10YR7/4にぶい黄橙	指頭痕、マメ ツ	タタキ、ハ ケ、マメツ	3/8	
51		49	198	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 壺	12.3	17.0	(2.8)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：5Y7/3浅黄	ヘラケズリ、 ナデ	タタキ、ハ ケ、ナデ	6/8	

插图番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
51		199	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	(15.8)	—	—	2.0mm以下砂粒 多含	内：10Y6/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/4残黄	ナデ、指頭 痕、ヘラケス リ	ナデ、タタ キ、ハケ	—	
51		200	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	(11.6)	—	—	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/1灰 外：10Y R6/6明黄褐	マメツ	ナデ、タタ キ、ハケ	2/8	
51	49	201	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	(14.0)	18.0	1.4	2.5mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：2.5Y7/3残黄	マメツ	マメツ、ハケ	3/8	
51	49	202	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	(14.6)	17.0	(5.0)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：10Y R6/4にぶい黄橙	ナデ、板ナデ	ナデ、タタキ	4/8	
51	50	203	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	(10.2)	8.4	—	1.5mm以下砂粒 含(石むすか 含)	内：2.5Y7/4残黄 外：2.5Y7/3残黄	ナデ、指頭 痕、ヘラケス リ	ナデ、ハケ	7/8	下川津C類
52		204	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕 底部	—	—	6.4	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄	指頭痕、板ナ デ	ハケ	6/8	
52		205	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕 底部	—	—	(9.0)	1.5mm以下砂粒 多含	内：10Y R6/4にぶい黄橙 外：10Y R7/2にぶい黄橙	板ナデ	タタキ、ハケ	6/8	
52		206	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕 底部	—	—	4.4	3.0mm以下砂粒 含	内：10Y R7/4にぶい黄橙 外：10Y R6/6明黄褐	ハケ、指頭痕	ハケ、タタキ	4/8	
52		207	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕 底部	—	—	5.5	2.5mm以下砂粒 含	内：7.5Y R8/4残黄橙 外：5 Y5/1灰	ハケ、マメツ	ハケ、マメツ	3/8	
52		208	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	—	—	3.8	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/4残黄 外：10Y R8/4残黄橙	指頭痕、ハ ケ、ヘラケス リ	ナデ、タタ キ、ハケ	6/8	焼成前1孔

插图番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
52	50	209	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 甕	—	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：10YR5/6黄褐 外：7.5YR7/4にぶい橙	ハケ、板ナ デ、ナデ	タタキ、ナデ	5/8	焼成前6孔
52		210	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 台付甕か	—	—	(6.6)	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR7/4にぶい橙	ナデ、指頭痕	マメツ、指頭 痕、ナデ	2/8	
52	50	211	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 鉢	—	—	3.0	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ、指頭痕	タタキ、ナデ	6/8	
52		212	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 鉢	15.4	6.4	4.0	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5YR6/6橙 外：5YR6/8橙	マメツ	マメツ、タタ キ	8/8	
52		213	O.P-41.42区 SD04上層	弥後 古前 鉢	—	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内：10YR7/6明黄褐 外：10YR7/4にぶい黄褐	ハケ	ハケ	7/8	
52	50	214	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 鉢	23.0	11.5	6.8	3.0mm以下砂粒 含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：7.5YR7/6橙	ハケ後ヘラ ミガキ、ナデ	タタキ後ハ ケ、ナデ	7/8	
52		215	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 高杯	13.3	—	—	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/3にぶい黄	ヘラミガキ	マメツ	5/8	
52	50	216	O.P-41.42区 SD04上層	弥後～古前 高杯	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5YR6/6橙 外：10YR6/4にぶい黄橙	板ナデ	マメツ、ハケ	6/8	円形透かし孔
55	50	225	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕	(20.2)	—	—	1.0mm以下砂粒 含(g含)	内：2.5Y7/2灰黄	ナデ、ハケ	ナデ	7/8	下川津C類
55		226	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕	(14.2)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：5YR6/8橙 外：5YR8/4淡橙	マメツ	マメツ	2/8	304.312と同一個 体か？

挿図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
55		227	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕	(21.1)	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：10Y R8/3淺黄橙 外：10Y R8/2灰白	マメツ	マメツ	1/8	
55		228	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕 底部	—	—	4.8	1.0mm以下砂粒 含	内：10Y R6/4にぶい黄橙 外：2.5Y 7/3淺黄	ハケ、指頭 痕、ナデ	タタキ、ハケ	6/8	
55	50	229	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕 底部	—	—	(12.0)	1.0mm以下砂粒 含	内：10Y R7/3にぶい黄橙 外：2.5Y 7/3淺黄	ハケ、ナデ、 指頭痕	ヘラミガキ	5/8	内面に朱
55		230	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕 底部	—	—	4.0	1.0mm以下砂粒 含	内：5 Y 6/1灰 外：7.5Y 5/6明褐	ハケ	剥落	4/8	
55		231	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 鉢	(39.4)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5Y R5/6明褐 外：10Y R5/6黄褐	ナデ、ハケ	ナデ、タタ キ、ハケ	1/8 以下	
55		232	O.P-41.42区 SD05下層	弥前 甕	—	—	9.4	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y 7/2灰黄 外：5 Y 8/2灰白	板ナデ	板ナデ	6/8	焼成後1孔
55		233	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 甕	—	—	5.5	2.0mm以下砂粒 含	内：5 Y 7/3淺黄	指頭痕、指ナ デ	タタキ、マメ ツ	7/8	焼成前2孔
55	50	234	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 小型器台	—	—	—	3.0mm以下砂粒 含	内：7.5Y R6/6橙 外：10Y R7/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	4/8	
55		235	O.P-41.42区 SD05下層	弥後～古前 製埴土器	—	—	(4.7)	2.0mm以下砂粒 含	内：7.5Y 3/1オリーブ黒	ナデ、指ナ デ、指頭痕	タタキ、指頭 痕、ナデ	5/8	
57		237	O.P-41.42区 SD05上層	弥後～古前 甕	(20.8)	—	—	3.0mm以下砂粒 含	内：5 Y 7/2灰白	指頭痕、横ナ デ	ナデ、ハケ	3/8	

挿図番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
57		238	O-P-41.42区 SD05上層	弥後～古前 甕	12.5	-	-	3.0mm以下砂粒 多含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR6/6明黄褐	板ナデ	タタキ	5/8	
57		239	O-P-41.42区 SD05上層	弥後～古前 甕	(13.2)	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：7.5YR6/6橙	ナデ、指頭 痕、ヘラケス リ	ナデ、タタ キ、ハケ	3/8	
57		240	O-P-41.42区 SD05上層	弥後～古前 甕	-	-	4.4	2.0mm以下砂粒 含	内：5Y5/1灰 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ	ナデ、タタキ	7/8	焼成前1孔
57		241	O-P-41.42区 SD05上層	弥後～古前 高杯	(25.6)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：7.5YR6/4橙	マメツ	ナデ	1/8	
59	51	242	O-39.40区 SR01	弥生中期 甕	(11.5)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/4浅黄	板ナデ、ヘラ ミガキ		2/8	貼り付け突帯(刻 み目)8条、櫛描 文、複線波文
59		243	O-39.40区 SR01	弥前 甕	(13.2)	-	-	2.5mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：2.5Y7/4浅黄 外：2.5Y7/3浅黄	指頭痕、ヘラ ケスリ	指頭痕、ナ デ、マメツ	2/8	ヘラ描き沈線5条
59		244	O-39.40区 SR01	弥前 底部	-	-	(7.3)	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/4淡黄 外：2.5Y7/3浅黄	指頭痕、板ナ デ	指頭痕、ナデ	4/8	
59		245	O-39.40区 SR01	弥前 底部	-	-	(7.4)	3.0mm以下砂粒 多含	内：5YR6/6橙 外：10R5/4赤褐	剥落、ナデ、 指頭痕	剥落	4/8	
59		246	O-39.40区 SR01	弥前 底部	-	-	9.2	4.0mm以下砂粒 多含	内：5YR6/4にぶい橙	剥落	剥落	3/8	
59		247	O-39.40区 SR01	弥前 底部	-	-	13.2	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y5/2暗灰黄	指頭痕、ヘラ ミガキ	ハケ	5/8	

挿図番号	図番	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	口径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
61	51	251	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(20.2)	-	-	1.0mm以下砂粒 多含	内:5YR5/6明赤褐 外:5YR5/6明赤褐	ナデ, 指頭 痕, ハケ	ナデ, 板ナデ	6/8	端部に竹管文, 山 形文
61		252	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(14.8)	-	-	2.5mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/3淺黄 外:2.5Y7/3淺黄	マメツ	ナデ, ハケ	3/8	端部に複線波文
61	51	253	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(12.7)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:5YR5/6明赤褐 外:2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ	1/8	
61	51	254	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 小型丸底甕	(8.0)	8.8	1.4	1.5mm以下砂粒 含(金雲母含)	内:7.5YR6/4にぶい橙 外:7.5YR7/4にぶい橙	ナデ, 指頭痕	ナデ, ハケ	7/8	
61		255	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(15.8)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:5Y7/1灰白 外:2.5Y7/2灰黄	ヘラケズリ	マメツ	1/8	
61		256	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(15.1)	-	-	1.0mm以下砂粒 多含	内:2.5Y7/4淺黄	板ナデ, ナデ	ハケ, ナデ	1/8	
61		257	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(15.4)	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/4淺黄	ナデ, ハケ, 指頭痕	ナデ, タタ キ, ハケ	2/8	
61		258	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含(金雲母含)	内:2.5Y7/2灰黄	ナデ, 指頭痕	ナデ, タタキ	-	
61	51	259	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(14.6)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/3淺黄 外:5Y7/3淺黄	ヘラケズリ 板ナデ, 指頭 痕, ナデ	タタキ, 板ナ デ, ナデ	5/8	
61		260	O-39,40区 SD05等	弥後~古前 甕	(15.1)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:10YR8/2灰白 外:7.5YR5/6明褐	指頭痕, ハ ケ, ナデ	タタキ, ナデ	1/8	

插图番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
61		261	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕	(15.6)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：—	マメツ	マメツ	3/8	
61		262	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕	(15.2)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y5/3黄褐 外：2.5Y7/3浅黄	マメツ, 指頭 痕, ナデ	ナデ, ハケ, タタキ	1/8	
61		263	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕	(16.4)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/1灰白 外：2.5Y7/3浅黄	ナデ, 指頭痕	ナデ, タタ キ, ハケ	2/8	
61		264	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕	(13.6)	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/4浅黄 外：2.5Y7/3浅黄	ナデ, ハケ, 指頭痕	ナデ, ハケ, タタキ	3/8	
61	52	265	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕	(12.6)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y6/4にぶい黄	ハケ	タタキ, ナ デ, マメツ	2/8	
62		266	O-39,40区 SD05等	弥前 壺 底部	—	—	5.3	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y4/3オリープ褐 外：2.5Y5/3黄褐	ヘラミガキ	マメツ	7/8	
62		267	O-39,40区 SD05等	弥前 壺 底部	—	—	9.5	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/4浅黄 外：—	マメツ	マメツ, 指頭 痕	6/8	
62		268	O-39,40区 SD05等	弥前 壺 底部	—	—	(9.2)	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y8/4淡黄 外：2.5Y7/3浅黄	マメツ, 指頭 痕	マメツ, 指頭 痕	4/8	
62		269	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 壺 底部	—	—	6.2	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/4灰黄 外：2.5Y7/3浅黄	ナデ, ハケ	ハケ	3/8	
62		270	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 壺 底部	—	—	(7.3)	3.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y7/4浅黄	指頭痕, ナデ	ハケ, ナデ, マメツ	5/8	

挿番	図号	図番	報番	文号	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	調整 (内面)	調整 (外面)	残存	備考
62			271		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕 底部	—	—	3.8	2.0mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR7/6橙	ヘラケズリ	ハケ	4/8	
62			272		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕 底部	—	—	(4.1)	1.5mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：—	ナデ, 指頭痕	タタキ, ナデ	4/8	
62			273		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 甕 底部	—	—	5.7	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：5Y7/3浅黄	ハケ, 指頭痕	タタキ, ハケ	5/8	
62			274		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢 か	—	—	1.8	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/3浅黄	ヘラミガキ	タタキ, ナデ	8/8	
62		52	275		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	(22.0)	12.0	6.6	3.0mm以下砂粒 含	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：—	ハケ, ヘラミ ガキ	タタキ, ナデ	7/8	
62			276		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	(23.8)	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y5/2暗灰	ナデ	指頭痕, ナデ	2/8	
62			277		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	—	—	—	3.0mm以下砂粒 含	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：—	ナデ, ヘラミ ガキ	ナデ, ハケ	1/8	
62			278		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	—	—	—	3.0mm以下砂粒 含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/3浅黄	指頭痕, マメ ツ	タタキ, ナ デ, マメツ	1/8	
62		52	279		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	14.2	8.1	4.6	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5Y7/6橙 外：—	ハケ	タタキ	7/8	
62			280		O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	(14.5)	7.4	—	3.0mm以下砂粒 含	内：10YR6/6明黄褐 外：10YR7/3にぶい黄褐	ナデ	タタキ, ナデ	5/8	

插图番号	図番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
62		281	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 鉢	12.4	6.3	—	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ	ナデ	7/8	
62	52	282	O-39,40区 SD05等	弥生中期 高杯	—	—	12.3	1.0mm以下砂粒 含	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：7.5YR7/4にぶい橙	ナデ, ヘラケ スリ	ナデ, ヘラミ ガキ	8/8	
62		283	O-39,40区 SD05等	弥後～古前 高杯	—	—	—	0.8mm以下砂粒 含	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：10YR8/3浅黄橙	ナデ	ナデ	—	
62		284	O-39,40区 SD05等	弥前 蓋	—	—	(6.8)	2.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y8/2灰白 外：10YR8/3浅黄	指頭痕, マメ ツ	指頭痕, マメ ツ	5/8	
65	52	293	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 甕	—	—	4.2	2.5mm以下砂粒 含	内：5 Y7/3浅黄 外：2.5Y7/2灰白	ナデ, 板ナ デ, 指頭痕	ヘラミガキ タタキ, ナデ	8/8	
65		294	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 蓋	(16.0)	—	—	1.5mm以下砂粒 多含	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：2.5Y7/4浅黄	マメツ	マメツ	2/8	
65		295	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 甕 底部	—	—	(3.7)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y5/1黄灰	板ナデ	タタキ	3/8	
65	53	296	O-39,40区 SD05下層	弥後 古前 小型丸底甕	(9.4)	(9.7)	—	1.5mm以下砂粒 含(g含)	内 外：5 Y7/3浅黄	マメツ, ナデ	マメツ	6/8	下川津C類
65	52	297	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 甕	12.7	21.0	—	1.0mm以下砂粒 含(g多含)	内 外：2.5Y7/2灰黄	指頭痕, ナ デ, ヘラケス リ	ハケ, ナデ	6/8	下川津C類
65		298	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 甕	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5 Y7/3浅黄 外：7.5YR6/4にぶい橙	マメツ, ナデ	ハケ, ナデ	1/8	

挿入番号	図号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
65			299	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 鉢 底部	—	—	6.0	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/4浅黄 外：2.5Y7/3浅黄	ヘラミガキ	ナデ、ハケ	6/8	
65		53	300	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 鉢	14.6	6.9	(4.9)	2.5mm以下砂粒 含(金葉母含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/2灰黄	ナデ、指ナデ	タタキ、ナデ	7/8	
65		53	301	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 鉢	9.8	6.9	3.5	1.0mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/3浅黄	ナデ、指頭痕	指頭痕、ナ デ、タタキ	7/8	
66			302	O-39,40区 SD05下層	弥前 壺	—	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y6/3にぶい、黄	ナデ	ナデ	—	貼り付け突帯(刻 み目)3条
66		53	303	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 壺	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5YR7/6橙 外：5YR7/8橙	ナデ	ナデ、ハケ	—	貼り付け突帯(刻 み目)
66			304	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 壺	(15.0)	—	—	0.8mm以下砂粒 含	内：7.5YR6/6橙 外：7.5YR6/6橙	マメツ	マメツ	1/8	226.312と同一個 体か？
66			305	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 壺	(14.5)	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ、ナデ	ナデ、タタ キ、ハケ	2/8	
66			306	O-39,40区 SD05下層	弥前 壺 底部	—	—	(8.6)	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/1黄灰 外：2.5Y8/3淡黄	ナデ、指頭痕	ナデ、剥落	6/8	
66			307	O-39,40区 SD05下層	弥前 壺 底部	—	—	7.0	4.0mm以下砂粒 含	内：5Y6/2灰オリーブ 外：2.5Y8/3淡黄	ナデ、指頭 痕、剥落	ナデ、剥落	5/8	
66			308	O-39,40区 SD05下層	弥後～古前 壺 底部	—	—	(5.0)	3.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y4/1黄灰 外：2.5Y7/3浅黄	ナデ	タタキ、板ナ デ	2/8	

種 番 号	図 番 号	報 文 番 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
66	53	309	O-39,40区 S D05下層	弥後～古前 鉢	14.0	4.4	—	1.0mm以下砂粒 わずかに含 (g 含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/3淡黄	メメツ	メメツ	5/8	下川津C類
66	53	310	O-39,40区 S D05下層	弥後～古前 鉢	(22.0)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3淺黄 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ	ハケ	6/8	
67		312	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 壺	(16.0)	—	—	0.8mm以下砂粒 含	内：7.5Y R6/6橙	メメツ	メメツ	2/8	226,304と同一個 体か？
67	54	313	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 甕	9.5	15.4	4.2	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/4淺黄 外：7.5Y R7/4にぶい橙	ナデ、板ナ、ハ ケ、ハケ、ヘ ラケズリ	タタキ、ナデ	8/8	
67		314	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 甕	(10.5)	—	—	1.0mm以下砂粒 含 (g含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/2灰黄	指頭痕、ヘラ ケズリ、ナデ	ハケ、ナデ	7/8	下川津C類
67	54	315	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 甕	15.5	23.8	—	1.5mm以下砂粒 含 (g含)	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y5/2暗灰黄	ナデ、指頭 痕、ヘラケズ リ	ナデ、ハケ	5/8	下川津C類
67		316	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 甕	(13.2)	19.9	—	1.5mm以下砂粒 含 (g多含)	内：5 Y6/2灰より一 ブ 外：2.5Y7/3淺黄	指頭痕、ヘラ ケズリ、ナデ	ナデ、ハケ	3/8	下川津C類
67		317	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 甕	—	—	—	1.0mm以下砂粒 含 (角閃石、金 曇母含)	内：7.5Y R5/6明褐 外：—	メメツ、指頭 痕	メメツ、ハ ケ、指頭痕	—	下川津B類
67		318	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 甕 底部	—	—	5.4	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y3/1黒褐 外：2.5Y7/3淺黄	メメツ	タタキ、ハケ	6/8	
67		319	O-39,40区 S D05上層	弥後～古前 鉢	(15.1)	7.5	(5.4)	1.5mm以下砂粒 多含	内：5 Y7/2灰白 外：—	メメツ	タタキ	3/8	

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	報 文 番 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
67			320	O-39,40区 SD05上層	須恵器 杯身	10.3	4.4	2.8	1.5mm以下砂粒 まばら含	内：N5/0灰 外：N6/0灰	回転ナデ	回転ヘラケ スズリ、回転ナ デ	5/8	
72		54	321	N-37,38区 SD07下層	弥後～古前 壺	(16.1)	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内：5Y6/2灰オリープ 外：2.5Y6/3にぶい黄	指頭痕、ナ デ、マメツ	指頭痕、ナ デ、マメツ	2/8	端部に複線波文、 518と同一個体？
72			322	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 壺	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5YR6/6橙 外：5YR5/4にぶい赤褐	ナデ	ナデ	—	貼り付け突帯(刻 み目)、円形浮文
72			323	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 壺	23.8	—	—	1.5mm以下砂粒 含(81含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/1灰白	ナデ、マメツ	マメツ	8/8	下川津C類
72			324	M,N-36区 SD07下層	弥後～古前 壺	(21.5)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y5/3黄緑 外：10YR5/4にぶい黄橙	マメツ	ナデ、ハケ	3/8	端部にヘラ描き文
72		54	325	M,N-36区 SD07下層	弥後～古前 壺	—	—	5.9	1.5mm以下砂粒 含	内：5Y4/2灰オリープ 外：2.5Y7/3浅黄	指頭痕、ハ ケ、ナデ	ハケ、ナデ、 タタキ	5/8	
72		54	326	N-37,38区 SD07下層	弥後～古前 壺	(21.6)	30.9	6.0	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：5Y7/2灰白	指頭圧痕、板 ナデ、ハケ	タタキ、ハ ケ、ヘラ、ミガ キ	7/8	端部に半截竹管文
72		54	327	O-37,38区 SD07下層	弥後～古前 壺	—	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：2.5Y7/3黄	指頭痕、ヘラ ケスズリ	ハケ	8/8	
72		54	328	M,N-36区 SD07下層	弥後～古前 壺	—	—	(5.2)	1.5mm以下砂粒 含(金鱗母含)	内：2.5Y3/1黒褐 外：10YR6/3にぶい黄橙	ヘラケスズリ、 指頭痕	ハケ、ナデ、 マメツ	4/8	
72			329	O-37,38区 SD07下層	弥後～古前 壺	—	—	—	2.0mm以下砂粒 含(角閃石含)	内：2.5Y6/2灰黄 外：7.5Y6/6明褐	ナデ、マメツ	マメツ	2/8	

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	報 番 号	文 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
72	55		330	N-37.38区 S D07下層	弥後～古前 甕	(18.6)	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：—	マメツ	ナデ、ハケ	2/8	端部に擬凹線3条
72			331	N-37.38区 S D07下層	弥後～古前 甕	(15.7)	—	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：5YR6/8橙 外：7.5YR7/6橙	マメツ	ナデ	2/8	
72			332	N-37.38区 S D07下層	弥後～古前 甕	(20.3)	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/1灰白 外：10YR7/3にぶい黄橙	ナデ、マメツ	ナデ	1/8	
73			333	O-39.40区 S D07下層	弥後～古前 甕	12.3	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：10YR8/3浅黄橙 外：7.5YR8/4浅黄橙	マメツ	タタキ	2/8	
73			334	O-37.38区 S D07下層	弥後～古前 甕	(14.8)	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：7.5YR6/4にぶい橙	ナデ、ハケ	ナデ、タタ キ、ハケ	1/8	
73			335	O-39.40区 S D07下層	弥後～古前 甕	(14.0)	—	—	—	1.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/3浅黄	ナデ、指頭 痕、ハケ	ナデ、ハケ	2/8	
73			336	O-39.40区 S D07下層	弥後～古前 甕	(15.8)	—	—	—	2.5mm以下砂粒 含(角閃石、金 雲母わずか含)	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：—	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ	2/8	
73			337	O-39.40区 S D07下層	弥後～古前 甕	(14.4)	—	—	—	1.0mm以下砂粒 含(角閃石、金 雲母含)	内：10YR6/3にぶい黄橙 外：2.5Y7/3浅黄	ナデ、指頭痕	ナデ、ハケ	1/8	下川津B類
73			338	N-37.38区 S D07下層	弥後～古前 甕	(17.1)	—	—	—	0.8mm以下砂粒 含(角閃石、金 雲母含)	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：10YR6/3にぶい黄橙	ナデ、板ナ デ、指頭痕	ナデ、ハケ	2/8	下川津B類
73	55		339	N-37.38区 S D07下層	弥後～古前 甕	(14.6)	23.3	5.2	—	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3浅黄 外：—	ヘラケズリ、 ナデ	タタキ、板ナ デ、ナデ	7/8	

插图番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
73	55	340	M、N-36区 SD07下層	弥後～古前 甕	(14.3)	19.9	—	2.0mm以下砂粒 含	内：5 Y7/2灰白 外：—	指頭痕、ナデ	タタキ、ハケ	6/8	下川津C類
73		341	O-39、40区 SD07下層	弥後～古前 底部	—	—	5.0	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5 Y5/3黄褐 外：2.5 Y6/3にぶい黄	ハケ	タタキ、ハケ	6/8	
73		342	O-37、38区 SD07下層	弥後～古前 底部	—	—	(5.3)	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y8/3淡黄 外：5 Y7/2灰白	ナデ	ナデ、タタキ	3/8	
73		343	O-37、38区 SD07下層	弥後～古前 底部	—	—	3.7	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5 Y2/1黒 外：10 Y R7/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	4/8	
73		344	O-39、40区 SD07下層	弥後～古前 底部	—	—	5.5	2.0mm以下砂粒 多含	内：5 Y6/1灰	ヘラケズリ、 ナデ	タタキ、ハケ	7/8	
73		345	O-39、40区 SD07下層	弥後～古前 甕 底部	—	—	4.3	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5 Y7/2灰黄 外：5 Y7/2灰白	ハケ	ハケ、マメツ	3/8	
74	55	346	M、N-36区 SD07下層	弥後～古前 鉢	11.3	3.9	1.0	0.8mm以下砂粒 含(6多含)	内：2.5 Y6/4にぶい黄 外：2.5 Y7/4浅黄	ヘラミガキ、 ナデ	ヘラケズリ、 マメツ、ナデ	6/8	下川津C類
74	55	347	M、N-36区 SD07下層	弥後～古前 脚台付鉢か	—	—	8.0	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5 Y R8/6浅黄 外：7.5 Y R6/6橙	マメツ、指頭 痕	ヘラケズリ、 指頭痕、ナデ	7/8	
74	55	348	O-39、40区 SD07下層	弥後～古前 脚台付鉢	(18.4)	9.9	(6.3)	2.5mm以下砂粒 含	内：7.5 Y R7/6橙 外：—	ナデ、指頭痕	指頭痕、タタ キ、ナデ	5/8	153と形態・胎土 ・色調が似る
74		349	N-37、38区 SD07下層	弥後～古前 鉢	(12.4)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：7.5 Y5/4にぶい褐 外：10 Y R6/4にぶい黄橙	ナデ、ヘラケ ズリ	ナデ、タタ キ、ナデ	1/8	

種 番	図 番	版 番	報 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
74			350	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 鉢	(19.6)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3残黄 外：2.5Y7/2灰黄	ナデ、ハケ	ナデ、タタ キ、ハケ	1/8	
74	56		351	N-37,38区 SD07下層	弥後～古前 鉢	18.1	10.1	5.9	1.0mm以下砂粒 含	内：5Y8/3淡黄 外：7.5Y5/6明褐	指頭痕、ヘラ ケスリ、ヘラ ミガキ	ナデ、ハケ、 ヘラミガキ	5/8	
74	56		352	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 鉢	(26.0)	12.7	—	0.8mm以下砂粒 含(g多含)	内：2.5Y8/2灰白	ナデ、指頭 痕、板ナデ	ナデ、タタ キ、ヘラケス リ	3/8	下川津C類
74	56		353	M,N-36区 SD07下層	弥後～古前 鉢	(18.8)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/3残黄	ナデ	ナデ、タタキ	3/8	
74	56		354	M,N-36区 SD07下層	弥後～古前 高杯	(15.6)	—	—	0.8mm以下砂粒 わずかな含(g1 含)	内：2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ、ハケ	3/8	下川津C類
74	56		355	M,N-36区 SD07下層	弥後～古前 高杯	—	—	(12.6)	0.4mm以下砂粒 わずかな含(g多 含)	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/2灰黄	ナデ、マメツ	ナデ、ハケ	4/8	下川津C類
74	56		356	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 製塩土器	—	—	4.3	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白	ナデ	タタキ、ナ デ、指頭痕	3/8	
74	56		357	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 製塩土器	—	—	(4.8)	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/3淡黄	ナデ	ナデ	5/8	
74	56		358	O-37,38区 SD07下層	弥後～古前 高杯	5.4	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/1灰白	マメツ、板ナ デ	ハケ、マメツ	5/8	
74	56		359	O-39,40区 SD07下層	弥後～古前 ミニチュア	—	—	(3.0)	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄	ハケ	ナデ	3/8	

插图番号	插图番号	版号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
74	360	56	N-37,38区 SD07下層	弥後～古前 ミニニチュア	—	2.0	4.4	0.8mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：2.5Y7/2灰黄 外：—	ナデ	ナデ、指頭痕	8/8		
74	361	56	N-37,38区 SD07下層	須恵器 杯蓋	(12.0)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5PB6/2紫灰 外：N5/0灰	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラケケス	4/8		
74	362	56	N-37,38区 SD07下層	須恵器 杯身	9.8	3.6	2.9	1.0mm以下砂粒 含	内：N5/0灰	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラケケス	8/8		
76	366		N-37,38区 SD07上層	弥前 壺	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5Y6/2灰オリーブ 外：10YR7/3にぶい黄橙	マメツ	マメツ	3/8	貼り付け突帯(刻 み白)2条	
76	367		O-39,40区 SD07上層	弥後～古前 壺	(10.3)	—	—	1.0mm以下砂粒 含(珪含)	内：2.5Y7/1灰白 外：2.5Y7/2灰黄	ナデ	ナデ	3/8	下川津C類	
76	368		M,N-36区 SD07上層	弥後～古前 甕	(15.9)	—	—	1.5mm以下砂粒 含(角閃石含)	内：10YR5/4にぶい黄褐 外：10YR5/6黄褐	ヘラケケスリ、 ナデ	ナデ、マメツ	2/8		
76	369		N-37,38区 SD07上層	弥後～古前 甕	(18.0)	—	—	3.5mm以下砂粒 含	内：5YR6/6橙 外：5YR5/6明赤褐	ナデ	ナデ	1/8		
76	370		N-37,38区 SD07上層	弥後～古前 甕	(17.5)	—	—	0.8mm以下砂粒 多含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR6/4にぶい黄橙	ナデ	ナデ	2/8		
76	371	57	N-37,38区 SD07上層	須恵器 杯蓋	—	—	(11.9)	0.4mm以下砂粒 まばら含	内：N4/0灰 外：2.5GY4/1暗オリー ブ灰	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラケケス	3/8		
76	372	57	N-37,38区 SD07上層	須恵器 杯蓋	—	4.2	10.9	2.5mm以下砂粒 わずかな含	内：5PB6/1青灰	回転ナデ、ナ デ	回転ナデ、回 転ヘラケケス	7/8		

挿図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
76	57	373	M、N-37区 SD07上層	須恵器 杯身	(10.2)	-	-	1.0mm以下砂粒 わずかな含	内：7.5Y5/1灰 外：7.5Y6/1灰	回転ナデ、ナ デ	回転ナデ、ス 転ヘラケケ、ス リ	3/8	
76		374	N-37、38区 SD07上層	須恵器 甕	-	-	-	1.0mm以下砂粒 わずかな含	内：5 B5/1黒灰 外：5 B4/1暗青灰	同心田状の回 転ナデ、指頭 痕、ナデ	格子目タタキ、 平存タタキ、回 転ナデ、回転ヘ ラケスリ、タタ キ	7/8	
78		375	N-37、38区 SD06	弥前 底部 壺	-	-	(9.4)	3.0mm以下砂粒 多含	内：5 Y6/2灰オリ 外：2.5Y7/4残黄	板ナデ、マメ ツ	マメツ、指頭 痕、ミガキ	4/8	
78	57	376	N-37、38区 SD06	弥前 底部 壺	-	-	(10.6)	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ、ミガ キ	3/8	
80		378	N-37、38区 SD04下層	弥後～古前 甕	(10.6)	-	-	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5Y R6/6橙 外：7.5Y R7/4にぶい橙	ハケ、ヨコナ デ	タタキ、ハ ケ、ヨコナデ	3/8	
80		379	N-37、38区 SD04下層	弥後～古前 甕	(12.5)	-	-	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/2灰黄 外：2.5Y7/3残黄	ハケ、ヘラケ スリ	タタキ、ハケ	1/8	
80	57	380	N-37、38区 SD04下層	弥後～古前 甕	(13.6)	28.2	(6.2)	3.0mm以下砂粒 含	内：10Y R7/3にぶい黄橙 外：2.5Y6/2灰黄	ヨコナデ、指 頭痕、板ナデ	ヨコナデ、タ タキ、板ナデ	4/8	
80		381	N-37、38区 SD04下層	弥後～古前 甕	(17.4)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/1灰白	マメツ	ヨコナデ、タ タキ、ハケ	1/8	
80		382	O-39、40区 SD04下層	弥後～古前 甕	(17.4)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/1灰白 外：7.5Y R8/4残黄橙	ハケ、マメツ	タタキ、ハ ケ、マメツ	2/8	
80		383	N-37、38区 SD04下層	弥後～古前 甕	(15.5)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：5 Y R3/4暗赤褐 外：5 Y R3/6暗赤褐	マメツ	ヨコナデ、マ メツ	1/8	

挿番号	図号	図番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
80			384	M, N-36区 SD04下層	弥前～壺 底部	—	—	8.8	2.0mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/3残黄 外: 2.5Y7/2灰黄	指頭痕、マメ ツ	マメツ	3/8	絞り目
80		58	385	N-37, 38区 SD04下層	弥後～古前 鉢	11.9	6.0	4.2	1.5mm以下砂粒 含	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 2.5Y7/3残黄	ハケ	ヘラケズリ、 ナデ	7/8	絞り目
81		58	387	N-37, 38区 SD04上層	弥後～古前 壺	(19.7)	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/3残黄 外: 2.5Y7/3残黄	ハケ、マメツ	ヨコナデ、ハ ケ	6/8	刺突文、列み目、 貼り付け突帯文
81			388	N-37, 38区 SD04上層	弥後～古前 甕 底部	—	—	(4.8)	2.5mm以下砂粒 含(金雲母、角 閃石わずが含)	内: 2.5Y7/3残黄 外: 7.5YR6/4にぶい橙	ヘラケズリ	ハケ	5/8	
81		58	389	O-39, 40区 SD05上層	弥後～古前 器台か	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内: 7.5YR5/6明褐 外: 7.5YR6/6橙	ナデ、マメツ	ハケ、マメツ	6/8	
83			390	N-37, 38区 SD05下層	弥後～古前 壺	(16.0)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内: 7.5YR6/4にぶい橙 外: 5YR5/6明赤褐	ヨコナデ、ナ デ	ヨコナデ、ハ ケ	2/8	
83			391	M, N-35区 SD05下層	弥後～古前 壺	—	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内: 5Y8/2灰白 外: 5Y8/1灰白	ハケ	ヨコナデ、ハ ケ	7/8	
83		58	392	N-37, 38区 SD05下層	弥後～古前 甕	(13.6)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/4残黄 外: 2.5Y7/3残黄	ヨコナデ、ハ ケ、ヘラケズ リ	タタキ、ハケ	3/8	
83			393	N-37, 38区 SD05下層	弥後～古前 甕	(15.0)	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内: 10YR7/3にぶい黄橙 外: 2.5Y7/3残黄	マメツ、ヨコ ナデ	タタキ、ハ ケ、ヨコナデ	3/8	
83			394	M, N-35区 SD05下層	弥後～古前 甕	(16.4)	—	—	0.8mm以下砂粒 わずが含	内: 2.5Y8/2灰白 外: 2.5Y8/2灰白	ナデ、指頭痕	ヨコナデ、指 頭痕、ナデ、 タタキ、ハケ	2/8	

挿図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
83		395	M、N-36区 SD05下層	弥後～古前 甕	(15.3)	—	—	1.5mm以下砂粒 含(角閃石含)	内：5 YR6/6橙 外：10 YR6/3にぶい黄橙	ヨコナデ、ハ ケ	ヨコナデ、ハ ケ	1/8	
83	58	396	N-37、38区 SD05下層	弥後～古前 甕	(14.5)	—	—	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5 Y6/3にぶい黄 外：2.5 Y6/2灰黄	ハケ	タタキ	3/8	
83		397	M、N-35区 SD05下層	弥後～古前 甕	(19.2)	—	—	1.5mm以下砂粒 含(金雲母わず か含)	内：2.5 Y7/3浅黄 外：—	ナデ、指頭痕	ナデ、タタキ	2/8	
83	58	398	N-37、38区 SD05下層	弥後～古前 甕	(11.0)	13.5	—	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y2/1黒 外：2.5 Y6/3にぶい黄	ハケ、指頭 痕、ヘラケス リ	ハケ	5/8	
83		399	M、N-36区 SD05下層	弥後～古前 底部	—	—	5.5	2.5mm以下砂粒 多含	内：5 Y7/1灰白 外：5 Y6/2灰オリーブ	マメツ	マメツ	7/8	
83		400	M、N-36区 SD05下層	弥後～古前 底部	—	—	4.0	1.5mm以下砂粒 多含	内：5 Y7/1灰白 外：2.5 Y7/2灰黄	板ナデ	マメツ	7/8	
83		401	M、N-36区 SD05下層	弥後～古前 鉢	—	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y7/3浅黄 外：10 YR7/3にぶい黄橙	ハケ、板ナ デ、ナデ	ナデ、タタ キ、ハケ	—	
83	58	402	N-37、38区 SD05下層	弥後～古前 鉢	11.0	5.7	3.5	1.5mm以下砂粒 多含	内：7.5 YR7/4にぶい橙 外：5 YR7/4にぶい橙	マメツ(ハ ケ?)	タタキ、ナデ	7/8	
83		403	M、N-36区 SD05下層	弥後～古前 鉢	(16.0)	8.6	—	1.5mm以下砂粒 含	内：5 YR7/6橙 外：7.5 YR7/6橙	マメツ	マメツ	2/8	
83	59	404	N-37、38区 SD05下層	弥後～古前 高杯	13.6	—	—	2.0mm以下砂粒 含(金雲母、角 閃石わずか含)	内：2.5 Y4/2暗灰黄 外：2.5 Y5/3黄褐	マメツ	マメツ	5/8	

插图番号	図番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
83	59	405	N-37, 38区 S D05下層	弥後～古前 高杯か	—	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：5 Y R7/6橙 外：10 Y R7/3にぶい、黄橙	ナデ、ヘラケ ズリ	指頭痕、タタ キ、ヨコナデ	7/8		
85	60	409	N-37, 38区 S D05上層	弥後～古前 小型丸底壺	(8.0)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：10 Y R5/3にぶい、黄褐 外：2.5 Y 5/2暗灰黄	指頭痕、ナデ	指頭痕、ナデ	4/8		
85		410	M, N-36区 S D05上層	弥後～古前 甕	(15.0)	—	—	1.5mm以下砂粒 含(金雲母含)	内：10 Y R6/4にぶい、黄橙	ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハ ケ	1/8		
85		411	M, N-36区 S D05上層	弥後～古前 甕	(13.4)	23.2	1.9	1.0mm以下砂粒 含(g多含)	内：5 Y 7/1灰白 外：5 Y 7/2灰白	指頭痕、ヘラ ケズリ、ヨコ ナデ	ハケ、ヨコナ デ、マメツ	5/8	下川津C類	
85		412	M, N-36区 S D05上層	弥後～古前 甕	(12.4)	—	—	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5 Y 7/3浅黄	ハケ、板ナデ	ナデ、タタキ	1/8		
85		413	N-37, 38区 S D05上層	弥後～古前 甕	(12.4)	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y 6/3にぶい、黄 外：10 Y R6/4にぶい、黄橙	ヨコナデ、ヘ ラケズリ	ヨコナデ、ハ ケ	3/8		
85		414	N-37, 38区 S D05上層	弥後～古前 甕	(14.3)	—	—	2.0mm以下砂粒 含(g1含)	内：5 Y 7/2灰白 外：2.5 Y 7/2灰黄	マメツ	マメツ	2/8	下川津C類	
85		415	M, N-36区 S D05上層	弥後～古前 鉢	(15.8)	5.2	(5.8)	2.0mm以下砂粒 含	内：5 Y 6/2灰オリーブ 外：5 Y 7/3浅黄	(ハケ)	タタキ、ヘラ ケズリ	2/8		
85		416	M, N-36区 S D05上層	弥後～古前 鉢	(36.0)	—	—	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y 6/2灰黄 外：2.5 Y 7/3浅黄	ハケ、ナデ	マメツ	1/8		
85		417	N-37, 38区 S D05上層	弥後～古前 高杯か	(14.1)	(12.6)	(11.9)	2.5mm以下砂粒 多含	内：10 Y R6/4にぶい、黄橙 外：10 Y R5/4にぶい、黄褐	ナデ、ヘラケ ズリ	(ハケ)	6/8		

挿番号	図番	版号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
87			418	M, N-36区 SD16	弥後～古前 甕	(16.5)	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：2.5Y5/3黄褐	ヨコナデ	ヨコナデ, ハ ケ	1/8	
87			419	M, N-36区 SD11	弥後～古前 甕	(17.3)	—	—	1.0mm以下砂粒 含	内：5Y8/1灰白 外：7.5YR4/3褐	ハケ		1/8	
87			420	M, N-35区 SD15	弥後～古前 甕	(15.5)	—	—	0.8mm以下砂粒 多含	内：5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR6/6橙	ナデ	ハケ, マメツ	1/8	
87			421	M, N-36区 SD13	弥後～古前 底部	—	—	(3.5)	1.0mm以下砂粒 多含	内：10YR7/3にぶい黄橙 外：10YR7/2にぶい黄橙	マメツ	ハケ, ナデ	5/8	
87			422	M, N-35区 SD13	弥後～古前 底部	—	—	5.0	1.0mm以下砂粒 多含(金雲母 多含)	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：10YR5/3にぶい黄褐	ヘラケズリ ?	ヘラミガキ	3/8	
87			423	O-34～36区 SD20	弥後～古前 底部	—	—	(4.0)	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y5/2暗灰黄 外：2.5Y5/3黄褐	指頭痕, 板ナ デ	ヘラミガキ, ナデ	4/8	
87			424	M, N-35区 SD13	弥後～古前 底部	—	—	7.1	2.5mm以下砂粒 含	内：7.5YR6/4にぶい橙 外：5YR6/6橙	マメツ	ハケ, マメツ	6/8	
87			425	O-37, 38区 SD12	弥後～古前 底部	—	—	(5.0)	0.2mm以下砂粒 含	内：5Y7/1灰白 外：2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ, 板ナ デ	3/8	
87			426	M, N-35区 SD15	弥後～古前 鉢	(22.4)	—	—	1.5mm以下砂粒 多含	内：10YR6/4にぶい黄橙 外：2.5Y6/4にぶい黄	マメツ	タタキ, マメ ツ	1/8	
87			427	M, N-35区 SD15	弥後～古前 鉢	(22.5)	—	—	0.8mm以下砂粒 含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/3淡黄	ハケ	マメツ, タタ キ, ナデ	1/8	

挿図番号	図番	報文番号	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	調整 (内面)	調整 (外面)	残存	備考
87		428	M, N-35区 SD16	弥後～古前 鉢	(37.0)	20.7	—	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/2淡黄	ハケ	タタキ、ハケ	6/8	
106		433	O, P-41, 42区 SP063	土師器 小皿	6.5	1.2	5.0	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y7/3淡黄	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	6/8	
106		434	O, P-41, 42区 SP064	土師器 小皿	7.4	1.0	5.7	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/3淡黄	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	6/8	
106	60	435	O, P-41, 42区 SP069	土師器 杯	11.0	2.9	6.0	1.0mm以下砂粒 含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：10YR6/2灰黄褐	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	7/8	板状圧痕
106	60	436	O, P-41, 42区 SP069	土師器 杯	11.0	3.2	6.7	0.2mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	7/8	板状圧痕
106	60	437	O, P-41, 42区 SP068	土師器 杯	(10.4)	3.0	(8.2)	0.2mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/3淡黄	回転ナデ	回転ナデ、静 止ホキリ	5/8	
106		438	O, P-41, 42区 SP063	須恵器 甕	(20.8)	—	—	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：5 P B7/1明青灰 外：5 R P5/1葉灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
106		439	O, P-41, 42区 SP068	須恵器 こね鉢	—	—	—	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：5 B6/0青灰	回転ナデ	回転ナデ	—	
109		441	O, P-41, 42区 SP090	土師器 小皿	(8.0)	1.1	(5.0)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：7.5Y R8/4浅黄橙 外：10Y R8/3淡黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	3/8	
113	60	442	N-39～42区 SP164	土師器 杯	11.6	2.9	7.4	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y8/3淡黄 外：2.5Y8/4淡黄	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	7/8	板状圧痕

播図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
114		443	N-39~42区 S P 205	土師器 杯	(10.8)	—	(7.0)	0.2mm以下砂粒 含む	内：10YR8/4浅黄橙 外：10YR8/3浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	1/8	
114		444	N-39~42区 S P 202	土師器 土釜 脚部	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含む	内：2.5Y6/4にぶい黄 外：—	板ナデ、指頭 痕	板ナデ、指頭 痕	—	
117		445	N-39~42区 S P 279	土師器 小皿	(5.8)	1.1	(5.0)	0.2mm以下砂粒 わずかな含む	内：2.5Y8/3淡黄 外：2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	1/8	
117		446	N-39~42区 S P 270	土師器 小皿	6.1	0.8	5.0	0.2mm以下砂粒 わずかな含む	内：5 Y R 7/6橙 外：7.5 Y R 6/4にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	7/8	板状圧痕
117		447	N-39~42区 S P 250	土師器 小皿	(7.1)	1.1	(5.8)	0.2mm以下砂粒 わずかな含む	内：10 Y R 7/4にぶい黄橙 外：—	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
117		448	N-39~42区 S P 250	土師器 小皿	8.1	1.5	5.8	0.2mm以下砂粒 わずかな含む	内：10 Y R 7/4にぶい黄橙 外：—	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	6/8	
117		449	N-39~42区 S P 226	土師器 小皿	7.5	1.1	5.5	0.8mm以下砂粒 含む	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/3浅黄	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	8/8	板状圧痕
117		450	N-39~42区 S P 244	土師器 小皿	(7.8)	1.5	(5.6)	1.0mm以下砂粒 含む	内：10 Y R 8/3浅黄橙 外：—	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	3/8	
117		451	N-39~42区 S P 218	土師器 小皿	(7.6)	1.2	(5.6)	0.8mm以下砂粒 わずかな含む	内：2.5Y7/4浅黄 外：—	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
117		452	N-39~42区 S P 250	土師器 小皿	(7.2)	1.4	(5.4)	0.4mm以下砂粒 含む	内：2.5Y8/2灰白 外：—	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	4/8	

插图番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
117		453	N-39~42区 SP251	土師器 小皿	(7.2)	1.4	(4.3)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：10Y R7/2にぶい黄橙 外：10Y R7/2にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	4/8	
117		454	N-39~42区 SP280	土師器 杯	(9.7)	2.7	(6.5)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：10Y R8/2灰白 外：10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	4/8	
117	60	455	N-39~42区 SP259	土師器 杯	(10.3)	2.9	(6.1)	0.4mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/2灰白	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	板状圧痕
117	60	456	N-39~42区 SP259	土師器 杯	9.9	2.7	5.5	0.4mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5Y8/2灰白 外：10Y R8/2灰白	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	5/8	板状圧痕
117		457	N-39~42区 SP252	土師器 杯	(10.1)	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/2灰黄 外：N3/0暗灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
117		458	N-39~42区 SP263	瓦質土器 碗	(13.8)	-	(5.8)	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/1灰白 外：2.5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	3/8	
117	60	459	N-39~42区 SP221	瓦質土器 碗	(13.7)	4.0	(5.2)	0.8mm以下砂粒 わずかな含	内：N8/0灰白 外：N8/0灰白	ナデ, 回転ナ デ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	
117		460	N-39~42区 SP223	土師器 碗	-	-	-	0.2mm以下砂粒 含	内：10Y R4/4褐 外：10Y R4/4褐	ナデ	ナデ, ヨコナ デ	2/8	
117		461	N-39~42区 SP268	土師器 土鍋	-	-	-	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5Y5/1黄灰 外：2.5Y5/2暗黄灰	ハケ, ナデ	ハケ, ナデ	1/8	
117		462	N-39~42区 SP259	土師器 土釜	(19.4)	-	-	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/2灰白	ハケ, ナデ, 指頭痕	ハケ, ナデ, 指頭痕, タタ キ	2/8	へラ描き沈線8条 以上, 端部刻み目

挿図番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	調整 (内面)	調整 (外面)	残存	備考
117		463	N-39~42区 S P 220	土師器 甕	—	—	—	2.5mm以下砂粒 含む	内：5 Y R 5/6明赤褐 外：10 Y R 5/3にぶい黄褐	ハケ	ハケ、指頭痕	—	
118		464	N-39~42区 S P 344	土師器 小皿	(6.0)	0.7	(5.1)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：7.5 Y R 8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ、 ナデ	1/8	
118		465	N-39~42区 S P 340	土師器 小皿	5.6	0.6	4.8	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：7.5 Y R 7/4にぶい橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	8/8	
118		466	N-39~42区 S P 344	土師器 杯	(12.1)	—	—	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：2.5 Y 8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
119		467	N-39~42区 S P 390	土師器 擂鉢	—	—	—	0.8mm以下砂粒 含む	内：2.5 Y 4/1黄灰 外：10 Y R 7/3にぶい黄橙	マメツ	ヨコナデ	—	おろし目
121		468	N-39~42区 S P 377	土師器 土釜 脚部	—	—	—	1.0mm以下砂粒 含む	内：10 Y R 5/4にぶい黄褐	ハケ(接合 部)	ナデ	—	
126		469	O-37.38区 S P 410	土師器 小皿	6.8	1.2	4.5	1.0mm以下砂粒 わずかな	内：7.5 Y R 7/6橙 外：7.5 Y R 7/4にぶい橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	8/8	
126		470	O-37.38区 S P 561	瓦質土器 杯	(11.8)	—	(6.8)	0.4mm以下砂粒 含む	内：N4/0灰 外：N3/0暗灰	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	2/8	
126	60	471	O-37.38区 S P 565	黒色土器 碗	(15.0)	5.7	—	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：7.5 Y 3/1オリーブ黒 外：2.5 Y 7/2灰黄	ヘラミガキ	ナデ、ヨコナ デ	3/8	貼り付け高台
126		472	O-37.38区 S P 529	黒色土器 A類 碗	(14.2)	—	—	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：7.5 Y 2/1黒 外：2.5 Y 7/2灰黄	ヘラミガキ	回転ナデ、ヘ ラミガキ	1/8	

挿図番号	図番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
126		473	N-37.38区 SP489	黒色土器 A類 碗	-	-	(5.5)	0.8mm以下砂粒 わずかな含	内：7.5Y2/1黒 外：2.5Y8/1灰白	暗文	回転ナデ	2/8	
131		474	N-37.38区 SP651	土師器 小皿	(6.2)	-	(4.7)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：10Y R8/2灰白	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
131		475	N-37.38区 SP651	土師器 小皿	7.1	1.2	5.4	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	7/8	板状圧痕
131		476	N-37.38区 SP654	土師器 杯	(9.6)	(2.7)	6.4	0.8mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5Y8/3淡黄	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	4/8	
131		477	N-37.38区 SP655	土師器 杯	(10.5)	2.5	7.2	1.5mm以下砂粒 含	内：7.5Y R7/6橙 外：7.5Y R8/6浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	6/8	
131	61	478	N-37.38区 SP634	土師器 杯	10.6	2.4	7.6	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：10Y R8/3浅黄橙 外：10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	7/8	
131		479	N-37.38区 SP646	須恵器 鉢	-	-	-	0.8mm以下砂粒 含	内：5 Y6/2灰白 外：5 Y5/1灰	ヨコナデ、ナ デ	ヨコナデ	-	
131		480	N-37.38区 SP655	土師器 土釜	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y5/2灰黄	-	板ナデ	-	
132		481	N-37.38区 SP688	土師器 小皿	6.5	0.5	5.3	1.0mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5Y8/1灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	8/8	
132	61	482	N-37.38区 SK17	土師器 小皿	6.3	0.9	5.8	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y7/3淡黄	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	6/8	

種番	図号	図番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
132			493	N-37,38区 SK16	瓦質土器 甕(亀山焼)	—	—	(24.0)	0.8mm以下砂粒 わずかな含	内：N8/0灰白 外：N4/0灰	ナデ、ヨコナ デ、ヨコナ タキ	ナデ、ヨコナ デ、ヨコナ タキ	1/8	
135		61	497	N-37,38区 SP718	土師器 小皿	6.8	1.2	5.8	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	8/8	
135			498	N-37,38区 SK20	土師器 杯	9.6	2.3	6.2	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：7.5YR8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	7/8	
135		61	499	N-37,38区 SK20	土師器 杯	10.1	2.7	6.1	0.8mm以下砂粒 含	内：7.5YR8/3浅黄橙 外：7.5YR7/6橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	8/8	
135			500	N-37,38区 SP722	土師器 杯	10.7	2.8	6.1	1.0mm以下砂粒 含	内：10YR8/3浅黄橙 外：10YR7/3にぶい黄橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	4/8	
136			501	N-37,38区 SP704	土師器 小皿	(7.0)	—	(5.2)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：5YR6/4にぶい黄橙 外：10YR8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	1/8	
136			502	N-37,38区 SP745	土師器 小皿	(6.2)	—	(5.6)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：5YR6/6橙 外：2.5Y7/2 灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
136			503	N-37,38区 SP704	土師器 杯	(10.0)	2.5	(5.7)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：7.5YR7/4にぶい橙 外：7.5YR7/6橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	1/8	
136			504	N-37,38区 SP745	土師器 杯	(11.0)	2.6	(5.4)	0.8mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ	3/8	
138			506	N-39~42区 SK05	土師器 杯	(10.4)	2.2	(5.4)	0.4mm以下砂粒 わずかな含	内：7.5YR8/6浅黄橙 外：10YR8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	3/8	板状圧痕

挿図番号	図番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
138	61.62		507	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.0	2.6	6.4	0.2mm以下砂粒 含む	内:2.5Y5/2暗灰黄 外:7.5YR8/3浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	7/8	板状圧痕
138	61		508	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.6	-	6.5	0.6mm以下砂粒 わずかな含む	内:2.5Y8/3淡黄 外:2.5Y8/4浅黄橙	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	板状圧痕
138	61		509	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.7	2.5	7.4	0.4mm以下砂粒 わずかな含む	内:10YR8/4浅黄橙 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	
138	61		510	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.2	-	5.9	0.8mm以下砂粒 わずかな含む	内:2.5Y8/4淡黄 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	5/8	
138			511	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.1	2.5	6.5	0.2mm以下砂粒 わずかな含む	内:2.5Y8/4淡黄 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	6/8	
138	61		512	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.2	2.7	5.6	0.8mm以下砂粒 わずかな含む	内:10YR8/3浅黄橙 外:7.5YR8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	5/8	
138	61		513	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.5	-	7.6	0.8mm以下砂粒 わずかな含む	内:7.5YR8/4浅黄橙 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	
138	61		514	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.3	2.8	6.9	1.5mm以下砂粒 含む	内:2.5Y8/2灰白 外:7.5YR7/6橙	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	
138			515	N-39~42区 SK05	土師器 杯	10.7	2.3	6.2	0.8mm以下砂粒 わずかな含む	内:7.5YR7/6橙 外:10YR8/3浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	6/8	
138	61		516	N-39~42区 SK05	土師器 杯	9.9	2.6	7.2	0.2mm以下砂粒 わずかな含む	内:2.5Y8/2灰白 外:10YR8/3浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	6/8	

挿図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
138		517	N-39~42区 SK05	須恵器 長頸壺	-	-	-	0.8mm以下砂粒 含	内：5 B5/1青灰 外：5 B6/1青灰	回転ナデ	回転ナデ	2/8	
138		518	N-39~42区 SK05	土師器 ふいご羽口	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/3淺黄 外：5 Y8/1灰白	-	マメツ	-	
138		519	N-39~42区 SK05	土師器 土釜 脚部	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：10Y R7/3にぶい黄橙 外：2.5Y7/2灰黄	ハケ	ナデ	-	
138		520	N-39~42区 SK05	土師器 土釜	22.8	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：10Y R6/3にぶい黄橙	ハケ、指頭痕	ハケ、ナデ、 指頭痕	1/8	
141		521	N-39~42区 SK06	瓦質土器 小皿	(6.0)	-	(4.8)	0.2mm以下砂粒 含	内：5 Y3/1オリーブ黒	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	3/8	
141		522	N-39~42区 SK06	備前焼 播鉢	(30.8)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：5 Y6/2灰オリーブ 外：5 Y7/3淺黄	回転ナデ	回転ナデ、ナ デ、おろし目	1/8	
141		523	N-39~42区 SK06	土師器 土釜	(24.0)	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：10Y R8/4淺黄橙 外：5 Y R6/8橙	ヨコナデ	ヨコナデ、指 頭痕	1/8	
141		524	N-39~42区 SK06	土師器 土釜 脚部	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y8/3淺黄	板ナデ、指頭 痕	板ナデ、指頭 痕	-	
145		525	O-37.38区 SK09	土師器 小皿	(6.5)	1.1	(4.3)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：2.5 Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
145		526	O-37.38区 SK09	土師器 小皿	(6.2)	1.0	(5.6)	0.2mm以下砂粒 わずかな含	内：10Y R7/3にぶい黄橙 外：10Y R8/4淺黄橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	

挿図番号	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
145	62	527	O-37.38区 SK09	土師器 杯	(10.8)	(2.4)	6.0	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y R6/6橙 外：7.5Y R6/6橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	6/8	板状瓦痕
145	62	528	O-37.38区 SK09	土師器 土釜	17.8	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y5/2暗灰黄	板ナデ、指頭 痕	ヨコナデ、指 頭痕、板ナ デ、ハケ	2/8	
147		529	O-37.38区 SK10	土師器 杯	(10.5)	-	-	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R8/3浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	3/8	
147		530	O-37.38区 SK10	須恵器 こね鉢	(30.5)	-	-	0.2mm以下砂粒 含	内：2.5Y8/1灰白 外：2.5Y7/2灰黄	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
149	62	531	N-37.38区 SK13	土師器 杯	10.6	2.4	5.2	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y8/3淡黄 外：7.5Y R8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	6/8	板状瓦痕
149		532	N-37.38区 SK13	土師器 杯	(10.1)	2.7	5.4	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R8/4浅黄橙 外：7.5Y R8/4浅黄橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	3/8	
149		533	N-37.38区 SK13	土師器 杯	(11.0)	2.8	(8.0)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R7/1灰白 外：10Y R7/3にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
149	62	534	N-37.38区 SK13	土師器 杯	(13.0)	(3.5)	(5.2)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：5 Y8/1灰白 外：2.5GY7/1明オリー 灰	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	3/8	
149		535	N-37.38区 SK13	白磁 椀	-	-	-	-	内：2.5GY7/1明オリー 灰	-	-	-	施釉、沈線1条
149	62	536	N-37.38区 SK13	白磁 椀	-	-	(6.5)	-	内：2.5GY7/1明オリー 灰 外：10Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	4/8	施釉、沈線1条

挿入番号	図番	版番号	製文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
149			537	N-37,38区 SK13	須恵器 こね鉢	-	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：5 Y7/2灰白 外：5 Y7/2灰白	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
149			538	N-37,38区 SK13	須恵器 こね鉢	-	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：N7/0灰白 外：5 Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ	-	
149			539	N-37,38区 SK13	須恵器 こね鉢	-	-	-	0.2mm以下砂粒 含	内：5 Y7/1灰白 外：5 Y7/1灰白	回転ナデ、ナ デ	回転ナデ	1/8	
149	62		540	N-37,38区 SK13	須恵器 こね鉢	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：N5/0灰白 外：N5/0灰白	回転ナデ	回転ナデ	-	
149			541	N-37,38区 SK13	須恵器 こね鉢	(26.8)	-	-	0.2mm以下砂粒 含	内：10 Y6/1灰 外：5 B5/1青灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
149			542	N-37,38区 SK13	須恵器 こね鉢	-	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：N6/0灰 外：N6/0灰	ナデ	ナデ、回転へ ラキリ	1/8	
149			543	N-37,38区 SK13	土師器 甕	-	-	(34.0)	2.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y8/3淡黄 外：2.5 Y8/2灰白	ハケ	ハケ、ナデ	1/8	
149			544	N-37,38区 SK13	土師器 土釜	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：2.5 Y7/4淡黄 外：2.5 Y7/4淡黄	ハケ	ヨコナデ	-	
149			545	N-37,38区 SK13	土師器 土釜	-	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：10 Y R8/3浅黄橙 外：2.5 Y8/2暗灰黄	ヨコナデ、指 頭痕、ハケ	ヨコナデ、ハ ケ	-	
149			546	N-37,38区 SK13	土師器 土釜	(25.5)	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：5 Y5/1灰 外：5 Y5/1灰	ハケ	ハケ	1/8	

插图番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
149		547	N-37,38区 S K13	土師器 土釜 脚部	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:10Y R6/2灰黄褐 外:2.5Y5/2暗灰黄	指頭痕, ヨコ ナデ	板ナデ	-	
149	62	548	N-37,38区 S K13	土師器 土釜 脚部	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内:2.5Y7/2灰黄 外:10Y R6/2灰黄	指ナデ	ナデ	-	
150	62	549	N-37,38区 S K13	弥後~古前 紡錘車	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含	外:2.5Y5/2暗灰黄	ナデ	ナデ	8/8	
150		550	N-37,38区 S K13	土師器 器種不明	-	-	-	0.2mm以下砂粒 含	内 外:2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ	1/8	
152	63	552	N-37,38区 S K14	土師器 小皿	6.2	0.8	4.4	0.4mm以下砂粒 わずかな	内 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	8/8	板状圧痕
152		553	N-37,38区 S K14	土師器 杯	10.4	2.7	5.7	0.2mm以下砂粒 わずかな	内:10Y R8/2灰白 外:2.5Y6/4にぶい,黄	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	
152		554	N-37,38区 S K14	土師器 杯	(10.0)	2.4	(6.5)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内:10Y R8/3浅黄橙 外:10Y R8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	
153		555	N-39~42区 S X04	土師器 小皿	(6.1)	1.0	(5.4)	0.4mm以下砂粒 わずかな	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y7/2灰黄	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	4/8	
153		556	N-39~42区 S X04	土師器 小皿	5.1	0.8	5.3	0.2mm以下砂粒 わずかな	内 外:10Y R5/2灰黄褐	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	2/8	
153		557	N-39~42区 S X04	土師器 土釜	-	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内 外:2.5Y8/3淡黄	ヨコナデ	ヨコナデ, 指 頭痕	-	

挿図番号	図版番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
155	63	558	N-39~42区 S X05	土師器 小皿	5.2	1.2	4.4	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R8/3浅黄橙 外：10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	8/8	
155	63	559	N-39~42区 S X05	土師器 小皿	5.6	1.5	5.2	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/3浅黄	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	8/8	
156		560	N-39~42区 S X07	瓦質土器 杯	(12.0)	—	(7.9)	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y8/1灰白 外：2.5Y7/1灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	1/8	
157		561	N-39~42区 S X08	土師器 小皿	(7.9)	1.2	(5.5)	0.6mm以下砂粒 含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y7/3浅黄	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	4/8	
157		562	N-39~42区 S X08	土師器 小皿	8.1	1.5	3.0	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y7/3浅黄 外：10Y R7/4にぶい黄橙	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	5/8	
157		563	N-39~42区 S X08	土師器 杯	(9.6)	2.7	(5.9)	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y8/2灰白 外：2.5Y8/3浅黄	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	
157		564	N-39~42区 S X08	土師器 杯	(10.6)	3.2	(7.0)	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：7.5Y R8/6浅黄橙 外：7.5Y R8/4浅黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	2/8	
157		565	N-39~42区 S X08	土師器 不明	—	—	(5.8)	0.8mm以下砂粒 含	内：7.5Y R6/6橙 外：7.5Y R6/6橙	ナデ	ヨコナデ, ナ デ	1/8	
157		566	N-39~42区 S X08	須恵器 こね鉢	—	—	—	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：7.5Y6/1灰 外：7.5Y6/1灰	回転ナデ	回転ナデ	—	
157		567	N-39~42区 S X08	土師器 土鍋	—	—	—	1.5mm以下砂粒 含	内：10Y R8/2灰白 外：10Y R7/4にぶい黄橙	ハケ	ヨコナデ, ナ デ	—	

挿図番号	図番	図版番号	報文番号	出土位置	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	色調	調整 (内面)	調整 (外面)	残存	備考
157			568	N-39~42区 SX08	土師器 土鍋	-	-	-	0.6mm以下砂粒 含む	内:2.5Y7/2灰暗 外:2.5Y5/2暗灰黄	ヨコナデ, ナ デ	ヨコナデ, 指 頭痕, ナデ	1/8 以下	
159			569	O, P-41, 42区 SD28	土師器 小皿	(6.0)	0.9	(4.0)	1.0mm以下砂粒 含む	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	2/8	
159	63		570	O, P-41, 42区 SD28	土師器 小皿	6.5	1.1	4.2	0.2mm以下砂粒 わずかも含む	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/2灰白	ナデ	ナデ 回転へ ラキリ	7/8	
159	63		571	O, P-41, 42区 SD28	土師器 小皿	6.8	1.1	5.2	0.2mm以下砂粒 わずかも含む	内:10Y R8/4残黄橙 外:10Y R8/3残黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	板状圧痕
159	63		572	O, P-41, 42区 SD28	土師器 小皿	6.8	1.0	4.9	0.8mm以下砂粒 わずかも含む	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	
159			573	O, P-41, 42区 SD28	土師器 小皿	(5.1)	1.0	(5.6)	0.2mm以下砂粒 わずかも含む	内:10Y R8/2灰白 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	板状圧痕
159	63		574	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	6.5	1.4	4.0	1.0mm以下砂粒 わずかも含む	内:2.5Y8/3淡黄 外:10Y R8/3残黄橙	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	7/8	
159			575	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	(10.0)	2.3	(5.9)	0.6mm以下砂粒 わずかも含む	内:10Y R8/2灰白 外:10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	
159			576	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	(10.0)	2.7	5.0	0.2mm以下砂粒 わずかも含む	内:2.5Y8/3淡黄 外:2.5Y8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回 転へラキリ	3/8	
159	63		577	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.9	3.0	5.9	1.0mm以下砂粒 わずかも含む	内:2.5Y8/2灰白 外:2.5Y8/2灰白	マメツ	マメツ	3/8	

挿図番号	図番号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
159	63	578	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.6	3.1	6.0	0.6mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R8/1灰白 外：10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	8/8	
159		579	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	(11.8)	2.8	(7.5)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R8/3淺黄橙 外：10Y R8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	2/8	
159	63	580	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.8	2.8	6.3	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y 8/2灰白 外：10Y R8/2灰白	ママツ	ママツ, 回転 へラキリ	8/8	
159	63	581	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.8	3.1	6.2	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R8/3淺黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	6/8	板状圧痕
159		582	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	(11.0)	3.1	(5.0)	0.4mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y 8/2灰白 外：10Y R7/4にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	3/8	
159	63	583	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.9	2.6	7.3	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y 8/2灰白	回転ナデ, 仕 上げナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	8/8	板状圧痕
159		584	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	(11.0)	2.8	(6.0)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y 8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	2/8	板状圧痕
159	63	585	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.9	2.9	5.1	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：2.5Y 8/2灰白 外：10Y R8/3淺黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	7/8	板状圧痕
159	63	586	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.6	3.1	6.9	0.8mm以下砂粒 含	内：10Y R8/2灰白 外：10Y R8/3淺黄橙	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	7/8	
159	63	587	O, P-41, 42区 SD28	土師器 杯	10.2	2.5	7.2	0.8mm以下砂粒 含	内：2.5Y 8/2灰白	回転ナデ	回転ナデ, 回転 へラキリ	8/8	

挿 番 号	図 番 号	報 文 番 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内面)	調 整 (外面)	残 存	備 考
159	63	588	O.P-41.42区 SD28	土師器 杯	10.5	2.3	6.7	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R7/2にぶい黄橙 外：10Y R8/2灰白	マメツ	マメツ	7/8	
159		589	O.P-41.42区 SD28	瓦質土器 杯	(13.0)	-	-	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：N7/0灰白 外：N6/0灰	回転ナデ	回転ナデ	1/8	
159		590	O.P-41.42区 SD28	瓦質土器 甕	(32.4)	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内：5 Y3/1オリーブ黒 外：5 Y2/1黒	ヨコナデ	ヨコナデ 格子目タタキ	1/8	
159		591	O.P-41.42区 SD28	土師器 土釜	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5 Y5/2暗灰黄 外：10Y R8/1灰白	ハケ	ナデ	-	
163		592	N-39~42区 SD31	瓦質土器 こね鉢	-	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：N4/0灰 外：5 Y8/1灰白	ヨコナデ	ヨコナデ、ナ デ	-	
163		593	N-39~42区 SD31	土師器 土釜	-	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：10Y R6/4にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ、指 頭痕、ナデ	-	
163		594	N-39~42区 SD31	土師器 土釜	-	-	-	0.4mm以下砂粒 含	内：5 Y6/2灰オリーブ 外：5 Y8/2灰白	ナデ	ナデ	-	
170		595	O.P-41.42区 SK25	土師器 土釜	(26.2)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：7.5 Y R7/6橙	ヨコナデ、ハ ケ	ヨコナデ	1/8	
170		596	N-39~42区 SK35	土師器 小皿	(7.0)	1.2	(4.7)	0.2mm以下砂粒 わずかな	内：10Y R7/3にぶい黄橙 外：10Y R7/4にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ、回 転へラキリ	2/8	
170		598	O.P-41.42区 SD39	土師器 杯	10.7	3.3	8.3	0.6mm以下砂粒 わずかな	内：7.5 Y R8/3浅黄橙 外：7.5 Y R8/4浅黄橙	回転ナデ、仕 上げナデ	回転ナデ、ナ デ	7/8	

挿図番号	図番	版番号	器文番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
172			600	O, P-39, 40区 包含層	弥前壺	-	-	-	3.0mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y6/4にぶい黄 外: 2.5Y4/4褐	ナデ	ナデ	1/8	櫛描文, 刺突文
172			601	O, P-41, 42区 トレンチ	弥前壺	-	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y8/3浅黄 外: 2.5Y7/2灰黄	マメツ	マメツ	-	貼り付け突帯, 刻 み目
172			602	O, P-41, 42区 包含層	弥後~古前 壺	(16.4)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/3浅黄 外: 2.5Y7/4浅黄	ヘラケズリ	ハケ	1/8	絞り目
172			603	O, P-41, 42区 トレンチ	弥後~古前 壺	16.0	-	-	2.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y7/2灰黄 外: 10YR7/2にぶい黄橙	ヨコナデ, ハ ケ	ヨコナデ, ハ ケ	6/8	
172			604	O, P-41, 42区 トレンチ	弥後~古前 壺	(15.4)	-	-	2.0mm以下砂粒 含	内: 2.5Y8/3浅黄 外: 2.5Y7/2灰黄	ヨコナデ	ヨコナデ	2/8	波状文
172			605	O, P-41, 42区 不明	弥前壺	(25.4)	-	-	2.0mm以下砂粒 含	内: 2.5Y6/3にぶい黄 外: 2.5Y6/4にぶい黄	ナデ	ヨコナデ, ナ デ	1/8	刻み目, ヘラ描き 沈線
172			606	O, P-43区 包含層	弥前壺	(19.4)	-	-	2.0mm以下砂粒 含	内: 2.5Y6/2底黄 外: 2.5Y7/4浅黄	指頭痕, ナ デ, マメツ	指頭痕, ナデ	1/8	刻み目, ヘラ描き 沈線
172			607	M, N-35区 13トレンチ	弥前壺	(15.3)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内: 2.5Y5/2暗灰黄 外: 2.5Y7/3浅黄	ナデ, マメツ	マメツ	-	刻み目, ヘラ描き 沈線
172			608	O, P-41, 42区 包含層	弥前壺	(13.4)	-	-	3.0mm以下砂粒 多含	内: 2.5Y7/4浅黄 外: 10YR6/4にぶい黄橙	マメツ	ヨコナデ	2/8	櫛描き沈線文
172			609	O-39, 40区 トレンチ	弥後~古前 壺	(15.7)	-	-	2.5mm以下砂粒 多含(金雲母 含)	内: 2.5Y6/4にぶい黄 外: 7.5YR5/6明褐	マメツ, 指頭 痕, ナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ, タ キ	-	

挿入番号	図番	図号	報告番号	出土位置	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	色調	調整(内面)	調整(外面)	残存	備考
172			610	O-39,40区 トレンチ	弥後～古前 甕	-	-	4.4	2.0mm以下砂粒 多含	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：2.5Y6/2灰黄	指頭痕、ハ ケ、板ナデ	ハケ、タタキ	7/8	
172			611	N-37,38区 12トレンチ	弥前 底部	-	-	7.1	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：2.5Y7/4浅黄	マメツ、板ナ デ	指頭痕、ナデ	6/8	
173			612	O、P-43区 包含層	弥前 甕	-	-	(9.0)	3.0mm以下砂粒 多含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：10YR5/6黄褐	マメツ	ナデ、マメ ツ、剥落	3/8	
173	63		613	O-39,40区 包含層	弥後～古前 高杯	-	-	(17.6)	2.5mm以下砂粒 含	内：2.5Y6/3にぶい黄 外：10YR5/4にぶい黄橙	ナデ	ハケ、ミガキ	5/8	絞り目、穿孔4ヶ 所
173			614	O、P-41,42区 不明	弥前 蓋	3.7	-	-	2.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/4浅黄 外：2.5Y6/4にぶい黄	マメツ	ナデ、ミガ キ、マメツ	4/8	
173			615	M、N-35区 包含層	弥後～古前 製塩土器	-	-	4.4	1.5mm以下砂粒 多含	内：2.5Y7/2灰黄 外：2.5Y6/3にぶい黄	マメツ	マメツ	7/8	
173			616	O、P-41,42区 トレンチ	弥生 紡錘車	-	-	-	2.0mm以下砂粒 多含	内：7.5Y3/1オリーブ黒	ナデ	ナデ	-	
173			617	O-39,40区 包含層	土師器 杯	11.9	2.8	5.9	1.5mm以下砂粒 含	内：10YR8/5浅黄橙 外：2.5Y7/2灰黄	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラキリ	8/8	
173			618	N-39～42区 包含層	須恵器 杯身	(10.3)	-	-	0.8mm以下砂粒 わずかな	内：10YR7/4にぶい黄橙 外：5Y8/2灰白	マメツ	マメツ	1/8	
173			619	N-39～42区 包含層	須恵器 碗	-	-	(4.8)	0.8mm以下砂粒 含	内：N8/0灰白	マメツ	ヨコナデ	1/8	

挿 番 号	図 番 号	報 文 番 号	出 土 位 置	器 種	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	胎 土	色 調	調 整 (内 面)	調 整 (外 面)	残 存	備 考
173		620	N-39~42区 包含層	青磁 碗	(16.0)	-	-	-	露胎：N8/0灰白 釉：2.5Y6/1オリープ灰			1/8	龍泉窯，鍋連弁
173		621	O-37,38区 包含層	須恵器 こね鉢	(29.0)	-	-	1.0mm以下砂粒 含	内：5 Y R6/2灰褐 外：5 Y R6/3にぶい橙	回転ナブ， ナ ブ	回転ナブ	1/8	
173		622	O-39,40区 包含層	土師器 器種不明 円筒土器	(11.4)	-	-	1.5mm以下砂粒 含	内：2.5 Y 7/3灰黄 外：2.5 Y 7/3残黄	マメツ，指頭 痕	マメツ	5/8	

石器観察表

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
22	41	3	N-39~42区 SD02	打製石斧	12.4	5.8	1.2	103.9	サヌカイト	
23		8	O-37,38区 SD03	削器	4.3	6.0	0.5	18.0	サヌカイト	
26		24	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(8.8)	9.6	2.5	260.7	サヌカイト	
26	41	25	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	10.5	8.0	0.8	79.6	サヌカイト	
26		26	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(6.9)	4.8	1.5	66.0	サヌカイト	
27		27	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(8.1)	5.2	1.3	62.6	サヌカイト	
27		28	O, P-43区 SR01 (東)	石包丁	4.9	11.1	1.3	83.3	サヌカイト	
27		29	O, P-43区 SR01 (東)	石包丁	10.8	4.9	0.9	47.2	サヌカイト	
27		30	O, P-43区 SR01 (東)	削器	7.8	5.5	0.8	39.5	サヌカイト	
29	42	47	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(7.8)	15.3	1.6	224.7	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
29		48	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(8.0)	6.1	1.1	70.2	サヌカイト	
29		49	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(6.0)	5.1	1.5	59.8	サヌカイト	
29	42	50	O, P-43区 SR01 (東)	石包丁	11.9	5.0	1.2	79.9	サヌカイト	
30		51	O, P-43区 SR01 (東)	石包丁	(7.6)	3.6	0.8	32.0	サヌカイト	
30		52	O, P-43区 SR01 (東)	削器	(10.0)	5.3	0.9	67.3	サヌカイト	
30		53	O, P-43区 SR01 (東)	二次加工のある剥片	6.2	7.4	0.8	47.4	サヌカイト	
30		54	O, P-43区 SR01 (東)	石鏃	2.5	1.7	0.3	1.3	サヌカイト	
32		81	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	(6.5)	4.8	1.1	47.5	サヌカイト	
32		82	O, P-43区 SR01 (東)	打製石斧	8.0	4.8	0.8	48.9	サヌカイト	
32		83	O, P-43区 SR01 (東)	石包丁	7.8	4.0	0.9	41.7	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
33		84	O.P-43区 SR01 (東)	石鎌	12.5	4.9	0.9	55.1	サヌカイト	
33	43	85	O.P-43区 SR01 (東)	削器	(10.0)	4.5	1.0	47.0	サヌカイト	
33		86	O.P-43区 SR01 (東)	削器	7.8	7.0	1.2	71.7	サヌカイト	
33		87	O.P-43区 SR01 (東)	削器	7.5	5.5	1.1	55.0	サヌカイト	
33		88	O.P-43区 SR01 (東)	削器	(7.0)	5.1	1.0	38.8	サヌカイト	
33		89	O.P-43区 SR01 (東)	削器	8.2	4.9	0.8	32.9	サヌカイト	
33	43	90	O.P-43区 SR01 (東)	敲石	7.8	6.5	3.0	172.8	サヌカイト	
35		102	O.P-43区 SR01 (西)	打製石斧	(5.4)	7.2	0.8	39.4	サヌカイト	
35		103	O.P-43区 SR01 (西)	打製石斧	7.4	4.5	1.1	51.6	サヌカイト	
35	44	104	O.P-43区 SR01 (西)	削器	12.0	6.2	0.6	74.0	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
35		105	O, P-43区 SR01 (西)	削器	10.2	7.8	1.1	78.8	サヌカイト	
37		114	N-37,38区 SR01	打製石斧	6.9	10.6	1.8	173.3	サヌカイト	
37	45	115	N-37,38区 SR01	削器	11.7	7.0	1.1	83.8	サヌカイト	
37	44	116	N-37,38区 SR01	石鏃	(2.3)	1.9	0.4	0.9	サヌカイト	
45		170	O, P-41,42区 SD04	打製石斧	(6.1)	(10.1)	1.9	122.7	サヌカイト	
46	48	171	O, P-41,42区 SD04	打製石斧	8.3	4.3	1.3	74.0	サヌカイト	
46		172	O, P-41,42区 SD04	石包丁	(4.7)	4.5	0.9	27.1	サヌカイト	
46		173	O, P-41,42区 SD04	石包丁?	(8.2)	4.6	0.8	29.7	サヌカイト	
46	48	174	O, P-41,42区 SD04	石包丁	9.7	5.4	1.2	90.2	サヌカイト	
46	48	175	O, P-41,42区 SD04	石包丁	13.0	4.3	1.2	98.5	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
47		176	O, P-41, 42区 SD04	削器	(6.3)	6.5	1.0	48.3	サヌカイト	
47		177	O, P-41, 42区 SD04	削器	8.5	7.3	1.1	65.8	サヌカイト	
47		178	O, P-41, 42区 SD04	削器	6.4	9.4	1.4	98.4	サヌカイト	
47		179	O, P-41, 42区 SD04	削器	10.7	7.3	1.0	83.4	サヌカイト	
48		180	O, P-41, 42区 SD04	削器	8.6	5.6	0.9	27.6	サヌカイト	
48		181	O, P-41, 42区 SD04	削器	9.9	6.2	1.0	58.7	サヌカイト	
48		182	O, P-41, 42区 SD04	削器	10.3	6.0	2.2	90.9	サヌカイト	
66		183	O, P-41, 42区 SD04	砥石	16.5	8.0	3.3	487.5	花崗岩 ポーフイリー	
53		217	O, P-41, 42区 SD04	二次加工のある剥片	(9.7)	6.7	1.0	63.4	サヌカイト	
53	50	218	O, P-41, 42区 SD04	削器	6.1	5.7	1.1	38.0	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
53		219	O, P-41, 42区 SD04	石鏃	3.8	1.7	0.3	1.6	サヌカイト	
54		220	O, P-41, 42区 SD04	打製石斧	14.4	9.7	1.6	258.1	サヌカイト	
54		221	O, P-41, 42区 SD04	石槍状石器	14.3	5.1	1.2	95.9	サヌカイト	
54		222	O, P-41, 42区 SD04	石包丁	(6.7)	4.3	1.0	41.1	サヌカイト	
54		223	O, P-41, 42区 SD04	削器	6.7	3.5	0.4	10.5	サヌカイト	
85		224	O, P-41, 42区 SD04	石鏃	2.3	1.4	0.3	0.8	サヌカイト	
56		236	O, P-41, 42区 SD05	国府型ナイフ形石器	7.4	3.2	1.2	36.1	サヌカイト	
59	51	248	O-39, 40区 SR01	打製石斧	(13.8)	11.1	2.7	432.8	サヌカイト	
60		249	O-39, 40区 SR01	打製石斧	(3.7)	7.1	0.7	18.9	サヌカイト	
60		250	O-39, 40区 SR01	打製石斧	5.2	6.3	1.1	35.8	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
63		285	O-39,40区 S D05等	打製石斧	(5.5)	4.3	0.8	24.5	サヌカイト	
63		286	O-39,40区 S D05等	削器	8.5	6.0	0.9	58.6	サヌカイト	
63		287	O-39,40区 S D05等	削器	7.0	5.8	1.2	66.2	サヌカイト	
40		288	O-39,40区 S D05等	二次加工のある剝片	14.1	9.1	1.8	169.7	サヌカイト	
64	52	289	O-39,40区 S D05等	削器	10.3	5.3	0.9	46.3	サヌカイト	
64		290	O-39,40区 S D05等	石鏃	4.1	1.6	0.5	2.5	サヌカイト	
64		291	O-39,40区 S D05等	石鏃	2.4	1.8	0.3	0.8	サヌカイト	
64		292	O-39,40区 S D05等	石鏃	2.3	1.4	0.3	0.6	サヌカイト	
66	53	311	O-39,40区 S D04	削器	8.7	5.3	0.8	41.8	サヌカイト	
75	57	363	O-39,40区 S D07	石包丁	9.5	4.7	1.4	58.4	サヌカイト	

插图番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
75		364	N-37,38区 SD07	石包丁	5.5	7.2	0.7	37.8	サヌカイト	
75		365	O-37,38区 SD07	石鏃	4.0	1.6	0.5	5.6	サヌカイト	
78		377	N-37,38区 SD06	打製石斧	5.8	4.4	0.7	23.0	サヌカイト	
80	58	386	M,N-35区 SD04	石鏃	5.3	2.7	0.5	8.8	サヌカイト	
84	59	406	M,N-36区 SD05	石包丁	7.8	3.2	0.6	24.8	サヌカイト	
84		407	N-37,38区 SD05	石包丁	8.4	4.7	1.0	47.6	サヌカイト	
84	59	408	M,N-36区 SD05	石包丁	10.5	4.4	0.8	57.5	結晶片岩	
88		429	M,N-35区 SD16	石包丁	14.3	5.1	1.7	122.0	サヌカイト	
88		430	O-37,38区 SD12	石包丁	7.8	5.1	1.0	54.2	サヌカイト	
88		431	O-34~36区 SD21	石包丁	5.2	9.3	1.1	63.0	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
88		432	O-34~36区 SD25	石鏃	3.4	1.7	0.3	1.6	サヌカイト	
106		440	O、P-41,42区 SP062	硯?	(4.4)	(2.8)	0.9	16.0	流紋岩	
136		505	N-37,38区 SP704	石鏃	3.0	1.2	0.4	1.2	サヌカイト	
170	63	599	O-39,40区 SD45	石鍋	-	-	0.9	-	滑石	
174		624	N-39~42区 包含層	削器	8.2	10.3	0.9	88.8	サヌカイト	
174		625	N-39~42区 包含層	削器	11.2	6.4	1.2	79.0	サヌカイト	
174		626	O-39,40区 包含層	削器	11.0	5.3	1.1	53.6	サヌカイト	
174		627	O-39,40区 包含層	削器	8.7	4.1	0.7	79.7	サヌカイト	
174		628	N-37,38区 包含層	削器	5.0	7.2	1.3	38.2	サヌカイト	
174		629	O-39,40区 包含層	石鏃	2.3	1.0	0.3	1.0	サヌカイト	

挿図番号	図版番号	報文番号	報告遺構名	器種	現長(cm)	現幅(cm)	現厚(cm)	重量(g)	石材	備考
174		630	N-39~42区 包含層	石鏃	2.5	1.3	0.3	1.0	サヌカイト	
174	63	631	M, N-35区 包含層	石鏃	3.1	1.5	0.5	2.1	サヌカイト	
174		632	N-39~42区 包含層	石鏃	3.0	1.5	0.3	1.5	サヌカイト	

銅錢觀察表

挿番	図号	図番	版号	報番	文号	出土遺構	種類	直径 (cm)	重量 (g)	備考
132		61		494	N-37, 38区	S K16	嘉祐通宝	2.45	2.7	
132		61		495	N-37, 38区	S P 673	大觀通宝	2.40	2.7	
132		61		496	N-37, 38区	S P 689	開元通宝	2.50	3.3	
170				597	O-39, 40区	S D45	寬永通宝	2.50	3.3	
173				623	N-37, 38区	包含層	嘉祐元宝	2.35	3.3	

圖 版



調査前状況（東北から）



基本層序

图版 2



O,P-41,42区 SP050 断面



N-39~42区 SX06 断面



314



323



315



411



193

図版 4



遺跡付近空中写真① (縮尺約 1 / 2 万、国土地理院1973年撮影)



遺跡付近空中写真② (左が北、縮尺約1 / 5 千、国土地理院1962年撮影)

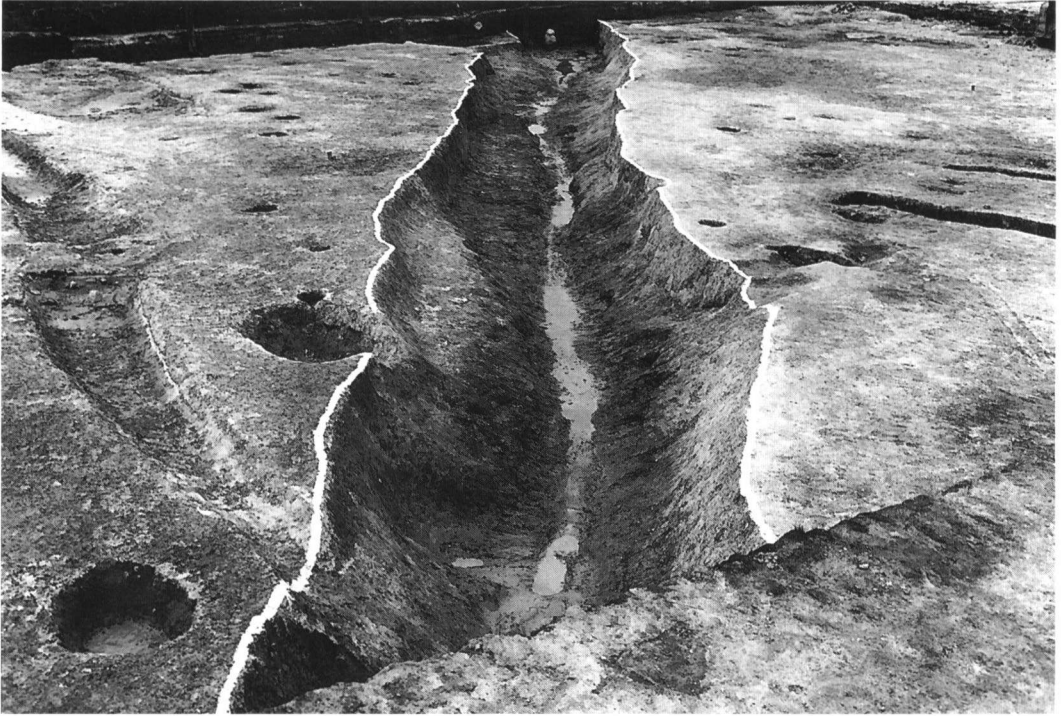
図版 6



調査前状況（西から）



O,P-43区 SR01 掘削状況（西北から）

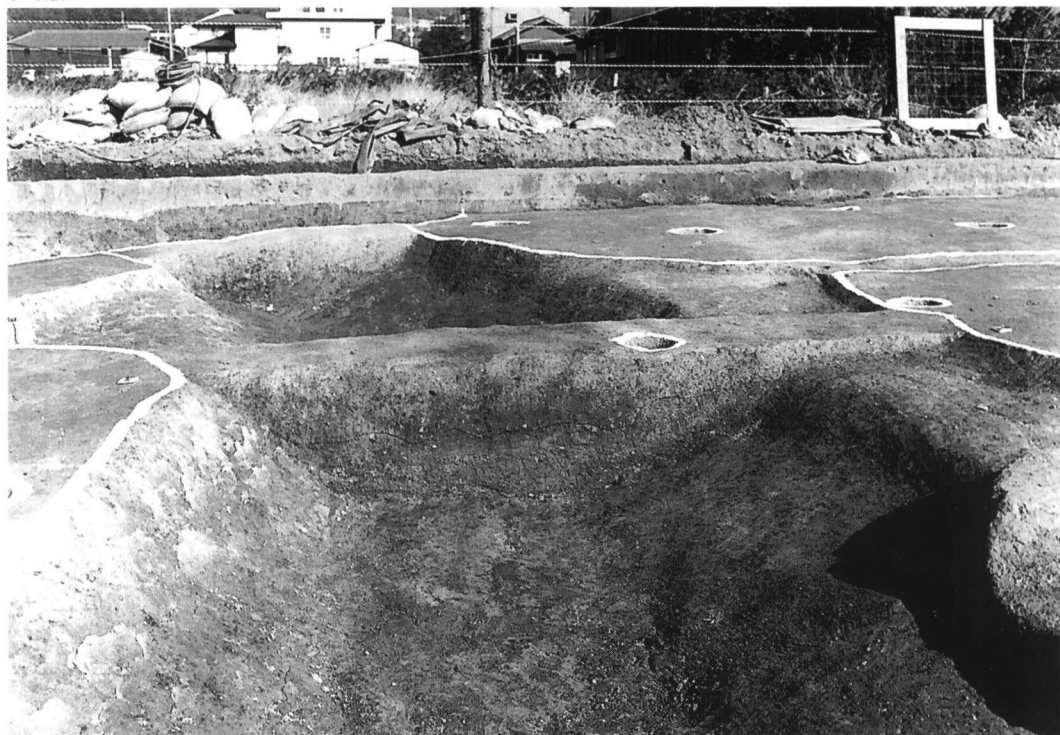


N-39~42区 SD02 掘削状況 (東から)



O,P-41,42区 SD02 断面

図版 8



O-37,38区 S D03 断面



O,P-41,42区 SR01 (東)(西) 合流部 断面



N-37,38区 SR01 掘削状況 (北から)



37ライン SR01 断面

図版 10



N-37,38区 S R01 河底 遺物(110)出土状況



N-37,38区 S R01 上層 遺物(117)出土状況



O,P-41,42区 S D04・05・S R01 掘削状況(北から)



O,P-41,42区 S D04 上層 遺物(184)出土状況

図版 12



O,P-41,42区 S D04 上層 遺物(193)出土状況①



O,P-41,42区 S D04 上層 遺物(193)出土状況②



O-39,40区 掘削状況 (南から)

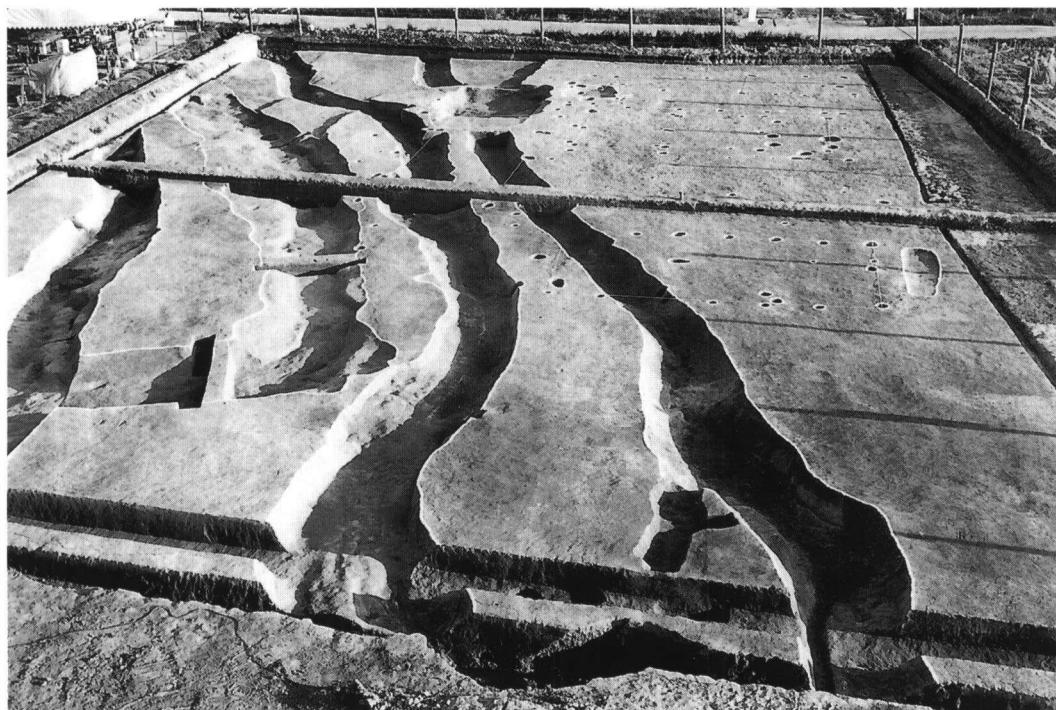


O-39,40区 S D05 下層 遺物(296,297)出土状況

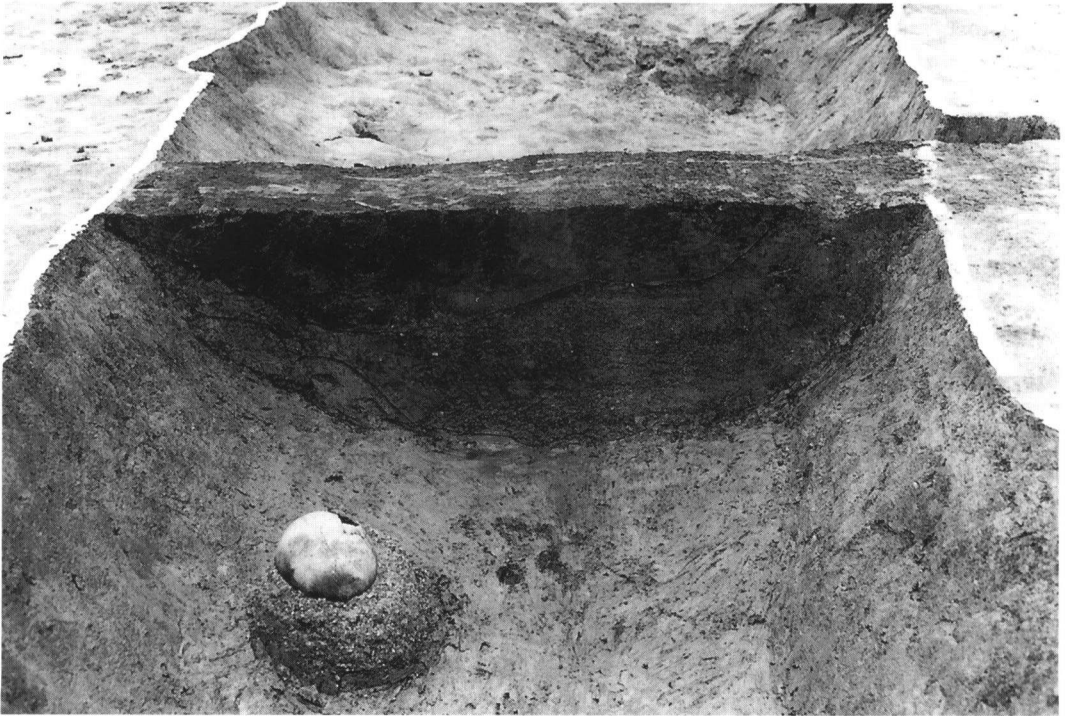
図版 14



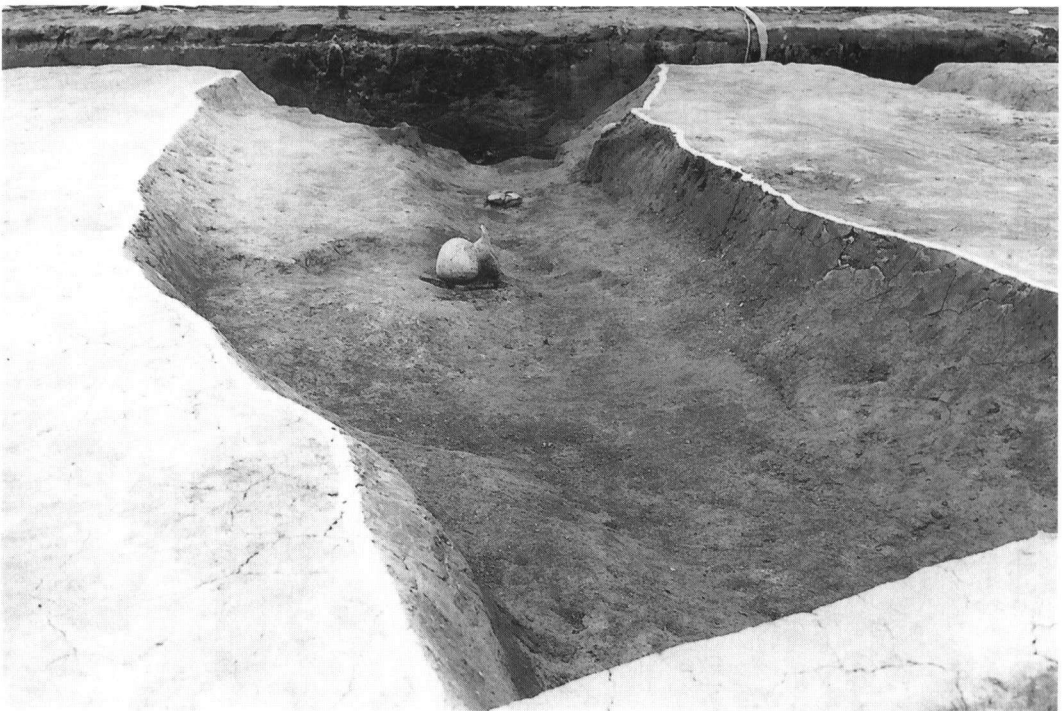
O-39,40区 S D07 遺物(323)出土状況



N-37,38区 掘削状況(北から)



N-37,38区 S D07 断面 (遺物は339)



N-37,38区 S D07 掘削状況 (南から、遺物は326)

図版 16



N-37,38区 S D05 上層 遺物 (387) 出土状況



N-37,38区 S D04 断面 (南から)



M,N-36区 掘削状況 (南から)

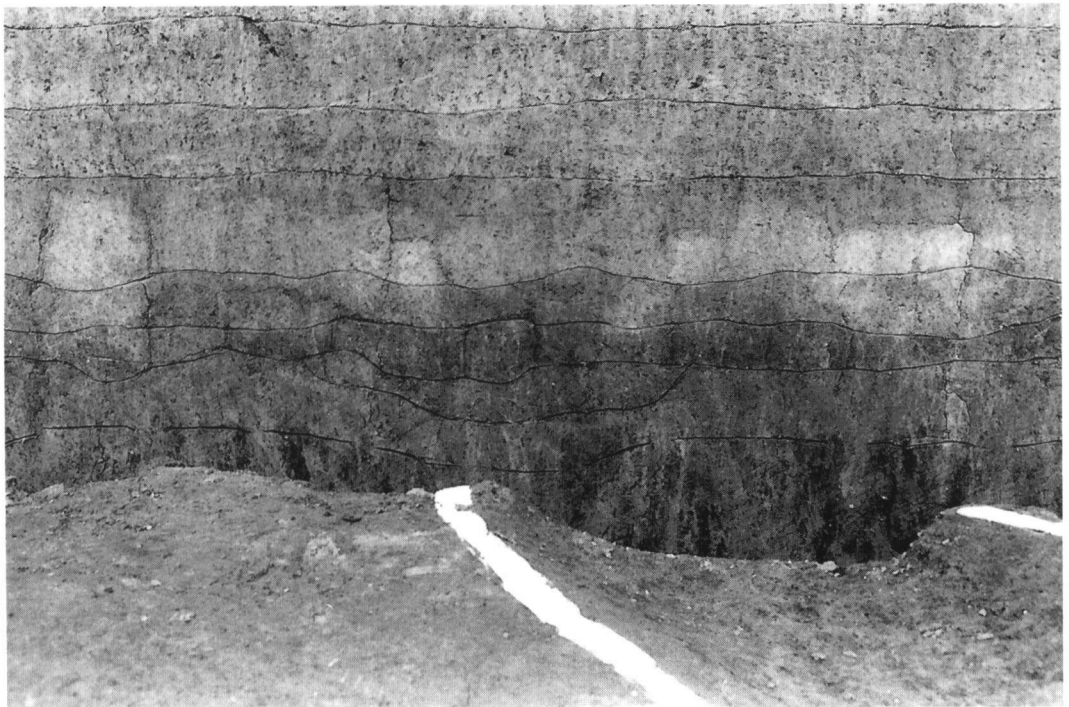


M,N-36区 S D04 遺物(411)出土状況

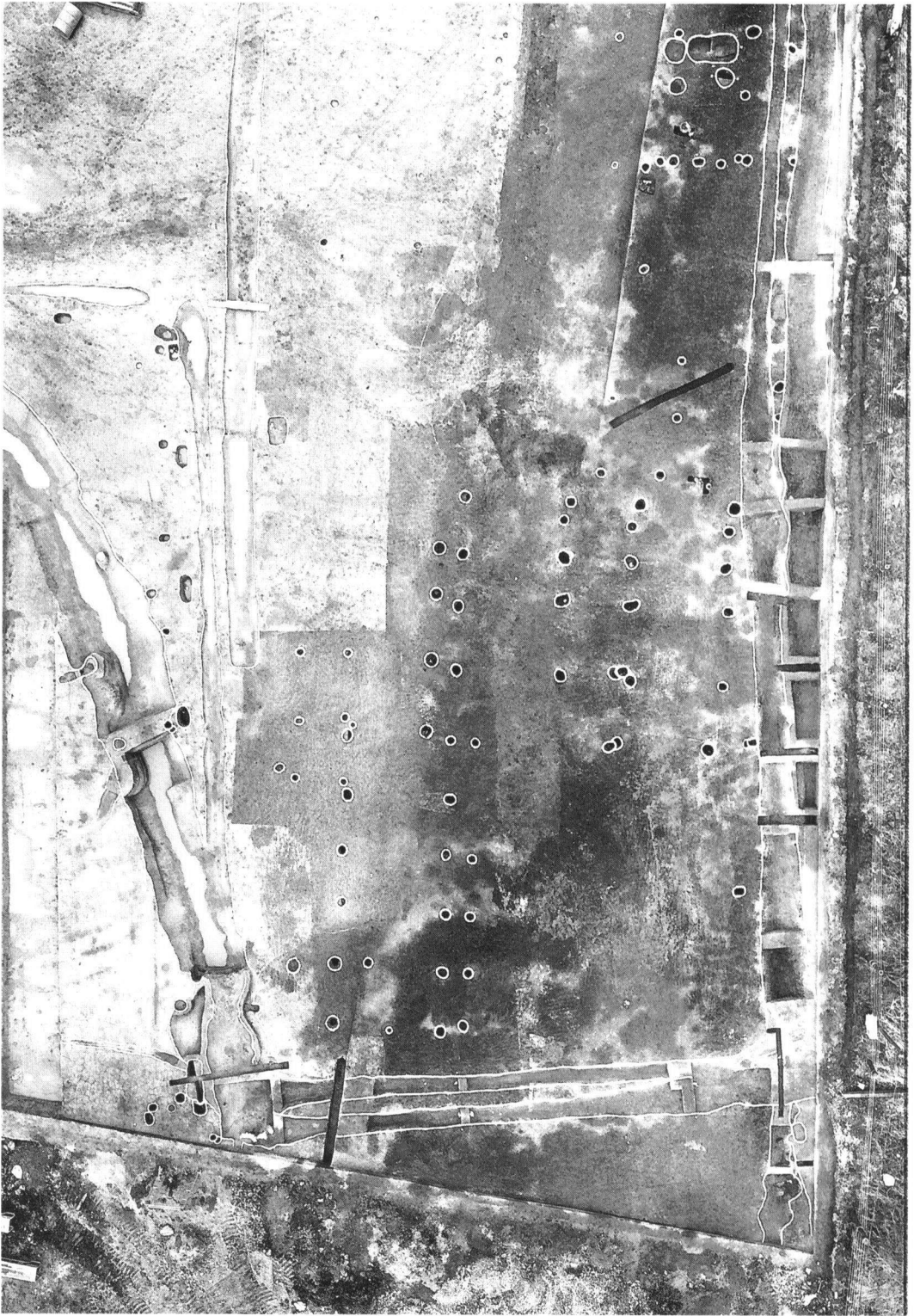
図版 18



O-34~36区 掘削状況 (南から)



M,N-35区 S D19 断面 (南から)



O,P-41,42区 上層 空中写真 (上が北)